

南相馬市埋蔵文化財調査報告第11集

浦尻貝塚 3

第1分冊 一土器編一

序 文

文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった先人の生活の様子や文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について、私達に多くの情報を与えてくれます。

浦尻貝塚は、平成12年に旧小高町の町道工事計画に伴い試掘調査を行ったところ、良好な貝塚を確認し、遺跡としての重要性が裏付けられ、遺跡の将来にわたる保存を図る必要があることから、文化庁・福島県の協力を得て、浦尻貝塚調査指導委員会を設置し、平成13年度から平成16年度まで国指定史跡指定にむけての範囲内容確認調査を開始したものであります。

この調査成果により、浦尻貝塚は福島県を代表する縄文時代の大規模貝塚であることが明らかとなり、全国的にみても大変重要な遺跡であると評価されたことから、平成18年1月26日、国指定史跡に指定されたところであります。

南相馬市では、この貴重な史跡を適切に保存し、広く活用を図るため、平成18年度から指定地内の全民有地の公有化をすすめ、平成19年度に完了したところであります。今後は、浦尻貝塚を活かした地域づくりに向け、史跡整備計画を策定して参る考えであります。

本書は、この国指定史跡に向けた範囲確認調査の成果の一部を報告するものであります。本書に掲載した調査成果が、地域における歴史の解明と地域文化の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の作成にあたり、多大なるご指導、ご協力をいただきました浦尻貝塚調査指導委員会の先生方、文化庁記念物課、福島県教育庁生涯学習・文化スポーツ領域文化財グループ等の関係機関の皆様、さらには調査にあたりご理解、ご協力をいただきました浦尻貝塚地権者会ならびに浦尻行政区の皆様には厚く御礼を申し上げます。

平成20年3月

南相馬市教育委員会
教育長 青木紀男

例 言

1. 本書は福島県南相馬市小高区大字浦尻南台他に所在する浦尻貝塚の発掘調査報告書の2分冊からなるうちの「土器編」である。なお南相馬市は、平成18年1月1日付けて、原町市、鹿島町、小高町の1市2町が合併して発足した市である。
2. 報告する調査は、平成12年度の旧小高町町道建設計画に伴う試掘調査及び平成13～16年度にかけて実施した保存目的範囲確認調査である。いずれの調査も国庫補助対象事業として旧小高町教育委員会が主体となって実施した。
3. 上記調査のうち、これまでに調査内容の一部を掲載した調査報告書を刊行している。刊行した調査報告書は次のとおりである。

小高町文化財調査報告第2集「小高町内埋蔵文化財調査報告1」2001 小高町教育委員会
小高町文化財調査報告第6集「浦尻貝塚1」2005 小高町教育委員会
南相馬市埋蔵文化財調査報告書第1集「浦尻貝塚2」2006 南相馬市教育委員会

本書は、上記調査のうち、南台（台地南部を除く）・台ノ前・西向地区で出土した表土等遺構外の出土土器、台ノ前地区I区の出土土器などについて掲載したものである。先に刊行した「浦尻貝塚2」では同地区の遺構及び縄文時代の遺構・貝層・遺物包含層の出土遺物を報告している。
4. 整理調査は、浦尻貝塚調査指導委員会、文化庁ならびに福島県教育庁文化財グループの指導のもと、発掘調査時から平成20年度まで継続的に南相馬市教育委員会（旧小高町教育委員会）が実施している。平成18・19年度の調査体制は次のとおりである。

調査主体 南相馬市教育委員会

事務局 南相馬市教育委員会文化財課

教育長 青木紀男
事務局長 風越清孝
事務局次長 藤原直道
文化財課長 烏中清
係長 堀耕平
主任学芸員 川田強
主任文化財主事 荒淑人
学芸員 佐川久
嘱託学芸員 林紘太郎

整理調査補助員 牛渡由起子
狭川麻子
玉川美枝子
渡部定子
松本経子
松崎孝子

5. 出土土器の実測、図版作成は各調査参加者が行った。
6. 本書に掲載した出土土器の写真撮影は株式会社まつざき印刷に委託した。
7. 本書の編集は川田強が行った。執筆は、第2章のⅧ・Ⅸ群土器を佐川久、それ以外は川田強が担当した。
8. 平成13年度からの保存目的範囲確認調査を実施するにあたり、学識経験者からなる浦尻貝塚調査指導委員会（以下、「調査指導委員会」という。）を組織し、調査の指導をお願いした。調査指導委員会には下記の方々に引き受けていただき、ご尽力を賜った。（敬称略）
委員長：藤 沼 邦 彦（弘前大学）
副委員長：玉 川 一 郎（現福島県教育庁生涯学習・文化スポーツ領域文化財グループ）
委 員：山 田 昌 久（首都大学東京）
委 員：樋 泉 岳 二（早稲田大学）
指導機関：文化庁記念物課、福島県教育庁生涯学習・文化スポーツ領域文化財グループ
9. 報告書作成にあたり、下記の方々に多大なご協力いただいた。記して感謝の意を示したい。（敬称略、五十音順）
阿部健太郎、石田典子、岩崎真幸、新井達哉、植月学、宇佐美雅夫、大平好一、大平理恵、岡田康博、岡村道雄、小川長導、大塚初重、梶原圭介、梶原文子、川上和人、小林謙一、小林雄一、今野徹、佐藤耕三、坂井秀弥、佐々木長生、三瓶秀文、嶋村一志、新海和広、穴戸弘治、菅原弘樹、鈴鹿良一、鈴木啓、高橋満、竹中正巳、中坪啓人、中村真由美、西本豊弘、瀬宜田佳男、早瀬亮介、長谷川真、藤木海、古谷涉、堀江格、本間宏、松本茂、松本美和子、村田六郎太、村本周三、森幸彦、山内幹夫、山崎京美、山崎充浩、山本出、横田正美、吉田陽一
10. 本報告書（第1・2分冊）作成にあたり、下記の間関に多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を示したい。
国立歴史民俗博物館、東京大学総合研究博物館、千葉県立中央博物館、千葉市立加曽利貝塚博物館、財団法人福島県文化振興事業団、福島県文化財センターまほろん、南相馬市立博物館、南相馬市文化財保護審議会、原町市史編纂委員会考古部会、浦尻行政区、浦尻貝塚地権者会
11. 本書に掲載した資料はすべて南相馬市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書で掲載した挿図の縮尺は各挿図に記した。

2. 遺物実測図の表現は次のとおりである。

織維土器 : 断面内 ▲

断面輪積痕 : //

3. 掲載した出土遺物の縮尺は各挿図に記してあるが、基準は下記のとおりである。

出土土器 復元実測 1/4 断面実測 1/3

4. 出土土器写真の縮尺は不同である。

5. 各写真図版の写真番号は実測図版の番号に一致する。

総目次

第1分冊 ー土器編ー

第1章 序章

第2章 出土土器

第3章 まとめ

第2分冊 ー自然遺物編ー

第1章 貝層等の出土状況

第2章 動物遺体

第3章 出土人骨

第4章 炭化種実

附編1 浦尻貝塚出土のイノシシ遺体について

附編2 明治期の相双地方の漁業

附編3 角部内南台貝塚・片草貝塚の動物遺体

第1分冊 一土器編一 目次

序文

例言

凡例

目次

第1章 序章	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 遺跡の概要	5
第2章 出土土器	9
第1節 土器分類	9
第2節 南台地区遺構外出土土器	10
第3節 台ノ前南貝層貝層外出土土器	25
第4節 台ノ前北貝層貝層外出土土器	35
第5節 台ノ前地区Ⅰ区出土土器	58
第6節 西向貝層貝層外出土土器	75
第7節 西向地区斜面下部遺構外出土土器	87
第3章 まとめ	95
引用・参考文献	109
写真図版	111
観察表	135

挿図目次

図1	南相馬市の位置	1
図2	周辺の遺跡 (S = 1/30,000)	3
図3	浦尻貝塚調査状況図 (調査年次別) (S = 1/2,500)	6
図4	浦尻貝塚調査状況図 (縄文時代) (S = 1/2,500)	7
図5	南台地区遺構外出土土器① Ⅲ群土器	11
図6	南台地区遺構外出土土器② Ⅲ・Ⅳ群土器	12
図7	南台地区遺構外出土土器③ Ⅴ群土器	13
図8	南台地区遺構外出土土器④ V・Ⅵ群土器	15
図9	南台地区遺構外出土土器⑤ Ⅵ群土器	16
図10	南台地区遺構外出土土器⑥ Ⅶ群土器	17
図11	南台地区遺構外出土土器⑦ Ⅷ群土器	18
図12	南台地区遺構外出土土器⑧ Ⅷ群土器	19
図13	南台地区遺構外出土土器⑨ Ⅷ群土器	20
図14	南台地区遺構外出土土器⑩ Ⅷ群土器	22
図15	南台地区遺構外出土土器⑪ Ⅷ群土器	23
図16	南台地区遺構外出土土器⑫ X群土器	24
図17	台ノ前南貝層貝屑外出土土器① Ⅱ・Ⅲ群土器	26
図18	台ノ前南貝層貝屑外出土土器② Ⅳ群土器	27
図19	台ノ前南貝層貝屑外出土土器③ Ⅳ群土器	29
図20	台ノ前南貝層貝屑外出土土器④ V・Ⅵ群土器	30
図21	台ノ前南貝層貝屑外出土土器⑤ Ⅶ群土器	31
図22	台ノ前南貝層貝屑外出土土器⑥ Ⅶ・X群土器	33
図23	台ノ前北貝層貝屑外出土土器① Ⅱ・Ⅲ群土器	36
図24	台ノ前北貝層貝屑外出土土器② Ⅲ群土器	37
図25	台ノ前北貝層貝屑外出土土器③ Ⅲ群土器	39
図26	台ノ前北貝層貝屑外出土土器④ Ⅲ群土器	40
図27	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑤ Ⅲ群土器	41
図28	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑥ Ⅳ群土器	43
図29	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑦ Ⅳ群土器	44
図30	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑧ Ⅳ群土器	45
図31	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑨ Ⅳ群土器	47
図32	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑩ Ⅳ群土器	48
図33	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑪ Ⅳ群土器	49
図34	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑫ V群土器	51
図35	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑬ V群土器	52
図36	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑭ V群土器	53
図37	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑮ Ⅵ群土器	54
図38	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑯ Ⅵ群土器	55
図39	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑰ Ⅵ群土器	56
図40	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑱ Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ群土器	57
図41	台ノ前地区Ⅰ区出土土器① テストビット・サブレンチ出土土器	59
図42	台ノ前地区Ⅰ区出土土器② サブレンチ出土土器	60
図43	台ノ前地区Ⅰ区出土土器③ サブレンチ出土土器	61
図44	台ノ前地区Ⅰ区出土土器④ 遺構外出土土器	63
図45	台ノ前地区Ⅰ区出土土器⑤ 遺構外出土Ⅳ群土器	65
図46	台ノ前地区Ⅰ区出土土器⑥ 遺構外出土土器	66
図47	台ノ前地区Ⅰ区出土土器⑦ 遺構外出土Ⅵ群土器	68
図48	台ノ前地区Ⅰ区出土土器⑧ 遺構外出土土器	69

図49	台ノ前地区Ⅰ区出土土器⑨ 遺構外出土土器	70
図50	台ノ前地区Ⅰ区出土土器⑩ 遺構外出土Ⅶ群土器	71
図51	台ノ前地区Ⅰ区出土土器⑪ 遺構外出土Ⅶ群土器	72
図52	台ノ前地区Ⅰ区出土土器⑫ 遺構外出土土器	73
図53	西向貝層貝屑外出土土器① Ⅱ・Ⅲ群土器	76
図54	西向貝層貝屑外出土土器② Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ群土器	77
図55	西向貝層貝屑外出土土器③ Ⅳ群土器	79
図56	西向貝層貝屑外出土土器④ Ⅳ群土器	81
図57	西向貝層貝屑外出土土器⑤ V・Ⅵ群土器	83
図58	西向貝層貝屑外出土土器⑥ Ⅶ群土器	84
図59	西向貝層貝屑外出土土器⑦ Ⅶ群土器	85
図60	西向貝層貝屑外出土土器⑧ Ⅶ・Ⅷ群土器	86
図61	西向地区斜面下部遺構外出土土器① Ⅲ・Ⅳ群土器	88
図62	西向地区斜面下部遺構外出土土器② Ⅳ・V群土器	90
図63	西向地区斜面下部遺構外出土土器③ V・Ⅶ群土器	91
図64	西向地区斜面下部遺構外出土土器④ Ⅵ・Ⅶ群土器	93
図65	西向地区斜面下部遺構外出土土器⑤ Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ群土器	94
図66	浦尻貝塚貝屑出土土器① (S = 1/5)	96
図67	浦尻貝塚貝屑出土土器② (S = 1/5)	100
図68	浦尻貝塚貝屑出土土器③ (S = 1/5)	101
図69	浦尻貝塚貝屑出土土器④ (S = 1/5)	102
図70	浦尻貝塚貝屑出土土器⑤ (S = 1/5)	103
図71	浦尻貝塚貝屑出土土器⑥ (S = 1/5)	105
図72	浦尻貝塚貝屑等出土土器 (S = 1/5)	107

写真図版目次

写真図版1	南台地区遺構外出土土器①	113
写真図版2	南台地区遺構外出土土器②	114
写真図版3	南台地区遺構外出土土器③	115
写真図版4	南台地区遺構外出土土器④	116
写真図版5	台ノ前南貝層貝屑外出土土器①	117
写真図版6	台ノ前南貝層貝屑外出土土器②	118
写真図版7	台ノ前北貝層貝屑外出土土器①	119
写真図版8	台ノ前北貝層貝屑外出土土器②	120
写真図版9	台ノ前北貝層貝屑外出土土器③	121
写真図版10	台ノ前北貝層貝屑外出土土器④	122
写真図版11	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑤	123
写真図版12	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑥	124
写真図版13	台ノ前北貝層貝屑外出土土器⑦	125
写真図版14	台ノ前地区Ⅰ区出土土器①	126
写真図版15	台ノ前地区Ⅰ区出土土器②	127
写真図版16	台ノ前地区Ⅰ区出土土器③	128
写真図版17	西向貝層貝屑外出土土器①	129
写真図版18	西向貝層貝屑外出土土器②	130
写真図版19	西向貝層貝屑外出土土器③	131
写真図版20	西向地区斜面下部遺構外出土土器①	132
写真図版21	西向地区斜面下部遺構外出土土器②	133

第1章 序 章

第1節 遺跡の位置と環境

第1項 はじめに

浦尻貝塚は福島県南相馬市小高区浦尻字南台ほかに所在する縄文時代から近世にいたる複合遺跡である。平成12年度に旧小高町道工事計画に伴い試掘調査が実施された。その結果を受け、平成13年度から平成16年度にかけて、国指定史跡に向けての範囲内容確認調査を、小高町教育委員会（現南相馬市教育委員会）が実施した。

本書は、この調査のうち、南台（台地南部を除く）・台ノ前・西向地区で出土した表土等遺構外の出土土器、台ノ前地区1区の出土土器などについて掲載したものである。



図1 南相馬市の位置

先に刊行した「浦尻貝塚2」（南相馬市教育委員会2006）ではこの範囲内容確認調査における同地区の遺構及び縄文時代の遺構・貝層・遺物包含層の出土遺物を掲載している。また、本報告に係る調査のうち遺構等の調査状況については、「浦尻貝塚1」（小高町教育委員会2005）に掲載しており、調査歴・遺跡名・調査の経過等もあわせて報告していることから、本書ではその概略を記載するに留める。小迫北・南地区の出土土器は一部を除き、未報告であり、今後継続した整理調査を実施し、報告する予定である。

第2項 遺跡の位置と地理的環境

浦尻貝塚が所在する南相馬市は、福島県の太平洋側にあたる浜通り地方の北部域に所在する。浦尻貝塚は、この南相馬市南部の小高区にあり、浪江町に隣接した太平洋岸の大字浦尻に位置する。現海岸線からは、西に約700m離れた位置にあたる。

浜通り地方北部域の地質は、南北に縦断する双葉断層を境にし、西側に花崗岩を基盤とした標高500m以上の阿武隈山地が広がり、東側に第三紀の砂岩・泥岩などを基盤とした丘陵とその周囲に海成・河成の段丘が樹枝状に分布している。段丘下には東流する小高川などの河川によって形成された沖積地が広がる。段丘は、高位・中位・低位と3面に大別されている。段丘の堆積層は砂・レキ・砂レキ・シルトであり、この上部に風化火山灰層（ローム層）が堆積することが多い。このうち中位段丘は小高川流域などで発達しており、旧石器時代以降の遺跡が多く確認される。

浦尻貝塚はこの中位段丘上にあり、東西方向の段丘から派生した南北方向の舌状段丘を中心に分布し、段丘平坦面は標高25～28m、段丘幅は70～100m、眼下に望む沖積地との比高差は20～25mを測る。

浦尻貝塚が所在する段丘の北側には、かつては井田川浦という東西約1.8km、南北約1kmという大きな潟湖があり、大正末期～昭和初期にかけて干拓されている。旧井田川浦の汀線は、浦尻貝塚の所在する段丘北側にほぼ接している。井田川浦に注ぎ込んでいた宮田川は5～6kmの長さしかなく、源流は阿武隈山地まで至らない小川である。

潟湖を形成した浜堤は、浦尻貝塚の東側の磯坂遺跡（18）が所在する海岸線の段丘から北側に1.7kmにわたって伸び、太平洋をふさいでいたとされる。北に位置する小高川河口にも、同様の浜堤が形成されたが、少なくとも近世以降は井田川浦ほどの大きな潟湖は形成されていなかったようである。小高川支流の河口には、現在も規模は小さいものの前川浦という潟湖が残っている。

第3項 歴史的環境

浦尻貝塚は、縄文時代の貝塚・集落跡であるほか、古墳時代後期の古墳群、平安時代の集落跡、中世館跡の推定地でもある複合遺跡である。本報告は、このうち縄文時代の遺物について報告するので、周辺の縄文時代の遺跡を概観することとする。

福島県太平洋側にあたる浜通り地方では縄文時代早期末葉から遺跡が多く確認されるようになる。浦尻貝塚周辺では、北原貝塚（17）(註1)において、過去に押型文系土器が表採された記録（志賀1985）がある。遺跡数が多くなるのは早期末からであり、浦尻貝塚のほか北原貝塚（小高町教育委員会2004）で断片的ながら、条痕文系土器が少量出土している。南相馬市内でも、阿武隈山地に近い八重米坂遺跡（福島県教育委員会1990e）や萩原遺跡（小高町教育委員会1993ほか）などで多数の竪穴住居が確認されており、この段階で浜通り地方北部では集落遺跡の増加が認められる。

続く縄文時代前期前葉になると、浦尻貝塚周辺では多数の貝塚が確認される。浦尻貝塚と同じ宮田川（旧井田川浦）流域では、浦尻貝塚に隣接した北原貝塚のほか、海岸線から約4km離れた学史上著名な宮田貝塚（14）（小高町教育委員会1975）や加賀後貝塚（15）（小高町教育委員会2001）が所在する。

宮田貝塚では小高町史編さん事業に伴う学術調査が実施されており、前期前葉の宮田Ⅲ群とされる土器とともにイボキサゴを中心とした内湾性の貝を多く含む斜面貝層が確認されている。資料の採集方法には不明点が多いが、比較的多くの魚骨が得られている。鳥獣骨では、シカ・イノシシや、イヌ・タヌキなどの小形哺乳類が出土しているほか、カモ類も多くみられる。魚骨はスズキ・クロダイが最も多く、内湾での漁業が中心であったと考えられるが、マダイも一定量含まれ、外洋での漁業も想定される。これに伴うように、骨角器では釣針未製品や刺突具も出土しており、これらの調査成果から、宮田川流域では、この段階から積極的な漁業を示す資料が認められることが明らかとなった。

また、宮田貝塚では、貝層から多くの土器が出土し、このうち宮田Ⅲ群と分類された土器群は、当時知られていた一部併行する大木1式等と異なる地域的な特徴が見られることが調査報告書の中で指摘され、その後の縄文時代前期土器研究に大きな影響を与えた。

宮田貝塚に隣接する低位段丘斜面に形成された加賀後貝塚(註2)でも、ほ場整備に伴う試掘調査が実施され、宮田貝塚と同時期の小規模な貝ブロックを標高約3.0mの地点で検出している。小規模な貝ブロックでありながら比較的多くの動物遺体が見られている。貝類はイボキサゴを主体として少量のアサリやマガキが伴い、魚類はスズキ・クロダイが多く、宮田貝塚と同じく内湾性のものであることが確認された。獣骨は少量しか得られていないが、シカ・イノシシなどが出土している。また、周辺のボーリング調査では、標高約1～4mの縄文前期の遺物包含層が確認されている。

浦尻貝塚に隣接し、現海岸線に近い北原貝塚では、この前期前葉を中心として大規模な貝塚が形成されている。調査がされた段丘西側の貝層は宮田Ⅲ群が出土している。貝類は加賀後貝塚と同じくイボキサゴを主体とし、アサリ・ハマグリ・イソシジミなど内湾性のほか、岩礁性のクボガイ類なども少量認められている。魚類では2.5mmメッシュ以下で回収されるカタクチイワシなどの外洋沿岸～内湾表層域に生息する小形魚のほか、内湾浅海域に生息するフサカサゴなどの幼魚類が多量に出土していることが大きな特徴である。大形魚では宮田貝塚・加賀後貝塚と同様スズキ・クロダイなどの内湾性のものが多いが、フグが多産していることが特徴的である。外洋域のマダイ・カツオなども含まれるが量的には少ない。鳥獣骨は加賀後貝塚・宮田貝塚と同様イノシシ・シカ・カモ類が出土している。また、釣針・刺突具など少量ながら骨角器も出土している。

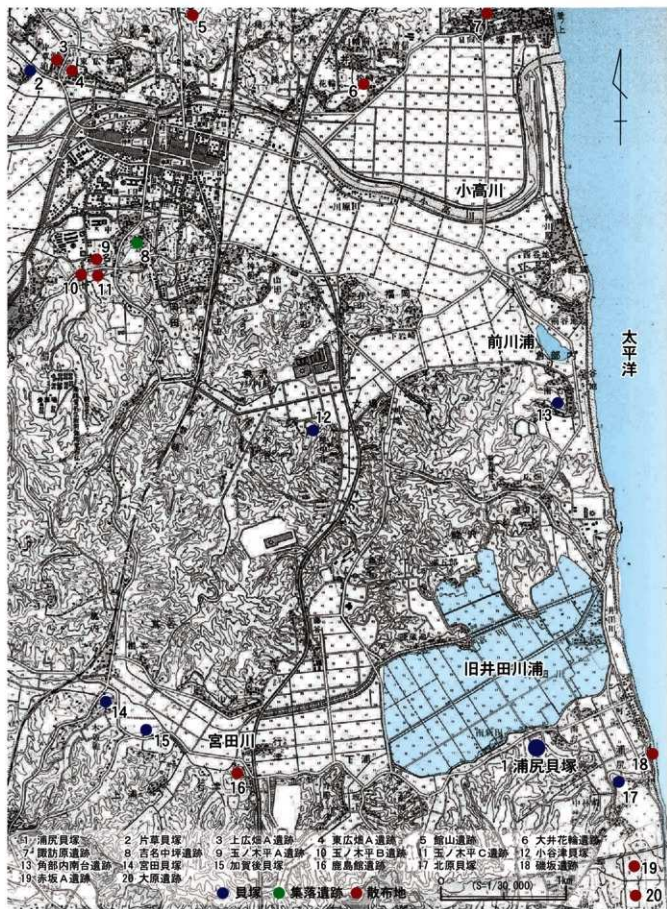


図2 周辺の遺跡 (S=1/30,000)

このほか、北原貝塚では平成13年に行われた個人住宅に伴う調査で縄文時代早期末～前期前葉と推定される小穴群が確認されている。さらに、平成16年には町道建設工事に伴い、小高町教育委員会が発掘調査を実施しており、大木2 a 式の土器が出土する貯蔵穴群を検出している(註3)。これらのことから、北原貝塚では縄文時代前期前葉～中葉にかけての集落が貝塚に伴うものと考えられる。

小高川流域では、大井花輪遺跡(6)で花積下層式の土器が採集されているほか、内陸に4kmを測る位置にある片草貝塚(2)では大木2 a 式の土器とともにアサリ・マガキなどを含む貝層が確認されている(竹島1975)。また、海岸に近い角部内南台貝塚(13)(小高町教育委員会1988)(註4)でも、大木2 a 式以降の土器が出土し、前期中葉以降に集落・貝塚が形成されたと考えられる。詳細は不明であるが、小谷津貝塚(12)も縄文時代前期に伴う可能性が高い(註5)。

福島県内の縄文時代前期の貝塚は、いわき市の弘源寺貝塚(いわき市教育委員会1986)や双葉郡双葉町の郡山貝塚(双葉町教育委員会1990)などが知られるが、このように多地点にわたり貝塚が確認されるのは小高川・宮田川流域の大きな特徴である。宮田貝塚・加賀後貝塚・片草貝塚のような内陸におよそ4km入った貝塚群は縄文海進に伴い形成されたものと言える。また、貝塚だけでなく、散布地も前段階に比較するとこの海岸域に多く分布するようになる。これらの調査成果から、浦尻貝塚周辺では縄文海進によって広がった内湾を主な漁場とする漁業への志向が強く認められる。

浦尻貝塚では、縄文前期後葉になると小規模な貝塚の形成が始まる。しかし、前期後葉では宮田貝塚・北原貝塚・角部内南台貝塚などでも土器が出土しているが、貝層は現在のところ確認されておらず、集落も不明である。

前期末～中期前葉では、浦尻貝塚において大規模な貝塚が形成されるが、この段階になると散布地も角部内南台貝塚以外には認められなくなる。このように前期末～中期前葉になると浦尻貝塚・角部内南台貝塚の海岸線付近の遺跡以外は生活の痕跡が少なく、前期前葉～中葉の様相と大きな変化が認められる。

中期中葉以降は浦尻貝塚でも貝塚の形成は断続的となると考えられるが、集落の形成は継続している。角部内南台貝塚の貝層はこの段階に形成されたと推定されており、角部内南台貝塚も浦尻貝塚同様、前期以降にも集落が継続していた可能性が高い。また、近年、小高川流域の吉名中坪遺跡(8)で市道整備工事に伴い発掘調査が実施され、大木8 a 式の貯蔵穴群と大木8 b 式の竪穴住居が確認されており(註6)、小高川中流域にも拠点的な集落が確認できるようになっている。

次の中期後葉～末葉になると、小高川の中～上流域の遺跡でも、大田和広畑遺跡(南相馬市教育委員会2007a)や大富西畑遺跡(福島県教育委員会1991b)などの複式炉に伴う住居跡が確認され、後期前葉まで集落が継続するようであり、拠点的なあり方を示す。浦尻貝塚では貝塚の形成は中期末に中断すると推定されているが、この段階の遺構数は多い。また、後期前葉には比較的大きな貝層も確認されている。前段階まで形成されていると考えられる角部内南台遺跡では中期後葉までの土器がみられるが後期前葉以後の土器は出土しておらず、貝塚は浦尻貝塚以外では現在のところ確認されていない。

後期中葉以降は、浦尻貝塚周辺ではほとんど遺跡が確認できておらず、遺跡数は減少すると見られる。浦尻貝塚でも居住地の移動があり、大きな変化が認められるが、小規模ながら貝塚が形成され、柱穴が多数確認されている。浦尻貝塚は、ほぼ晩期中葉をもって集落が終焉を迎えるが、浦尻貝塚に隣接する海崖上には晩期後葉～末葉の遺物包含層が確認される磯坂遺跡(18)(玉川1986ほか)がある。磯坂遺跡は、浦尻貝塚に後続する遺跡と考えられ、貝塚は確認されていないが、製塩土器を多く出土することでも注目される。

第2節 遺跡の概要

第1項 これまでの経緯

浦尻貝塚については、明治34（1901）年、大野延太郎が東京人類学雑誌に「浦尻台前貝塚」「浦尻西向貝塚」として記されていることが初めての報告である（大野1901）。調査としては、これまで昭和25（1950）年の福島県学生考古学会によるもの（福島大学考古学研究会1971）が初めてとしていたが、最近になり、福島県師範学校 佐藤健次郎による「福島県相馬郡福浦村浦尻貝塚第1回試掘調査報告」（佐藤1932?）という資料を確認した。これによると、昭和6年（1931）年に、現在呼称する台ノ前北・南のいずれかの貝層、西向貝層、小迫貝層と推定される3地点の調査を行っている。この時点で既にこれらの貝層を含めた範囲を浦尻貝塚とし、一連の遺跡であることを認識していることは注目される（註7）。また、この段階で4基の古墳が現存することも記載されている（註8）。昭和25年の福島県学生考古学会の調査については、詳細は不明である。

昭和40（1965）年には農道工事の際に、浦尻貝塚内に所在する浦尻古墳群1号墳の主体部である剣抜石棺が露出し、緊急の調査を行っている。本格的な発掘調査は、昭和45（1975）年の福島大学学生考古学会の学術調査があげられ、この調査により、複式炉を伴う竪穴住居と西向貝層の一部の調査を行い、大木10式期には集落が営まれたこと、貝層範囲の概略が明らかになるなど大きな成果が得られている（福島大学考古学研究会1971）。その後は調査が少ないが、玉川一郎、森幸彦、石川隆司らによる表面調査がなされ、出土資料の一部が報告されている（玉川1986、玉川・吉田1987、森1991、石川1983・1984・1988）。また、平成9（1997）年には、現在の西向地区低地で、ほ場整備に伴う試掘調査が小高町教育委員会により実施され、縄文時代の遺物包含層が確認されている。

平成12（2000）年、浦尻貝塚を縦断・横断する町道の拡幅工事計画に伴い、小高町教育委員会が試掘調査を実施した。この調査の結果、町道拡幅工事計画の一部において、良好な保存状況の縄文時代中期の貝塚などが確認された。小高町では町担当部局、県教育庁文化課と協議を行い、文化庁記念物課・福島県文化財課の現地視察を踏まえての指導に基づき、町道工事計画を中止し、平成13（2001）年から国史跡指定に向けた範囲内容確認調査を実施することとした。

範囲内容確認調査は、平成13（2001）年度に台ノ前・南台地区、平成14（2002）年度に南台・西向地区、平成15（2003）年度に小迫北・小迫南地区、平成16（2004）年度は小迫南地区で実施した。平成16年度には「浦尻貝塚1」を刊行し、これら平成12年以降の調査状況を報告した。

これらの調査から遺跡の概要・範囲が確定したことにより、平成17年度に国史跡指定事業に取り組み、平成18（2006）年1月26日付けて国史跡指定が告示となった。平成18年度には「浦尻貝塚2」を刊行し、範囲内容確認調査等の南台・台ノ前・西向地区の人工遺物の報告を行った。

また、平成18・19年度には、指定地外で調査が十分ではなかった南台地区台地南部等で範囲内容確認調査を行っている。さらに、墳丘が現存する浦尻古墳群4基の測量調査も実施している。これらの調査成果は「南相馬市内遺跡発掘調査報告書3」（南相馬市教育委員会2007b）で報告されている。

第2項 遺跡の概要

浦尻貝塚は平成12（2000）年以降の調査から調査区を、図3のとおり大きく4つの地区に分けており、それぞれ地形をもとに小区分している。本報告の記載内容はこの調査区分に基づく。平成12年以前に呼称されてきた「浦尻台前貝塚（台ノ前貝塚）」、「浦尻西向貝塚（西向貝塚）」、「小迫貝塚」「浦尻南台遺跡群」等の呼称は、すべて「浦尻貝塚」に統合している。

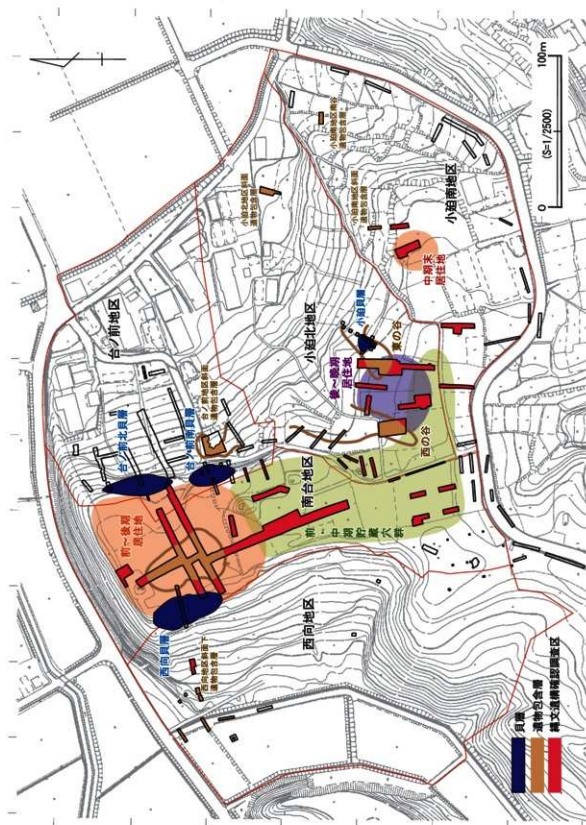


図4 浦原貝塚調査状況図（縄文時代）(S=1/2,500)

これまでの縄文時代の調査概要は図4のとおりである。南北に伸びる舌状段丘上（南台地区）は、前期後葉以降後期中葉までの遺構が確認される。前期後葉～後期前葉の竪穴住居・柱穴が分布する居住地は台地北側の径100mほどの範囲が中心となる。その中央は掘削行為により中期後葉の段階で厚さ70cm以上と推定されるローム層が失われている。遺構は前期後葉～中期中葉は少ないが、これは掘削行為等による遺構の破壊も考えられ、本来はこの地点で相当数の遺構があったものと考えている。確認される遺構数は、中期後葉以降に増加し、後期前葉まで多く確認されるが、後期中葉では断片的となる。居住地の南側の台地上には、小迫北地区までおよぶ広い範囲で貯蔵穴が分布している。

この居住地の東西斜面に貝層が形成されている。東側は「台ノ前北貝層」・「台ノ前南貝層」が南北に縦列しており、西側は「西向貝層」が確認されている。いずれも東西幅15～20m、南北長30～40mを計る大規模な貝層である。これらはいずれも前期後葉から形成され、前期末葉～中期初頭に本格化し、中期中葉までは継続して営まれている。中期中葉以後は断片的となり、現在のところ中期末葉には断続期をもつが、中期後葉、後期前葉も部分的な貝層が認められる。貝層は、前期末葉～中期中葉では土を多く含み、これは掘削行為による土の廃棄によるものと推定されている。貝はアサリを中心として、魚骨はスズキ・ウナギなど内湾性のものが多い。その他、台ノ前・西向地区の斜面、斜面下部ではこれらの居住地・貝層に伴う時期の遺物包含層が認められる。

小迫南地区では南台地区とおよそ180mの距離を持って、小規模ながら中期中葉の居住地が確認されている。また、前期前葉の遺物包含層も認められる（小迫南地区斜面遺物包含層）。しかし、小迫北・南地区で土器の出土量が多くなるのは、南台地区等で遺構数が減少する後期中葉以後である。小迫北地区では北から入り込む埋没谷（東の谷・西の谷）に囲まれた範囲を中心に多数の柱穴が確認され、この地区は後期末～晩期中葉の居住地と考えられている。

埋没谷は土器等の廃棄場としても利用されており、西の谷では後期末～晩期中葉にかけての貝以外の動物遺体を含む遺物包含層、東の谷には晩期前葉～中葉にかけての小規模な小迫貝層が確認される。この貝層ではヤマトシジミやイソシジミが多く、それ以前とは魚骨も含めて大きく様相を変える。このほか小迫南地区南谷遺物包含層（後期前葉）、小迫北地区低地遺物包含層（後期中葉～晩期）なども形成されており、低地や谷部まで生活の痕跡が認められている。

このように浦尻貝塚は、居住地や貝層の形成場所は変わりながらも、前期後葉～晩期までの長期間にわたる居住地として利用されていることと、各時期の貝層が形成されるという点が特筆される。

この他、浦尻貝塚の範囲内には浦尻古墳群とされる古墳時代後期の古墳群のほか、平安時代の竪穴住居も確認されている。また、中世館跡の推定地でもある。

註1 北原貝塚はこれまでに「北原貝塚」「神ノ前貝塚」「北向貝塚」「北原西貝塚（竜ヶ迫貝塚）」と呼称されてきており、過去にこれをまとめて「北原貝塚遺跡群」としたことがある（小高町教育委員会2004ほか）。平成19（2007）年に南相馬市教育委員会が実施した埋蔵文化財包蔵地の再整理において、これらを「北原貝塚」として登録することとした。

註2 加賀後貝塚は、これまで「大畑遺跡」「加賀後遺跡」「加賀後貝塚」を北原貝塚と同じく統合したものである。未報告である。

註3 角部内南台貝塚は、「角部内南台東貝塚」「角部内南台南貝塚」を統合したものである。

註4 竹島国基氏が採集した、南相馬市博物館に寄贈された資料には、縄文時代前期前半の土器が多いようである。

註5 未報告である。

註6 「浦尻貝塚1」で「浦尻台ノ前貝塚（台ノ前貝塚）」「浦尻西向貝塚（西向貝塚）」を統合したのは、福島大学学生考古学会の調査としていたが、初現はこの佐藤の報告であることが確認されたので、訂正をしておく。また、小迫貝層（小迫貝層）も玉川一郎が昭和56（1981）年に発見したとしていたが、佐藤の記述の中に小迫貝層に比定できる地点の調査報告があるので、これも昭和6年時に既に確認されていたと考えられる。

註7 この4基の古墳のうち3基は、1～3号墳に相当すると推定される。古墳ではない可能性が指摘される4号墳（南相馬市教育委員会2007b）は、記載内容からみて異なるものであり、残る1基は現在墳丘が消失している5・6号墳であることも推察される。

第2章 出土土器

第1節 土器分類

報告する縄文土器は、「浦尻貝塚2」に追記して下記のように分類した。「浦尻貝塚1」で掲載した遺物は、型式分類を変更しているものがある。一部併行すると考えられる土器群も含めている。

I群土器 縄文早期後葉の条痕文系土器群

II群土器 縄文前期初頭～中葉の土器群

III群土器 縄文前期後葉～末葉の土器群

III-1類 大木3式

III-2類 大木4式

III-3類 大木5式

III-4類 大木6式

III-5類 1～4類または一部IV群に伴う主に単斜縄文等地文のみ施される土器を一括した。

III-6類 1～4類に併行する異系統の土器を一括した。

IV群土器 縄文中期前葉の土器群

IV-1類 大木7 a式

IV-2類 大木7 b式

IV-3類 1・2類に伴う主に無文の土器を一括した。

IV-4類 1・2類または一部III群に伴う主に結束回転文等地文のみ施される土器を一括した。

IV-5類 1・2類に併行する異系統の土器を一括した。

V群土器 縄文中期中葉の土器群

V-1類 大木8 a式

V-2類 大木8 b式

V-3類 1・2類に併行する異系統の土器を一括した。

VI群土器 縄文中期後葉～末葉の土器群

VI-1類 大木9式

VI-2類 大木10式

VI-3類 1・2類に併行する異系統の土器を一括した。

VII群土器 縄文後期前葉の土器群

VII-1類 網取Ⅰ式

VII-2類 網取Ⅱ式

VII-3類 堀ノ内Ⅱ式

VII-4類 1～3類に併行する異系統の土器を一括した。

VIII群土器 縄文後期中葉～末葉の土器群

VIII-1類 加曾利B式

VIII-2類 新地式

IX群土器 縄文晩期の土器群

X群土器 縄文後期中葉～晩期の粗製土器

第2節 南台地区遺構外出土土器

第1項 地区の概要

南台地区は、縄文時代前期末以降後期中葉までの遺構が多数確認されている地区である。北側は竪穴住居のほか、柱穴などの多数の遺構が確認され、その分布範囲の中央部は縄文時代に掘削されたと考えられている。遺構の時期は大木9式期～網取式期を中心とし、竪穴住居や柱穴とした土坑Ⅰ類の検出は多くがこの段階に相当する。しかし、前期末～中期中葉の遺構も断片的に確認することもでき、この地区の東西に分布する台ノ前北貝層、台ノ前南貝層、西向貝層という大規模な貝層も前期末葉以降中期中葉を中心として形成されていることから、当地区は前期末葉以降の居住域であったと考えられている。貝層は中期後葉以降では部分的な形成にとどまり、後期中葉で終焉するが、遺構は後期中葉まで確認できる。また、当地区の斜面側の調査区からは、それぞれの貝層の斜面上位部分が存在する。

当地区の南側は、竪穴住居等の遺構は少ないが、集落の中心部から南北に伸びる道路状遺構のほか、土坑Ⅱ類とした貯蔵穴が多く確認されており、集落の中心部に隣接した貯蔵穴群が広がっていることが確認された。この貯蔵穴群は、小迫北地区まで広がることが明らかとなっている。

ここで報告するのは、51～53T、59T、Ⅱ区の調査区から出土した小土坑・遺構外出土土器である。

第2項 Ⅲ群土器

(1) Ⅲ-1・2類 (図5-1~14)

2は斜位の多条沈線と刺突、縦位に円形竹管が施されており、Ⅲ-1類とした。その他はⅢ-2類である。1・9は口縁に波状貼付文、頸部を横位に区画する貼付文が施されている。3～5は口縁部無文、地文が縄文のもので、口縁上端は刺突(3)、縄文(4)、交互押捺(5)がみられる。指頭による口縁交互押捺は、6・12など口縁に明瞭な無文帯を有しないものにもみられる。7は口縁にV字状の貼付文と押捺、口縁下に横位の刺突列が施文されている。8は口縁から横位・斜位の波状沈線上に縦位に垂下する波状貼付文が見られる。地文は斜位・縦位の結節回転文である。10は口縁から波状沈線が垂下し、頸部を横区画するものである。11も同様の横位の波状沈線が、頸部に施文されるものである。13は縄文地上に縦位の多条の平行沈線が施されており、全体の文様構成は不明だが、Ⅲ-2類に含めておく。14は幾何学状の貼付文が施される。

(2) Ⅲ-3類 (図5-15~20、図6-1・2)

図5-15は口縁に鋸歯状貼付文が施される。同図16・17はちぎったような貼付文がみられるもので、山形文を施文している。同図18~20は縄文地上に多条の山形沈線が施されている。図6-1・2は複合口縁を呈し、口縁下端に刻みを持つ。1は平行沈線により弧状の文様を描き、2は半円状の突起がつけられる。

(3) Ⅲ-4類 (図6-3~10)

3～6は口縁に文様が施文されるもので、3は上位を区画した格子状の平行沈線が施される。4は爪形文で施文され、2段の山形文を上下で区画し、施文後口縁の一部に押捺が認められる。5は太い隆帯が縦位に貼り付けられ、頸部を爪形文で区画している。6は頸部を突出するような隆帯で区画し、口縁部には縦位の多条平行沈線が充填されている。7は口縁に2個一対の瘤状隆帯(突起)がつけられている。8～10は胴部破片である。8は縄文地上に横位3条の結節浮線文が施されている。9は平行沈線で下位区画され、縦位の山形文が見られる。10は2条1単位の弧状刺突列が見られる。

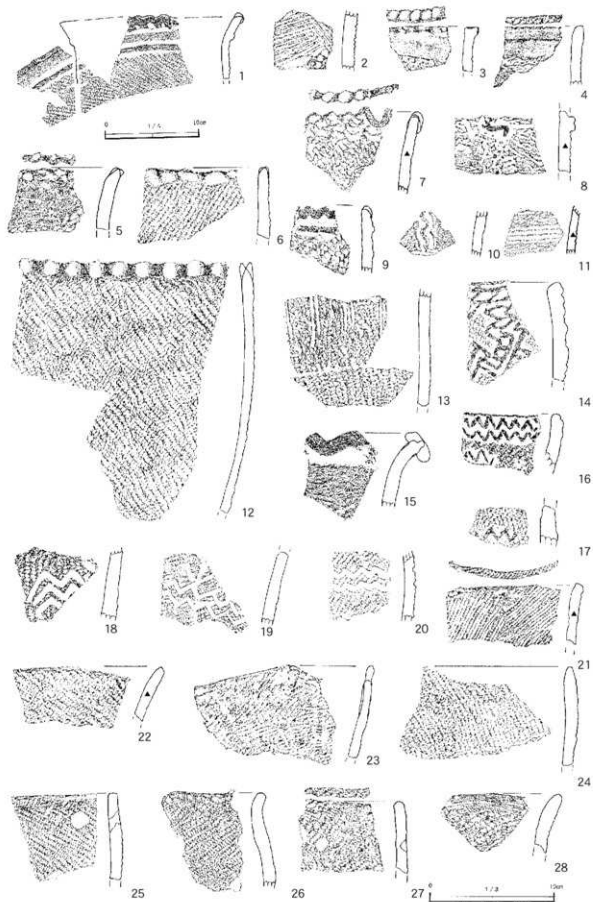


图5 南台地区遗構外出土土器①Ⅲ群土器

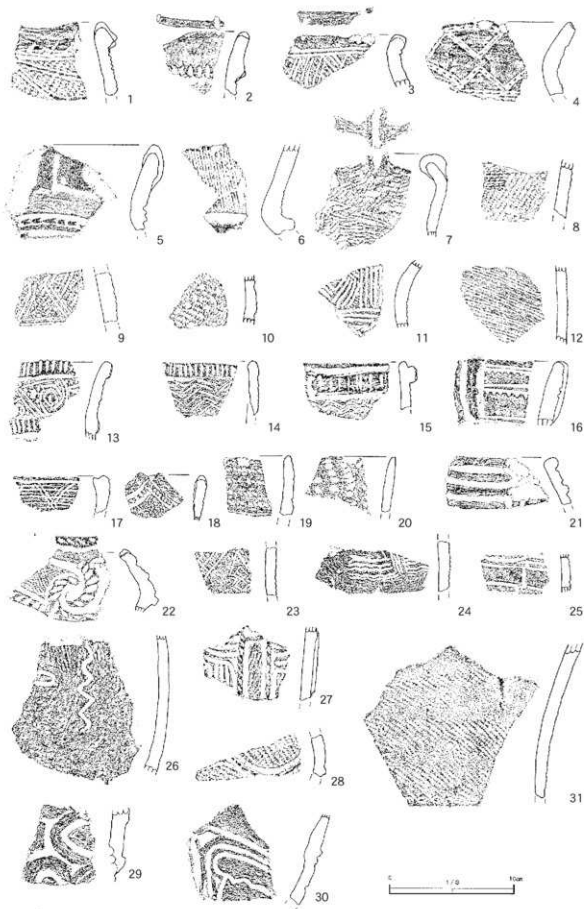


図6 南台地区遺構外出土土器②Ⅲ・Ⅳ群土器

(4) III-5類 (図5-21~28)

III-2~4類に伴うと考えられる縄文施文の土器である。胎土に少量の繊維を含むもののほか(21・22)、波状口縁もみられる(23・26)。横位施文の単斜縄文を施し、口縁上端にも施文するものがある(27)。

(5) III-6類 (図6-11・12)

11は縄文地に多条沈線により縦位・横位・V字状の文様が施されている。12は斜位の櫛歯状線文が施される。

第3項 IV群土器

(1) IV-1類 (図6-13~18・23~26)

13~15は口縁に縦位刻みが施された隆帯を施し、渦巻文、多段の山形文・波状文を描くものである。13は渦巻文の周囲に刺突を充填している。16は縦位隆帯を付け、横位沈線に沿い刺突が施される。17は横位多条平行沈線施文後に上位を単沈線で区画し、斜位・弧状の平行沈線で文様を描いている。18は波状口縁で梯子状短沈線が施されるもの、23も梯子状短沈線を施し、縦位に垂下する文様が施されている。24は縦位に垂下する多条波状沈線に横位波状沈線がアクセントとして加えられている。25・26も無文地に沈線による文様が描かれるものであり、IV-1類に含めておく。

(2) IV-2類 (図6-19~22、27~31)

19は口縁に横位縄圧痕文が施されるものである。20は斜位刺突列が施されるもので、IV-2類に相当としておく。21・22は内湾する口縁部であり、21は隆沈線で楕円状区画が、22は刻み付隆帯で弧

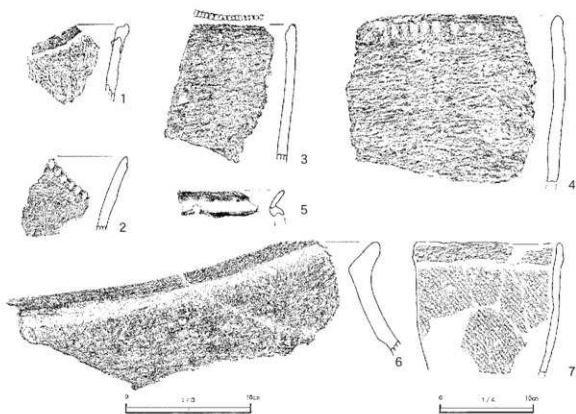


図7 南台地区遺構外出土土器③ IV群土器

状・渦巻状の文様が施されている。27は縄圧痕文が施された2条単位の縦位隆線で縦位に区画し、沈線による文様が施されている。28は隆線に沿い有節沈線がみられ、29・30は隆帯・隆線に沿う沈線・隆沈線が施文されている。31は断面三角の隆線が縄文地上に貼り付けられている。

(3) IV-3・4類 (図7-1~7)

1・7はIV-4類である。1は波状複合口縁である。7は口縁が肥厚し、無文を呈するが、胴部は横位の縄文が施されている。2~6はIV-3類である。2は口縁断面が三角形を呈し、口縁上端は、外方からの刻みが増えられる。3は内面内そぎ状の口縁形態で、口縁上端に押捺が施される。4は口縁がナデで丸く整えられている。5は口縁がくの字状に屈曲し、頸部に焼成前の穿孔が見られる有孔土器である。6は波状口縁を呈する浅鉢で、内面胴部上端に明瞭な段をもつ。

第4項 V群土器

(1) V-1類 (図8-2~10・12)

2・3は渦巻状・S字状の貼付文が施されている。4・5は口縁上下に横位の弧状貼付文を施し、間に縦位の縄圧痕文を施すものである。6は口縁下端に隆帯を施し、口縁上に刺突列を施す。7は口縁を隆帯・隆線で区画し、燃糸文地上に沈線で弧状等の文様を描くものである。9は2~3条単位の沈線による文様を描き、下端を交互刺突文で区画するものである。12は隆沈線により方形区画され、渦巻文等が施される。8・10は縄文地上に平行沈線により施文されている。本類に含めたが、前後の段階に相当する可能性がある。

(2) V-2類 (図8-1・11・13~20、図9-1・2)

図8-1は浅鉢で波状口縁の波頂部を起点として隆沈線による渦巻文が施される。同図11は一部剝離しているが、断面カマボコ状の隆沈線による渦巻文が施される。胴部が大きく膨らむ器形を呈する。同図13~17は内湾する口縁である。13・14は横位に伸びる剣先状の隆線・隆沈線が施され、13は頸部に無文帯を有する。同図15~18は隆沈線で、19・20は隆線で文様が施される。

図9-1・2は渦巻状の隆沈線が施される口縁部破片である。渦巻文の中央の高さが浅くならないものである。

第5項 VI群土器

(1) VI-3類 (図8-21)

21は頸部がくびれ、地文に平行沈線による条線文と押捺された隆帯がT字状に施されるものである。

(2) VI-1類 (図9-3~12・15~19)

3は渦巻状隆線、4は環状隆線が施されている。5~7は隆沈線により渦巻文、楕円形区画が施される。8~10は隆沈線により曲線状・渦巻状の文様が施される胴部破片である。11は2条単位の沈線により縦位の帯状文が描かれ、12も同様の帯状文が施される。口縁が緩やかに外反する器形である。15は口縁を横位に区画し、頸部に無文帯を有し、縦位の沈線と帯状文が施される。16~18も沈線による縦位の帯状文が施される胴部破片である。19は断面カマボコ状の隆沈線間に刺突が施され、内外面ともに丁寧なミガキが施される。

(3) VI-2類 (図9-13・14、図10-1~10)

図9-13は波状口縁を呈し、曲線状の文様が施される。同図14は口縁を横位区画し、縦位の帯状の縄文帯が施文されている。

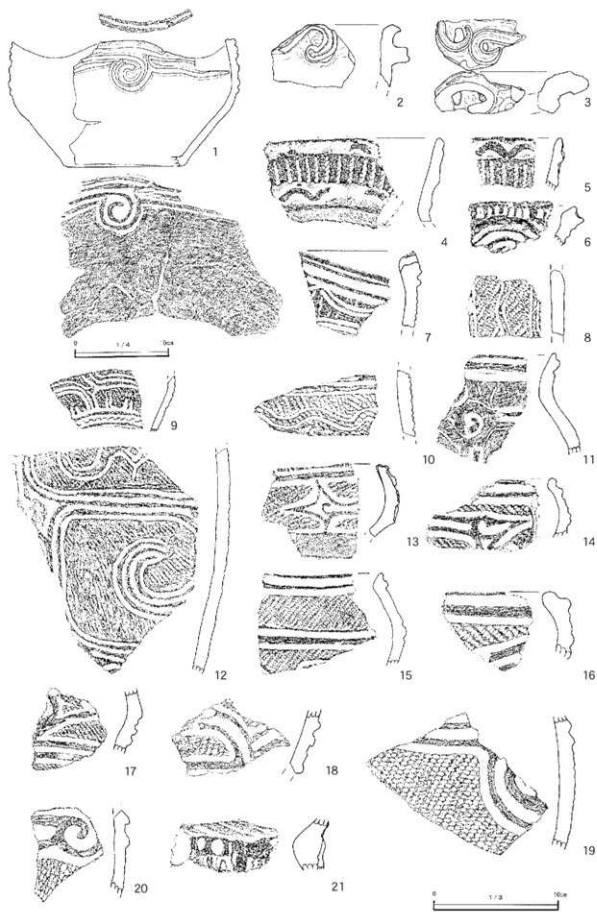


图8 南台地区遗構外出土土器④ V·VI群土器

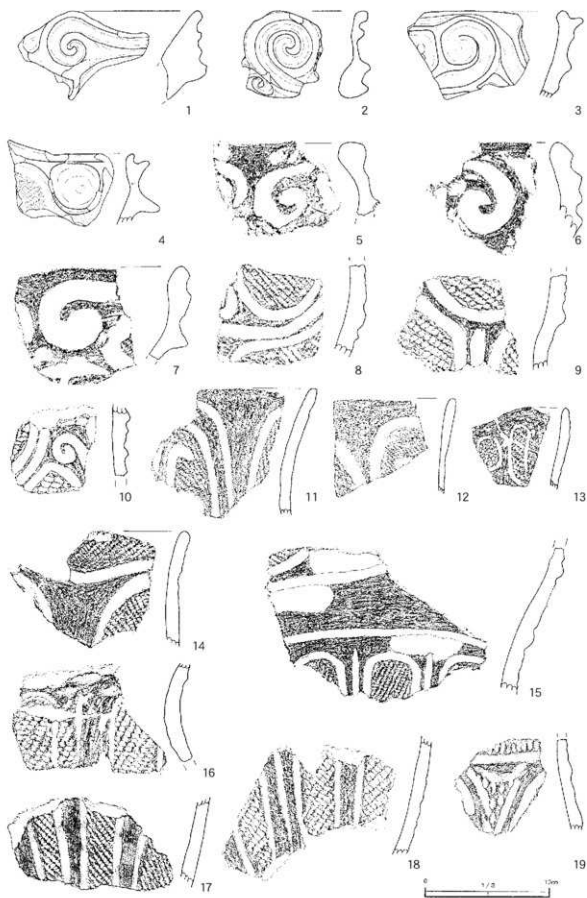


図9 南台地区遺構外出土土器⑤VI群土器

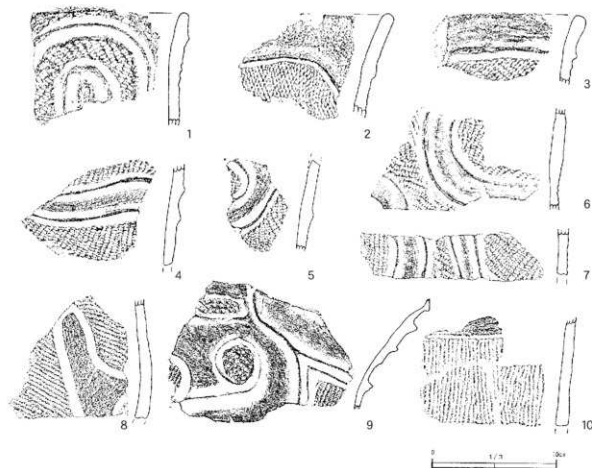


図10 南台地区遺構外出土土器⑥ VI群土器

図10-1～7は、断面三角の隆線で文様を描くものである。1・2は逆U字状に、4～7は無文帯で横方向に流れた文様を描くものである。同図8は沈線で区画された無文帯で文様を描く胴部破片である。同図3・10は口縁を断面三角の隆線、沈線で区画する粗製土器である。同図9は浅鉢で、断面三角の隆線で文様を描き、外面が赤彩される。内外面ともにミガキ調整されている。

第6項 VII群土器

(1) VII-1類(図11-1～14、図12-1・2)

図11-1～3、5～7は口縁を隆帯で区画し、縦位隆帯・ノ字状隆帯が施されるものである。隆帯は刺突(2)や押捺(4)が施されるほか、中央沈溝をもつもの(6)がある。5は隆帯の交点に8字状浮文がつけられている。1は横方向に突出する突起をもつ。同図9は口縁が内屈し、低い隆線による渦巻文が施される。同図10は渦巻状・8字状の隆帯がつけられる突起部である。同図11・12・14は口縁を隆帯とそれに沿う沈線で区画するものである。11は縦位の摩消縄文や蛇行状沈線が認められる。同図13は三角状の突起をもち、隆帯が弧状にせり上がるように施されている。

図12-1は摩消縄文が施されるもので、J字状文を描くとみられる。同図2は多条の沈線で三角形区画が施される。



図 11 南台地区遺構外出土土器⑦ VII群土器

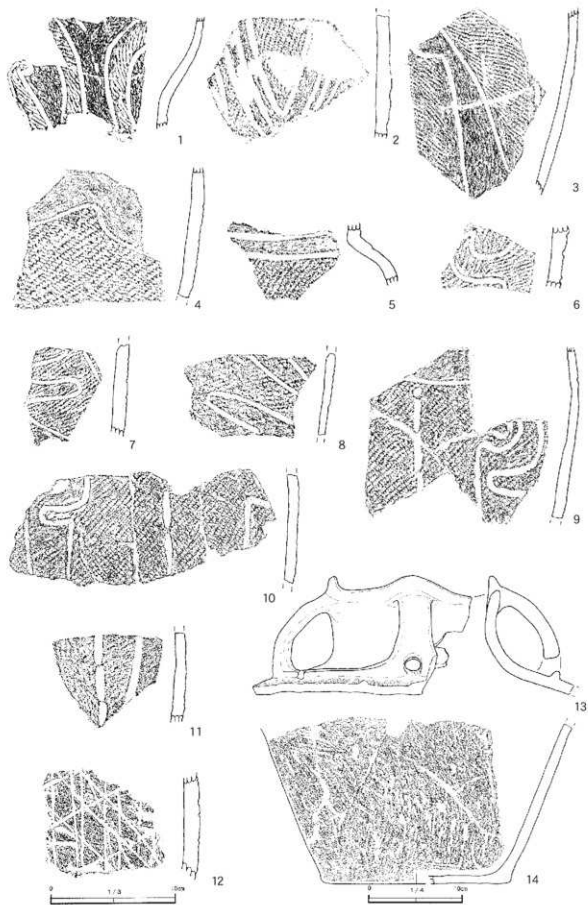


图 12 南台地区道槽外出土土器⑦ VII群土器

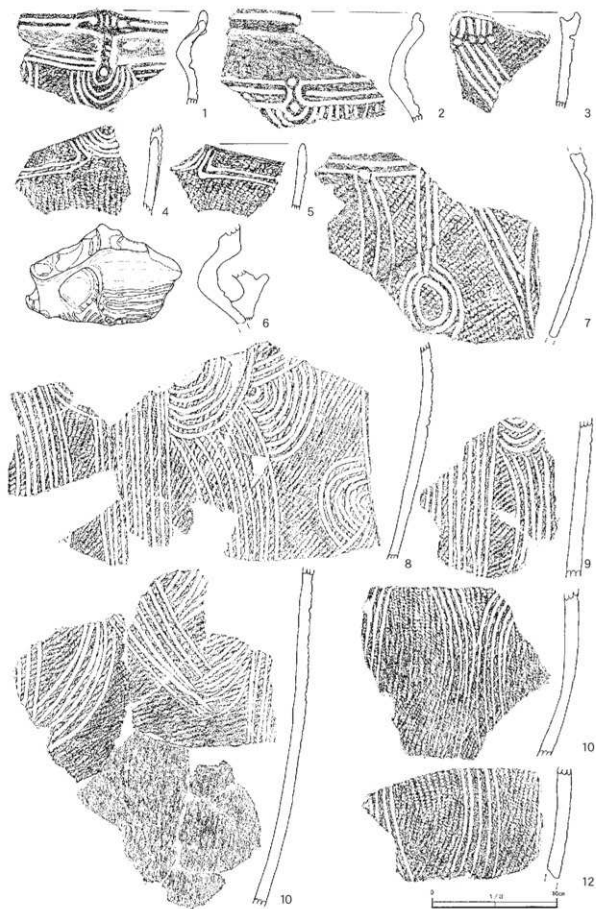


图 13 南台地区遺構外出土土器⑦ VII群土器

(2) VII-2類 (図11-15・16・18、図12-3~11、図13-1~12)

図11-15・16・18は口縁を沈線区画し、15は蕨手状、16は蛇行状沈線、18は鈎手状摩消縄文を施す。図12-3~8は、摩消縄文により文様を描くものである。5は頸部が区画され、胴部が彫らむ器形を呈する。同図9~11は縦位の列点状沈線をもつものである。9・10は蕨手状文が施されている。

図13-1~12は多条沈線で文様が描かれるものである。1・2は頸部を楕円形の沈線で区画し、上向弧状の多条沈線が施されている。1は波頂部から垂下する縦位隆帯がつく。3は小波状口縁の波頂部に縦位多条の弧状沈線と盲孔を起点として、斜位多条沈線が施文されている。4・5は同一個体で、波頂部に上向の重弧状の多条沈線を施し、口縁を2条の沈線で区画している。6は橋状把手を持つもので、頸部に楕円形の沈線区画が認められる。7は沈線で口縁を区画し、縦位に多条沈線により曲線状、弧状の文様を施している。8~12は多条沈線により、曲線状の文様を施す。

(3) VII-4類 (図11-19・20)

19は波状口縁を呈し、単沈線間に半截竹管による刺突が充填される。20は口縁に1条の沈線が施され、縄文地上に2条単位の横位沈線を施し、沈線間に円形刺突を充填している。

(4) VII群 (図11-17、図12-12~14)

VII-1・2類いずれにも即断できないものをまとめた。図11-17は口縁を沈線で区画する粗製土器である。図12-12は格子状沈線が施される胴部破片である。同図13は波状口縁を呈する壺形土器である。波頂部から4単位の橋状把手が付けられ、把手下端には貫通孔が施されている。同図14はVII群と考えられる底部破片である。胴部下端にヘラケズリによる調整がみられ、底部はナデ調整されている。

第7項 VIII・IX群土器

(1) VIII-1類 (図14、図15-1~8、11~19)

図14-1・3は内面に文様を持つ。1・3とも外面にミガキが施され、1は内面に平行沈線の施文後に刻みが増えられる。3は内面に円形状の沈線、平行沈線が施された後に刻み・平行沈線に連結するL字状の沈線が施文されている。同図2・4~11・14・15は地文施文後に平行沈線で横位文様帯を描出す一群である。5は口縁の形状にあわせて山形状の平行沈線が施される。6は平行沈線間に曲線状沈線を施文し、地文を磨り消している。9・14・15も沈線間の地文を磨り消している。同図12・13は地文施文後に横位沈線を1条施している。同図16~25は平行沈線を用いて横位の文様帯を描出した後に横位の文様帯を縦位の沈線で区切る一群である。17は口縁の上端部に縦位沈線が入った山形状の小突起が施され、18は口縁部に円形の突起・刻みが増えられる。19・23は施文してある平行沈線をなぞりながらL字状の沈線を描いている。20~22・25は縦位弧状沈線を施し、24は2条一対の縦位短沈線を施文している。

図15-1は頸部より上位が欠損する小形の壺形土器である。底部から外反しながら立ち上がり、肩が張り肩部に最大径を持つ。頸部から肩部にかけて斜位LR縄文を施し、肩部で横位沈線により文様帯を区画する。文様帯内は十字状に沈線を施し、区画内の縄文を磨り消している。底部には網代痕が確認される。同図2は斜位LR縄文施文後に斜位沈線を加えている。同図3・4は横位沈線の下部に弧状沈線区画、同図5は平行沈線間に刻みが施されている。同図6は沈線で区画され、内部は地文が磨り消されている。同図7は横位・縦位の平行沈線、同図8は弧状沈線が描かれている。同図11は注口土器である。注口部下位に縦位の沈線を施文する。同図12は内外面に、13は内面にミガキが施され、口縁内側に1条の沈線が横走する。同図14~16は内外面にミガキが施され、横位の沈線を加えている。同図18は波状口縁を呈す。同図19は口縁がわずかに肥厚し、内外面にミガキを施している。

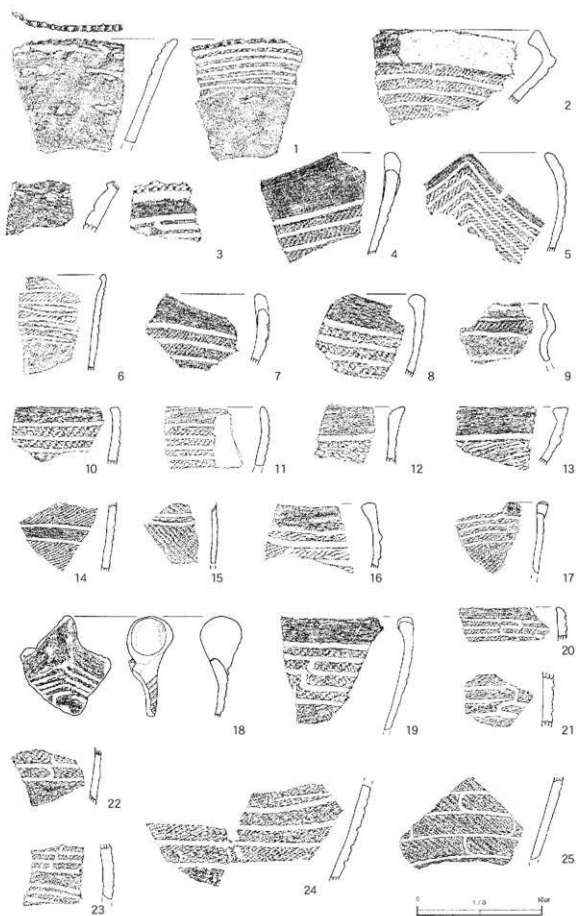


図 14 南台地区遺構外出土土器⑩ VIII群土器

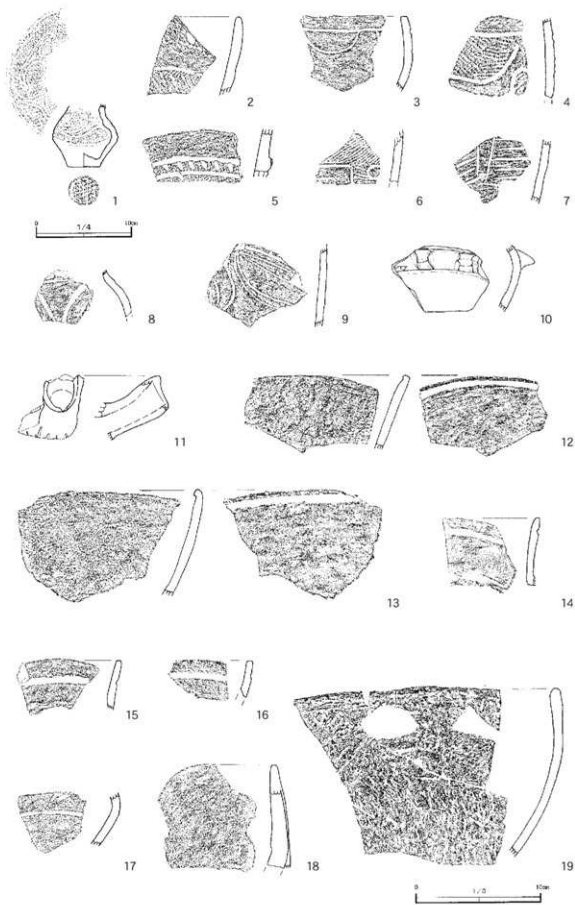


图 15 南台地区道槽外出土土器①Ⅶ群土器

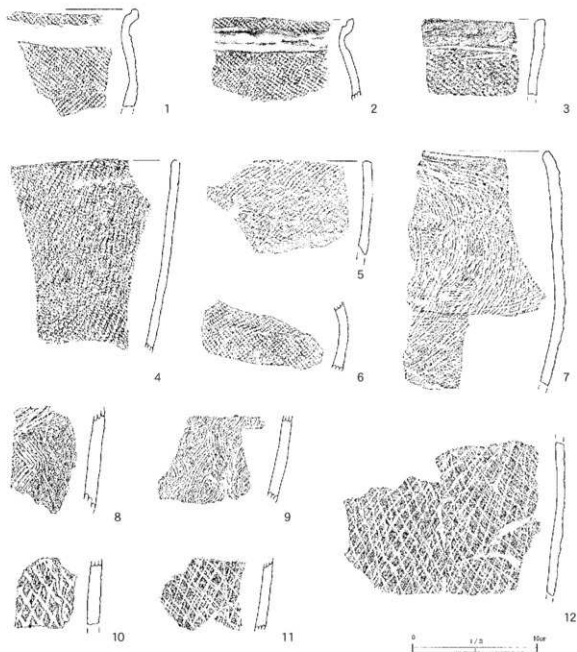


図16 南台地区遺構外出土土器⑫ X群土器

(2) VIII-2群土器 (図15-9・10)

9は弧状沈線により文様が描出されている。10は2個の突起を施した後に平行沈線を横走させ、小さな瘤を貼付けている。

(3) X群土器 (図16)

後期中葉～晩期の粗製土器である。1・6は非結束羽状縄文が施文されている。1は頸部の縄文が磨り消され、口縁内側に1条の横位沈線が加えられている。2～5は斜位縄文が施される。2は頸部の縄文が磨り消され、口縁内側に1条の沈線が横走る。3は横位沈線が見られる。7～9は縦位櫛歯条線文が施文される。同図10～12は網目状撚糸文が施されている。11と12は同一個体である。

第3節 台ノ前南貝層貝層外出土土器

第1項 貝層の概要

台ノ前南貝層は集落の中心と考えられる南台地区の東側にあたる東西最大約14m、南北約31mを測る貝層である。確認したトレンチは31・32・37～39・43Tである。貝層を掘り込んで調査したのは、斜面上位にあたる31Tと斜面下位にあたる38・39・43Tである。

貝層中からはⅢ・Ⅳ群を中心とした土器が出土しており、下層に大木5～6式が出土し、大木7a式を中心として、大木9式まで認められる。貝層は小規模な貝層が下層に間層をもって確認され、斜面上位は土・土主体層を中心とした堆積、斜面下位に混土貝層の堆積が認められる。

本節では貝層を確認しただけで掘り込んで調査していない32・37Tのほか、貝層は確認していないが、隣接する40Tの出土土器もあわせて掲載した。

第2項 Ⅱ・Ⅲ群土器

(1) Ⅱ群土器 (図17-1)

1は胎土に繊維を含み、口縁上端と外面に横位縄文が施文されている。

(2) Ⅲ-1・2類土器 (図17-2・3・12)

2は附加条縄文施文地に1条の山形沈線が施されるものである。やや波状であり、1条で施されていることから、Ⅲ-1・2類に伴うものとした。3は口縁下に多条の結節回転文が縄文地に施されるもので、Ⅲ-2類とした。12は胎土に繊維を少量含み、2段の横位沈線間に半截竹管による斜位刺突を施文している。刺突の方向が斜位であり、Ⅲ-1類に位置づけておく。

(3) Ⅲ-3類 (図17-4・5)

4・5は口縁に鋸歯状貼付文が施されるものである。4は口縁下が無文で、頸部以下に縄文が施文されている。5は縄文地に2条単位の山形沈線が施される。

(4) Ⅲ-4類 (図17-6～11・13～19)

6・7は口縁を無文とし、6は複合口縁を呈している。8・9も同じく口縁を無文とするが、口縁下端に8は三角刻み、9は爪形文を施文する。8は口縁下に爪形文で文様を描き、9は縄文地に平行沈線で山形(波状)文を加えている。10は肥厚口縁に太描沈線で施文している。11は肥厚しない口縁にL字状に区画された沈線間に短沈線を充填している。13も口縁破片で、弧状沈線や沈線間に短沈線が施されている。

14～19は金魚鉢形の器形を呈すると考えられるものである。14は胴部上半に太描沈線で文様が施されている。15は頸部屈曲部にあたり、横位に沈線区画し、縦位刻みが施文される。16は爪形文で文様を描き、17～19は沈線で文様を描いた後、沈線の片側に爪形文を沿わせている。

(5) Ⅲ-6類 (図17-20～24)

20・21は同一個体で、横位に多条の有節沈線が施されている。22は縦位沈線間に斜位沈線を縦に充填するように施文している。23は変形爪形文が横位に施文されるものである。24は櫛歯状の工具による斜位・横位沈線が施されている。

(6) Ⅲ-5類 (図17-25～29)

26は附加条1種、25・27・28は横位縄文、29は横位・縦位に縄文が施文される。25・27は波状口縁を呈する。28は棒状工具による刻みが施されている。

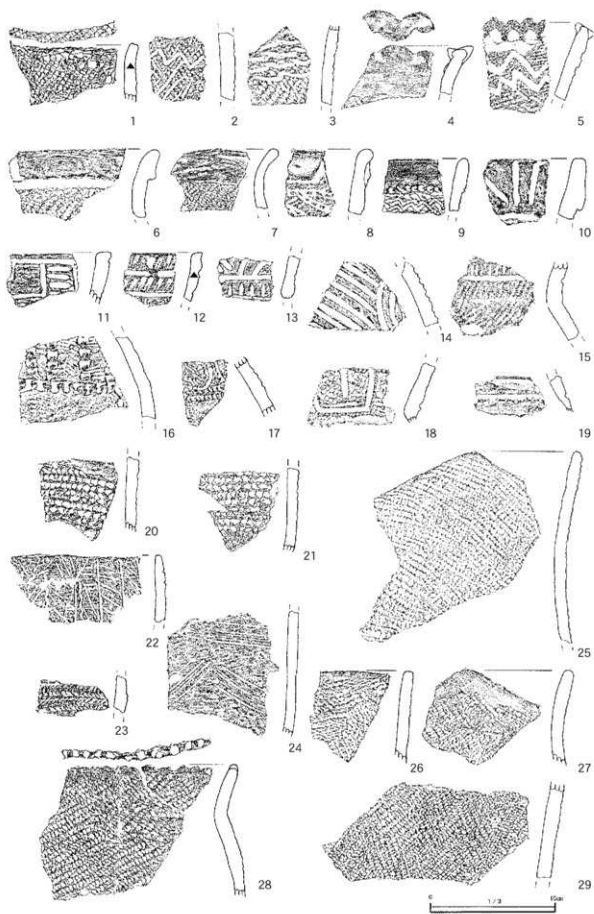


図 17 台ノ前南貝層貝層外出土土器①Ⅱ・Ⅲ群土器

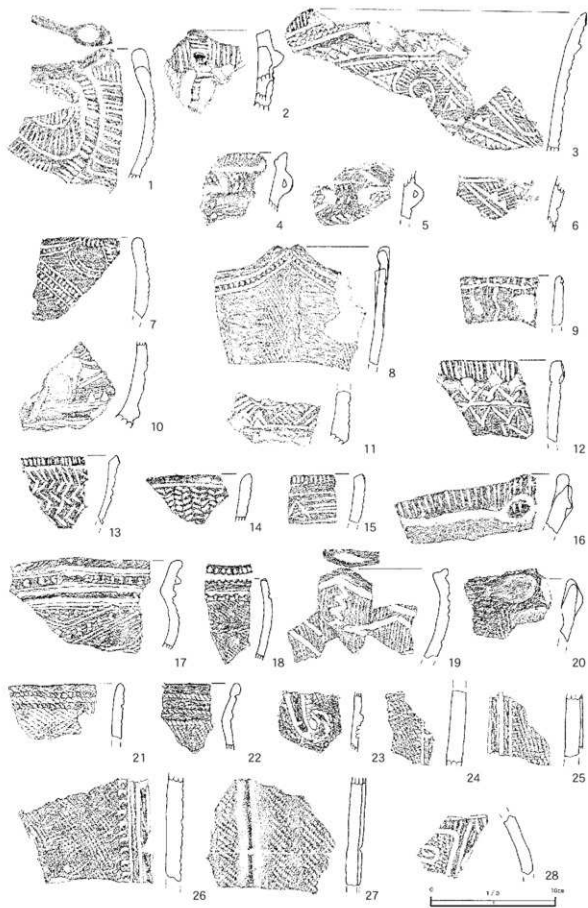


図18 台ノ前南貝層貝層外出土土器②IV群土器

第3項 IV群土器

(1) IV-1類 (図18-1~19)

1は波状口縁を呈し、口縁が内湾する器形である。波頂部に隆帯を貼り付けた突起を有する。縦位の刻み付弧状隆帯を施した後、渦巻状沈線を描き、波頂部下に沈線が充填される。渦巻状沈線間に施される梯子状短沈線はやや乱雑に間隔をあけて施文されている。2は口縁に刻み付隆帯を貼付けている。口縁上端の突起部から口縁部にかけて縦位に刻み付隆帯が施され、隆帯の下端に瘤状突起を有する。瘤状突起からは逆U字状の隆帯が垂下している。

3~6は同一個体である。波状口縁を呈し、口縁は直線的に外反する。4・5には口縁下に横状把手が見られる。口縁に刻み付隆帯を施し、口縁下の沈線間にD字形刺突列を施す。その下端を隆沈線で区画し、斜位多条沈線を充填した後、交互に三角刺突列が加えられている。胴部は斜位・渦巻状の沈線が描かれ、梯子状短沈線と三角刺突を加えて玉付三叉文を描いている。

7~9・11は梯子状短沈線が施文されている。7は斜位・弧状、8・9は口縁に沿って施されている。8は波状口縁で直線的に開く器形を呈する。9は縦位に山形波状沈線も施文されている。11は玉付三叉文を描くものとみられる。10は口縁が内湾する器形で、頸部を隆沈線で区画し、剥離が激しいが沈線と三角刺突で玉付三叉文を描くと考えられる。

12~15は短沈線により多段の山形文・矢羽状文を描くものである。12は口縁に刻み付隆帯を貼付け、下端に三角刻みが加えられる。13も口縁部に刻み付隆帯を施すが、14は口縁部を無文としている。15は口縁に隆帯はないが、縦位刻みがつき、横位多条沈線を施した上に山形沈線を描いている。16は口縁に刻み付隆帯を施し、山形状小突起を施した隆帯下端に瘤状貼付文が付けられている。

17は頸部で屈曲し、口縁は短く外反、胴部上半が膨らむ器形を呈している。口縁に縄文を施した隆帯を貼り付けている。頸部を隆帯で区画し、口縁下と胴部に横位・斜位の平行沈線で文様を描いている。平行沈線間には半截竹管による2条の刺突列が充填されている。18は口縁が内湾する器形を呈し、口縁上端に刻み、口縁下に横位沈線と交互刺突文が施される。19は内湾する波状口縁である。波頂部は隆帯が貼り付けられ、半截竹管による多条沈線地に単沈線による斜位、縦位山形文が施文されている。

(2) IV-2類 (図18-20~28、図19-4)

図18-20は小波状口縁を呈し、横位弧状隆帯を貼り付けるものである。同図21・22は口縁に横位縄圧痕文を施すものである。21は縄文地に施され、端部が渦巻状を呈している。22は肥厚する無文の口縁に施文されている。同図23は縄文地に蕨手状の隆線を施し、隆線に沿い有節沈線が加えられる。同図24~25は同一個体の可能性があり、縦位隆線・平行沈線とそれに沿う爪形文が施されている。同図27は断面三角の隆線が縄文地に施されている。同図28は沈線により、方形または三角形に区画し、区画内に曲線状の文様を描くものとみられる。

図19-4は波状口縁を呈し、波頂部が逆U字形にくぼみ、波頂部のみ口縁上端に押捺が施される。外面は縦位に縄文が施文され、口縁内面には明瞭な段を持つ。

(3) IV-4類 (図19-1~3・5~9)

3以外は縦位結節回転文が施文されている。6・9は附加条1種、7は羽状縄文を整った形で施文している。3は縦位の弧状隆帯があり、縄文が認められないが、2・8と同様に頸部を押捺付隆帯で区画することから本類に含めた。5は頸部を縦位刻み付隆帯で区画している。

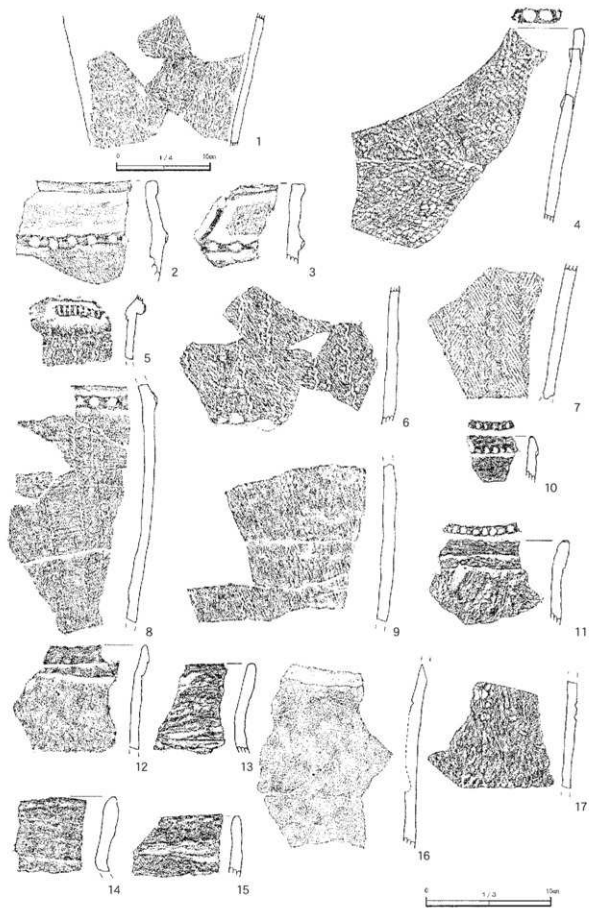


図19 台ノ前南貝層貝層外出土土器③IV群土器



図20 台ノ前南貝層貝層外出土土器④ V・VI群土器

(4) IV-4類 (図19-10~17)

10は複合口縁を呈し、口縁上端と下端に半截竹管による刺突を施すものである。11・12は口縁に輪積痕を残すものである。11は口縁上端に半截竹管による刻みを施しているが、12は先端を尖らせるように調整している。13~15は口縁破片である。13は口縁上端が平坦、14・15は丸い断面形を呈している。また、13・14は頸部でゆるく外反し、直立する形態であり、15はゆるく内湾する。16は胴部破片である。17は部分的に半截竹管による刺突が縦位に施文されている。

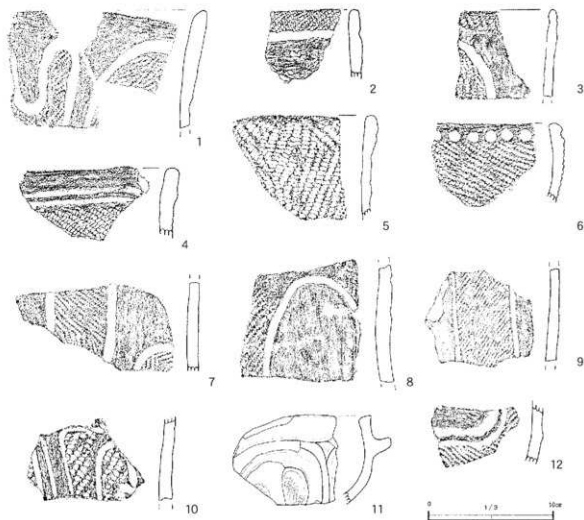


図21 台ノ前南貝層貝層外出土土器⑤ VI群土器

第4項 V群土器

(1) V-1類 (図20-1~4)

1は口縁に隆帯を貼付けて区画し、区画内に有節沈線を施す。口縁上端には貼付文を施した突起を有し、頸部を隆帯区画している。2は隆沈線により方形区画するもの、3は隆沈線による曲線状文、4は平行沈線による横位・斜位の文様を描く。

(2) V-2類 (図20-5~12)

5は内湾する口縁でキャリバー状の器形を呈するものである。横位の隆沈線が施されている。6も同様の器形で渦巻文が施文されており、楕円形の区画を施す。12も同様の器形を呈し、隆線で文様が描かれている。7は渦巻文をもつ突起。8・9も渦巻状の隆線・隆沈線が施されている。10・11は胴部破片で、10は隆線、11は平行沈線で文様を描いている。

第5項 VI群土器

(1) VI-1類 (図20-13~24、図21-7~10)

図20-13~16・19・20は内湾する口縁でキャリバー状の器形を呈するものである。口縁は楕円形区画(14~16)や渦巻文(13・16)が施される。15・16の胴部の帯状文は上位が閉じず、開放している。19は弧状の文様を施す。20は口縁を沈線区画し、縦位の帯状文が施されるものと見られる。同図17は胴部が膨らみ、頸部に横方向の突起をもつ。同図18は口縁に横位の橋状把手を有している。いずれも文様は沈線による帯状文である。同図21・22は口縁が外反して開く器形であり、逆U字状の文様を描くものと考えられる。同図23・24は2本1対の隆線・隆沈線で連結渦巻文を描くものである。

図21-7~10は胴部破片で、縦位の帯状文・逆U字状文を施している。

(2) VI-2類 (図21-1~3・11・12)

1は曲線状の文様が描かれている。2・3は口縁が直線的に開くものであり、口縁に横位縄文帯を有している。11は浅鉢で内湾する口縁部である。断面三角の隆線で文様を描き、内外面に丁寧なミガキが施され、外面は赤彩が残る。12は断面三角の隆線で区画された無文帯で文様を描くものである。

(3) VI群 (図21-4~6)

4は断面三角の隆線により口縁を区画する。5は単斜縄文が施文されるもので、本群に伴う可能性が高い。6は口縁に円形刺突列が施されている。

第7項 VII・X群土器

(1) VII-1類 (図22-1~6)

1~3は口縁を隆帯で区画している。1は縦位隆帯がつけられる。4は波頂部に「の」字状隆帯を貼付けている。5は口縁が内屈する波状口縁であり、波頂部に対向する弧状沈線、内面に盲孔を施す。6は口縁の沈線による楕円形区画内にD字形の刺突列を施すものである。縦位隆帯もわずかに認められる。

(2) VII-2類 (図22-7~23)

7は口縁突起をもち、突起上端に環状の隆帯を貼り付けている。突起の内外面に沈線と盲孔が施され、胴部は対向する弧状の多条沈線が施文される。8も突起が付く口縁破片で橋状把手と多条沈線が施される。9も波状口縁を呈し、波頂部に貫通孔と盲孔が施されている。10・11・13は口縁が沈線区画されるものである。12は頸部を沈線による楕円文で区画している。

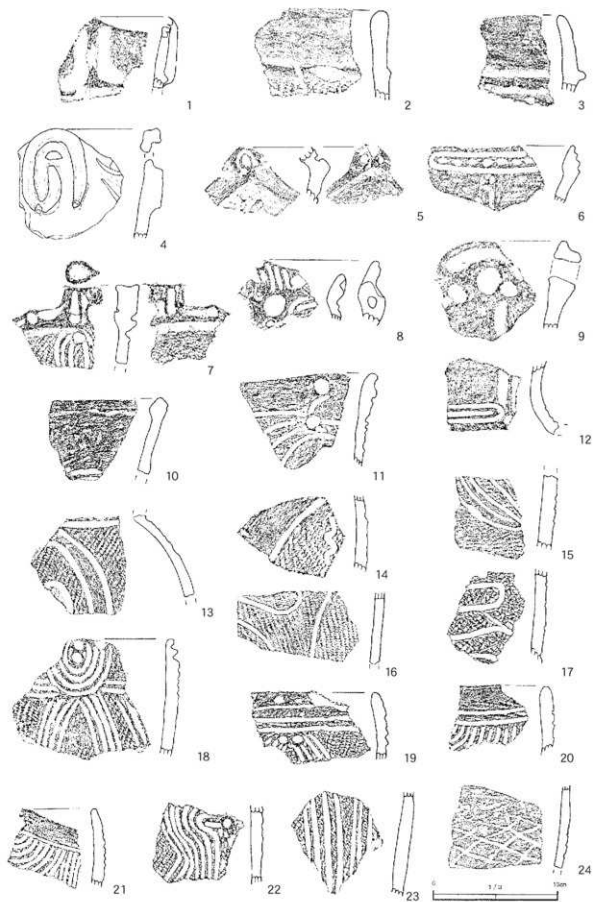


図22 台ノ前南貝層貝層外出土土器⑥ VII・X群土器

14は弧状の沈線区画内に縦位の蛇行状沈線が施されている。15～17は曲線状の沈線が縄文地上に施されるものである。18～20は多条沈線により口縁を区画するものである。18は上向の重弧状文の中央に盲孔を施している。18・19の胴部文様は多条沈線により対向する弧状文を描いている。20・21は口縁区画下に上向の重弧状文を施す。22は円形浮文と縦位隆帯を基点にΩ状の文様を多条沈線で施している。23は縦位の多条沈線を描く。

(3) 区群 (図21-24)

24は網目状燃糸文が施文されている。

第4節 台ノ前北貝層貝層外出土土器

第1項 貝層の概要

台ノ前北貝層は、集落の中心とされる南台地区の東側にあたる東西最大約15m、南北約47mを測る貝層である。確認したトレンチは、53・54・63・67Tである。平面的な検出状況では、54・63Tで混貝土層と土主体層が互層となっており、53Tでは混貝土層、67Tでは土層が中心である。貝層を掘り込んで調査を行ったのは、斜面下位の54Tであり、63Tでは上層の一部のみ掘り下げて調査を行った。

46T、54T東側、56～58Tでは貝層は確認されなかったが、二次体積と考えられる混貝土層が確認されており、貝層の下端は破壊された部分が多いと推定される。特に46T、56T、58TではⅡ層中に多量の貝等の動物遺体が確認されている。本節では、ここからの出土土器もあわせて掲載した。

台ノ前南貝層と同じく、斜面上位は土・土主体層を中心とした堆積、斜面下位に混土貝層の堆積が認められ、貝層中からはⅢ・Ⅳ群を中心とした土器が出土している。

斜面上位の53T東で大木3～4式の出土がみられることから、この段階が貝層の形成初期段階として捉えられる。斜面下位では大木6～7b式を中心として、大木8a式まで貝層が形成されたと考えられている。

第2項 Ⅱ・Ⅲ群土器

(1) Ⅱ群土器(図23-1～11)

1～11は胎土に織維を含む。1は口縁に山形状小突起を配し、多段のループ文が施文される。2は多条沈線により鋸歯状文を施す。口縁上端には刻み、文様帯下に横位の刺突列が加えられている。4は頸部が屈曲する器形で上位に多条斜位平行沈線を施し、屈曲部に半截竹管による刺突が加えられている。3・6・8・9は非結束羽状縄文が施されている。3は口縁上端に縄痕による刻み、口縁下に横位の刺突列が施される。6も口縁に横位刺突列が施されている。

(2) Ⅲ-1・2類(図23-12～20、図25-29)

図23-12・13はⅢ-1類である。12は縄文地に縦位木葉文と思われる縦位弧状の平行沈線を描く。13も縄文地に平行沈線により横位の連結木葉文を施文している。

図23-14～19はⅢ-2類である。14は口縁上端に刻みを施し、口縁に2条の刺突列が施される。15は波状・横位の貼付文が付けられている。16～19は口縁を無文とするもので、16・18・19は口縁下に多条の横位結節回転文が施される。口縁上端は16が刺突、17～19は押捺が施されている。

同図20は鋸歯状の貼付文が口縁に部分的につけられている。鋸歯状貼付文の幅が狭く、口縁下に結節回転文が認められることから、本類に含めておく。図25-29は縄文地に横位多条の爪形文を施し、その上に渦巻状貼付文を施している。

(3) Ⅲ-3類(図23-21～34、図24-1～11)

図23-21は縄文地上に半截竹管による刺突が施されている。小破片であることから、全体は不明であり、次段階の可能性もある。同図22～26は胴部に山形・幾何学状の貼付文が施されるものである。22は口縁に環状貼付文、23・24は鋸歯状貼付文がつけられている。26は内湾して立ち上がる波状口縁で、波頂部に貫通孔があり、その周囲に剝離痕がみられ、環状の貼付文がつけられていたとみられる。波頂部から垂下する菱形・三角形の貼付文が施される。同図27は口縁に縄文施文した鋸歯状貼付文が付き、頸部に2条の半截竹管による刺突列が加えられている。同図28は複合口縁の上端を棒状工具による刻み、下端を半截竹管による刻みを施し、口縁下に円形竹管による刺突が施文されている。

第4節 台ノ前北貝層貝層外出土土器

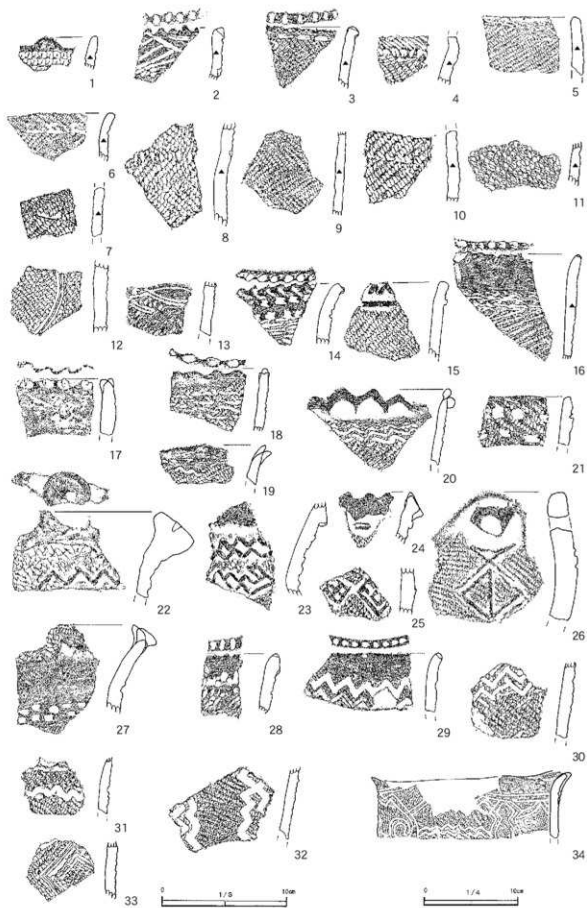


図23 台ノ前北貝層貝層外出土土器①Ⅱ・Ⅲ群土器

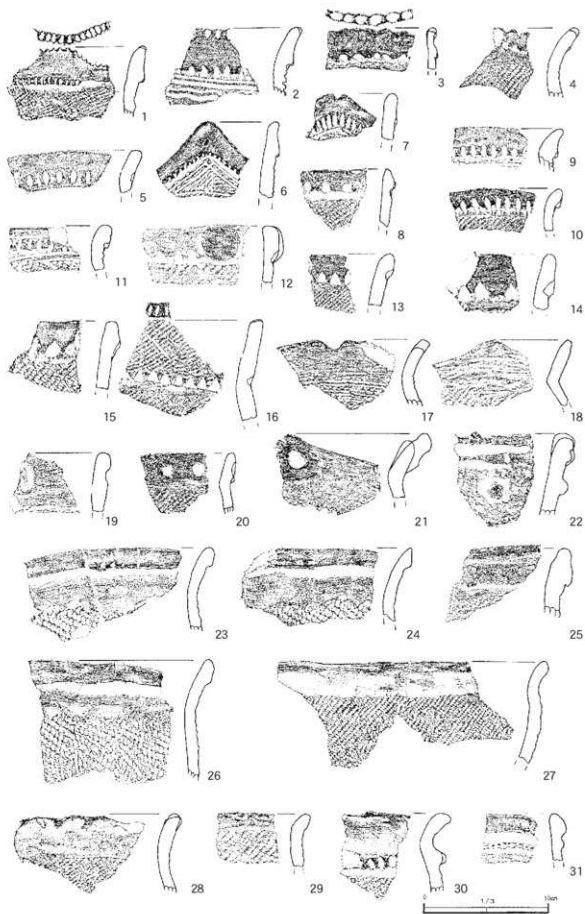


図24 台ノ前北貝層貝層外出土土器②Ⅲ群土器

同図29～34は沈線により文様を描くものである。29～32は縦位・横位の山形文、33は菱形の文様が描かれている。29は口縁上端に半截竹管による刺突が施される。34はゆるい波状口縁を呈し、口縁がわずかに外反する器形を呈する。口縁を2条単位の弧状沈線で区画し、横位・縦位・渦巻状などの2条単位の沈線による幾何学的な文様が描かれている。

図24-1～11は口縁の上下端または下端に押捺、刻みを施すものである。1は半円状の突起がつけられている。4は口縁上端押捺、下端三角刻みを施し、鋸歯状貼付文に近い形状を呈している。5は複合口縁を呈さず、下端のみに刻みが認められる。2・11は口縁下に横位の平行沈線による文様が描かれる。6・7は口縁下に口縁に沿った平行沈線が施される波状口縁である。

(4) Ⅲ-4類(図24-12～31、図25-1～29、図26-1～23)

図24-12～16は口縁下端に三角刻みを施すものである。12は口縁に円形貼付文を加えている。13～15は口縁が無文である。16は口縁上端に刻みを施し、胴部と同じく口縁にも横位LR縄文が施文されている。同図17・18は波状口縁で、口縁が無文である。17は口縁下の縄文地に横位平行沈線を施す。同図19～21は口縁が肥厚し、貼付文と盲孔または貼付文に沿う凹みが施されるものである。19は頸部を爪形文で区画する。同図22は口縁上端に貼付文、口縁下に横位隆帯を施し、瘤状貼付文が加えられている。

同図23～29は口縁に無文部を有し、胴部以下に縄文を施文するものである。23・24・26は同一個体で複合口縁を呈する。25は肥厚して輪積痕を残したような複合口縁である。27は口縁がわずかに外反し、胴部上位が膨らむ器形である。28は指頭によるゆるやかな交互押捺が施されている。同図30・31は口縁に無文部、頸部に横位隆帯をもつもので、隆帯上に30は縦位刻み、31は爪形文が施文されている。

図25-1～6は口縁に無文部を有し、口縁下に沈線等により文様を施すものである。1・2は波状口縁で、口縁下に平行沈線による波状文を施文している。3・4は口縁下に横位爪形文、5は横位刺突列と斜位平行沈線を施している。6は平行沈線で文様を施すもので、上下を区画し、区画内に弧状・山形文を描き、区画線上にボタン状貼付文を加えている。同図7は爪形文で頸部を区画する。

同図8～10は口縁に縦位の沈線を施すものである。8は複合口縁を呈し、10は文様帯下端を横区画する。同図11は隆帯で弧状の文様を施すものである。同図12・13は頸部を横位沈線で区画し、2条単位の沈線で山形文を描く。12は盲孔も加えられる。同図14は太描多条沈線を口縁に施し、頸部にD字形刺突を加えた隆帯で区画している。

同図15～17は口縁部に縄圧痕文で文様を描くものである。15は口縁上端に瘤状貼付文と山形状突起をつけ、肥厚口縁に下向連弧状の文様を描いている。頸部は2条の爪形文で区画されている。16は口縁に沿って縄圧痕文がつけられ、頸部には刺突列が施される。17は波状口縁の波頂部で上端に刻みが施され、斜位の縄圧痕文が施文される。

同図18・19は有節沈線で文様を描くものである。18は頸部を無文の隆帯とそれに沿う有節沈線で区画し、口縁に有節沈線による多条山形文を施文する。19は頸部を爪形文で区画し、口縁部に有節沈線による文様を描く。

同図20～28は刺突・爪形文で文様を描くものである。20は縄文地に爪形文が間隔をあけて横位施文される。21は波状口縁で、波頂部に環状貼付文をつけ、その周囲に沈線と爪形文を施文する。22は内湾する口縁を横位沈線と刺突で区画し、刺突列で文様を描いている。23は口縁に台形状突起を付け、無文地の肥厚口縁に円形竹管文を施文している。突起部は円形竹管文が円形に施される。24は口縁に

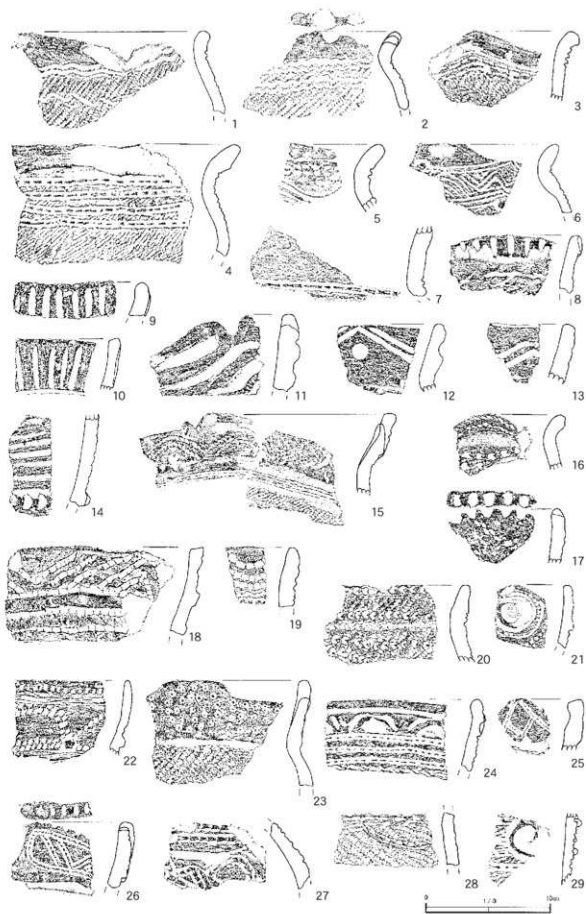


図 25 台ノ前北貝層貝層外出土土器③ III群土器



図26 台ノ前北貝層貝層外出土土器④Ⅲ群土器

連弧状の隆沈線を施し、その下部は削りだされた調整をしている。その下端に横位多条の爪形文を施文している。25・26は肥厚する口縁に爪形文で文様を描くものである。27・28は胴部破片で、27は無文地に、28は縄文地に爪形文で文様を描いている。

図26-1～3は沈線と沈線に沿う爪形文が施されるものである。1は縦位隆帯を貼付け、縦位山形文を施す。2は肥厚口縁にボタン状貼付文を加えた縦位隆帯を貼付けて、口縁部に沈線と沈線に沿う

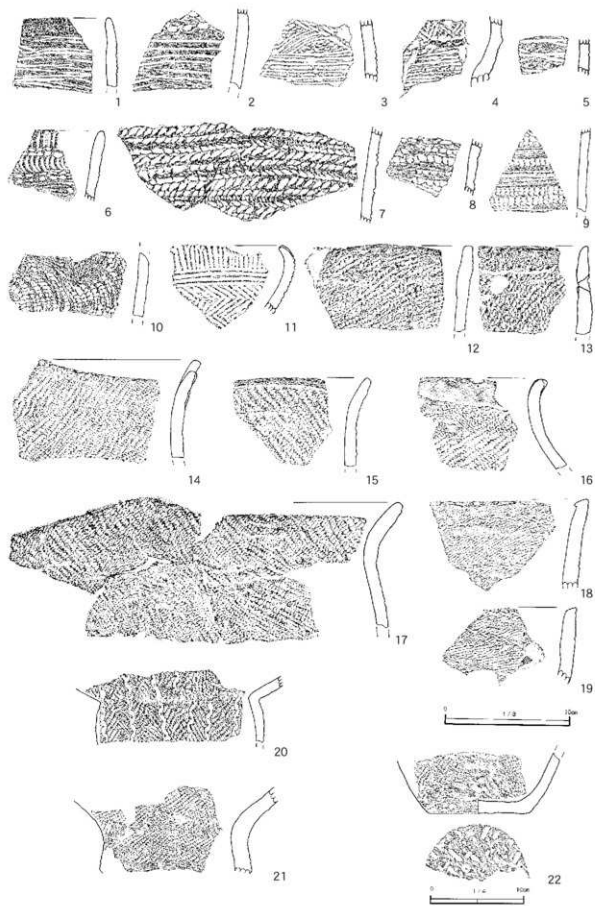


図27 台ノ前北貝層貝層外出土土器⑤Ⅲ群土器

爪形文が施される。頸部は爪形文で区画している。3は沈線と沈線に沿う爪形文で区画し、区画内にボタン状貼付文が施されている。同図4・5は結節浮線文で文様を描いている。

同図6～9は縄文地に単沈線で文様を施すものである。6は口縁に方形の区画文を配する。7は頸部を沈線区画し、2条単位の沈線で口縁が上向弧状文、胴部に山形文を施文する。8は渦巻状・弧状の文様を施し、9は胴部上半に縦位区画された中に斜位短沈線を充填している。同図10・11は頸部を斜位刻み付隆帯で区画する。いずれも頸部で緩やかに外反し、胴部中位が膨らむ器形を呈し、口縁～頸部は斜位の沈線文が施されている。10の胴部には横位の豆粒状貼付文を基点として縦位菱形文・波状文を縄文地上に描いている。

同図12～17は無文地で肥厚しない口縁に単沈線による文様を描くものである。13・14は口縁上端に隆帯を貼り付ける。描かれる文様は、横位沈線と波状文(12)のほか、爪形文(13)、連弧状文(14・15)、縦位多条沈線(13・16・17)、山形文(14・15・17)がある。17は口縁を区画する沈線間に刻みを施している。同図18・19は平行沈線で山形文が施される。18は上位を爪形文で、19は上位を刻み付隆帯で区画する。同図20～23はソーメン状貼付文が施されるものである。20は口縁内面に隆帯を貼り付けており、21は口縁外面にL字状隆帯、22・23は頸部に横位隆帯がつけられる。貼付文の文様は連続菱形文(20)、山形文(21・22)、格子状文(23)がある。

(5) III-6類(図27-1～11)

1～4は多条の平行沈線が施されるものである。2は多条の刺突列が伴い、3は弧状の多条平行沈線間に半截竹管による刺突を充填する。4は屈曲部を隆帯区画し、上位に山形平行沈線を描く。5は小破片であるが、連結木葉文を描くものとみられる。

6・7は変形爪形文と刺突列が交互に配されている。8は横位多条の有節沈線、9は横位多条有節沈線と多条の平行沈線を交互に施文している。10は縦位波状の貝殻腹縁文が施される。11は口縁にソーメン状貼付文を縦位に貼付け、横位・矢羽状の整った半隆起線が施される。

(6) III-5類(図27-12～22)

12～17は横位に縄文を施文するものである。14・17は波状口縁で、17は頸部で緩やかに外反し、胴部が膨らむ器形を呈する。15・16は口縁に無文部を残す。18・19は横位に施文され、結節回転文が伴うものである。20・21は金魚鉢形の器形を呈するもので、20は縦位羽状縄文・結節回転文、21は横位LR縄文を施文する。22は底部に網代痕を残す。

第3項 IV群土器

(1) IV-1類(図28-1～31、図29-1、図30-1～3)

図28-1～4・7は梯子状短沈線で文様を描くものである。1は口縁内面に隆帯を貼り付け、口縁上端に刻みを施す。内湾する器形であり、斜位・弧状の沈線により、文様を描く。2～4も内湾する器形であるが、梯子状短沈線はやや雑な施文であり、渦巻文、斜位沈線も整っていない。3は4と同一個体である。7は直線的に開く器形で、口縁下を横位沈線区画し、三角刻み列が伴う。胴部上位は斜位沈線により三角形の区画をなし、その区画から縦位に垂下する文様を描く。垂下文には沈線に沿って三角刻みが施される。

同図5～13は縦位刻みを持つ。5は1と同じく、沈線区画された口縁と頸部隆帯に縦位刻みが施されている。口縁部は斜位・弧状沈線を施した後、横位多条の短沈線が余白部に充填される。6は波状口縁を呈し、波底部に縦位、波頂部に渦巻状の刻み付隆帯を施す。口縁部は斜位・弧状・三角形に

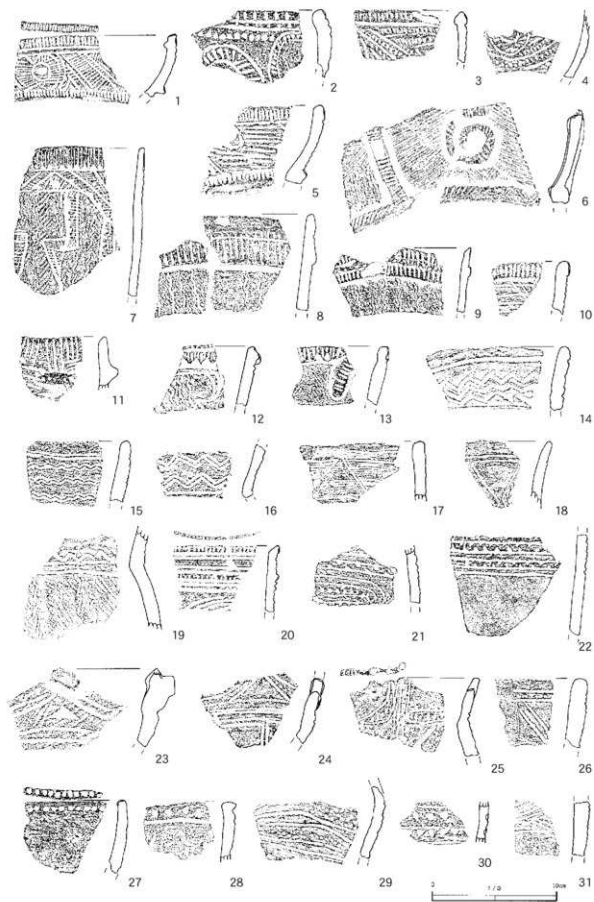


図28 台ノ前北貝層貝層外出土土器④IV群土器

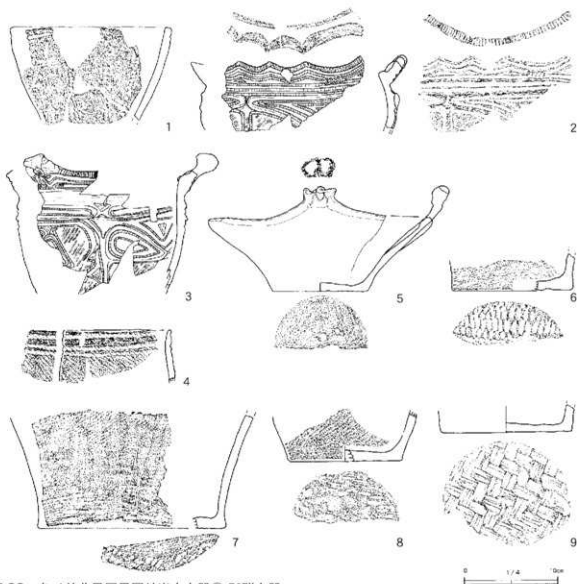


図29 台ノ前北貝層貝層外出土土器⑦ IV群土器

多条沈線を施し、余白部に刺突を充填している。8は口縁下に幅広の隆帯を施し、横位沈線で区画するものである。9は口縁と頸部に刻み付隆帯を貼付け、隆帯間に棒状工具による刺突を充填する。10は口縁部に横位多条沈線を施文した後、斜位沈線を施している。同様の文様は同図17にもみられる。11は口縁下に瘤状貼付文を施し、横位多条沈線間に交互刺突が加えられている。12・13は口縁の隆帯下に三角刻みを施し、12は曲線状沈線の垂下文、13はハの字状の隆帯が施されている。

同図14～16は口縁の上下を沈線区画後、多段の山形・波状沈線を施文するものである。同図18も無文地に平行沈線で文様を描く。同図19は頸部を横位・波状の沈線で区画している。同図20は口縁と頸部に隆帯を持ち、それに沿う平行沈線が施されている。胴部は弧状の多条沈線が施され、上位区画の交点に交互刺突がみられる。同図23は波状口縁で波頂部に帯状の突起を有する。2条単位の沈線により口縁に沿った三角形区画をなし、中央に三角刺突を施す。

同図21・22・24～31は無文地に沈線と刺突（刻み）が施されるものである。21・22は横位沈線間に交互刺突文を施している。24は波状口縁を呈し、23と同様に波頂部は三角形区画をなす。沈線間には円形竹管文が施文され、頸部を沈線区画し、胴部に沈線が垂下している。25・26・30は沈線間に刺突

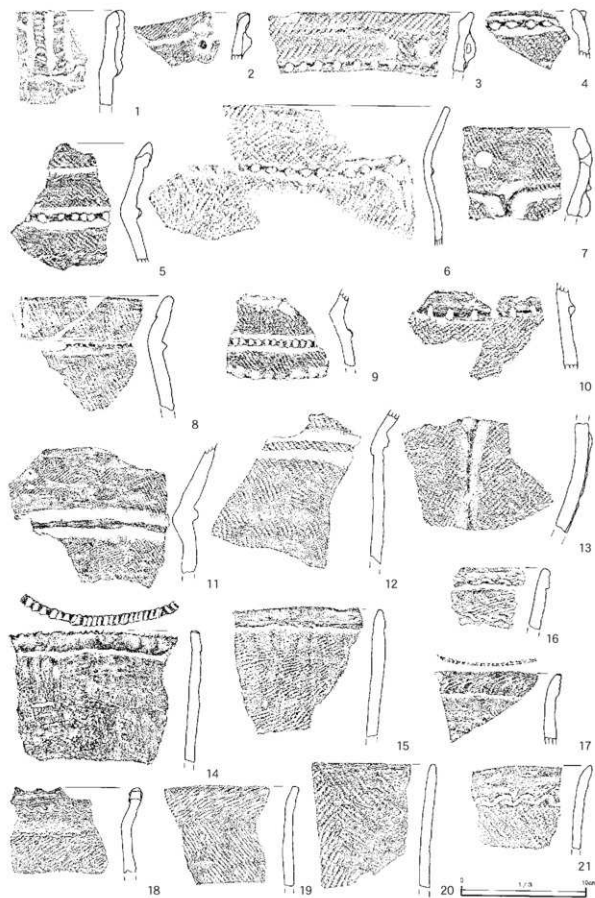


図30 台ノ前北貝層貝層外出土土器③ IV群土器

が施されるもので、25・30は三角刺突、26は円形竹管文である。25の文様は口縁上端の突起に対応した文様構成となっている。27・28は口縁部に刺突列が施され、28は口縁を沈線で区画する。29は沈線間に円形竹管文が充填されるもの、31は鋸歯状の沈線と円形刺突が施文されている。

図29-1も無文地に沈線と刺突が施される。やや内湾ぎみに立ち上がる器形で、口縁を沈線区画し、横位・縦位の刺突列を施文している。

図30-1は口縁に縦位の2条の棒状隆帯が付けられる。同図2は複合口縁を呈し、小波状口縁の波頂部下に瘤状貼付文が付けられる。同図3は口縁に橋状把手が付けられ、頸部を刻み付隆線で区画している。

(2) IV-4類 (図29-7・8、図30-4~21)

図29-7・8は底部に網代痕を残し、横位縄文を施す。

図30-4は口縁に刻み付隆線が付けられる。同図5~12は頸部を区画する隆線が付けられている。隆線には刻み付隆線のもの(5・6・9・10)、縄文が施文されるもの(12)、素文のもの(8・11)がある。5は複合口縁に山形状小突起が付き、8は口縁に縦位隆線が施されている。6・7や同図13の様にY字状隆線が垂下するものもある。

同図14~17は複合口縁を呈するものである。14・15は複合口縁で、口縁が無文である。14はわずかに胴部に附加条施文が認められ、口縁上端は刻みが施される。17も口縁上端に刻みを施し、附加条縄文が口縁は横位に、胴部は縦位に施文されている。同図18は山形状小突起が口縁に付けられる。同図19~21は素口縁を呈する。19は口縁と胴部で施文方向を変える。21は口縁無文で、口縁下に結節回転文が1条施される。

(3) IV-2類 (図29-2~4、図31-1~24、図32-1~13)

図29-2・3は隆線・有節沈線で文様を描き、口縁上端に刻みが施され、頸部または胴部上位に楕円形の区画文を持つものである。2は波状口縁を呈し、中位が膨らんだ胴部が頸部で屈曲し、短く外反する器形を呈する。口縁に2条の有節沈線が沿い、波底部は途切れて斜位刺突列がみられる。頸部は横位3条の有節沈線を施し、楕円・三角形(弧状)・縦位に有節沈線で区画している。地文は横位縄文である。内面は沈線がめぐり、三角印刻文が施される。3も波状口縁を呈し、波頂部に環状の貼付文が付けられる。口縁は三角形区画を有節沈線で施し、区画内に三角刺突が加えられる。頸部に無文帯を有する。胴部は縄文地に隆線・有節沈線により文様が描かれる。上位に横位楕円形区画を配し、中~下位は方形・弧状・三角形に区画され、区画内や交点に三角刺突を加えている。

図31-1・2は同一個体の可能性がある。波状口縁を呈し、波頂部がU字状を呈し、上端に刻みをもつ。口縁下を下向連弧状の隆線・沈線で区画し、中央に刺突を配した円形文が描かれる。口縁に沿って交互刺突文が配され、波頂部を三角形に区画している。同図3・4は同一個体で口縁が内湾する器形を呈する。隆線と沈線で口縁を三角形に、頸部を横区画している。

同図5は曲線状の文様を有節沈線で描き、棒状工具による刺突が加えられている。同図6・7も縄文地に有節沈線が施されるもので、6は隆線とともに口縁下を区画し、7は多条となって曲線状の文様を描いている。同図9は直線的な胴部と内湾する口縁を呈する器形で、頸部を爪形文付隆線とそれに沿う爪形文で区画し、口縁を爪形文で方形区画する。

同図8・10は沈線で連弧状文を描くものである。8は口縁に渦巻状突起が付き、上下に対向する連弧状文を配している。10は口縁が内湾し、波状口縁を呈す。波底部の上端には押捺が施され、口縁に



図 31 台ノ前北貝層貝層外出土土器⑨ IV群土器

沿った隆線・沈線の下に縦長の渦巻文と連弧状文を施文している。同図11～13は曲線状の文様が施されるもので、11・13は胴部破片、12は内湾する口縁部である。11は縦位隆線で区画され、胴部上位を多条の沈線・波状文を施して方形の区画をなし、区画内に曲線状の文様が配される。12は2条単位の沈線で無文地に文様を施文し、13は縦位に垂下する文様を縄文地に施す。

同図14～16は口縁に隆線により楕円状の区画を施すものである。14は断面三角の隆線が胴部に垂下する。15は口縁下を多条沈線で区画し、縄文地に曲線状の文様が施されている。16は縄圧痕による刻み付隆線で頸部を区画している。同図17は渦巻状隆帯が口縁に付けられるものである。

同図18は隆線・沈線・爪形文で方形区画をなす。19は刻み付隆線で横区画し、縦位に楕円文や弧状文が施される。20は浅鉢の口縁破片である。口縁下端に横位楕円状に隆帯を付ける。楕円文の交点部に対応して上位の口縁部に渦巻沈線を施し、その横に横位の交互刺突文を施している。

同図21～24は隆線と沈線で文様を描くものである。21は縦位にクランク状の文様が垂下するもので、隆線に浅い沈線が沿う。22は底部から直線的に立ち上がりが頸部で屈曲する器形である。頸部に波状沈線を配し、Y字状隆線とそれに沿う沈線で胴部を区画する。23も同様の器形と考えられ、頸部を多条の隆線・沈線で横区画し、縦位垂下文と区画に接する上向連弧状文を施文している。24は縄圧痕文施文の隆線と沈線が垂下するもので、縦位楕円状の区画を呈すとみられる。

図29-4、図32-1～8は縄圧痕文を施文するものである。図29-4は胴部に最大形をもつ器形で無文地の口縁に3条の横位縄圧痕文を施文する。

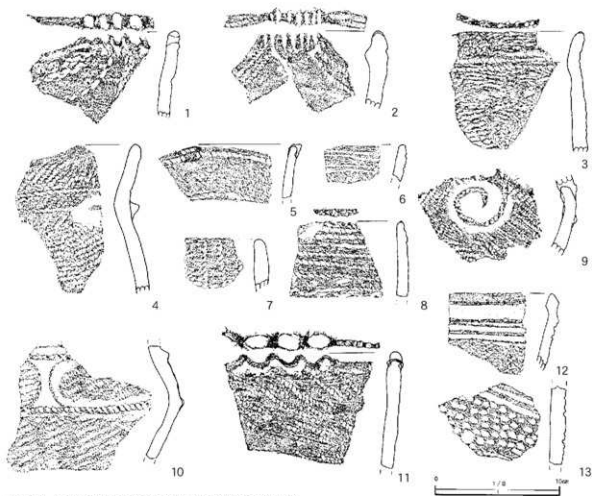


図32 台ノ前北貝層貝層外出土土器⑩ IV群土器

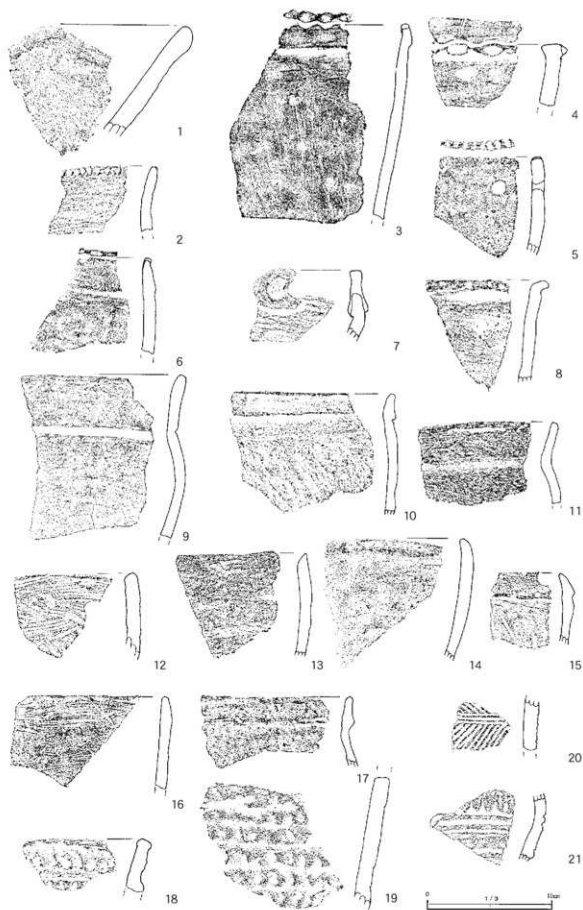


図33 台ノ前北貝層貝層外出土土器① IV群土器

図32-1・2は波状口縁を呈し、波頂部上端に刻みを有する。縄圧痕文は無文地に施文され、1は波頂部から口縁に沿って弧状に施文される。2も口縁に沿って施文されるが、波頂部はU字状に施され、口縁上端にも認められる。3・4の縄圧痕文は頸部屈曲部に横位に施文される。3は口縁上端に刻みを有し、4は波状口縁で頸部に瘤状貼付文を施している。5は口縁に小Y字状?貼付文を付け、口縁と頸部に横位縄圧痕文を施文する。6は口縁の横位縄圧痕文の下位に平行沈線が沿う。7は縦位、8は横位多条の縄圧痕文が無文地の口縁にみられる。

同図9は波状口縁を呈し、波頂部から縄圧痕文付隆線により渦巻文を描くものである。同図10は胴部上半で内屈した部分に刻み付隆線による楕円形区画が施される。同図11は隆帯を貼り付けて山形状突起を呈するものである。同図12は短口縁を呈するもので、頸部を隆帯と2条の沈線で区画している。同図13は2条の斜位沈線が施され、多条の刺突列が施される。

(4) IV-3類 (図29-5・6・9、図33-1~17)

図29-5は浅鉢で4単位の波状口縁を呈する。波頂部は瘤状の隆帯により三山状の突起を有する。底部は木葉痕をわずかに残す。同図6・9は底部に網代痕を残すものである。

図33-1は浅鉢であり、波状口縁を呈し、口縁が丸く肥厚している。同図2~6は口縁に刻みまたは押捺が施されるものである。同図3・10は複合口縁であり、3は刻みが施される。4は口縁に隆帯を貼り付けて押捺を加えている。同図7は三日月状の突起を有し、突起中央がくぼんだ形状を呈している。同図8は口縁が短く横に突出する形態である。9は頸部に1条の沈線を施す。同図11~17は素口縁である。頸部で屈曲し外反するもの(11)、内湾気味のもの(12~16)、口縁下にわずかに稜をもつもの(15・17)などがある。

(3) IV-5類 (図33-18~21)

18・19は外面に輪積痕を残し、輪積痕上に押捺が加えられている。20は半隆起線に近い平行沈線で斜位・横位に施文されている。21は上位に蓮華文と2条の半隆起線を施し、無文帯を挟んで、下位に横位半隆起線が施文されている。

第4項 V群土器

(1) V-1類 (図34-1~22)

図34-1・2は口縁にソーメン状隆線文が施される。1は短口縁を呈し、胴部が膨らむ器形で、頸部を多条沈線で区画し、上下に波状沈線を施す。3~10は口縁を隆帯・隆線により、区画するものである。区画内は爪形文(3・4・6~8)、有節沈線(5・9・10)を施す。5は口縁下に縦位の多条有節沈線を施文し、9・10は口縁下に2条単位の向上連弧状文が沈線により施される。また区画には楕円形区画をなすもの(3・5・6・10)もある。3は隆線により2段の楕円形区画を口縁に施している。上位区画は爪形文を施し、下位の隆線下端のみ刻みを加える。6は楕円形隆線区画に接して渦巻状隆線が配される。4・8は隆帯・隆線の下端に押捺を施す。8は頸部にも横位の押捺付隆線を施す。

11も横位の楕円形区画と渦巻文を施し、区画内に爪形文を充填している。12・13は同一個体でソーメン状隆線文により文様を描くものである。口縁が内湾する器形を呈する。口縁に有節沈線を施し、横位・波状・縦位の文様を無文地に施文する。

14~16は突起部である。14は突起の外面に渦巻状隆帯を貼り付け、内面・側面・上面に渦巻状・S字状のソーメン状隆線を施している。15・16は突起の上面・内面にS字状・渦巻状貼付文が施されている。頸部には沈線による文様を施文する。

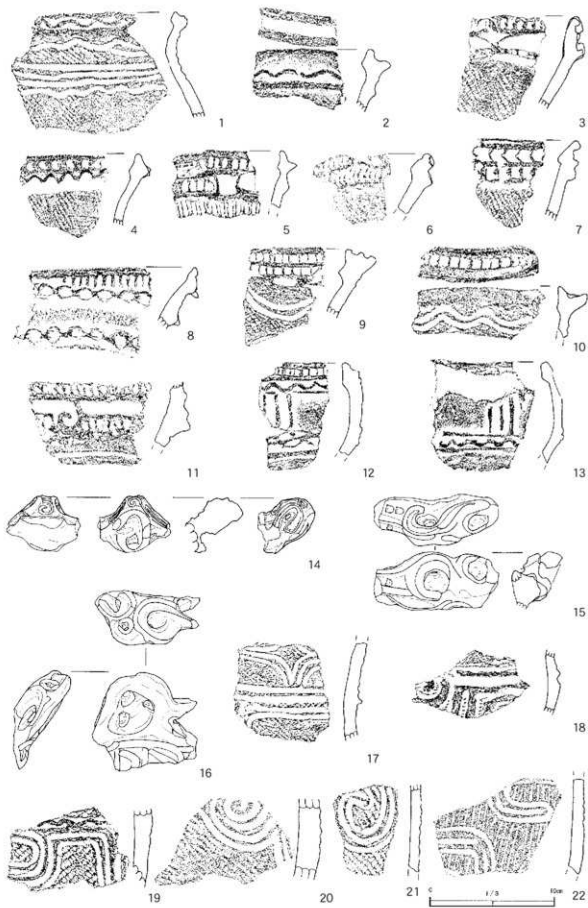


图 34 台ノ前北貝層貝層外出土土器② V群土器

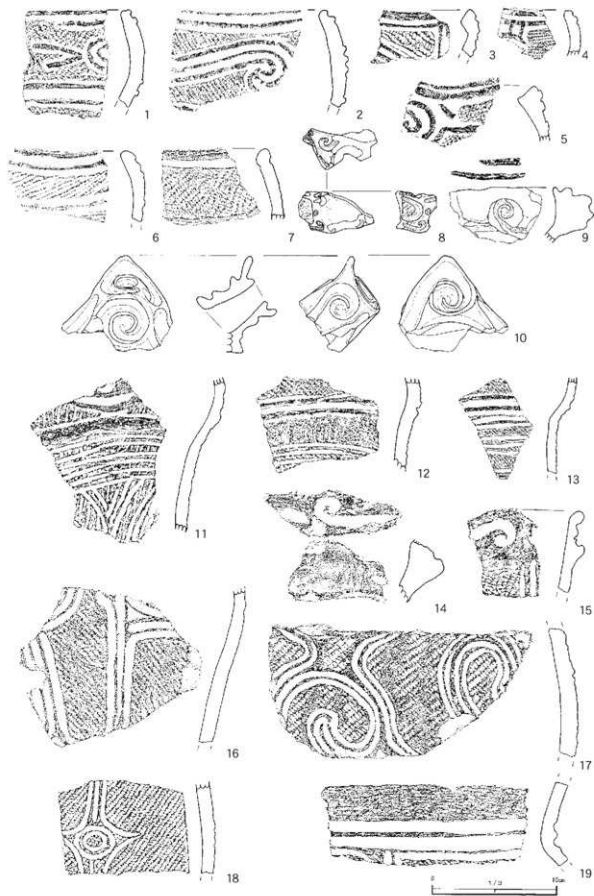


図 35 台ノ前北貝層貝層外出土土器⑬ V群土器

17～22は胴部破片である。17・20～22は沈線、18は隆線、19は隆沈線で文様を施している。胴上位の区画は、17は縄圧痕文を施した隆線と多条沈線で、18は隆線、19は波状のソーメン状隆線で区画している。22の地文は縦位の摺糸文である。

(2) V-2類 (図35-1～19、図36-1～6)

図35-1～7は口縁が内湾するものである。1～5は隆線・隆沈線により文様を区画し、横位の渦巻文、剣先状の文様を描く。同図8～10は突起部である。8は突起の周囲に沈線による渦巻文が施される。9は口縁に渦巻状の突起を施すものである。10は箱状の突起部で全面に渦巻文が隆沈線で付けられる。同図11～13はキャリバー状の器形を呈するもので、口縁下を隆線・隆帯で区画し、胴部に横位の多条沈線を施す。11は胴部に縦位の弧状の文様を施し、12は頸部に無文帯を有する。

同図14・15は口縁に沈線・隆沈線により渦巻文が加えられる。同図16は縦位・渦巻状に隆沈線が施されるものである。同図17は隆線、沈線により連結渦巻文を施す。同図18は縦位と円形の沈線に剣先状のアクセント文が加えられている。同図19は頸部を隆沈線で区画するものである。

図36-1～5は隆沈線で弧状・連結渦巻状の文様が施されるものである。同図6は3条単位の縦位沈線を施文している。底部はミガキ調整される。

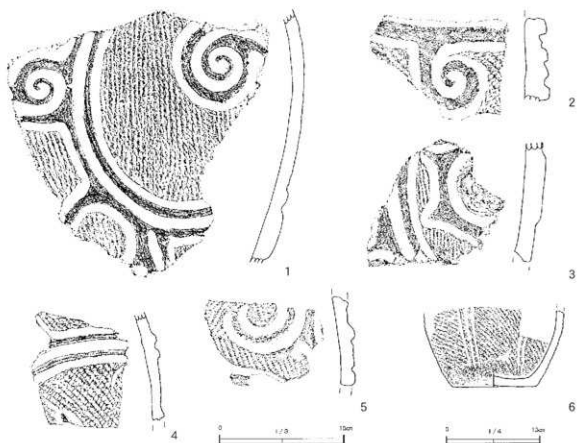


図36 台ノ前北貝層外出土土器④ V群土器

第5項 VI群土器

(1) VI-1類 (図37-1~14、図38-1~8)

図37-1~8は隆線、隆沈線により渦巻文、楕円形区画を施すものである。1~5は渦巻文が波頂部となる波状口縁を呈する。6~8は区画内には多条沈線が充填される。7は口縁を弧状に区画し、頸部に縦位に開放した沈線が施され、8は口縁に中央が凹んだ渦巻文と楕円形区画文を施文し、頸部無文とするものである。

同図9は隆沈線により渦巻文を描く胴部破片である。同図10は波状口縁を呈し、縞系文地に沈線による渦巻文が施されている。11は隆沈線により頸部を区画し、带状文を配するものである。12は縦位の隆沈線、13は縦位沈線で縦帯を区画している。14は浅鉢で、隆線で双頭渦巻文を施し、文様の中央につまみ状の突起を有する。



図37 台ノ前北貝層貝層外出土土器⑤ VI群土器

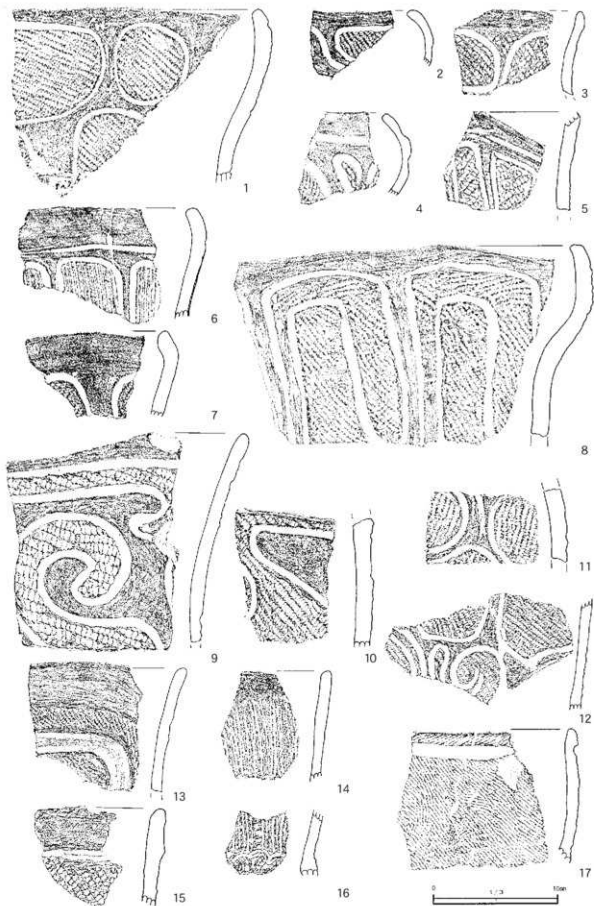


図38 台ノ前北貝層貝層外出土土器⑤ VI群土器

第4節 台ノ前北貝層貝層外出土土器

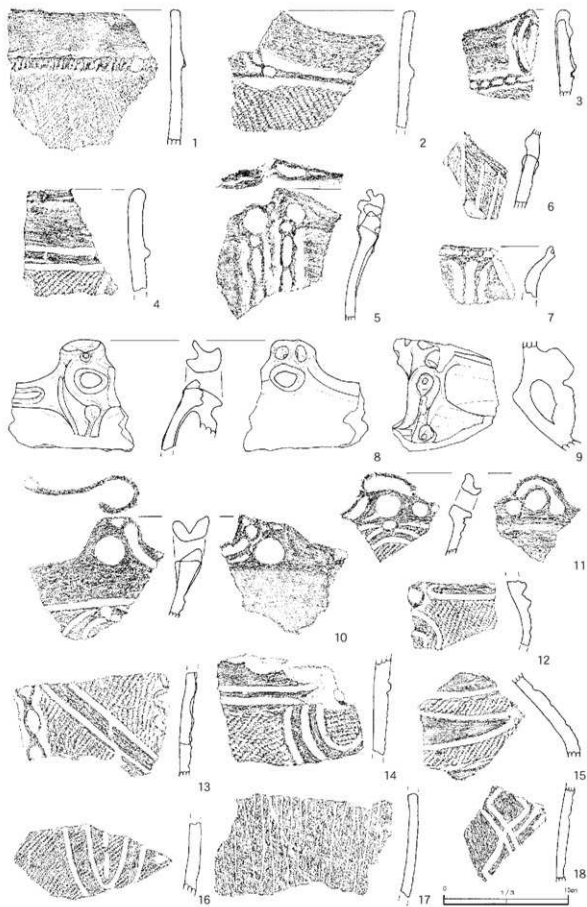


図 39 台ノ前北貝層貝層外出土土器⑦ VII群土器

図38-1～3は口縁を沈線により区画された横位の文様を施すものである。1は口縁に円形文、楕円文を配し、胴部は縦位に帯状文を施す。1・2は内湾する口縁であるが、3は緩やかに外反し、口縁上位はやや内湾気味に立ち上がる器形を呈する。同図4は口縁を沈線区画し、帯状文と蕨手状の沈線を施している。5は外反する波状口縁で縦位帯状文を施文する。6・7は内湾する口縁で縦位帯状文を施し、6は縦位条線文が充填される。8も口縁が内湾し、頸部以下直線的となる器形である。縦位C字状に沈線で縄文を区画する文様を施文している。

(2) VI-2類 (図38-9～13)

9～12は沈線で区画された縄文帯と無文帯で曲線状の文様が施されるものである。9は小波状口縁を呈し、S字状の文様を施す。13は断面三角の隆線で区画された無文帯で横方向にながれた文様を描くものである。

(3) VI群 (図38-14～17)

14は縦位に半截竹管による条線文が施される。15は口縁を断面三角の隆線で区画している。17は口縁下に横位沈線を施し、口縁部と胴部で施文方向を異にしている。16はVI-3類とした。頸部で屈曲し、連弧状の平行沈線を1条施し、その上位に縦位の条線文が施文されている。

第6項 VII・IX・X群土器

(1) VII-1類 (図39-1～6・12～14)

1～3は口縁を隆帯で区画するものである。1は隆帯に刻みを施し、格子状の条線文が胴部に施される。2・3は口縁にノ字状に隆帯が施され、3は隆帯上に刺突が加えられる。4は隆帯と沈線で口縁区画するもので、口縁下に摩消縄文による文様が施される。5は波状口縁を呈し、波頂部に貫通孔と盲孔が施される。波頂部から円形浮文と鎖状隆帯が垂下している。6は波状口縁を呈し、縦位に施された沈線帯を摩り消している。

12は口縁下を横位楕円形の沈線による文様が施し、円形浮文を加えている。13は縦位鎖状隆帯を施し、斜位沈線と蛇行状沈線が施される。14は口縁を隆帯・沈線で区画し、弧状沈線が施文される。

(2) VII-2類 (図39-15・16)

15は口縁を沈線区画し、文様を施すものである。16は縦長の円形区画内に縦位の列点状沈線が加えられている。

(3) VII群 (図39-8・9・17・18)

8・9は横状把手をもつものである。17は縦位に条線文を施文し、18は無文地に2条単位の沈線で縦位に格子状文が施されている。

(4) VII-3類 (図40-1)

1は横位多条沈線に沿う円形刺突列が施文される。

(5) IX・X群土器 (図40-2・3)

2は縦位の櫛歯条線文が施文されるX群土器である。3は底部下端を2条の横位沈線が施され、底面はナデ調整されるIX群土器である。

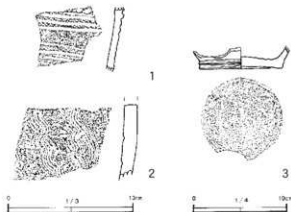


図40 台ノ前北貝層貝層外出土土器¹⁸
VII・IX・X群土器

第5節 台ノ前地区I区出土土器

第1項 調査区の概要

I区は台ノ前南貝層の東側斜面下に位置する調査区であり、第1次調査（平成12年度調査）において実施された41・42Tを拡張し、第2次調査（平成13年度調査）で実施したものである。第1次調査で確認された中近世と推定される水場遺構とそれに切られる調査区の西北側を中心としたⅢ-5層（縄文時代の遺物包含層）が確認されている。Ⅲ-5層は、台ノ前南貝層の斜面下位にあたる貝層のある西側から東側の緩やかな斜面に堆積する暗褐色シルト層である。

このⅢ-5層の内容を確認するため、調査区の北側で幅1.0mのサブトレンチを設定した結果、全面にわたり、多量の縄文土器が出土した。このためサブトレンチではその上面で確認するにとどめ、サブトレンチ西端に1.0m角のテストピットを設定し、Ⅲ-5層を掘り下げ、層厚ならびに堆積状況を確認している。テストピットにおけるⅢ-5層の層厚は約20cmを測る。なお、Ⅲ-5層からは貝類などの動物遺体は出土しなかった。

「浦尻貝塚2」刊行時には、このⅢ-5層出土土器（テストピット出土土器）ならびにⅢ-5層上面出土土器（サブトレンチ出土土器）の整理作業が終了していなかったため、本書で報告するものである。また、あわせて、Ⅲ-5層以外の層位から出土した土器についても報告する。

第2項 I区テストピット（Ⅲ-5層）出土土器（図41-1～5）

1・2はⅣ-2類である。1は断面三角の縦位隆線が施される。2は横位沈線間に三角刺突を施し、縦位の隆帯が施される。方形に区画された余白部には縦位帯状の沈線が複数配されている。3はⅣ-5類である。多段の幅広の爪形文が施され、縦位に蛇行状の隆線と隆線に沿う1条の有節沈線が加えられる。4はⅤ-2類で、渦巻状隆沈線がつけられた口縁突起部である。5はⅥ-1類で、帯状文が縦位に配されている。

第3項 I区サブトレンチ（Ⅲ-5層上面）出土土器

（1）Ⅱ群土器（図41-7・8）

7・8はいずれも胎土に繊維を含む。7は頸部の屈曲部に円形竹管文を施す。8は横位の結節回転文の地文上に横位2条単位の沈線が2段以上施されるものである。

（2）Ⅲ群土器（図41-9～13）

9・10はⅢ-6類である。9は口縁に縦位の刻みを施し、斜位刺突列、変形爪形文、横位平行沈線が多段に配されている。10は多条の半隆起線で施文されるもので、頸部を横位に区画し、縦位・鋸歯状に文様が施される。

11はⅢ-3類である。複合口縁で口縁下端に刺突が施される。12・13はⅢ-4類である。12は複合口縁で口縁下端に三角刻みを施し、口縁下に横位・山形状に平行沈線が描かれている。13は口縁に山形状小突起を付け、突起部に爪形文により円形文を配している。

（3）Ⅳ群土器（図41-14～26）

14はⅣ-1類である。無文地上に浅い沈線で菱形の文様を縦位に施している。15・17～24はⅣ-2類である。15は口縁に隆帯とその上下に1条の有節沈線を施し、口縁下に1条の波状沈線を施文している。17は波状口縁で、波頂部は扇形を呈し、刻みが施される。波頂部下を二山状とした隆線を口縁に沿ってめぐらしている。刺突が激しいが、波頂部から縦位に垂下する多条沈線と口縁に沿う多条

I区テストビットⅢ層

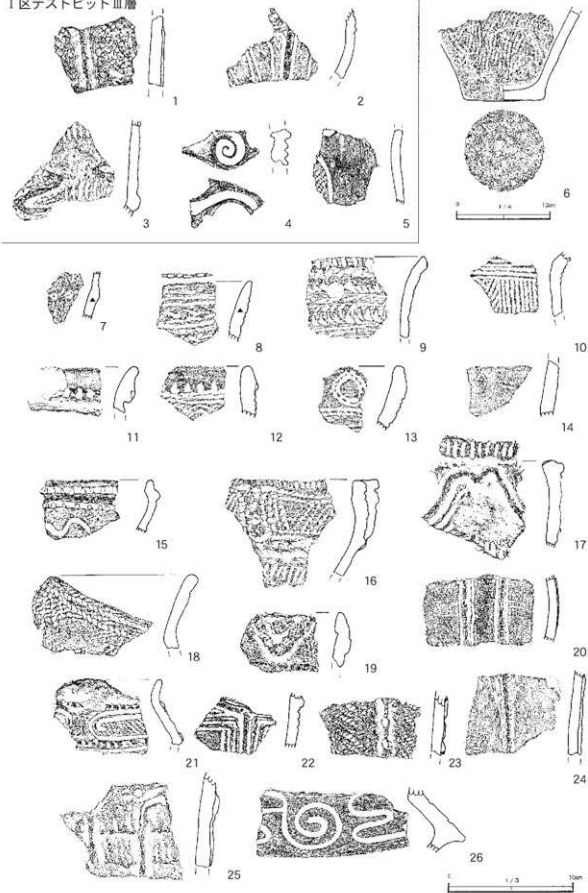


図41 台ノ前地区I区出土土器① テストビット・サブトレンチ出土土器

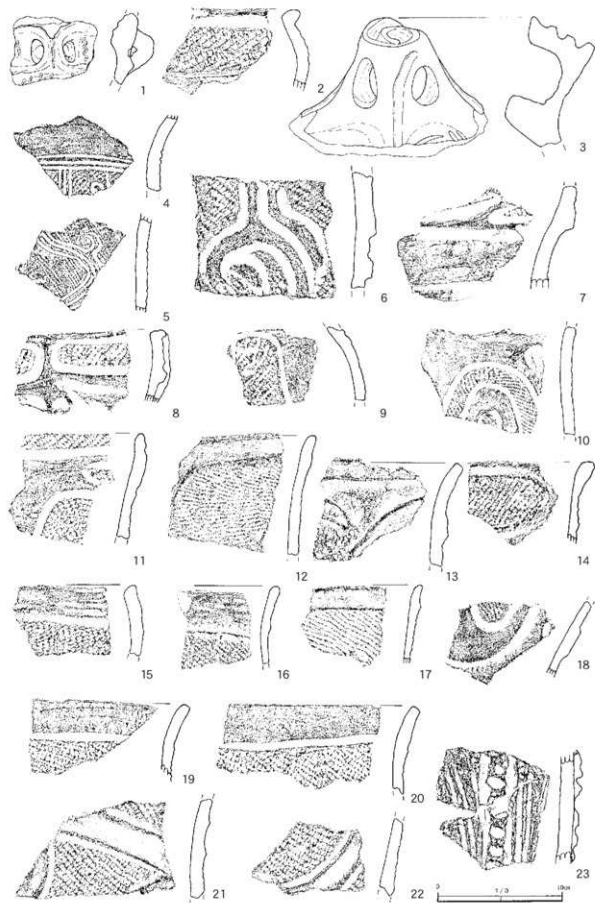


図42 台ノ前地区I区出土土器② サブトレンチ出土土器

沈線により口縁部を三角形に区画するものとみられる。18も波状口縁で縄圧痕文が施されている。縄圧痕文は波頂部から垂下するものと口縁に沿うものとみられる。19は縄圧痕文が加えられた山形状の隆帯が口縁に付けられる。21は口縁下に隆帯と沈線により楕円形区画が施されるもので、頸部で内屈し、口縁が短く外反する器形を呈している。20・22～24は胴部破片である。22は上位に太めの断面カマボコ状の隆線を貼り付けた後、縦位隆線と縦位・横位多条沈線により方形区画を施文する。20は縦位隆線とそれに沿う沈線、23は押捺付縦位隆線、24は縦位隆線とそれに沿う縄圧痕文を施している。

16・25・26はⅣ～Ⅴ類である。16は口縁を隆帯と1～2条の有節沈線（刺突）で方形に区画し、区画内に多条の山形有節沈線を施している。隆帯下には幅広爪形文が横位に施されている。25は輪積痕を残す胴部破片で縦位・弧状の隆線により楕円形の区画を施すものとみられる。26は浅鉢で単沈線により渦巻文とそれに連結した流水状の文様を施すものである。外面には丁寧なミガキが施される。

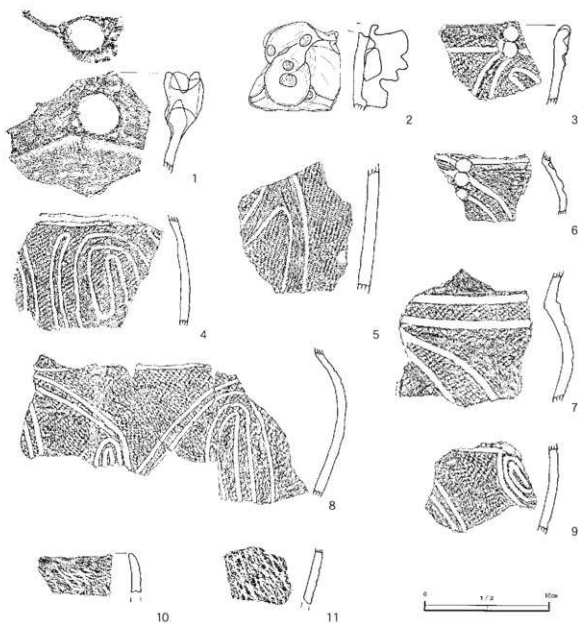


図43 台ノ前地区Ⅰ区出土土器③ サブトレンチ出土土器

(4) V群土器(図41-6、図42-1~7)

図41-6は縦位・斜位に縄文が施文された底部である。底面はナデ調整される。V群またはVI群に伴うものとみられる。

図42-1はV-1類である。隆線による楕円形区画の交点が橋状の突起を呈するものである。同図2~7はV-2類である。2は口縁が内湾する器形で、剝離しているが口縁下に隆帯が施される。3は上端に渦巻文を施した波状口縁の波頂部である。左右に貫通孔が施される。4は頸部を無文とし、頸部下に多条沈線を施すものである。5は曲線状の文様を沈線で施すもの、6は渦巻文を隆帯で施すものである。7は頸部に無文帯を有し、口縁を隆沈線で弧状区画している。

(5) VI群土器(図42-8~23)

8~10はVI-1類である。8は口縁を隆沈線で楕円形区画し、口縁下は隆線が施されている。9は縦位に帯状文を配するもの、10は弧状の文様が施されるものである。

11~14・18・21・22はVI-2類である。11は口縁を横位沈線で区画するものである。口縁はわずかに内湾しながら立ち上がる。12~14・21・22は断面三角の隆線で文様が施されるものである。13は隆線間に刺突が充填されている。14・21・22は横位に無文帯で文様を施すものである。18は浅鉢で、太い断面長方形の隆帯で弧状の文様を施す。内外面に丁寧なミガキが認められる。

15~17は断面三角の隆線を施すもの、19・20は同一個体で沈線で口縁を横区画するものである。これらはVI群に伴うものとしておく。

23はVI-3類である。太い刻み付隆帯を縦位に付け、余白部に縦位多条の太い条線文を施す。

(6) VII・X群土器(図43-1~11)

1は波状口縁で、波頂部に隆帯を貼付け、貫通孔を有する。2はひねりをもつ橋状把手である。口縁を隆帯区画し、VII-1類とみられる。3~9はVII-2類である。3・4・6・7は口縁を沈線区画するもので、胴部には曲線状の文様や盲孔が施される。5は摩消縄文が施される。8・9は多条沈線により連結した縦位渦巻状の文様を描いている。

10・11はX群で、網目状撚糸文が施される粗製土器である。

第4項 I区遺構外出土土器

(1) II群土器(図44-1・2)

1・2は胎土に繊維を含むものである。1は縄文地上に刺突列が施される。2は縦位に単斜縄文が施される。

(2) III-2類(図44-3~7)

3・4・6は口縁上端に押捺がみられ、5は交互押捺、7は刻みが施される。3は口縁下に横位結節縄文、縦位に山形貼付文を施す。6は口縁に縄文を施文せず、小波状の有節沈線が認められる。7は縄文地に平行沈線で文様を描いている。

(3) III-3類(図44-8~11)

8は口縁に鋸歯状貼付文を施すものである。9は縄文地に幾何学状の貼付文を施文している。10・11は縄文地に山形沈線を描くもので、11は2条単位の沈線で多段に施されている。

(4) III-4・5類(図44-12~21)

12~21はIII-4類である。12は肥厚する短い口縁が外反し、下端にのみ刺突を施すものである。13は多条沈線間に刺突を施している。14は口縁を無文とし、口縁下に沈線と沈線に沿う爪形文が施され

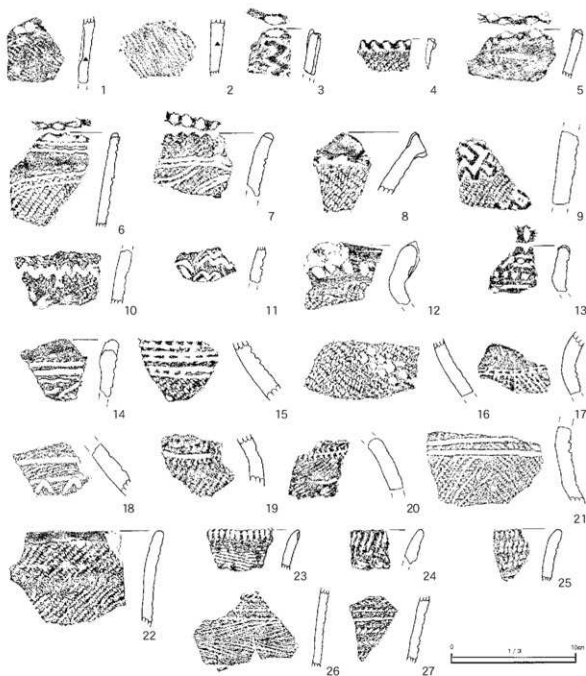


図44 台ノ前地区I区出土土器④ 遺構外出土Ⅱ・Ⅲ群土器

る。頸部には斜位沈線と余白部に山形沈線が施文される。15は横位多条の爪形文、16は斜位の刺突が施される。17は爪形文で口縁部を弧状、頸部を横区画、胴部を山形状に文様を施文している。18は横位と山形状に沈線が描かれる。19・20は沈線に沿って爪形文を横位に施文するものである。21は縄文地上に横位の沈線を2条施し、頸部を区画するものである。

22はⅢ-5類である。口縁に無文部を有し、横位縄文が施されている。

(5) Ⅲ-6類 (図44-23~27)

23~25は口縁に刻みを施す。23・25はアナダラ属の貝殻背圧痕文を施し、24は横位多条の刺突を充填している。26・27は変形爪形文を施文し、26は下位に多条の矢羽状平行沈線がみられる。

(6) IV-1類 (図45-1~10・22・23)

1は橋状把手をもつ口縁部である。把手中央には穿孔があり、その上下に山形沈線が施される。口縁部上下を2条単位の沈線で区画し、三角刺突を付加している。沈線間には円形竹管文が充填されている。区画内には多段の山形沈線が施文されている。2は斜位沈線と梯子状短沈線が施されている。3は内湾する口縁に刻みを施し、2条の横位沈線下に三角刺突が施される。この三角刺突に沿ってY字状の沈線が施される。

4・5・7は無文地に文様を施すもので、4は平行沈線間に爪形文、5は縦位多条沈線施文後に横位口縁区画、7は縦位多条沈線と横位波状沈線施文後に三角刺突を施している。6は複合口縁を呈し、口縁下端に三角刺突を施し、頸部に浅い横位多条沈線を施文した後、山形沈線を施す。8は複合口縁で口縁下に沈線による楕円形区画を施し、交点部を中心に沈線間に三角刺突が一部認められる。

9・10は同一個体で、2個一対とみられる短い八字状の隆帯が垂下する。口縁の文様は横位・弧状の刺突列である。

22は多条沈線と沈線に沿う三角刺突が施されている。23は沈線間に交互刺突を施すものである。

(7) IV-2類 (図45-11~20・24~27)

11は口縁に縄圧痕文を加えた横位隆線と沈線が施される。12は胴部上位で内屈し、頸部で再度屈曲して内湾ぎみに立ち上がる器形を呈している。波状口縁で、波頂部に弧状の隆帯を貼付け、周囲に刻み付隆線を施す。口縁は横位の楕円形区画を隆線(剝離)・沈線で施し、区画内に円形竹管文を1列施文している。胴部上位は横位1条の沈線で区画している。

13~16は隆線により楕円形区画を呈するものである。14は隆線区画に沿った沈線が施され、区画内に横位縄圧痕文が2条施される。13・16は無文地だが、15は胴部に縄文を施文している。17は口縁が短く外反し、胴部が膨らむ器形である。無文地の頸部下を隆線で区画し、胴部上位に隆線・沈線で方形区画を施す。

18~20は縄圧痕文が施されている。18は波頂部が二又状となり、口縁に沿うものと波頂部から垂下する山形状の文様を施す。19は縄文地上に横位に縄圧痕文が施文する。20は口縁を隆帯で区画し、口縁に横位・斜位に縄圧痕文を施文する。24は頸部を刻み付隆線で区画し、縦位隆線と隆線に沿う沈線で方形区画している。25・26は沈線で文様が施される。27は縦位に縄圧痕文付隆線が施される。

(8) IV-3・5類 (図45-21・38~31)

21はIV-3類である。波状口縁で、波頂部は内屈する器形である。

28~31はIV-5類である。28は縦位の隆帯を貼付け、口縁を刻み付隆線で区画する。隆帯・隆線に沿って1条の有節沈線を加え、区画内に2条単位の有節沈線を斜位に施す。胴部には幅広爪形文が横位に施文される。29は波状口縁で、波頂部に縦位瘤状貼付文を施し、弧状の隆線が垂下している。口縁内面には帯状の隆帯が貼り付けられる。30・31は押捺が施された輪積痕を多段に残すものである。30は複合口縁で、直線的に立ち上がる器形を呈し、口縁上端を平坦に整え、刻みを施している。口縁下端は下方からの押捺がなされている。31は縦位隆線の剝離痕が認められる。

(9) V-1類 (図46-1~8)

1~4は口縁に隆帯を貼付けて区画している。1は口縁下端に押捺を施し、頸部に多条沈線と波状沈線が施される。2・4は区画内に爪形文、3は波頂部に弧状貼付文を貼付け、有節沈線を施している。3の口縁外面には波状沈線がめぐる。5は口縁下端を隆線で区画し、爪形文と交互刺突文を施した隆線が施文されている。

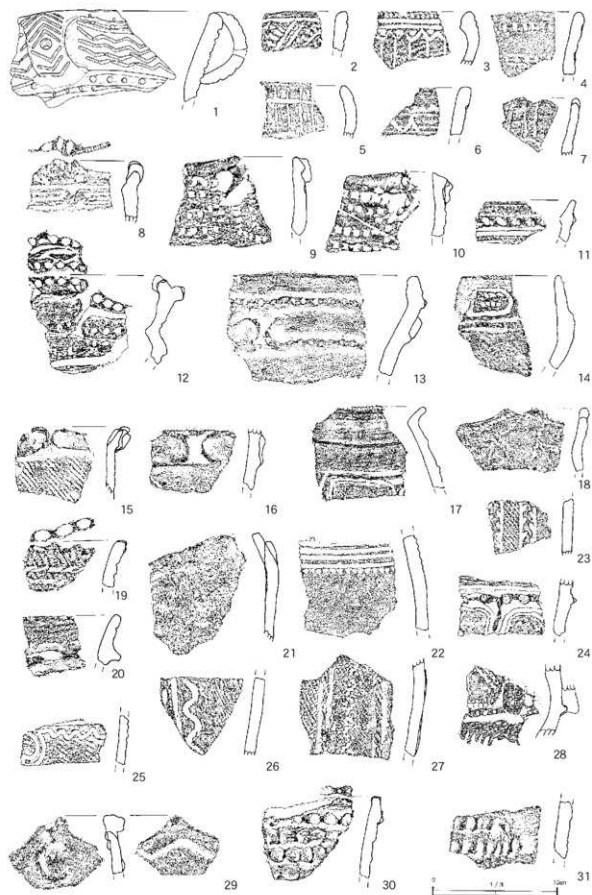


图45 台ノ前地区I区出土土器⑤ 遺構外出土IV群土器

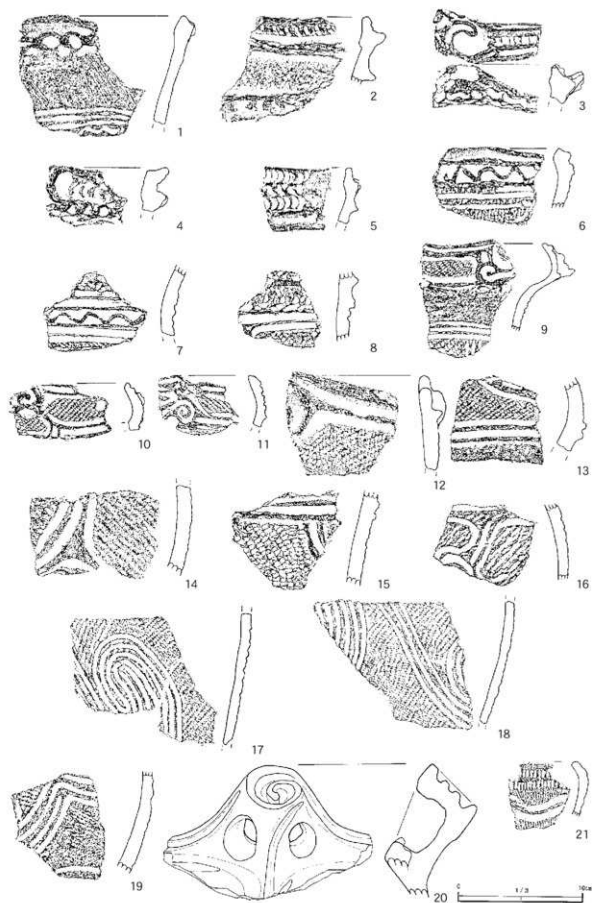


图46 台ノ前地区I区出土土器⑥ 遺構外出土V・Ⅶ群土器

6・7はソーメン状隆線により波状文を施すものである。6は口縁の隆線区画内に施され、口縁下には燃糸文地に2条の沈線が加えられる。7は頸部の横位沈線間に施されている。8は頸部を隆線・沈線で区画し、隆線間に縦位多条の縄圧痕文を施すものである。

(10) V-2・3類 (図46-9~16・19~21)

9~20はV-2類である。9~13はキャリパー状の器形で、口縁が内湾するものである。口縁に隆線・隆沈線による渦巻文・弧状文を施す。9は頸部を無文とし、胴部上位を多条沈線で区画し、縦位3条の沈線が施文されている。

14は隆沈線、15は隆線で弧状文を配し、16は燃糸文地に沈線で曲線状の文様を施している。19は3条単位の隆沈線で文様を施文するものである。20は上端に渦巻文を施した波状口縁の波頂部である。左右に貫通孔が施されている。

21はV-3類である。口縁にヘラ状工具による2条の縦位刺突列を施し、細線文地に2条単位の横位波状沈線を施文している。

(11) VI-1類 (図47-1~14・19、図48-1)

図47-1・2は内湾する口縁で、隆沈線による渦巻文・楕円形区画が施している。同図3も同様の器形を呈し、隆線による弧状区画を施す。同図4は胴部に隆沈線による渦巻文が施文される。同図5~12は沈線により区画された逆C字状文や縦位に帯状文を施文する。5~7は口縁が外反して開く器形である。

同図13・14は同一個体で、隆沈線により条線文を縦位区画している。同図19は浅鉢の胴部上半の破片で、隆線が縦位に施され、沈線により描出された2段の帯状文が認められる。

図48-1は胴部下半にあたる。幅の狭い縦位の縄文帯と上下2段に区画された帯状文が交互配置されている。文様の底部付近の下端は開放している。

(12) VI-2類 (図47-15~18、図49-1)

図47-15は弧状の隆沈線を描き、区画内に縄文、余白部に縦長刺突を充填している。同図16・17は断面三角の隆線で文様を描くもので、16は縄文帯が切りあう横方向の文様を施す。17は無文帯で曲線状の文様を描出している。同図18は直線的に開く器形であり、口縁内面に稜を持つ。口縁下と胴部上半に横位沈線と、縦位沈線がわずかにみられる。沈線は未調整である。

図49-1は口縁下に横位隆線を施すものでVI群に伴う粗製土器である。

(13) VII-1類 (図49-2~6・10・11・13、図50-8)

図49-2・4は口縁を隆帯で区画するものである。2の胴部は横位縄文、4の胴部は櫛描沈線により格子状文が施されている。同図3は隆帯が口縁にノ字状にせり上がるものである。同図5・6は内湾する口縁に横位縄文帯により楕円形の無文部を描出するものである。楕円無文部の口縁には円形浮文が施される。

同図10・11は口縁・頸部を隆帯とそれに沿う沈線で区画するものである。10は口縁に盲孔と2条の沈線を施し、口縁下に縦位鎖状隆帯・沈線が施される。11は小波状口縁を呈し、波頂部にノ字状隆帯、縦位・横位隆帯の交点に盲孔を施す。同図13は波状口縁の波頂部に2個の貫通孔を有する。口縁下には円形浮文を施し、胴部に2条単位の縦位沈線がみられる。

図50-8は縦位の蛇行状沈線が加えられている。

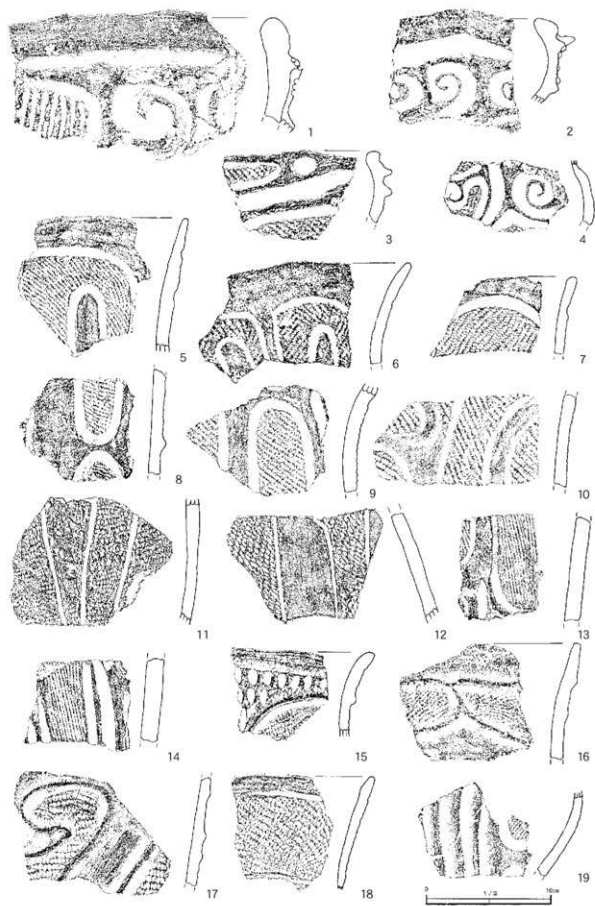


図47 台ノ前地区I区出土土器⑦ 遺構外出土VI群土器

(14) VII-2類 (図46-17・18、48-2・3、図49-7・9・12・14~21、図50-1~7・9~17、図51-1~12、図52-1~12)

図46-17・18は同一個体で、多条の弧条沈線を施す。図48-2は球形の器形を呈する小形土器である。口縁を沈線区画し、胴部文様との交点に盲孔を施す。胴部は横に流れた曲線状の文様を施し、下位を緩やかな波状口縁で区画している。同図3は胴部上位が膨らみ頸部で屈曲し、直線的に立ち上がる器形を呈している。口縁に小突起を有し、盲孔を施す。頸部は沈線区画され、胴部に弧状の文様を描いている。

図49-7・8は口縁下でくの字状に内屈する器形である。7は中央沈溝・盲孔を施した縦位隆帯を中心として、横位の方形無文部が描出される。8は口縁に2条の横位沈線を施し、胴部に三角形の区画文が描かれる。

同図9・12・14~21は口縁を沈線区画するものである。9は波状口縁で、波頂部に貫通孔を有する。12・14~17は小波状口縁を呈し、波頂部から垂下する文様は、12は貫通孔と縦位隆帯(盲孔、中央沈溝)、14は弧状沈線(盲孔)、15は縦位盲孔列、16は2条の縦位弧状沈線、17は盲孔と1条の縦位沈線である。18~21は口縁下に沈線が施され、胴部に18は蕨手状文、19は縦位楕円状沈線と列点状沈線、20は縦位楕円状沈線、21は小波状沈線が加えられている。

図50-1~4・14は頸部を沈線で区画するものである。1・2・14の胴部には摩消縄文で弧状の文様を施している。3は頸部に横位楕円状の沈線を施している。胴部にも斜位の雑な沈線が加えられている。

同図5・6は口縁に突起を有する小波状口縁である。5は突起上面に隆帯を貼付けて環状を呈している。6は突起外面に楕円形区画を施し、盲孔を充填している。7は蕨手状の摩消縄文を施す。

同図9・10は頸部下に横位の縄文帯と盲孔を施し、胴部に曲線状の文様を施している。同図11・12は鉤手状の文様を縦位に垂下させるものである。同図13も同様の文様に雑な小波状沈線が縦位に施文されている。

同図15は摩消縄文により曲線状の文様を描くもの、同図16・17は縄文地に曲線状の沈線を施すが、沈線間の縄文を摩り消していない。

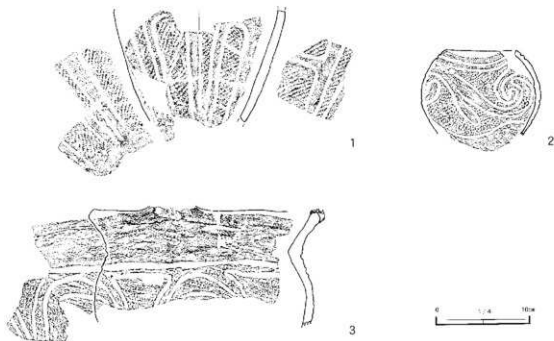


図48 台ノ前地区Ⅰ区出土土器⑧ 遺構外出土Ⅵ・Ⅶ群土器

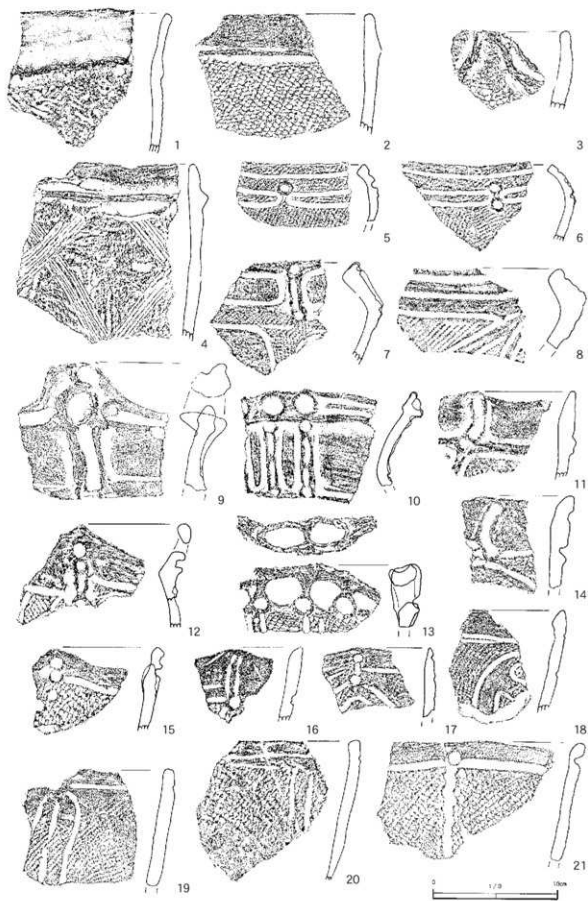


图49 台ノ前地区I区出土土器⑨ 遺構外出土VI・VII群土器

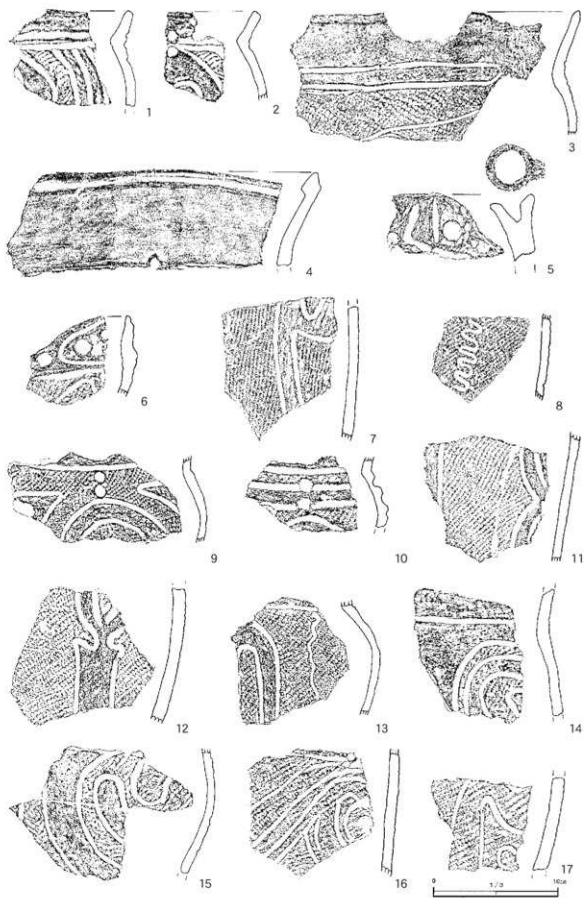


图 50 台ノ前地区 I 区出土土器⑩ 遺構外出土 VII 群土器

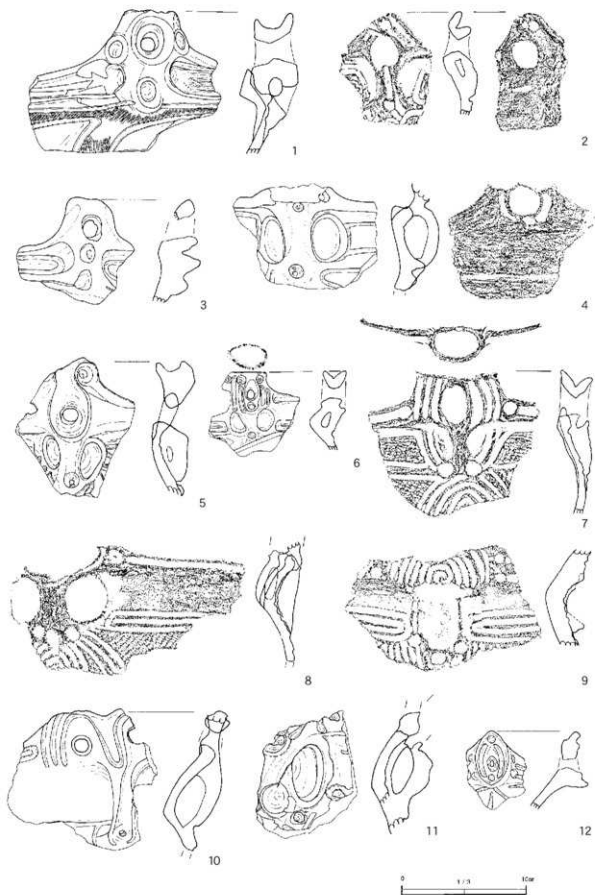


图 51 台ノ前地区I区出土土器⑪ 遺構外出土Ⅶ群土器

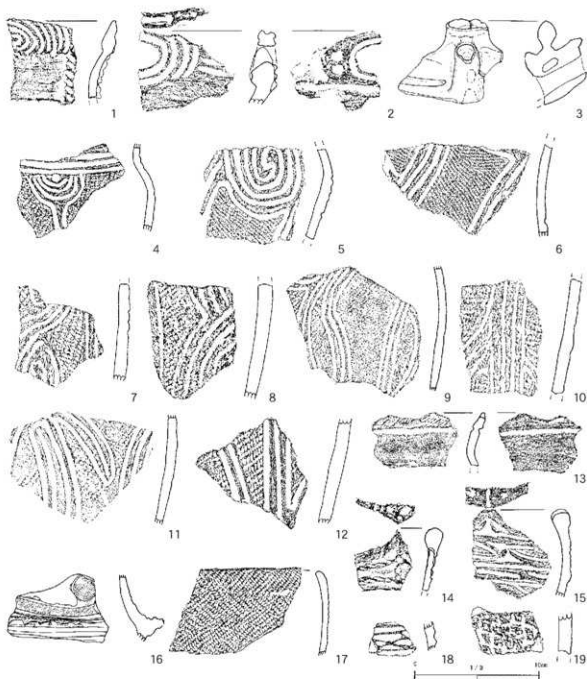


図52 台ノ前地区I区出土土器⑩ 遺構外出土 VII・VIII・IX・X群土器

図51-1~11は橋状把手をもつものである。把手の上位は曲線状隆帯や上面に環状隆帯を貼付けた突起を持ち、貫通孔が施されるものが多い(1~3・5~7)。6・7は貫通孔に沿って弧状の多条沈線が施され、10は波頂部に口縁と貫通孔に沿って曲線状の多条沈線を施し、横位楕円状沈線を加えている。橋状把手には盲孔のほか、把手が捻りをもつもの(11)、中央沈溝(2・10)をもつものがある。把手が付けられる頸部は把手から派生した弧状隆帯(4~9・11)や沈線(2~4・7)により、方形・楕円形の区画帯が描出されている。この区画帯には無文のもの(2~4・11)と縄文が施文されるもの(7)、多条沈線が施文されるもの(5)、楕円状沈線が下端に施されるもの(6・8・9)がある。楕円形・方形の区画を有しない1・10も上下を隆帯・沈線で区画し、横位の無文帯となっている。内面には盲孔(2・4)や弧状沈線(4)を施文しているものもある。胴部文様は1

が摩消縄文によって文様が施されているほか、5・7～9は多条沈線によって橋状把手の下端を基点とした弧状の文様を描いている。

同図12は波状口縁で波頂部に対向する弧状沈線と盲孔が付けられている。突起の中央は貫通孔を有する。口縁には2条の横位沈線と盲孔が施され、口縁下に沈線による文様が配される。IV-1類に伴う可能性もある。

図52-1・2は口縁部に多条の弧状沈線が施されるもので、1は刻み付縦位隆帯が頸部に加えられている。同図3は注口土器である。注口の上位には環状の隆帯が貼り付けられ、内面に弧状隆帯と盲孔が認められる。

同図4～12は多条沈線による文様が施される胴部破片である。渦巻状・弧状文などの曲線状の文様を施すもの(4・5・7～11)や三角形の区画文を配すもの(6・12)がある。4は頸部を横位多条沈線により区画し、上向の重弧状文の中央に盲孔が施されている。

(15) VII-3類 (図52-13・14)

13は山形状突起を口縁に貼付け、口縁下を沈線区画し、縄文を施すものである。内面にも1条の沈線がめぐる。14は波状口縁で、波頂部はつまみ出されたような突起を有する。波頂部から円形刺突を施した隆線が垂下し2条の刻み付隆線が口縁に沿って横位に施されている。口縁内面に浅い1条の沈線がめぐる。

(16) VII・IX・X群土器 (図52-15～19)

15はVII-2類で、上端部に縦位単沈線を持つ山形状小突起が施され、突起の形状にあわせるように三叉状文が描出されている。これらの下位に描かれている向かい合う三叉状文の間には小さい瘤を貼付けている。口縁部から胴部にかけて横位沈線、弧状沈線、斜位沈線、横位単沈線が施文されている隆帯が加えられている。

同図16・18はIX群土器である。16は注口土器である。地文を施文した後に横位沈線・円形状沈線が施され、刻目文・刺突文が加えられた隆帯が巡っている。18はための沈線を用いて浮線網状文を描出している。

同図17・19はX群土器である。17は横位の非結束羽状縄文が施文された口縁部資料である。19は網目状燃糸文が施されている。

第6節 西向貝層貝層外出土土器

第1項 貝層の概要

西向貝層は、集落の中心と考えられる南台地区の西側にあたる東西最大約20m、南北約49mを測る貝層である。確認した調査区は64T・52Tの西端である。ただし、52Tは貝層（Ⅲ-3層）上に竪穴住居が構築されており、面的には確認していない。53T西では後世の影響を受け、明確な貝層は確認できなかった。また、過去に福島大学考古学研究会で調査したDトレンチは、53T西に隣接するものと推定され、約20cmの貝層が確認されている（福島大学考古学研究会1971）。

平面的な検出状況では、土主体層（c層）の上位及び斜面下位に混貝土層（a・b層）が堆積している状況が認められた。貝層を掘り込んで調査したのは64Tのコラムサンプルとサブトレンチだけである。a層（混貝土層）からはⅦ-2類、b層（混貝土層）からはⅣ群、c層（土・土主体層）からはⅢ・Ⅳ群が中心に出土し、c層最上層からⅤ-1類が出土している。本節では64Tの貝層上面にあるⅠ・Ⅱ層から出土した出土土器を報告する。

第2項 Ⅱ・Ⅲ群土器

(1) Ⅱ群土器 (図53-1)

1は胎土に繊維を含み、縦位刺突列と横位多条沈線が施されるものである。

(2) Ⅲ-2類 (図53-2~4)

2は口縁を無文とし、口縁上端に刺突を施すものである。胎土にわずかに繊維を含む。3は口縁が交互押捺されるもの、4は口縁を無文とし、口縁下に横位多条有節沈線が施されている。

(3) Ⅲ-3類 (図53-5・6・9)

5は2条単位の山形沈線が施される。6は波状口縁で波頂部が三角状を呈する。口縁端が肥厚し、外方へ大きく庇状に突出し、波頂部から垂下する縦位多条貼付文が施されている。9は波状の複合口縁である。口縁下端に刻みを施し、胴部上半に平行沈線で上下を区画した山形文が施される。

(4) Ⅲ-4類 (図53-7・8・10~22、図53-1・2)

図53-7は複合口縁で、口縁上端に刻みを施し、下端に縦位繩圧痕文が施される。同図8も複合口縁を呈し、口縁上下端を棒状工具による刻みと縦位の隆帯が付けられている。地文は縦位摺糸文である。同図10はわずかに複合口縁状を呈し、下端に三角刻みを施している。同図11・12は同一個体で太描の山形沈線を施し、山形の頂点に対応して盲孔が施文される。頸部下に三角刺突列が施されている。

図53-13・14ならびに図54-1は頸部に爪形文を施した数条の隆帯を施すものである。いずれも口縁を無文とする。図53-13は山形状の突起を2個付けている。同図14も波状口縁では無文の口縁部が短く肥厚する。図54-1は口縁が肥厚し、短く外反する金魚鉢形の器形である。胴部は横位縄文と1条の結節回転文が施される。同図2も同様の器形を呈するが、口縁の肥厚は顕著ではない。頸部まで無文として、頸部下に輪積痕を1段残し、装飾効果をなしている。山形状の突起を有する。

図53-15も波状口縁で口縁を無文とする。縄文地上に平行沈線により格子状文を施している。同図16は口縁を横位に区画し、縦位の多条沈線を施文している。同図17・18は肥厚した口縁に縄圧痕文による文様を施すものである。17は口縁上位を横位に区画し、2条単位の菱形（弧状）文を配した下位に横位の小山形文を施文している。18は上下を区画して、U字状文を配し、余白部に斜位に施文されるものである。同図19は肥厚口縁にL字状に区画した沈線と沈線に沿う爪形文が施文されている。頸部も横位1条の沈線を区画し、胴部には爪形文が施文される。20は1条の横位山形沈線、2条の横位

第6節 西向貝層貝層外出土土器

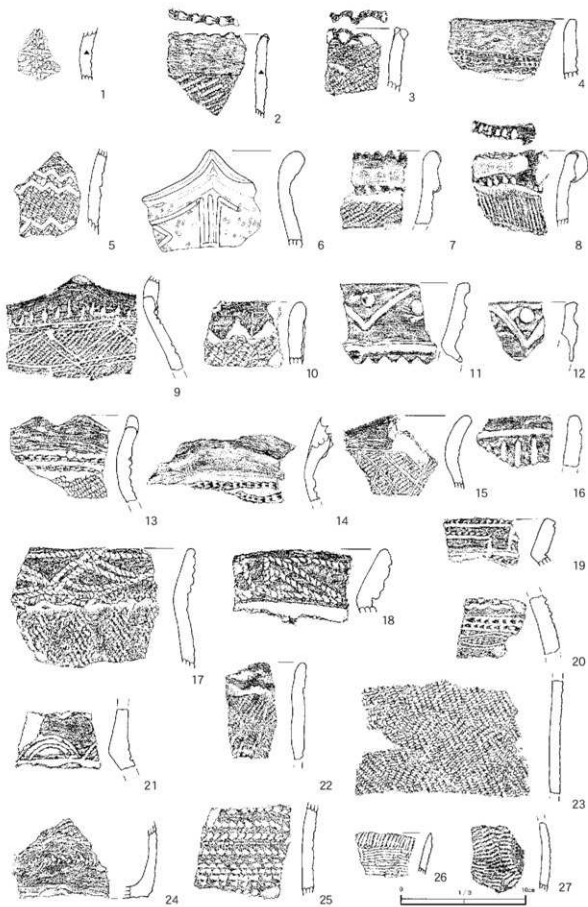


圖 53 西向貝層貝層外出土土器① II・III群土器

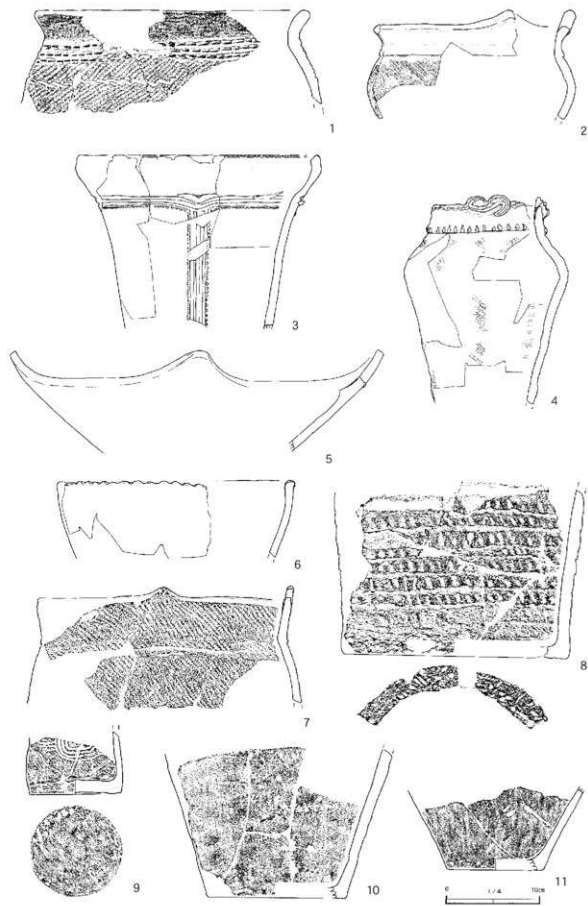


图 54 西向貝層貝層外出土土器② III·IV·V·VII群土器

爪形文、弧状の平行沈線が施されている。同図21は頸部を沈線区画し、口縁の上位に横位山形沈線、下位に2条単位の下向連弧状文が無文地に施文されている。

(5) III-5類 (図53-22~24)

22は口縁下に輪積痕をのこし、口縁を無文とするものである。23は縦位・横位にLR縄文を施文している。24は底部破片で横位LR縄文と結節回転文が施される。やや膨らんで立ち上がることから、III-4類の金魚鉢形の器形を呈するものと考えられる。底部はナデ調整される。

(6) III-6類 (図53-25~27)

25は幅広い変形爪形文と多条の有節沈線を交互に施したものである。変形爪形文の中央には有節沈線のような浅い有節沈線状の痕跡が残され、半截竹管の内側を削ぎ、先端を尖らせた施文具で施されたと思われる。26は口縁に縦位の刻みを施し、多条の有節沈線を充填するものである。27は貝殻腹線文を弧状に施文し、文様を描出している。

第3項 IV群土器

(1) IV-1類 (図54-3、図55-1~12)

図54-3は、胴部は直線的に開き、口縁が内湾する器形を呈する。口縁上端は刻みを付け、口縁部は無文である。頸部隆帯貼付による有段を呈し、V字状の貼付文を施している。頸部は横位2条の沈線と沈線の下端に三角刺突、胴部はV字状の貼付文から垂下する3条の沈線と両側に三角刺突が施されている。

図55-1・2は口縁に縦位の刻みを施す。1は波状口縁で口縁に沿い2条の沈線を施し、波頂部下に梯子状短沈線を施した弧状文が配される。2は多段の山形沈線が施されている。同図9も上下を横位沈線で区画した多段の山形沈線が施されるものである。同図3は下端に三角刻みを施した刻み付隆帯で口縁下を区画する。区画内は上下を沈線区画し、2条単位の山形沈線を施し、斜位の刺突を余白部に充填している。胴部は横位の多条沈線が施文される。

同図4・6は刻み付隆帯が突起または波頂部から縦位に垂下し、頸部も横区画するものである。口縁が直線的に開く器形を呈する。4は多条沈線を横位施文後縦位に施し、格子状文を描出するものである。隆帯の交点には瘤状の貼付文が施される。6は口縁上位も隆帯で区画し、区画内と隆帯下に縦位の刺突列が施される。胴部は縦位の縄文と結節回転文を施文している。同図5は内湾する口縁で、口縁に横位1条、縦位に2条の刻み付隆帯が付けられ、乱雑な横位多条沈線が施文される。同図11は頸部を刻み付隆帯で区画し、口縁に縄文と結節回転文が施されている。

同図7は口縁を横位1条の沈線で区画し、縦位刻みがその上下に施されている。8は無文地に縦位・横位に浅い多条沈線を施すものである。同図10は直線的に立ち上がる胴部が頸部で内湾ぎみに外傾する器形を呈する。頸部を平行沈線で区画し、口縁に上向弧状短沈線を多段に充填している。同図12は無文地に縦位・横位・斜位の沈線と刺突列を沈線に沿わせている。

(2) IV-2類 (図55-13~17、図56-1~4)

図55-13は直線的に開く器形で、口縁下端に隆帯を貼付けて口縁幅を広げ、横位沈線と円形刺突列が施される。口縁下には斜位隆帯と沈線が施され、余白部に2条単位の沈線による曲線状の文様を描かれている。内外面とも丁寧なミガキが認められる。同図14は胴部が膨らみ、頸部で屈曲して短い口縁を持つ器形である。頸部下は隆帯・沈線による楕円形区画が施され、区画内は沈線による方形文が配される。胴部は沈線による楕円文と波状文が描かれている。同図15も隆帯・沈線により横位楕円形

区画が頸部下に配されるもので、区画内無文の楕円状区画文も縦位に施されている。同図16は断面三角の縄圧痕文付隆線が縦位に施されるもの、同図17は頸部の横位沈線区画から縦位に波状文が垂下するものである。

図56-1~4は縄圧痕文が施されるものである。1は瘤状貼付文を基点として横位・斜位・縦位に隆帯を付け、それに沿った多条の縄圧痕文が施文される。2~4は口縁に1条の縄圧痕文を施すものである。2は口縁にY字状貼付文、3は頸部に押捺付隆帯、4は口縁に下端に押捺を加えた隆帯を貼付け、環状・縦位の貼付文による突起を有する。

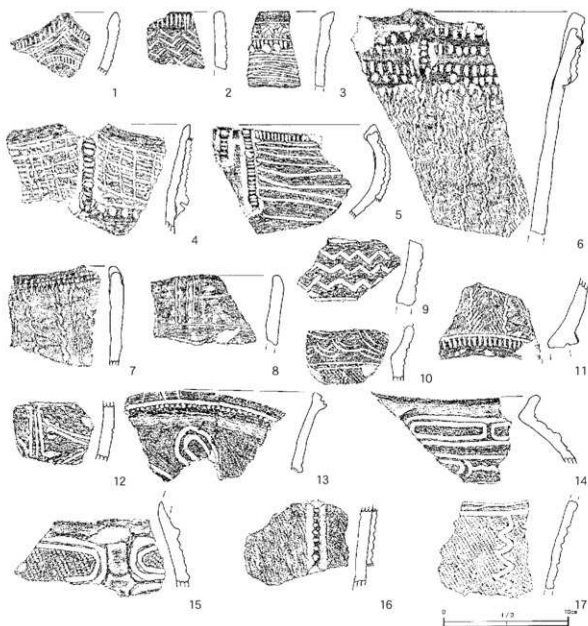


図55 西向貝層具層外出土土器③IV群土器

(3) IV-4類 (図54-7、図56-5~13)

図54-7は膨らんだ胴部が頸部で屈曲し、直線的に開く器形を呈する。口縁に山形状小突起をつけ、突起上端は浅い刻みを施して、三山状となっている。地文は横位RL縄文である。

図56-5・6は内湾する口縁で、口縁に押捺付隆帯を施している。5は口縁に瘤状突起を有する。同図7は口縁と頸部に押捺付隆帯を施すもの、同図8・10・11は刻み・押捺を施した断面三角の隆帯で頸部を区画するものである。8はやや内湾気味の器形であり、口縁上端に刻みを施す。10・11はゆるく外反する器形である。同図9は口縁上端に縄圧痕文、同図12は頸部に縄圧痕文付隆帯を施す。同図13は内湾気味に立ち上がる器形を呈している。

(4) IV-3類 (図54-5・6・10、図56-14~17・19)

図54-5は波状口縁を呈する浅鉢である。口縁を平坦に整え、内面に1条の隆帯を貼り付けて有段状を呈している。図56-19も同様の浅鉢であり、口縁内面に隆帯を施し、口縁上端に瘤状貼付文を加えている。図54-6は内湾気味に立ち上がる器形で口縁上端に押捺を施している。同図10は直線的に開く底部で、底面に網代痕を残している。

図56-14は膨らんだ胴部が頸部で屈曲し、短く外反する器形である。15は胴部が直線的に開き、口縁部が肥厚し、内湾気味に直立するものである。口縁上端に刻みを施す。16・17は複合口縁状に輪積痕を残すもので、16は多段に輪積痕が認められる。

(5) IV-5類 (図54-8、図56-18)

図54-8は押捺が施された輪積痕を多段に残すものである。底面は網代痕を残す。

図56-18は胴部が直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して直線的に外傾する器形である。波頂部に傾斜した突起を有する波状口縁を呈する。波頂部の上端は片縁のみ棒状工具による刻みを施し、波頂部から斜位に蕨手状隆帯が垂下する。口縁部と口縁部上端の文様は1条単位の有節沈線によって施される。口縁部の波頂下片側には環状隆帯の剥離痕がみられ、その中央は貫通孔が施されている。有節沈線はこの隆帯に沿うものと上下対向する横位蕨手状文があり、蕨手状文の交点には、剣先状の刺突が加えられる。胴部以下は押捺が施された輪積痕を残し、断面三角の隆帯と一部沈線となる有節沈線による横位楕円形区画が施される。波頂部の内面にも円形刺突・刻み文を施し、波頂部から垂下するL字状の1条の有節沈線がみられ、頸部内面は隆線状の段をもっている。

第4項 V群土器

(1) V-1類 (図54-9、図57-1~11)

図54-9は3~4条の沈線によりクランク状文を施すものである。底部はナデ調整される。

図57-1~3は同一個体である。口縁上端に縄圧痕文を施す。口縁に隆線により区画された2帯の文様帯を配し、中位の区画隆線が伸びて渦巻状を呈する。区画内は上位に半截竹管による刺突、下位に縦位多条沈線を施している。隆線には沈線に沿っており、下端には多条沈線と連貫状(山形)沈線を施文する。地文は縦位縄文である。

同図4・5は口縁に隆帯・隆線で楕円形区画を施すものである。4は爪形文、5は棒状工具による刺突が施される。同図6は口縁に隆帯を貼付け、2段の有段状を呈し、下端のみ押捺が施される。隆帯下位に2条の横位沈線を施し、胴部に縦位・波状沈線が垂下する。口縁上面の内方にS字状貼付文を付ける突起を有し、口縁の一部と突起上端には縄圧痕文が施される。同図7は内外面にS字状・渦巻状貼付文を施す突起をもつものである。頸部に押捺付隆帯が施される。

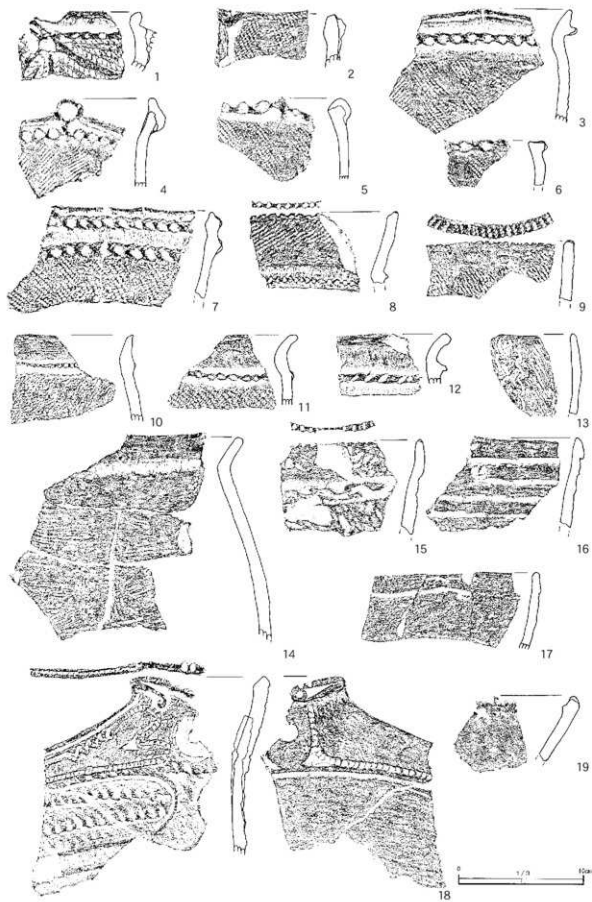


图 56 西向貝層貝層外出土土器④ IV群土器

同図8・9は撚糸文地に文様を描き、胴部が直線的に開く器形を呈するものである。8は頸部を多条沈線で区画し、その上位に横位波状沈線が描かれる。9は頸部を2条の沈線と小波状沈線で区画し、口縁上位に隆線、下位に弧状・斜位の沈線文様を施文している。同図10・11は隆線・隆沈線で文様を描くものである。10は縦位区画され、弧状文・渦巻文が施文される。11は方形区画された文様帯の下位に縦位に曲線状の文様を施すものである。

(2) V-2類 (図57-12・13)

12・13は口縁が内湾するものである。12は口縁を隆沈線で区画し、弧状の隆沈線を施す。口縁中央に瘤状突起が付けられ、突起に口縁から縦位に垂下する隆線と突起を巻く隆線が加えられる。13も弧状の隆沈線が口縁に描かれ、環状の隆線がアクセント文として施されている。

第5項 VI群土器 (図57-14~16)

14・15はVI-1類である。14は断面三角の隆沈線により逆C字状文を描くものとみられる。15は胴部破片で隆沈線による弧状文が施されている。16はVI-2類またはVII-1類に位置づけられるものである。波状口縁を呈し、波頂部に山形状小突起、口縁内面に鈎状の突帯を有する。外面は剝離が激しいが、未調整沈線により三角形の区画文を施している。

第6項 VII・VIII群土器

(1) VII-1類 (図58-1~11、図59-1~5)

図58-1~11は口縁を隆帯で区画するものである。1・10・11は隆帯に沿って沈線も加えられている。1は波状口縁であり、弧状隆帯・沈線が胴部に垂下する。3は胴部に2個単位の刺突列を8字状に施している。4は口縁上端と下端に刻み付隆帯が施され、胴部に縦位の櫛播多条短沈線が施されている。7~11は小波状口縁または半円状の突起を有し、縦位隆帯が施されている。隆帯は1字状(5・7・10・11)・ノ字状(6・8)・対向する弧状(9)を呈し、中央沈溝や盲孔が伴っている。10・11は胴部にJ字状の文様が施されている。

図59-1~4は円形浮文が施されるものである。1は波状口縁で、波頂部に対向する弧状文と盲孔を施し、中央に貫通孔を有する。口縁は盲孔と2条の沈線を施し、波頂部下の円形浮文を基点として縦位に沈線文様が垂下している。2~4は胴部破片で、摩消縄文による文様の交点に円形浮文が加えられている。同図5は胴部下位の破片で縦位鎖状隆帯が付けられている。

(2) VII-2類 (図59-6~16、図60-1・2)

図59-6・7は橋状把手をもつものである。把手の上位は上面に環状隆帯を貼付けた突起が付き、把手の上下に盲孔を施す。いずれも胴部は縄文地に沈線文様を描く。7は突起の中央から内面に抜ける貫通孔を有する。把手が付けられる頸部は把手から派生した弧状隆帯が付き、口縁と頸部下に付けられた隆帯ともに頸部に横位の区画が作られている。この区画帯には楕円状沈線が施される。

同図8~14は口縁・頸部を沈線区画するものである。8は口縁に円形浮文、胴部に蕨手文を施す。9・10は突起または波頂部に盲孔を施し、10は胴部に方形の区画文を描出する。11は沈線区画上に8字状浮文を加え、それを基点として縦位列点状沈線を施文している。12も突起から垂下する列点状沈線が加えられている。13は胴部が膨らみ、口縁が外反する器形である。摩消縄文によって文様が描かれる。14は胴部が膨らみ、口縁が短く立ち上がる器形を呈する。頸部に2条の沈線を施し、多条沈線によるJ字状文を施文している。

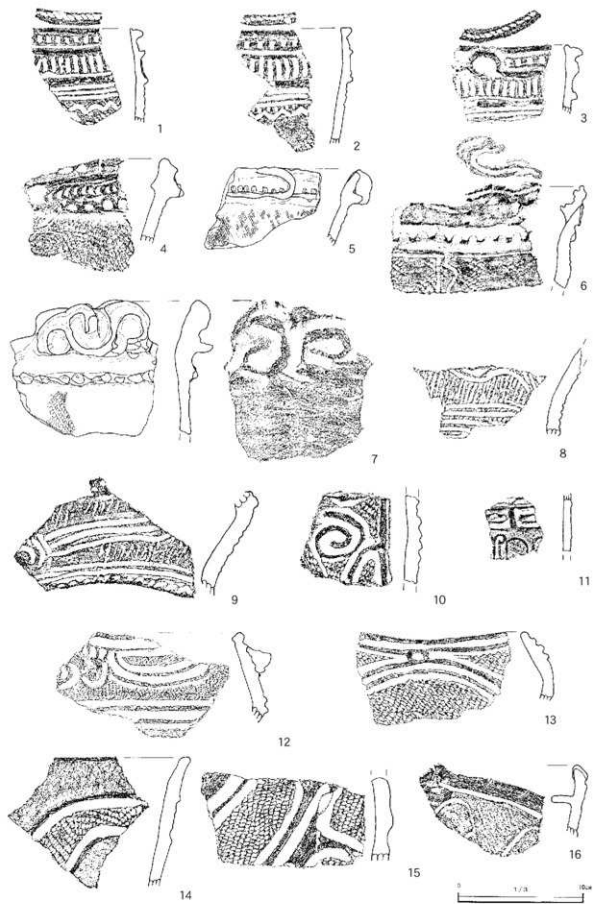


图 57 西向貝層貝層外出土土器⑤ V·VI群土器

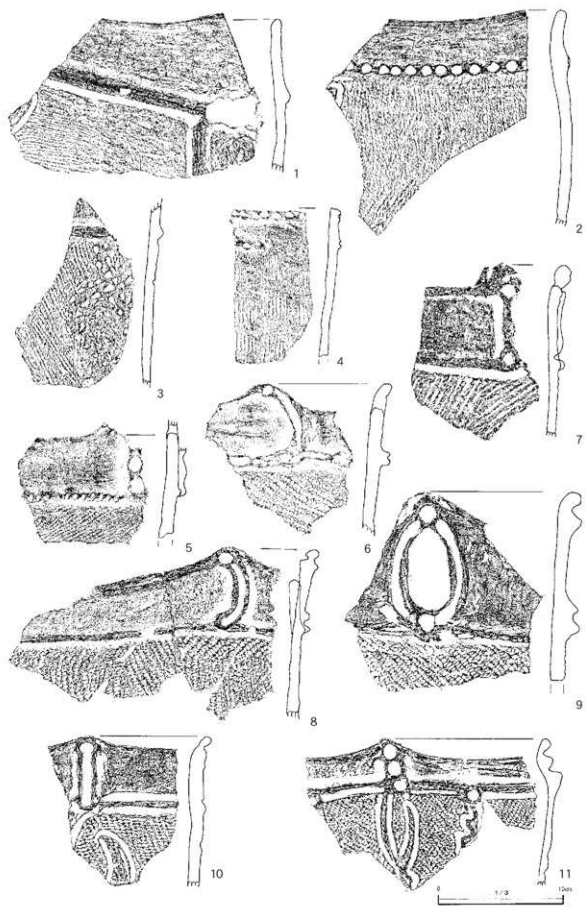


图 58 西向貝層貝層外出土土器⑦ VII群土器



图 59 西向貝層貝層外出土土器⑦ VII群土器

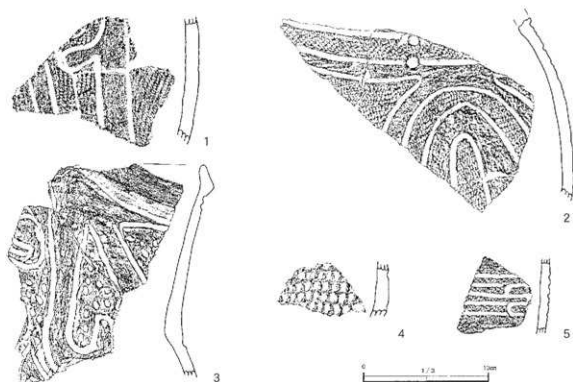


図60 西向貝層貝層外出土土器⑧ VII・VIII群土器

同図15は内湾する口縁であり、口縁を沈線区画し、縄文上に横位の曲線状の文様を加えている。同図16は胴部が膨らむ胴部上半にあたり、同図15の文様に摩擦消しを加えたような横位曲線状の文様を施している。

図60-1・2は摩擦縄文で文様を描かれた胴部である。1は蕨手文、2は渦巻状の文様を描かれている。

(3) VII-4類・VIII-1類 (図60-3~5)

3・4はVII-4類である。3は波状口縁であり、胴部中で屈曲し、直線的に開く器形を呈する。口縁は短く内屈する。無文地に沈線で曲線状の文様を施し、沈線間に半截竹管による刺突を充填している。4は横方向からの刺突が全面的に施されている。

5はVIII-1類である。縄文地に施された横位沈線間に縦位弧状の沈線を付加している。

第7節 西向地区斜面下部遺構外出土土器

第1項 調査区の概要

西向地区斜面下部は、西向貝層の西側斜面下にあたる。この地区は表土上から多くの破砕貝が認められるが、65T等のトレンチによる調査及びボーリング調査により、耕作等により西向貝層が破壊され、斜面下部まで崩落した二次堆積であることが確認された。

この地区で調査した調査区は、65・68・69・70・71Tである。このうち65Tで網取式期の土坑が1基検出され、65・70・71Tでは遺物包含層を確認した。遺物包含層を掘り込んで調査をしたのは65Tだけであり、その他は上面確認にとどめている。遺物包含層は緩やかな斜面に厚さ20cmほどで堆積している。網取式の土坑の上位に堆積するが、遺物包含層からはⅢ～Ⅸ群までの土器が混在している。

平成9年度にこれらの西側の西側で実施したトレンチ（①～④T）やさらに西側の西向地区低地部にも調査した箇所（Ⅲ区）があるが、今回は報告の対象としなかった。本節では、65・68・69・70・71Tの調査区におけるⅠ・Ⅱ層から出土した土器を掲載した。

第2項 Ⅲ群土器

（1）Ⅲ-2・3類（図61-1～4）

4はⅢ-2類である。横位多条結節回転文上に縦位の波状沈線が施される。

1～3はⅢ-3類である。1は直線的に開く器形で、口縁に縦位刻みを施している。口縁下には平行沈線により文様を描き、上下区画された中に斜線文が施される。2は波状口縁で、波頂部に瘤状貼付文を施す。口縁と胴部中に単沈線による多条の山形沈線を施し、その間を2条の斜線文が加えられている。3も縄文地に山形沈線を描くものである。

（2）Ⅲ-4・5類（図61-5～16）

5～12・14～16はⅢ-4類である。5は直線的に開く器形を呈し、横位爪形文と三角刻み列が交互に多段に配されている。6は口縁を無文とし、屈曲する頸部を爪形文で区画して、胴部に多条の平行沈線が縦位・波状に施されるものである。7・8は単沈線で文様を描き、7は口縁に隆帯、8は突起が付けられている。9は口縁が肥厚し、沈線と沈線に沿う爪形文が施されている。14は胴部破片で同じく沈線に沿う爪形文で弧状の文様を描いている。10は口縁上端に隆帯を貼付けて幅広とし、そこに沈線による文様を施している。口縁外面は上位を沈線区画し、横位弧状の短沈線を多段に配している。

11は口縁に棒状工具による刻みを施している。12は胴部破片で縄文地に多条の平行沈線により方形・X字状の文様を施文する。平行沈線の交点には太描の弧状沈線が加えられている。15は金魚鉢形の器形を呈するもので、胴部上半に短沈線による山形文と2条の横位沈線文を施し、文様帯の下位を横位隆帯で区画している。16は口縁上位に多条の縦位短沈線を施文し、横位に沈線区画している。区画下は沈線で弧状文と波状文を描いている。口縁の内面は隆帯を貼付けて突出した形態を呈している。

13はⅢ-5類で、無文の口縁がやや肥厚するものである。胴部は横位縄文が施文されている。

第3項 Ⅳ群土器

（1）Ⅳ-1類（図61-17・18）

17は口縁内面に隆帯を貼付けて、肥厚した形態を呈する。梯子状短沈線を施した渦巻文を描き、余白部に斜位多条沈線を施す。18は頸部を刻み付隆帯で区画し、口縁部に浅い平行沈線を斜位に施した後、やや深さのある平行沈線を斜位（格子状?）に加えている。

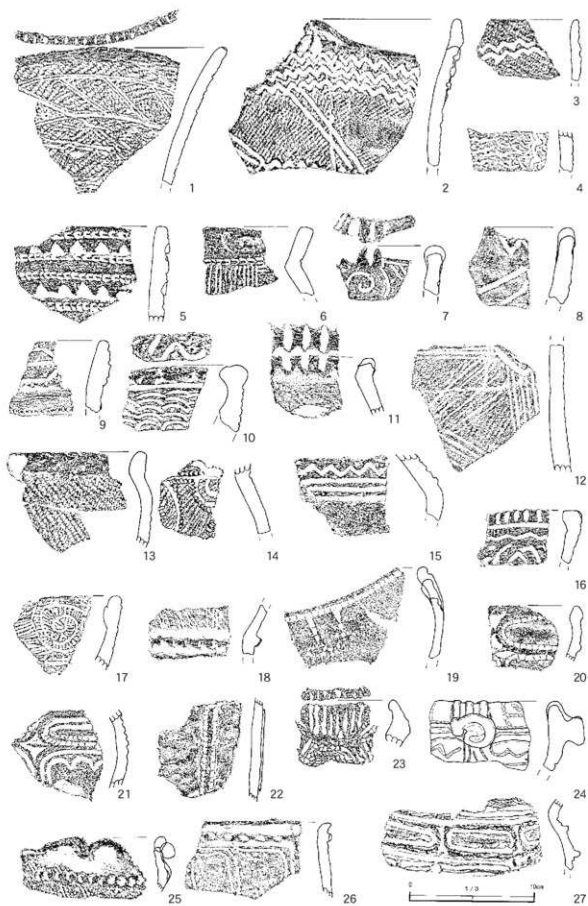


图 61 西向地区斜面下部遺構外出土土器①Ⅲ・Ⅳ群土器

(2) IV-3・5類 (図61-19・20・22、図62-1・2)

図61-19・20・22、図62-2はIV-5類とした。図61-19は口縁が内湾する波状口縁である。口縁に沿って1条の有節沈線を施し、波底部に2条の有節沈線が短く垂下する。同図20・22は隆線に沿って1条の有節沈線が施されるものである。20は口縁に楕円形区画を有し、区画線に沿った1条の有節沈線が胴部に垂下している。22は無文地に縦位隆線・有節沈線が施されている。

図62-1はIV-3類とした。内面にも段をもち、外面に多段の輪積痕を残している。同図2も多段の輪積痕を残すものだが、輪積痕上に断面三角の隆線による縦位文様を加えられている。

(3) IV-2類 (図61-21・23~27、図62-3~8)

図61-21は胴部上位に隆線による楕円形区画を施し、区画内に隆線に沿う2条の有節沈線を施している。区画下はY字状隆線・沈線が垂下し、上位に連弧状沈線が施される。同図23は波状口縁の波頂部突起で、上端はわずかにU字状を呈する。突起はU字状の隆線が下位に施され、その上位と波頂部上端に縦位多条沈線が施される。波頂部下は逆U字状の多条沈線を中央に配し、口縁に沿って沈線と交互刺突文が施文される。同図24は口縁下を2条の横位隆線で区画し、隆帯上に渦巻状隆帯を貼り付けた突起を有する。突起には口縁から垂下する縦位隆線が加えられる。口縁は横位(楕円?)隆線と縄圧痕文が施される。頸部は沈線による山形文・弧状文などの文様が施文される。

同図25は口縁に弧状貼付文を付け、口縁に沿って横位1条の縄圧痕文が施されるものである。屈曲する頸部には縦位に縄圧痕文がみられる。同図26は短く外反する口縁で頸部から胴部にかけてわずかに膨らむ器形である。口縁下には刻み付隆線が施され、縦位の隆線を加えて方形区画をなしている。胴部の区画内は無文地に浅い沈線によるL字状?の文様が描かれる。同図27は頸部で屈曲する器形の胴部上半の破片資料である。隆線による楕円形区画を配し、区画内に隆線に沿う浅い沈線が施される。区画の上下は横位の多条沈線が加えられ、楕円形区画の一部の交点下位から垂下する2条の隆線も認められる。

図62-3は波頂部が三角形形状を呈する波状口縁である。口縁内面に隆帯を貼付け、口縁上端を幅広とし、爪形文を施文する。波頂部から縦位に縄圧痕文を付けた隆帯が垂下し、斜位の多条沈線が口縁に沿ったように施される。同図4は環状貼付文を付け、L字状に断面三角の隆線は無文地に施している。口縁はやや外傾し、内面に隆線状に稜を持ち、楕円形沈線と沈線の端部に刻み文を有する。

同図5・6は口縁に隆線による楕円形区画を施すものである。5は直線的に外傾した胴部が頸部で直立気味に屈曲し、明瞭な稜を有する。反り気味に内傾した頸部は口縁下で再度稜をもって内屈し、楕円形区画と一体となっている。区画内には縦位沈線が施される。6の楕円形区画内は区画に沿った2条の沈線が施される。

同図7は縄文地に沈線により弧状文と斜位の楕円文が施されている。同図8は口縁に横位に伸びたS字状貼付文による突起が付く。口縁下には隆帯を貼付けて、複合口縁状の段を持つ。口縁外面には半截竹管による横位刺突列、胴部には縦位LR縄文が施されている。

第4項 V群土器

(1) V-1類 (図62-9~15)

9・10は口縁下に隆帯を貼り付けるものである。9は口縁に縄圧痕文を施す。10は口縁にS字状?貼付文と有節沈線を施す。口縁下には沈線による上向連弧状文を施文し、頸部は横位沈線で区画している。11は口縁に隆線による楕円形区画を有するものである。外面には沈線による文様を施す。内面

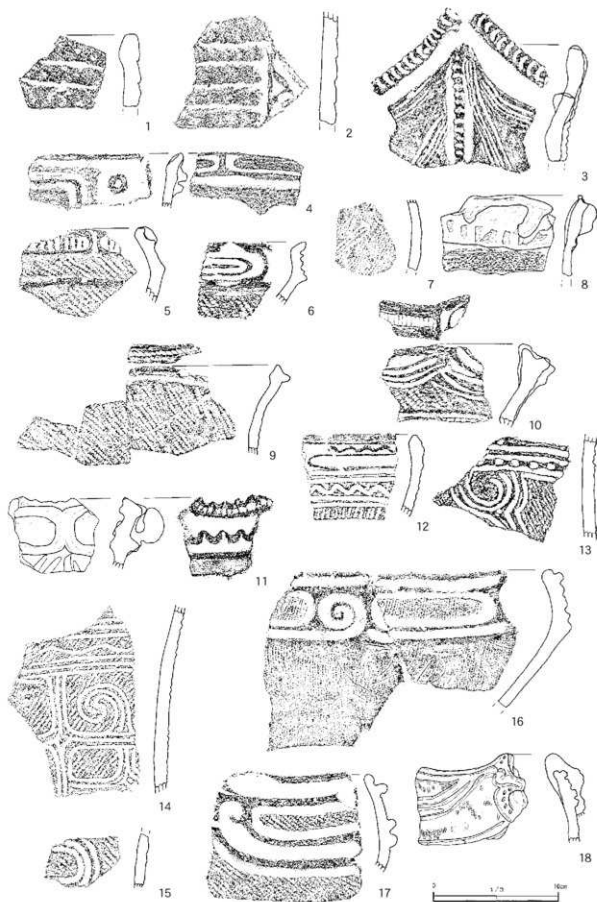


图62 西向地区斜面下部遺構外出土土器② IV・V群土器

には隆帯を貼付け、隆線による波状文と有節沈線を施す。12は口縁に隆線による波状文と楕円文を、その下位の燃糸文地に横位・波状沈線を施している。

13～15は胴部に沈線文様が施すもので、13は頸部を隆沈線と隆線で区画し、3～4条単位の渦巻状沈線を描く。14は横位・山形沈線で頸部を区画し、方形区画内に渦巻文・クランク状文を施文する。

(2) V-2類 (図62-16～18、図63-1～4)

図62-16～18は口縁を隆沈線による渦巻文・楕円形・弧状の区画を施すものである。18は渦巻状の突起が付けられている。突起周囲には渦巻状沈線と刺突が加えられる。



図63 西向地区斜面下部遺構出土土器③ V・VI群土器

図63-1・2は横状把手を持つもので、把手の左右から内面に抜ける貫通孔が施される。1の波頂部は隆沈線による渦巻文、2の波頂部は環状沈線を施し、把手の周囲には渦巻状沈線を描く。

同図3は、胴部が膨らむ器形で、無文地に隆沈線で文様が施される。頸部を無文とし、胴部を横位に区画し、胴部には連結渦巻文が描かれている。同図4は縦位の条線文地に渦巻状沈線を施文する。

第5項 VI群土器

(1) VI-1類 (図63-5~12)

5は隆沈線で文様を描く胴部破片である。6は口縁が内湾する器形で、縦位帯状文が施されている。7~9は口縁部に渦巻状隆沈線を施すものである。11・12も同様の口縁区画がなされているとみられる。7は口縁が内湾するキャリバー状の器形で、口縁と胴部で分帯化され、胴部は縦位に帯状文が施される。10は口縁を沈線区画し、弧状の文様を配し、余白部に刺突を充填する文様を施文している。

(2) VI-2類・VI群 (図63-13・14、図64-1)

図63-13は波状口縁で波頂部に「の」字状隆帯を貼り付けるものである。条線文を沈線で区画している。同図14は胴部上位に円形の貫通孔を有する。貫通孔の周囲に弧状沈線が施される。

図64-1は小波状口縁を呈し、波頂部から伸び、口縁を横区画する隆帯と、口縁から逆し字状に胴部に垂下する隆帯が施されている。隆帯で区画された余白部に縦位条線文を施し、未調整沈線により楕円状・帯状に区画される。

第6項 VII群土器

(1) VII-1類 (図64-2~5・13・14、図65-1)

図64-2は口縁を隆帯と沈線で区画し、盲孔を加え、盲孔を基点とし、蛇行状沈線が施される。同図3~5は口縁を隆帯で区画し、弧状隆帯を加えるもので、3・4は胴部に蕨手状沈線が施される。4は貫通孔を有した突起をなす渦巻状の隆帯が弧状隆帯として頸部に垂下している。

同図13は波状口縁で波頂部に貫通孔を有する。波頂部上端は沈線を施した突起を付け、貫通孔の周囲に盲孔、下端に円形浮文を加える。波頂部の円形浮文からは中央沈溝の隆帯が垂下し、口縁は2条の沈線を施している。同図14は口縁が内屈する波状口縁で、波頂部に縦位隆帯を貼り付けた突起を施している。突起の内面は弧状沈線と盲孔が施され、内面中央から外面横に抜ける貫通孔を有する。

図65-1は重三角形の文様を描く摩消縄文が施される。

(2) VII-2・3類 (図64-6~12、図65-2~11・13)

図64-6~12は口縁・頸部を沈線区画するものでVII-2類である。6・9・11は波状口縁または突起を有し、波頂部に貫通孔を有する。6は貫通孔に沿う隆線を施し、貫通孔脇と波頂部上端に盲孔を施す。7は口縁に弧状隆帯を貼付、胴部には曲線状の文様が描かれている。8は盲孔を基点として蕨手状、弧状沈線が描かれる。9は貫通孔に沿って隆線・沈線・盲孔、頸部には列点状沈線が施される。11は盲孔を基点とした蕨手状沈線が垂下する。12は崩れた蕨手状沈線を描いている。

図65-2~7は曲線状の文様を描く胴部破片でVII-2類である。7は蕨手状文がみられる。9は頸部を沈線区画するものである。横位沈線区画上に円形浮文を加え、それを基点に縦位列点状沈線を施文し、曲線状の文様を無文地に描いている。同図10・11は多条沈線により、弧状の文様を描くものである。10は横位楕円状沈線で頸部を区画し、盲孔が加えられている。

同図12はVII-3類で、横位・縦位に沈線を施し、縄文を沈線間に充填するものである。

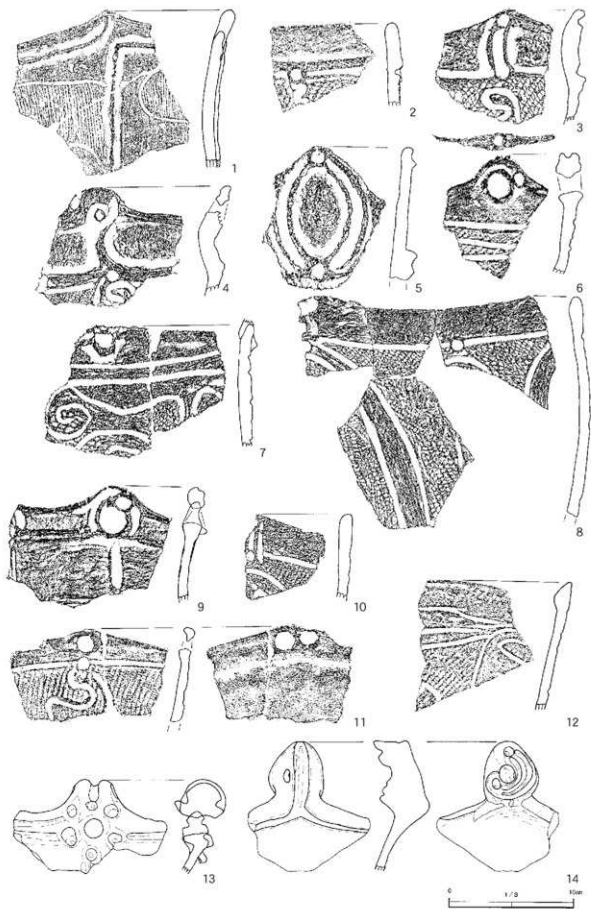


图 64 西向地区斜面下部遗構外出土土器④ VI·VII群土器

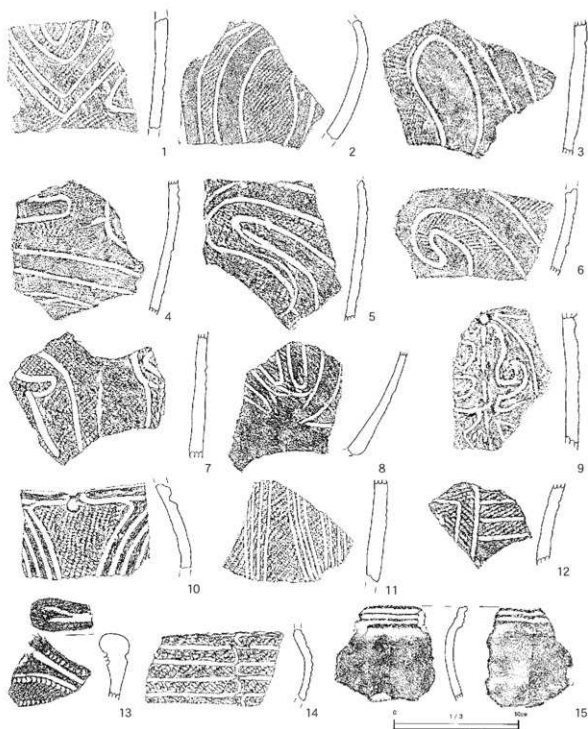


図65 西向地区斜面下部遺構外出土土器⑤ VII・VIII・IX群土器

第7項 VIII・IX群土器 (図65-13~15)

13・14はVIII-1類である。13は波状口縁を施し、波頂部に隆帯を貼り付けている。沈線で弧状の区画文を施して、縄文を充填させ、口縁と区画に沿って刺突が施されている。14は横位平行沈線間に縦位弧状沈線を付加するものである。

15はIX群で、壺形土器である。口縁が段をもって直立して立ち上がり、横位3条の沈線を施す。内面にも2条の沈線を加えている。

第3章 まとめ

1. はじめに

浦尻貝塚は、前期前葉～晩期末葉までの遺構・貝層・遺物包含層が確認され、一遺跡の継続期間としては極めて長期にわたっている。また、出土土器は早期の条痕文系土器群から出土し、長短の断続期を挟む可能性はあるが、遺構等の確認時期以上の長期間の利用がうかがえる。

本報告ならびに「浦尻貝塚2」（南相馬市教育委員会2006）では、南台（台地南部を除く）・台ノ前・西向地区で出土した遺物を掲載した。この3地区では、前期後葉～後期中葉の遺構・貝層・遺物包含層が確認されており、当該時期の土器が多く出土している。貝層は断続期を挟みながらも前期後葉～後期前葉までの所産と考えられ、遺構は中期後葉以降の検出が多い。遺構等が確認されない後期末葉以降の出土土器は極少量である。

これまでに、報告した浦尻貝塚の範囲確認調査は、遺構等の保存を前提に調査を実施している。このため、出土土器についても、遺跡全体からすると断片的であることは否めない。しかし、浦尻貝塚では、福島県太平洋岸では調査された遺跡数が少ない時期である前期後葉～中前期の貝層からの出土土器があり、貴重な資料と言える。また、この時期は浦尻貝塚の貝層形成の中心時期であり（註1）、多くの情報を内包する各貝層の一定の時間軸を決定する必要がある。

このようなことから、本報告のまとめとして、大別した層位毎のまとまりを概観し、貝層形成の中心時期である前期後葉～中前期の土器群の概要を述べることにしたい（註2）。対象とする土器群は、貝層中から出土した資料を中心とし、適宜、遺構・遺構外・貝層外出土資料で補足することとする。以下で記述する層位ごとの土器群は、出土状況や土器の特徴から、一定の時間幅を共有すると考えたまとまりである。これらは複数の時期のものが含まれるが、出土量や大形破片の出土を基に、各層の中心時期を考え、まとまりを設定した（註3）。

2. 大木3～5式

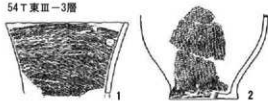
貝層から出土した大木3～5式に位置づけられる土器群は少なく、台ノ前北貝層の斜面上位にあたる53T東Ⅲ～3層ならびに西向貝層斜面上層の64Tサブトレンチ1Ⅲ層出土土器をあげるに留まる。

53T東Ⅲ～3層では、縄文地に平行沈線による縦位木葉文（図66-3）を施すものがあり、大木3式に相当しよう。同図4は口縁に指頭による交互押捺が施され、大木4式の特徴を有するが、口縁下に横位爪形文列と地文と同じ原体のLR縄文による縄圧痕文が山形状に施されている。縄圧痕文は大木5式の要素とされる（芳賀1985、小林1991）。幅の狭い爪形文列を浮島Ⅲ～興津式からの影響と考えることもでき、本土器を大木4式の新しい段階に位置づけておく。

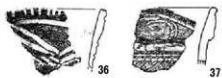
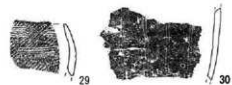
その他、縄文を施文した粗製土器があり、口縁が外反して広がる器形（同図1）、胴部中位が膨らむ器形（同図2）が認められる。1は横位施文の縄文とともに斜方向に結節回転文が加えられている。これらは大木3～4式に含められ、口縁上端に刻みを有するもの（同図5）や粗雑な条線を施すもの（同図6）も伴すると考えられる。

64Tサブトレンチ1Ⅲ層では、口縁に無文部を有し、口縁下と内面に2条単位の波状粘土紐貼付文を施す大木4式が出土している（同図7）。同図10の渦巻状貼付文は、少量の繊維を胎土に含み、粘土紐の形状が大木4式のものに共通する。これに類似した渦巻状貼付文は図25-29があり、これは大木4式に共通する地文を有し、幅の狭い爪形文上に施されている。

54T東Ⅲ-3層



31TⅢ層



64Tサブトレンチ1Ⅲ層



31TⅣ層

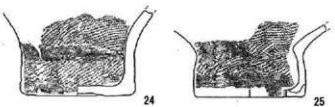
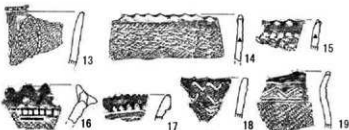


図 66 浦尻貝塚Ⅲ層出土土器① (S = 1/5)

図66-9は口縁に条線帯(縦位刻み)を持ち、口縁に沿って爪形文が施されている。同図11は貝殻腹縁文、条線文、横線文が配される。これらは興津Ⅰ式に位置づけられよう。

この他、当該時期の土器は、各貝層中や貝層外から断片的に出土している。大木3式では、円形竹管文で縦位木葉文を施すもの(図66-13)、爪形文が施されるもの(同図26)、内湾する口縁で、口縁端部が短く外反し、円形竹管文を配するもの(図68-6)、入組木葉文と考えられる文様内に円形竹管文を施すもの(図69-1)などが相当しよう。遺構・貝層外資料でも図5-2や図23-12・13が含まれる。

大木4式は、大木3式に比較し出土数が多くなる。口縁は指頭による交互押捺(図66-14・15、図68-8)や部分的な刻みを施すもの(図66-27)、波状貼付文を施すもの(同図28)、上端に刺突列(図68-7)・縄文(同図8)を施すものがある。文様は、口縁下に刺突列(図66-15)・結節回転文(同図14・28)を施すもの、口縁に無文帯を有し、口縁下を有節沈線で横位に区画するもの(図66-27、図69-2)、これに縦位の文様を加えるもの(図68-7・8)が多くみられる。この他、図66-29・30のような平行沈線で文様を描くものも含まれよう。

遺構・貝層外資料では、大木4式の新しい段階とされる粘土紐貼付文(図5-1・8・9等)のほか、単沈線で山形文を描くもの(図17-2)などがある。図23-20は、口縁の波状貼付文が鋭角化し、山形状を呈しており、大木5式の口縁の鋸歯状貼付文につながると考えられる。

大木5式はまとまった土器群はないが、台ノ前北・南貝層から他の時期の資料と混在して出土している。大木5a式とされる鋸歯状貼付文を持ち、梯子状貼付文を施すもの(図66-16)、山形沈線文を施すもの(同図32)の他、大木5b式とされる口縁の上下に刻みを有したものの(同図17、図68-10)がみられる。図68-15のような口縁の鋸歯状貼付文が緩い波状となり、多条横線文と連弧状の文様が施されるものも大木5b式に含めて考えられよう。

この他、山形沈線文がランダムに配されるもの(図66-18)、刺突列と横線を交互に施すもの(同図31)、口縁部に無文部を有し、縄瓦痕文と山形沈線を施すもの(同図33)、縄文地に横位の縄瓦痕文を施すもの(同図34)などがある。口縁下の刺突のみのもの(図68-9)は、大木4式から大木5式に相当しよう。

遺構・貝層外資料では、口縁に環状突起を有するもの(図23-22)、頸部に刺突文列を施すもの(同図27)がある。沈線文様は、口縁に無文部を有し、山形文が整然としたもの(同図29)や縦位に施文されるもの(同図32)など粘土紐貼付文と共通する文様がある他、平行沈線で菱形文様を描くもの(同図33)、当地域では少ないとされ、冨宮西遺跡(会津高田町教育委員会1984)などでみられる幾何学的な文様が組み合わさるもの(同図34)などもある。

また、内湾する口縁に、縦位に細い粘土紐貼付文による文様を施し、貫通孔が伴う環状貼付文を持つものがある(同図26)。同じく波状口縁の波頂部から垂下する縦位の文様を細い貼付文で施し、口縁が庇状に鋭く外反するものもある(図53-6)。これらは大木5b式に位置づけられる。さらに、図24-5~10のような複合口縁の下端に刻み、刺突を施すものも同段階と考えられよう。(註4)

これらの土器群には64TサブトレンチⅢ層出土土器にみられるように、浮島・興津式が伴うと考えられる。他に、貝層中から、興津Ⅰ式として変形爪形文と刺突列、多条横線文が配されるもの(図66-20)、興津Ⅱ式として平行沈線区画内に刺突を充填して文様を描くもの(同図21)がある。同図22は刺突と平行沈線による条線文が施され、浮島Ⅲ~興津式に相当する。これらは遺構・貝層外からも散見され、浮島Ⅱ~Ⅲ式(図27-6~8)や興津Ⅰ式(同図9)などが中心となるようである。

当該時期の資料は、浜通り地方北部では羽白C遺跡など真野ダム関連遺跡の中で出土しており、鈴鹿良一により、次のような土器群の変遷が示されている(鈴鹿1990)。

羽白C遺跡1次・2次	大木3式(古)
上ノ台C遺跡	大木3式(新)
岩下D遺跡	大木4式(古)、諸磯b式(中)、浮島Ⅱ式
羽白D遺跡・柏久保遺跡	大木4式(新)、浮島Ⅲ～興津Ⅰ式
羽白A遺跡・松ヶ平B遺跡	大木5a式、興津Ⅱ式(註5)

これらと浦尻貝塚出土資料を比較すると、64TサブトレンチⅢ層は大木4式(新)に相当しよう。また、浦尻貝塚出土資料は、大木4式(古)以前の資料は少なく、大木4式(新)以降大木5b式までの資料が明確であり、小破片資料を含めると多くの文様・器形等のバリエーションが認められる。浮島Ⅰb式、諸磯b式以前の資料が少なく、浮島Ⅱ～Ⅲ式以降多いこともこの傾向に一致している。

これらの土器群は先学により東北地方南部においても地域差があり、浮島・興津式の出土量にも差があることが指摘されている(芳賀1985など)。資料がまとまりつつある中で(註6)、これらの変遷や地域差についても今後検討していく必要がある。

3. 大木6式

当該時期に限定される土器群はないが、各貝層から多く出土している。福島県の当該時期は松本茂により古・新の2段階に分けられ(松本1991)、近年松田光太郎により東北中南部を対象とした3段階5様相の編年案が出されている(松田2003)。ここでは松本の2細分を基に記載し、松田の編年で補足する。概ね松本の古段階は松田の古・中段階に、松本の新段階は松田の新段階に相当しよう。

31TⅣ層では、この時期以降の土器は出土はなく、当該時期が下限である。図66-24・25は金魚鉢形の器形の底部破片で横位の縄文・結節回転文が施文される。同図19は波状口縁を呈し、頸部に横位沈線文様が施され、大木5b～大木6式古段階に位置づけられる。その他、三角形区画内に結節浮線文による渦巻文を施すもの(同図23)は、大木6式に併行する関東・北陸地方の影響が考えられよう。

31TⅣ層の上位にあたる31TⅢ層は次段階の土器が中心となるが、少量の大木6式が含まれている。口縁に文様を施すものでは、2条単位の太描沈線で文様を描き、頸部を三角刻み(図66-35)・斜位刻み(同図36)で区画するもの、幅が狭い肥厚口縁に有節沈線(同図37)・爪形文(同図38)が施文されるもの、縄圧痕文が施されるもの(同図41・42)などが松本の古段階に、沈線に沿う刺突が施されるもの(同図39)、多条沈線で山形状の文様が描かれるもの(同図40)が同じく新段階に当てられよう。砲弾形の器形を呈する同図43は、浅い多条沈線で横線文と山形文が交互配置されるもので、胴部中位に波状貝殻腹線文が部分的に施文されている。文様構成は興津式以降にあると考えられるが、器形は十三菩提式に類似する。いずれにしても関東地方からの影響を受けた土器と見ることができる。

38Tの下層にあたるⅣ層・ⅢE～G層からも少量の大木6式が出土し(図68-11～13・16)、11・12・16が松本の古段階に、13が同じく新段階に当てられる。

最も資料としてまとまっているのは54Tの最下層にあたる29・30層であり、少量の大木7a式以降の土器群(図69-24～28)が含まれるが、主体となるのは大木6式である。大形破片資料では、金魚鉢形のもの(図69-17～20)があり、18・20は胴部中位まで文様が施され、爪形文による斜線文、弧状文、同心円文等の文様が施文されている。17・19は口縁に文様帯が縮小しており、17は隆帯で区画した口縁部に爪形文が沿った沈線により文様が描かれ、19は粘土紐貼付文による菱形文、矢羽状文

が施文されている。これらはいずれも松本の新段階に相当するが、18・20の胴部まで広がる文様構成は松田の中段階新相～新段階古相に、17・19は施文される文様要素ならびに口縁に縮小された文様帯という特徴から、松田の新段階新相に位置づけられよう。17・19が新段階の中でも新しい様相であることは、胴部下半が円筒状を呈する器形や19の縦位結節回転文などが次段階へつながることが傍証となろう。これらのことから、大形破片は松本の新段階の資料が多いと指摘でき、同図23はこれらに伴う粗製土器と考えられる。ただし、本土器群には口縁下に三角刻みを有す松本の古段階の資料もあり（同図12～14）、小破片資料からみると大きな時間差があるものといえる。

同図22は半隆起線で文様が描かれるものであり、同様のものに三角刻みが伴うもの（図70-16）や遺構外資料であるが、口縁に縦位に浮線文を施し、矢羽状の半隆起線が描かれるもの（図27-11）が出土している。これらは関東・北陸地方からの影響を受けた大木6～7a式に伴うものと考えられる。

図70-1は横位沈線間に短沈線を充填し、下段に沈線による山形文が施されるものである。沈線間の短沈線は宮城県域で多い大木7a式の横位沈線間の縦位刻み（縦位刻み文）と類似するが、山形文と組み合わせる点で文様構成上異なるものとみられる（註7）。他に沈線間に短沈線（刻み）を充填するものとして、図17-11・13・15や図26-16・17などがあげられる。これらは大木7a式の梯子状短沈線に比較し、沈線間の幅が広く、沈線も太描である特徴があり、大木6式に伴うものと考えた。

大木7a式に多く認められる梯子状短沈線は、「浮線文を沈線文に置き換えたもの」（今村1985）、「梯子状のソーマン浮線文をなぞる単沈線から」変遷すること（松田2003）が指摘されている。この他にも、このような沈線間に短沈線を施す手法もこの出現に関わる要素と言えるだろう。同様に松本が指摘するように法正瓦遺跡の図660-1～12のような沈線間に刺突（短沈線）を交互に施すものは、大木7a式の梯子状短沈線の文様中にみられる三角刻みによる交互刺突に変遷した可能性がある（松本1991）。松本は新段階の渦巻文が描かれる幾何学的な文様についても、次段階につながる要素と指摘している。図69-18の文様から数段階の変遷を経て図67-1の文様へという系統は首肯できる。

西向貝層の64TコラムサンプルS3のサンプル14以下は大木6式が下限と考えられ、大木6式が少量見られる（図72-4・5）。5は口縁に縦位沈線が施されるもので、松田の新段階に相当し、宮城県以北に多いとされている。貝層外資料には、宮城県以北に多い胴部に格子状の沈線文様を施すもの（図26-10）もあり、会津地方に比較し、浜通り地方北部ではこのようなタイプが多いようである。

西向貝層貝層上面からも少量の大木6式が出土している。図72-1は波状口縁で三角形の貫通孔を波頂部に持ち、口縁下有段部に爪形文を施す。同図2・3は口縁に横位または縦位隆帯がつき、2は刺突が加えられ、頸部に爪形文が施文されている。これらは松田の古段階に相当する資料と言える。

このように浦尻貝塚では大木6式古段階から新段階までの資料が多くのバリエーション（文様系統）をもって出土しており、この特徴は大木4式（新）以降継続的であると言える。また、新段階とされる資料には、次段階につながる要素が多く確認できることも指摘できよう。

4. 大木7a式

当該時期は浦尻貝塚の貝層中から最も多くの土器が得られている。一定の層位のまとまりを抽出できたので、これを基に述べてゆくこととする。

(1) 31TⅢ層（図67・図68-1～5）

大木6式以前に位置づけられるⅣ層の上位にあたり、下限はこの時期と考えられる。文様を施す

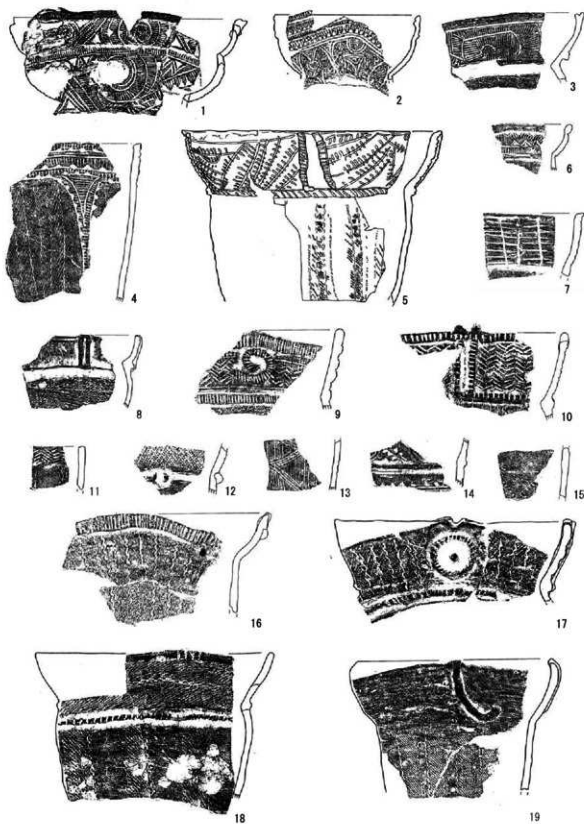
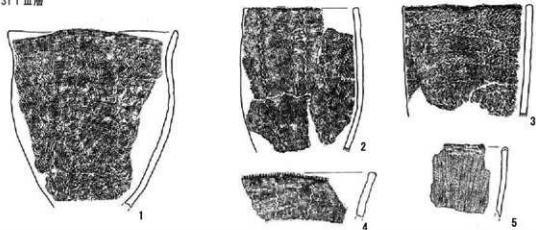
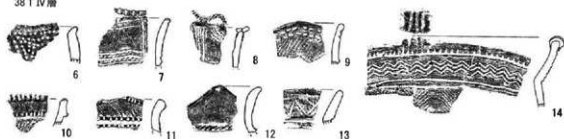


图 67 浦尻貝塚Ⅲ層出土土器② (S = 1/5)

31 T III層



38 T IV層



38 T III E~G層

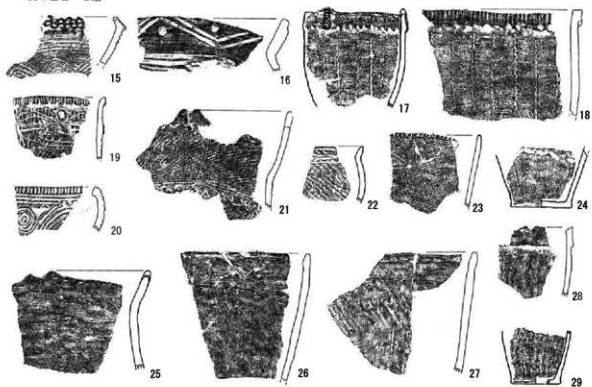
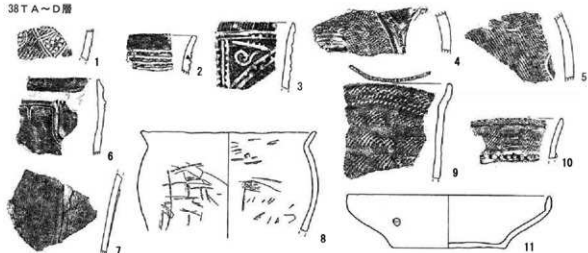


図 68 浦尻貝塚Ⅲ層出土土器③ (S = 1/5)

38TA-D層



54T 29-30層

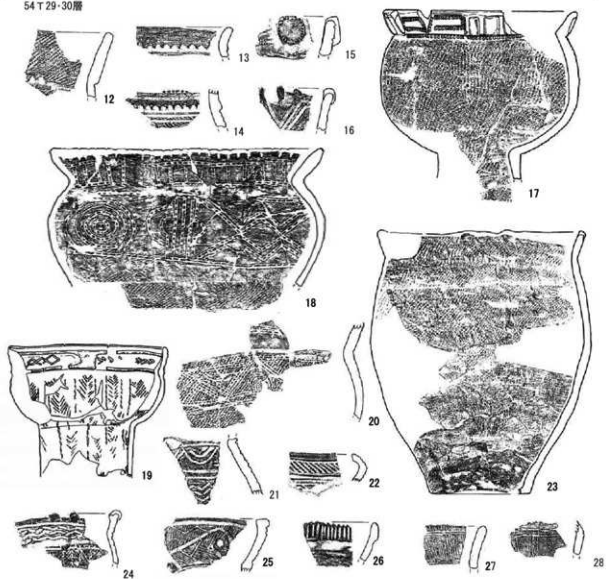


図 69 浦尻貝塚具層出土土器④ (S = 1/5)

54 T 26~28層

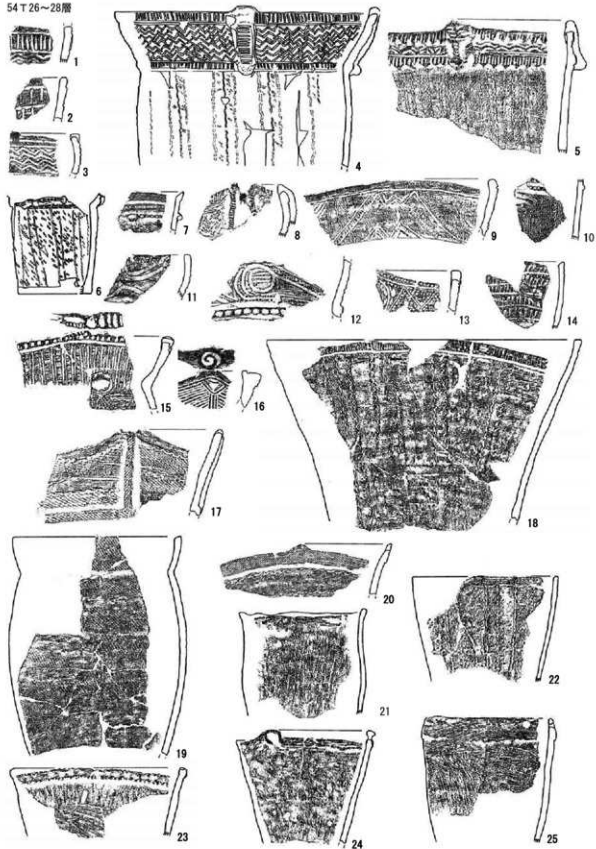


図 70 浦尻貝塚貝層出土土器⑤ (S = 1/5)

るものでは、器形は内湾する口縁を持つもの（図67-1～3・5～7）と直線的に立ち上がるもの（同図4）に大別される。同図9・10も内湾する口縁の分類に大別されよう。いずれも文様は口縁部に集中する。文様は梯子状短沈線を描くものが多くあり（同図1～6）、これらは三角刻みが施され、整然とした梯子状短沈線を施すもの（1・2・4・6）が多い。3は1の渦巻文・斜線文の組み合わせが横に押し潰されたような文様であり、5も明確な梯子状ではなく、斜線文に縦に短沈線を加えた施文である。これらの特徴は、前者と時間差を示しているとも考えられる。三角刻みは隆線で頸部を区画し、平行沈線に沿って施されるものもある（同図14）。

次に、多いのが、多条の山形沈線を施すものである（同図9・10・11）。その他、斜格子状文（同図12）、雑な格子状文（同図7）、縦位沈線だけのもの（同図8）などがある。小破片資料には、集合平行沈線地上に矢羽状の文様を施すもの（同図13）や無文地に沈線に沿う刺突を施すもの（同図15）などもある。

沈線文様が施されないものの中でも内湾する器形では、頸部の隆帯区画（同図17・18）や口縁文様体内に隆帯による縦区画（同図17・19）が多くあり、沈線文様を施すものと共通する要素が見られる。他に複合口縁上に縦位の刻みを有し、口縁下に瘤状貼付文を施すもの（同図16）などがある。19は口縁が無文であり、区画する隆帯もJ字状であり、U字状隆帯の崩れとみられ、やや新しい要素が指摘できる。縄文のみものものでは、胴部上位が膨らみ、頸部から口縁にかけて緩やかに外反するもの（図68-1）や砲弾形を呈するもの（同図2・3）などの器形がある。これらの地文は沈線文様を持つものを含めて、縦位の結節回転文を伴うものが多く、無文のものは小破片資料しかない（同図5）。

(2) 54T26～28層（図70）

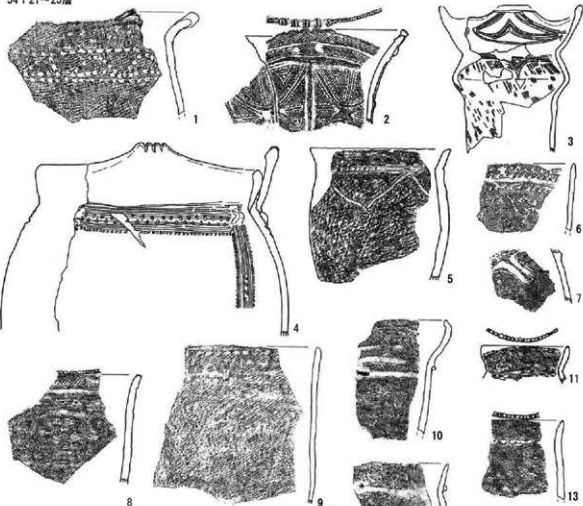
大木6式新段階の大形破片資料が出土する29・30層の上層にあたる。この土器群は、整然とした梯子状短沈線が少なく、縄文地に施文されるもの（9）や多条沈線地上に施されるもの（12）など雑な文様構成を呈するものが目立つ。多いのは山形沈線であり、内湾する口縁に施されるもの（4・8）や直立する口縁の狭い口縁に施されるもの（5）がある。弧状沈線が施された口縁端に山形沈線がアクセント文として施されるものもある（11）。その他、爪形文を施すもの（6・7）や沈線に沿って刺突を施し、三角刻みが伴うもの（13）（註8）、宮城県以北に多い横位沈線間に縦位刻みを施すもの（2・14）、縦位集合沈線が口縁部に施文されるもの（15）などがある。縄文施文は、沈線文様が施されるものを含め縦位結節回転文が伴うものが多いが、口縁部は横位に施文するもの（17・20）や結節回転文が伴わず、全体を横位に施文するものがある（19）。無文のものも少量みられ、複合口縁で刻みを有するもの（23）、渦巻状の突起が付けられるもの（24）、複合口縁上に有段部を有するもの（25）などがある。器形としては、31TⅢ層に見られなかったものとして、口縁に最大径をもち、大きく外反し、口縁がやや内湾するもの（18）、内湾する口縁で、胴部中部が膨らみ口縁径より大きくなるもの（19）などがあげられよう。

この下層にあたる29・30層でも山形沈線（図69-24）、渦巻文に短沈線を充填するもの（同図25）、など54T26～28層や31TⅢ層出土の土器群と共通する特徴のものが出土している。

(3) 54T21～25層（図71-1～14）

54T26～28層の上層にあたる。本土器群からは山形沈線や梯子状短沈線を施すものはほとんど見られない。代わって明確になるのは、沈線に沿い刺突が施されるもの（2・4）である。2は縦位の隆帯で4分割された縄文地の胴部に上下に対向する弧状沈線を施し、それに刺突が沿う。余白部には三角刻みが施され、口縁下と胴部文様の交点には横位の貼付文を持つ。4は口縁を無文とし、刻みが

54 T 21~25層



54 T B~20層

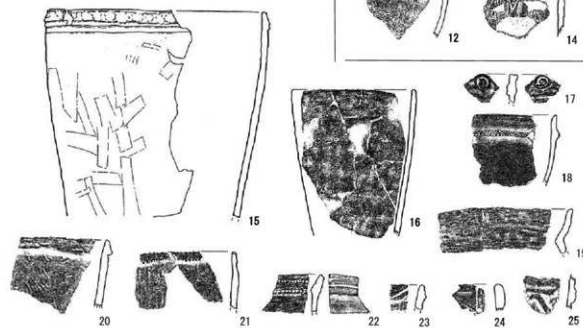


図 71 浦尻貝塚貝層出土土器⑥ (S = 1/5)

付けられた弁状の波頂部をもつ。横位沈線と交互刺突文、沈線に沿う刺突によりT字状の文様が施され、交点に横状貼付文が付く。無文地に文様を施すものは多くみられ、沈線と刺突で文様を施すもの(5)、刺突のみで文様を施すもの(6)、弧状隆線文に縄瓦痕文に沿うもの(7)などがみられる。3は、無文地の口縁に沈線により三角形の区画をなし、弧状の文様が加えられている。器形の系譜は図67-1に求められよう。4・5の胴部が膨らむ器形は図70-19などに類似している。

縄文のみを施すものでも横位縄文(9・10)が多くなり、縦位結節回転文も幅を広げやや雑に施されるもの(8)が目立つ。これらは無文地の土器(11~13)が多くなることと、地文の簡略化という点で一致した傾向と言えよう。他に木目状燃糸文(14)があり、東北北部・北陸からの影響も認められる。

(4) 54T2~20層(図71-15~25)

本土器群は54Tの最上層にあたる土器群である。文様が施文されるものはほとんどなく、縄文も浅い施文が多く(20)、無文地のものが多数を占める(15~19・21)。小破片資料では、口縁に縄瓦痕文が施されるもの(23・24)のほか、口縁外面に有節沈線、内面に沈線が施文されるもの(22)や、Y字状隆線が施されるもの(25)がみられる。

(5) 小結

福島県域の大木7a式は、松本茂によりⅣ期に分けられ、当地域において阿玉台Ⅰa式併行とされる上ノ台B遺跡出土資料以後が大木7b式期と理解されることが多い(松本1995・1996)。これと比較すると、31TⅢ層が松本のⅠ・Ⅱ期に、54T26~28層がⅡ期に、54T25層以上がⅢ期以降に共通する土器が多いといえるが、変遷は漸移的であり、本土器群の共時性にも問題があることから、時期を限定することは難しい。

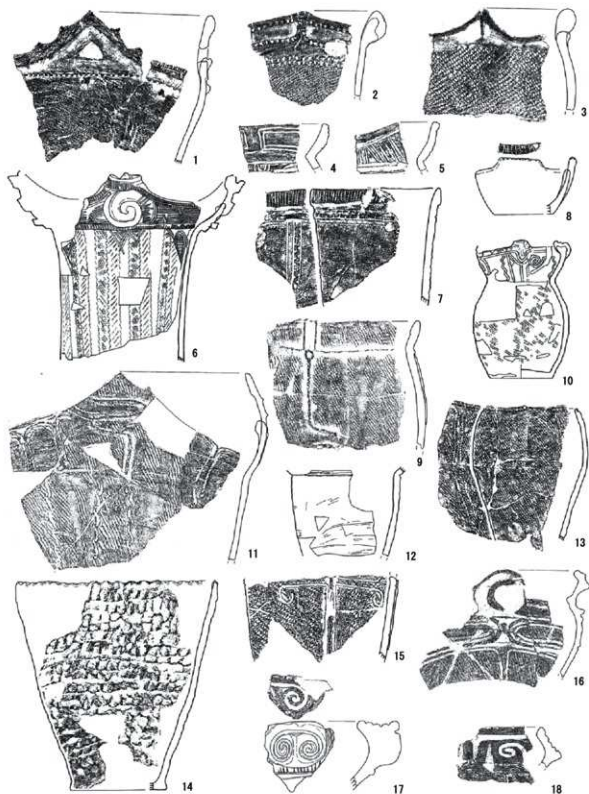
しかし、54T25層以上は、沈線・刺突を中心とした無文地への施文、縄文施文の簡略化、無文土器の増加が明瞭であり(註9)、31TⅢ層等の土器群にある梯子状短沈線や山形沈線を施すものや整然とした縦位結節回転文が施文されるものと大きな差が認められる。ここでは、浦灰貝塚の貝層出土の自然遺物の時間軸を設定する必要性を鑑み、これらの土器群を大木7a式新段階(松本のⅢ・Ⅳ期)とし、これに先行する31TⅢ層、54T26~28層の土器群を古段階(松本のⅡ期以前)としておく。

これを基にすると、台ノ前南貝層斜面下位の38Tでは、Ⅳ層の大木6式以前の土器に含まれる山形沈線を施すもの(図68-14)が古段階に含まれる。ⅢE~G層では、口縁に縦位刻みを施し、下端に三角刻みを施す同図17~19などが古段階に含まれるが、縄文地に浅い沈線で文様を描くもの(同図21)、玉付三叉文を施し、文様の交点に交互刺突文を施すもの(同図20)、口縁に横位縄瓦痕文を施すもの(同図22)などが新段階に相当し、無文(同図25~28)の出土も多いことから、ⅢE~G層は新段階が中心と考えられる。

38T A~D層では新段階のもの(図69-3)があるが、大木7b式に位置づけられる断面三角の隆線を施すもの(図69-6・7)や隆線に爪形文が沿うもの(同図4・5)などがあり、より新しい段階の土器が含まれているといえよう(註10)。

同じく台ノ前南貝層にあたる39TⅢ層中からは図72-11が出土している。本土器は三角波状口縁を呈し、口縁の片側突起、波頂部からの蛇行状の隆線など東関東の特徴を示しながら、隆線に沿う縄瓦痕が施され、小梁川遺跡Ⅳ・V群(相原1986)とされる大木7b式の要素も認められる。これは、当地域において大木7a新段階~7b式に位置づけられる土器と言えよう。このように台ノ前南貝層斜面下位では、大木7b式とされる段階までの貝層形成の可能性が指摘できる。

台ノ前北貝層にあたる54Tにおいても貝層上面ではあるが、環状・クランク状の隆線を施すもの



1～3・6：64TⅢ層上面（西向貝層） 4・5：64TコラムサンプルS3（西向貝層） 7：P100上面（南台地区台地北）
 8・9・14：54TⅢ層上面（台ノ前北貝層） 10：65TⅢ-5層（西向地区斜面下） 11：39TⅢ層（台ノ前南貝層）
 12・13・15・17・18：63TⅢ層上面（台ノ前北貝層） 16：Ⅱ区SK643（南台地区台地北）

図 72 浦灰貝塚貝層等出土土器（S = 1/5）

(同図9)や指頭押捺が施され輪積痕を明瞭に残すもの(14)など東関東の影響がある同時期の土器群が出土している。同じく63Tでも、貝層最上層・貝層上面出土の同図12・13は、縄圧痕文が施文され、大木7a式新段階から大木7b式に伴うものと考えられる。ただし、63Tの上面には当地域において大木7b式に位置づけられている上ノ台A遺跡出土土器と共通するもの(同図15)の他、大木8b式も出土しており、下限はさらに新しい段階の可能性もある。また、中峰式に位置づけられるもの(同図17・18)も出土しており、これらが含まれていることは大木7b～8a式期の当地域の土器群の特徴の一端を示すものと言えよう。

他に貝層中以外の資料で、口縁文様帯に細線状の地文を有する同図6は古段階に、同図7・8・10(註11)は新段階に、同図16は大木7b式に相当する土器としてあげられる。図29-2・3の有節沈線、隆線による楕円形区画、内面刻み文という特徴は大木7a式新段階～7b式に相当しよう。

5. まとめ

ここでは、貝層の時期決定を行う必要性を念頭に、一定の層位のまとまりをとらえ、その概要をみてきた。しかし、ここでの検討は、型式としての整理が十分ではないまま、これまでの編年に当てはめずに留まり、改めて検討を加える必要があると考えている。この事は今後の課題としたいが、浦尻貝塚の貝層中資料は、当地域における少なくとも松本の大木6式新段階から大木7a式新段階～7b式とした段階まで多くの系統を持つ各時期の土器が含まれていると言えよう。

また、これらを通してみると、大木3式以降大木7b式までの間には、何らかの表徴として東関東地方の影響が認められる。特に大木7a式新段階とした土器群は、今村が東関東の五領ヶ台式(今村1985)、小林が八辺式とするもの(小林1988・1989b)と共通する点が多い。既にこれらは先学の指摘するところであるが(松本1996ほか)、近年新地町山中B遺跡で当該期の資料を得て、改めて指摘されたところである(今野2007)。このことを含め、通時的と考えられる浦尻貝塚の当該期の出土資料は、複数の系統が組み合わさり、それぞれの系統が'時期的な多寡や性質を表現していることが伺われる。今後、その歴史的な意義も含めて、当該期の土器群を整理していく必要があると考えられる。

- 註1 貝層の調査状況については、「浦尻貝塚1」(小高町教育委員会2006)のほか、本報告第2分冊に詳述している。
- 註2 福島県の当該時期の土器群は、大木3～7b式という型式名が用いられているが、上れらは福島県域においても多くの地域差や系統差が認められている。また、これらの枠組みの差異は、特に大木7a式において大きい(相原2008ほか)。本報告を含めた浦尻貝塚の報告では概ね福島県域で用いられている型式名(鈴鹿1900・松本1991等)を基に、筆者なりに分類をした。
- 註3 貝層形成以前の考えられる前期前葉以前の土器は記載を省いた。また台ノ前貝層の38T A～D層の大木9式は分析の対象としない。西向貝層のコラムサンプル出土資料は、出土量が少ないことから、土器群として抽出しなかった。
- 註4 これらは大木6式古段階とする見解(松田2003)もあり、それぞれの型式の枠組みを設定することが必要と考えられる。
- 註5 大木5a式が興津Ⅱ式と併行することは芳賀英一も指摘するところだが(芳賀1985)、小林謙一は、大木5a式が興津Ⅱ式と完全に一致しない可能性を指摘している。(小林1991)
- 註6 近年南相馬市鹿島区(旧鹿島町)宮前遺跡(福島県教育委員会ほか2005)では大木3式のまとまった資料が得られており、他に浜通り地方南部富岡町の本町西A遺跡(福島県教委委員会ほか2002c)、上本町G遺跡(福島県教育委員会ほか2002d)から大木4式(古)、浜通り地方北部新地町山中B遺跡(福島県教育委員会ほか2007)から大木5a・b式、大木6式の良好な資料が得られている。
- 註7 松田は、宮城県域の大木7a式とする「縦位刻み文」は下から上に突き上げる技法や横帯区画された横位沈線間に施文されることから、沈線間に直行して施文する短沈線充填技法(柳子状短沈線)とは異なることを指摘している。
- 註8 本土器は「浦尻貝塚1」において、刺突を円形竹管文とみて、大木3式に位置づけたが、三角刻み文が伴うことから、大木7a式に伴うものに訂正しておく。
- 註9 本土器群は、近年報告されたⅢ期を中心として出土している山中B遺跡と共通する点が多い(今野2007)。
- 註10 38T A～D層は大木9式も出土している。しかし、大木8a・8b式の出土はみられない。このことを含め、大木7b式以前のまとまりを見る上では、38T貝層中資料は大木7b式新段階・大木7b～8a式(森1998)とされる段階が含まれない土器群と位置づけられよう。
- 註11 本土器は「浦尻貝塚1」において大木7b式としたが、口縁の短沈線(刻み)施文などから位置づけを変更しておく。

引用・参考文献

- 会津高田町教育委員会(1984)『胄宮西遺跡』
- 相原淳一(1986)『(1)小梁川遺跡Ⅳ 東側遺物包含層』小梁川遺跡遺物包含層土器編』所収
- 相原淳一(2008)『編年研究の現状と課題 東北地方』『歴史のものさし—縄文時代研究の編年大系—』縄文時代の考古学2 同成社
- 飯野町教育委員会(2003)『和台遺跡』飯野町埋蔵文化財報告書第5集
- 飯野町教育委員会(2004)『和台遺跡2』飯野町埋蔵文化財報告書第6集
- 飯館村教育委員会(1981)『松ヶ平B遺跡・岩下向遺跡・羽白A遺跡予備調査』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅱ』飯館村文化財調査報告第2集
- 石川隆司(1983)『福島県浦尻台ノ前貝塚における貝類採集活動の復元』『法政考古学』第8集 法政考古学会
- 石川隆司(1984)『縄文時代前期末葉における土器文化接触に関する予察』『法政大学大学院紀要』第12号
- 石川隆司(1988)『浦尻貝塚群の縄文土器(1) - 浦尻台ノ前貝塚採集資料 -』『法政考古学』第13集 法政考古学会
- 市川市教育委員会(2000)『東山王貝塚・イゴ塚貝塚—縄文時代低地性貝塚の調査—』
- 今村晋爾(1985)『五部ヶ台式土器の編年』『考古学研究室紀要』第4号 東京大学文学部考古学研究室
- いわき市教育委員会(1986)『弘道寺貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第13冊
- 海老沢忠(1982)『茨城県内における縄文中期前半の土器様相(1)』『豊良岐考古同人会』
- 大野延太郎(1901)『磐城線十日の旅』『東京人類学雑誌』16-181
- 小高町教育委員会(1975)『宮田貝塚』
- 小高町教育委員会(1988)『角部内南台東貝塚』
- 小高町教育委員会(1993)『萩原遺跡』小高町文化財調査報告第1集
- 小高町教育委員会(2001)『浦尻貝塚・加賀後貝塚』小高町埋蔵文化財調査報告Ⅰ』小高町文化財調査報告第2集
- 小高町教育委員会(2004)『北原貝塚遺跡群』小高町文化財調査報告第5集
- 小高町教育委員会(2005)『浦尻貝塚Ⅰ』小高町文化財調査報告第6集
- 上守秀明(1995)『中期初頭の諸塚相—東関東の様相—』『第8回縄文セミナー』縄文セミナーの会
- 興野義一(1967~70)『大木式土器理解のために(1)~(VI)』『考古学ジャーナル』No.12・16・18・24・32・48』ニューサイエンス社
- 興野義一(1984)『大木式土器について』『宮城の研究』1 清文堂
- 興野義一(1970)『大木5式土器の提唱』『古代文化』第22巻第4号(財)古代学協会
- 興野義一(1996)『山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて』『画龍点晴』
- 小林謙一(1984)『中部・関東地方における勝坂・阿玉台式土器設定期の様相』『神奈川考古』19号 神奈川考古同人会
- 小林謙一(1987)『東関東地方縄文時代中期初頭段階の土器様相—「八辺式」土器群の設定とその編年の位置について—』
『村上徹君追悼論文集』村上徹君追悼論文集編集委員会
- 小林謙一(1989a)『縄文中期勝坂式・阿玉台式成立期における土器群組成比的分析』『考古学の世界』
- 小林謙一(1989b)『千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について—東関東地方中期初頭段階の土器様相—』
『史学』第68巻2号 三田史学会
- 小林謙一(1991)『東関東の縄文時代前期末葉段階の土器様相—側面圧痕土器及び前面縄文施文土器の編年の位置づけ—』
『東邦考古』第15号
- 小林謙一(1995)『中期初頭の諸塚相—南関東の様相—』『第8回縄文セミナー』縄文セミナーの会
- 小林謙一・中山真治・馬尾和久(2004)『多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定(補)』
『シンポジウム 縄文集落研究の新天地3—勝坂から曾利へ— 発表要旨』縄文集落研究グループセツメント研究会
- 今野徹(2007)『山中B遺跡(調査1・Ⅱ区)第4章 まとめ』『一般国道6号 相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅵ』所収
- 佐藤健次郎(1932?)『福島県相馬郡蒲田浦尻貝塚第1回試掘調査報告』
- 志賀敏行(1985)『浦尻貝塚採集の押型文土器について』『Shell Mound』第3号
- 白鳥良一(1980)『前期大木式土器様式』『縄文土器大観Ⅰ』小学館
- 鈴鹿良一(1990)『第7編 総括』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ』福島県文化財調査報告書第230集
- 竹島国基(1975)『第一編 第一章 郷土文化のよけ』『小高町史』小高町
- 玉川一郎(1986)『福島の縄文製埴土器』『福島の研究』1 地質考古編』清文堂
- 玉川一郎・吉田秀亨(1987)『浦尻磯台遺跡の縄文晩期土器と製埴土器』『福島考古』28号
- 谷井彪(1980)『阿玉台式からみた東北部大木式の変遷』『古代80号』早稲田大学考古学会
- 塚本節也(1990)『北関東・南東北における中期前半の土器様相』『古代80号』早稲田大学考古学会
- 中山真治(1992)『五部ヶ台式土器—その段階設定と系統について—』『東京考古』10]
- 西村正壽(1984)『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版会
- 丹羽茂(1981)『大木式土器』『縄文文化の研究4』縄文土器
- 丹羽茂(1989)『中期大木式土器様式』『縄文土器大観Ⅰ』小学館
- 芳賀英一(1985)『大木5式土器と東関東の関係』『古代80号』早稲田大学考古学会
- 早瀬亮介・菅野智剛・須藤隆(2006)『東北大学文学研究科考古学陳列館蔵大木型貝塚出土土器資料』
『東北大学総合学術博物館研究紀要』第5号
- 福島県教育委員会ほか(1982)『七部内C遺跡』『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅹ』福島県文化財調査報告書第108集
- 福島県教育委員会ほか(1984a)『上ノ台A遺跡(第1次)』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書第128集

- 福島県教育委員会ほか(1984b)『杵久保遺跡』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告VI』福島県文化財調査報告第129集
- 福島県教育委員会ほか(1986)『若くD遺跡』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告VII』福島県文化財調査報告第165集
- 福島県教育委員会ほか(1987a)『中江川の宮遺跡』『国宮会津水利事業関連遺跡調査報告V』福島県文化財調査報告書第177集
- 福島県教育委員会ほか(1987b)『岩下向A遺跡』『明白D遺跡(第1次)』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告X』福島県文化財調査報告書第183集
- 福島県教育委員会ほか(1988a)『明白D遺跡(第2次)』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XI』福島県文化財調査報告書第193集
- 福島県教育委員会ほか(1988b)『明白C遺跡(第1次)』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XII』福島県文化財調査報告書第194集
- 福島県教育委員会ほか(1989)『明白C遺跡(第2次)』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XIII』福島県文化財調査報告書第210集
- 福島県教育委員会ほか(1990a)『上ノ台A遺跡(第2次)』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XIV』福島県文化財調査報告書第230集
- 福島県教育委員会ほか(1990b)『上ノ台B遺跡・上ノ台C遺跡・上ノ台D遺跡』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XV』福島県文化財調査報告書第231集
- 福島県教育委員会ほか(1990c)『八重米坂遺跡』『原町市火力発電所遺跡調査報告I』福島県文化財調査報告書第236集
- 福島県教育委員会ほか(1990d)『師山遺跡』『相馬開発関連遺跡調査報告II』福島県文化財調査報告書第234集
- 福島県教育委員会ほか(1991a)『東北横断自動車道遺跡調査報告11法正尻遺跡』福島県文化財調査報告書第243集
- 福島県教育委員会ほか(1991b)『大富西畑遺跡』『諫戸川地区遺跡発掘調査報告I』福島県文化財調査報告書第252集
- 福島県教育委員会ほか(1995)『萩原遺跡』『諫戸川地区遺跡発掘調査報告III』福島県文化財調査報告書第323集
- 福島県教育委員会ほか(1996)『三春ダム関連遺跡発掘調査報告8越田和道跡』福島県文化財調査報告書第322集
- 福島県教育委員会ほか(1999)『関林A遺跡』『福島空港公園遺跡発掘調査報告11』福島県文化財調査報告書第372集
- 福島県教育委員会ほか(2000)『常磐自動車道遺跡発掘調査報告21殿治屋遺跡(第1次)』福島県文化財調査報告書第365集
- 福島県教育委員会ほか(2001a)『常磐自動車道遺跡発掘調査報告24殿治屋遺跡(第2次)』福島県文化財調査報告書第377集
- 福島県教育委員会ほか(2001b)『常磐自動車道遺跡発掘調査報告25馬場前遺跡(1次調査)』福島県文化財調査報告書第378集
- 福島県教育委員会ほか(2002a)『常磐自動車道遺跡発掘調査報告28殿治屋遺跡(第3次)』福島県文化財調査報告書第387集
- 福島県教育委員会ほか(2002b)『常磐自動車道遺跡発掘調査報告29馬場前遺跡(2次調査)』福島県文化財調査報告書第388集
- 福島県教育委員会ほか(2002c)『本町西A遺跡』『常磐自動車道遺跡発掘調査報告32』福島県文化財調査報告書第391集
- 福島県教育委員会ほか(2002d)『上本町G遺跡』『常磐自動車道遺跡発掘調査報告35』福島県文化財調査報告書第392集
- 福島県教育委員会ほか(2003a)『常磐自動車道遺跡発掘調査報告34馬場前遺跡(2・3次調査)』福島県文化財調査報告書第398集
- 福島県教育委員会ほか(2003b)『常磐自動車道遺跡発掘調査報告35前山A遺跡』福島県文化財調査報告書第399集
- 福島県教育委員会ほか(2003c)『阿武隈川右岸堤遺跡発掘調査報告3高木・北ノ脇遺跡』福島県文化財調査報告書第402集
- 福島県教育委員会ほか(2005)『宮前遺跡』『常磐自動車道遺跡調査報告40』福島県文化財調査報告書第427集
- 福島県教育委員会ほか(2007)『山中B遺跡(調査I・Ⅱ区)』『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告VI』福島県文化財調査報告書第437集
- 福島県立博物館(1988)『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告第17集
- 福島県立博物館(1991)『企画展 縄文絵巻』
- 福島市教育委員会(1989)『愛宕原遺跡』『昭和63年度市道原宿愛宕原1号線建設工事関連遺跡発掘調査報告』福島市埋蔵文化財報告書第31集
- 福島大学考古学研究会(1971)『浦尻貝塚』福島大学考古学研究会発掘調査報告書第1冊
- 双葉町教育委員会(1990)『双葉・郡山貝塚の研究』双葉町埋蔵文化財調査報告書第7冊
- 松田光太郎(1995)『浮島式土器の研究』『古代探蔵Ⅳ-滝口宏先生追悼考古学論集-』早稲田大学出版部
- 松田光太郎(2002)『関東・中部地方における十三菩提式土器の変遷』『神奈川考古第38号』神奈川考古同人会
- 松田光太郎2003『大木6式土器の変遷とその地域性』『神奈川考古第39号』神奈川考古同人会
- 松本茂(1991)『法正尻遺跡下巻第3章 考察』『東北横断自動車道遺跡調査報告11』所収
- 松本茂(1995)『中期初頭の諸様相-福島県の様相-』『第8回縄文セミナー』縄文セミナーの会
- 松本茂(1996)『五頭ヶ台式土器から阿玉台式土器へ-福島県内出土土器から-』『論集しのお考古-目黒吉明先生追悼記念-』論集しのお考古刊行会
- 南相馬市教育委員会(2006)『浦尻貝塚2』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 南相馬市教育委員会(2007a)『大田和広畑遺跡-縄文時代集落跡の調査-』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 南相馬市教育委員会(2007b)『浦尻古墳群-浦尻貝塚(第6次・第7次調査)』『南相馬市市内遺跡発掘調査報告書3-平成17・18年度試掘調査報告-』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第8集
- 宮城県教育委員会(1986)『埋蔵文化財緊急発掘調査概報-長根貝塚-』宮城県文化財調査報告書第10集
- 宮城県教育委員会ほか(1986)『小梁川遺跡-遺物包含層土器編-ヒツタム関連遺跡発掘調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第117集
- 宮城県教育委員会ほか(2003)『森倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集
- 森森彦(1991)『浦尻ヶ台貝塚-浦尻西向貝塚』『福島県の貝塚-一県内貝塚詳細分布報告-』福島県文化財調査報告書第260集
- 森森彦(1998)『福島県内の大木8式土器について』『第11回縄文セミナー-中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 山本典幸(1988)『五頭ヶ台時様式』『縄文土器大観2』小学館
- 山本典幸(2000)『縄文時代の地域生活史』未完成考古学叢書1ミューゼ

写 真 图 版

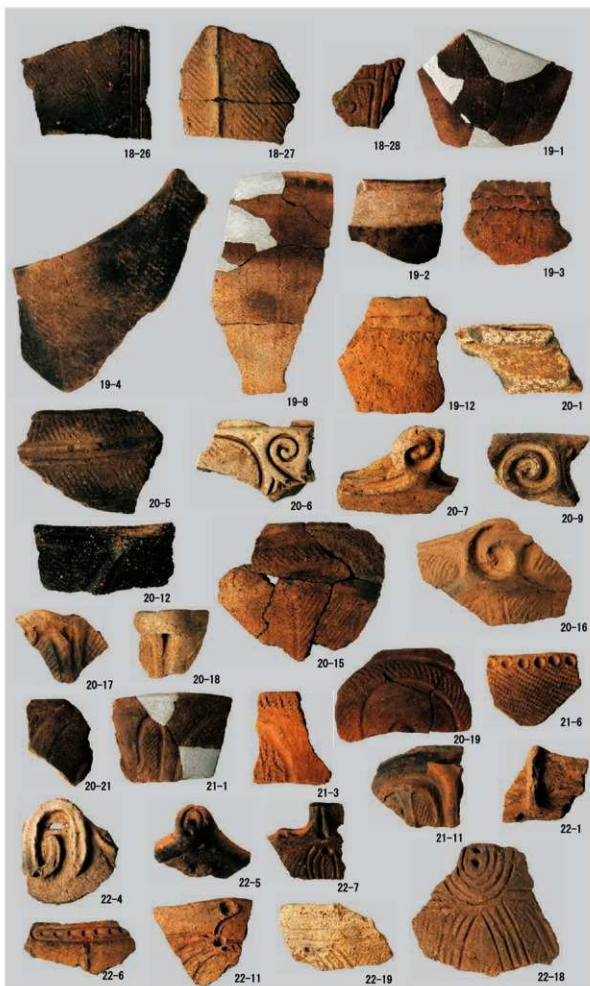




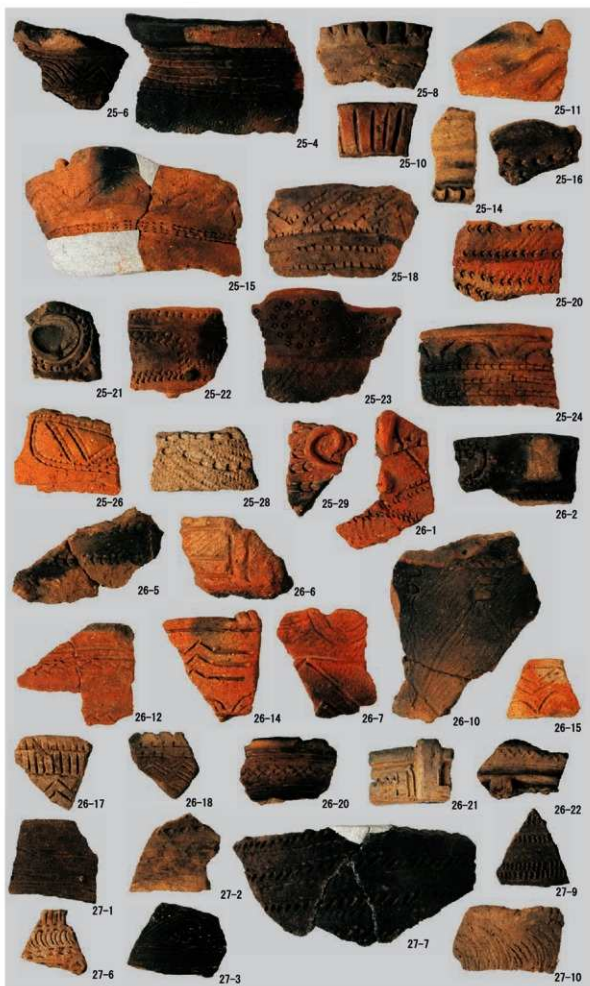




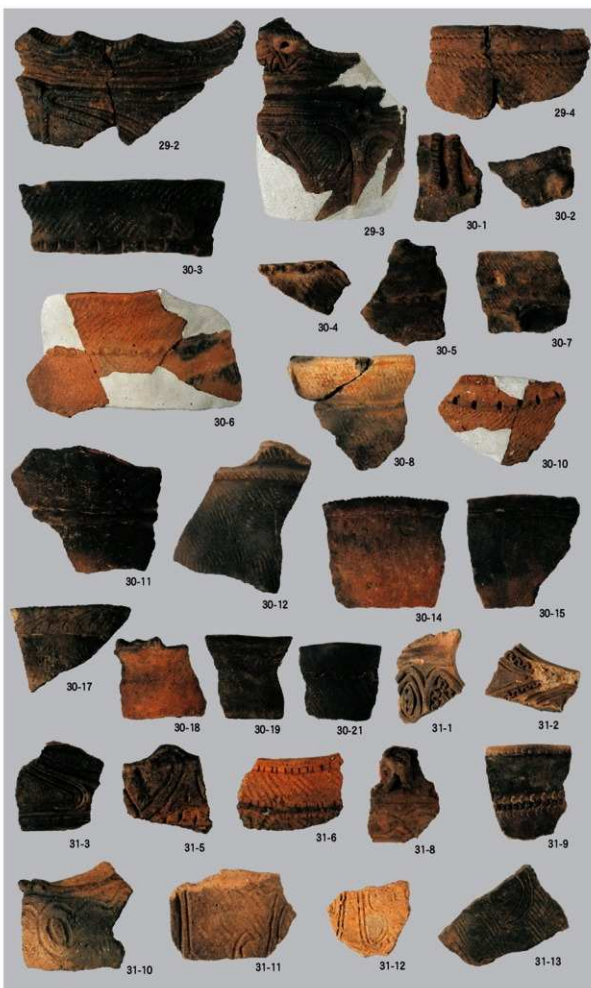




















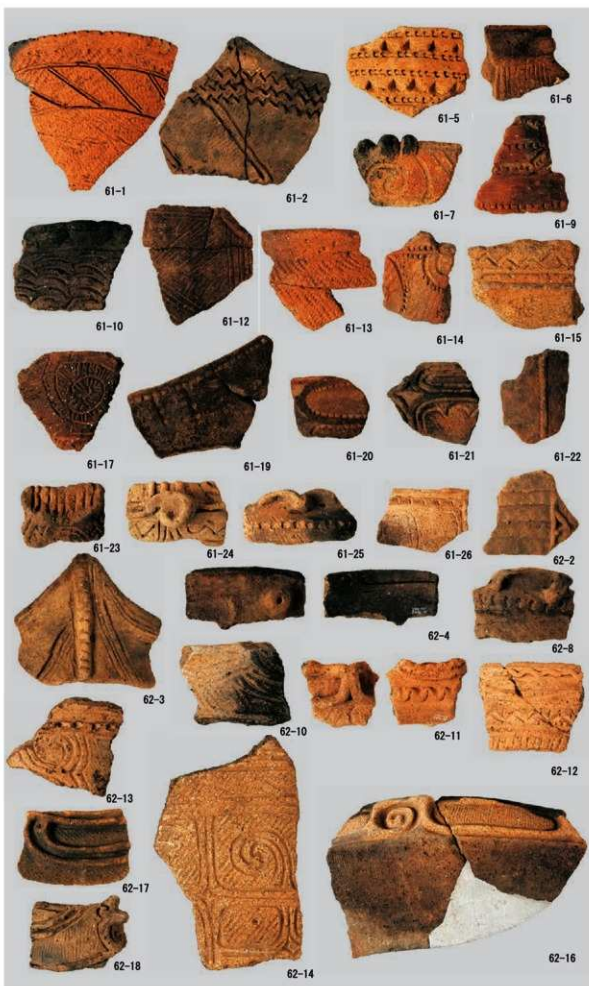














観 察 表

表1 土器観察表

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
5-1	53T I層	Ⅲ-2	口縁上端部分的に波状貼付文。頸部横位貼付文。横位RL(O段多条)縄文。	ヘラケスリ・ナデ	海綿状骨針
5-2	53T I層	Ⅲ-1	半截竹管による斜位多条沈線。斜位半截竹管によるD字形刺突。縦位円形竹管列。	ミガキ	海綿状骨針
5-3	53T I層	Ⅲ-2	口縁上端半截竹管によるD字形刺突、外面無文。頸部横位LR?縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
5-4	53T I層	Ⅲ-2	口縁上端LR縄文、外面無文。頸部横位結節回転文、RL?縄文。	ナデ	石英・海綿状骨針
5-5	53T II層	Ⅲ-2	口縁指頭による交互押捺。頸部無文、横位縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
5-6	52T I層	Ⅲ-2	口縁指頭による交互押捺。横位LR(O段多条)縄文。補修孔有。	ナデ	雲母
5-7	P311	Ⅲ-2	口縁V字状貼付文、上端ヘラ?状工具による押捺。LLR縄文⇒半截竹管による2列の横位刺突。	ケズリ・ナデ	繊維
5-8	53T II層	Ⅲ-2	斜位・縦位結節回転文⇒ヘラ状工具による横位・斜位波状沈線、縦位波状貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・繊維(少)
5-9	53T I層	Ⅲ-2	口縁上端波状貼付文。頸部横位貼付文、横位LR縄文。	ナデ	雲母
5-10	53T I層	Ⅲ-2	2条単位縦位・横位波状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
5-11	P653	Ⅲ-2	横位多段の4条単位の小波状沈線。	ナデ	繊維(少)
5-12	53T I層	Ⅲ-2	口縁指頭による交互押捺。横位RL(O段多条)縄文。	ヘラナデ	雲母・海綿状骨針
5-13	52T I層	Ⅲ-2?	RRL?縄文⇒半截竹管による縦位沈線。	ナデ	石英・海綿状骨針
5-14	53T II層	Ⅲ-2	RL縄文⇒2条単位の幾何学状の貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
5-15	52T I層	Ⅲ-3	口縁階面状貼付文。ナデ。	ヘラナデ	雲母・海綿状骨針
5-16	52T I層	Ⅲ-3	横位LR縄文⇒2本単位の山形貼付文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
5-17	53T II層	Ⅲ-3	横位LR縄文⇒山形貼付文。	ミガキ	雲母
5-18	52T I層	Ⅲ-3	縦位LR縄文⇒3条単位の山形沈線。	ナデ	雲母
5-19	53T I層	Ⅲ-3	横位LR縄文⇒2条単位の山形沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
5-20	53T I層	Ⅲ-3?	横位LR縄文⇒多段の2条単位の山形沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
5-21	52T I層	Ⅲ-5	口縁上端LR縄文、外面横位附加条1種(LR+R)。	ミガキ	海綿状骨針・繊維(少)
5-22	53T I層	Ⅲ-5	横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・繊維(少)
5-23	53T II層	Ⅲ-5	波状口縁。無節L縄文。	ヘラナデ 後ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
5-24	53T I層	Ⅲ-5	縦位RL縄文。	ヘラナデ	雲母・石英・海綿状骨針
5-25	53T II層	Ⅲ-5	横位RL縄文。補修孔有。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
5-26	53T I層	Ⅲ-5	波状口縁。横位附加条1種(LR+R)。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
5-27	53T I層	Ⅲ-5	口縁上端LR縄文。横位LR縄文。補修孔有(貫通せず)。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
5-28	53T II層	Ⅲ-5	横位結節回転文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
6-1	53T II層	Ⅲ-3	複合口縁。口縁無文、下端斜位ヘラ状工具による刻み。頸部以下横位LR縄文⇒斜位・弧状平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
6-2	53T II層	Ⅲ-3	複合口縁。口縁半円状突起、突起上端部分的に棒状工具による刻み。口縁無文、下端縦位棒状工具による刻み。頸部縄文⇒横位沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
6-3	59T I層	Ⅲ-4	口縁上端部分的に棒状工具による刻み。頸部以下格子状平行沈線⇒上位横位沈線。	ミガキ	石英・海綿状骨針
6-4	53T II層	Ⅲ-4	口縁下端横位爪形文⇒2段の山形爪形文⇒口縁上端横位爪形文⇒口縁上端部分的に指頭による押捺。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
6-5	52T I層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁縦位隆帯。頸部2条の横位爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
6-6	53T II層	Ⅲ-4	口縁～頸部縦位多条平行沈線。頸部横位隆帯。	ナデ	雲母・海綿状骨針
6-7	53T II層	Ⅲ-4	口縁縦位2条単位の縦位隆帯(突起)。外面横位LR縄文・RL縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
6-8	51・52T I層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒横位3条の結節浮線文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
6-9	53T II層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒横位・斜位・弧状平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
6-10	59TS205下層	Ⅲ-4	横位RL縄文⇒半截竹管による2条単位の縦位弧状刺突列。	ナデ	石英・海綿状骨針
6-11	52 T SD03	Ⅲ-6	横位RL?縄文⇒V字状・縦位・横位多条沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
6-12	53T I層	Ⅲ-6	斜位階面状条線。	ミガキ	雲母・石英
6-13	52T II層	Ⅳ-1	口縁上下縦位刻み付隆帯。2条単位の斜位・渦巻状沈線⇒棒状工具による刺突。	ナデ	雲母・石英
6-14	52T II層	Ⅳ-1	口縁上位縦位刻み付隆帯。多段の山形沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
6-15	53T I層	IV-1	口縁上位縦位刻み付隆帯。多段の山形・波状平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
6-16	52T II層	IV-1	2条単位の多段横位沈線。半截竹管による沈線に沿う刺突列⇒縦位棒状隆帯。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
6-17	52T II層	IV-1	横位多条平行沈線⇒斜位・弧状平行沈線⇒上位横位区画沈線。口縁内面隆帯貼付。口縁上端沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
6-18	59TS205	IV-1	波状口縁。波頂部二又文。縦位結節回転文⇒口縁に沿う2条の沈線⇒棒子状短沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
6-19	59 T SZ05	IV-2	4条の横位縄文(RL)。	ナデ	海綿状骨針
6-20	53T I層	IV-2?	棒状工具による多条斜位刺突列。	ミガキ	石英・海綿状骨針
6-21	52T I層	IV-2	隆沈線による楕円形区画。縦位隆沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
6-22	52T I層	IV-2	波状口縁。口縁上端斜位刻み。口縁横位LR・RL縄文⇒上下沈線が沿う隆帯区画。下位隆帯斜位刻み区画から伸びる沈線が沿う斜位刻み付隆帯による弧状・渦巻文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
6-23	52T II層	IV-1	斜位沈線⇒沈線間に棒子状短沈線。縦位重要状の沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
6-24	52T I層	IV-1	縦位小波状平行沈線。沈線に沿う刺突列?⇒横位多条の小波状平行沈線。	ナデ	雲母
6-25	53T I層	IV-1?	横位・縦位の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
6-26	52T I層	IV-1	縦位山形波状沈線。横位楕円?沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
6-27	53T I層	IV-2	縦位RL縄文⇒縄文裏文付縦位楕円状貼付文⇒多条の半沈線文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
6-28	52T II層	IV-2	縦位LR縄文⇒弧状隆帯⇒隆線に沿う有筋沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
6-29	52T I層	IV-2	横位・縦位の隆帯・沈線による楕円形区画。	ナデ	雲母・海綿状骨針
6-30	52T I層	IV-2	波状口縁。隆帯。隆線に沿う隆沈線による三角形区画、区画内斜位・波状の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
6-31	52T II層	IV-2	横位LR縄文。結節回転文⇒断面三角の縦位隆帯。	ナデ	雲母・石英
7-1	51T I層	IV-4	波状複合口縁。縦位LR縄文・結節回転文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
7-2	51T I層	IV-3	波状口縁。口縁上端縦位ヘラ?状工具による刻み。無文。	ナデ	雲母
7-3	52T II層	IV-3	口縁上端棒状工具による押除。ミガキならびにヘラナデ。	ヘラナデ	雲母・石英・海綿状骨針
7-4	52T I層	IV-3	ヘラナデ。	ヘラナデ	雲母・石英・海綿状骨針
7-5	53T II層	IV-3	有土器。ミガキ。頸部焼成前穿孔。	ミガキ	金雲母
7-6	52T I層	IV-3	浅鉢。波状口縁。ヘラナデ後ミガキ。口縁内面有段。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・金雲母
7-7	53T I層	IV-4	口縁肥厚。横位ナデ。胴部横位RL縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
8-1	II区SD01	V-2	波状口縁。浅鉢。口縁横位隆沈線(楕円形区画)。波頂部渦巻状隆位隆沈線。口縁上端1条の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
8-2	51・52T I層	V-1	波状口縁。波頂部渦巻状貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
8-3	59T I層	V-1	横方向の突起。上面S字状貼付文。	—	雲母・海綿状骨針
8-4	52T I層	V-1	上位から下向き弧状貼付文。縦位縄文裏文(L)。下向き弧状貼付文。図8-5と同一。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
8-5	52T I層	V-1	図8-4と同一。	—	—
8-6	52T I層	V-1	口縁隆帯区画。区画内刺突列。隆沈線による渦巻?文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
8-7	52T I層	V-1	波状口縁。口縁隆帯。縦位R捻糸文⇒2条単位の横位・連弧状沈線。口縁下横位隆帯。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
8-8	53T II層	IV-2・V-1	縦位RL縄文⇒縦位・波状平行沈線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
8-9	51 T I層	V-1	縦位LR縄文⇒横位・弧状の3条単位の沈線。の2条単位のU字状短沈線⇒下層3条以上の横位沈線⇒交互刺突文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
8-10	52T I層	V-1・2	縦位RL縄文⇒横位・波状平行沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
8-11	52T II層	V-2	口縁横位隆沈線。横位・縦位・渦巻状の隆沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
8-12	52T I層	V-1	縦位RL縄文⇒3条単位の隆沈線による方形区画。渦巻文。弧状文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
8-13	II区SD01	V-2	口縁上下隆帯区画。区画内横位LR縄文⇒刺先状・渦巻状隆帯。	ナデ	雲母・海綿状骨針
8-14	52T I層	V-2	横位RL?縄文⇒上位区画・刺先状・渦巻状の隆沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
8-15	51T I層	V-2	横位LR縄文⇒口縁上下横位隆沈線。胴部沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
8-16	53T I層	V-2	縦位LR 縄文⇒隆沈線による三角形区画。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
8-17	59T I層	V-2	縦位LR 縄文⇒弧状・横位の隆沈線。	ミガキ	石英
8-18	53T I層	V-2	縦位RL 縄文⇒弧状・横位の隆沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
8-19	59T I層	V-2	縦位RL 縄文⇒曲線状の隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
8-20	53T I層	V-2	横位RL 縄文⇒渦巻状の隆線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
8-21	60T I層	VI-3	斜位・縦位平行沈線⇒横位・縦位押捺付隆帯。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
9-1	51T I層	V-2	小波状口縁。渦巻状の隆沈線。	ミガキ	雲母
9-2	51・52T I層	V-2	突起。渦巻状の隆沈線。	ナデ	雲母・金雲母
9-3	II区SD01	VI-1	渦巻状の隆線、刺突。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
9-4	II区SD01	VI-1	小波状口縁。縦位RL 縄文⇒横位・環状隆線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
9-5	52T I層	VI-1	渦巻状の隆沈線。	ミガキ	雲母・石英・赤色粒
9-6	52T I層	VI-1	渦巻状の隆沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
9-7	51T I層	VI-1	渦巻状の隆沈線。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
9-8	53T I層	VI-1	縦位LR 縄文⇒曲線状の隆沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
9-9	53T I層	VI-1	縦位RL 縄文⇒曲線状の隆沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
9-10	59T I層	VI-1	縦位RL 縄文⇒曲線・渦巻状の隆沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
9-11	52T I層	VI-1	縦位LR 縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
9-12	53T I層	VI-1?	縦位LR 縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
9-13	59T I層	VI-2	小波状口縁。縦位LR 縄文⇒沈線、棒状工具による刺突。	ミガキ	雲母・金雲母
9-14	52T I層	VI-2	口縁横位LR 縄文、胴部縦位LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
9-15	52T I層	VI-1	縦位LR 縄文⇒隆沈線。頸部無文帯。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
9-16	52T I層	VI-1	縦位RL 縄文⇒隆沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
9-17	52T I層	VI-1	縦位LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
9-18	52T I層	VI-1	縦位LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	金雲母
9-19	53T I層	VI-2	LR 縄文⇒隆沈線⇒刺突。	ミガキ	雲母
10-1	52T I層	VI-1・2	縦位・斜位RL 縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
10-2	52T II層	VI-1・2	縦位L 捩糸文⇒断面三角の隆沈線。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
10-3	52TSD03	VI-2	縦位LR 縄文⇒断面三角の隆線。	ナデ	雲母・石英
10-4	52T I層	VI-2	縦位RL 縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
10-5	52T I層	VI-2	縦位RL 縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
10-6	52TSD02	VI-2	縦位・斜位RL 縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母
10-7	52TSD02	VI-2	縦位LR・RL 縄文⇒断面三角の隆線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
10-8	60T I層	VI-2	縦位LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母
10-9	53T I層	VI-2	鉢鉢。縦位RL 縄文⇒断面三角の隆線⇒ミガキ⇒棒状工具による刺突。赤彩。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
10-10	52T I層	VI-2?	縦位R 捩糸文⇒沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
11-1	59T I層	VI-1	口縁隆帯区画。隆帯上突起。横位RL 縄文。	ナデ	雲母・石英
11-2	51T I層	VI-1	小波状口縁。波頂部から縦位隆帯。口縁隆帯区画。隆帯上半截竹管による円形刺突。横位LR? 縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
11-3	59TSD05	VI-1	小波状口縁。波頂部から縦位隆帯。口縁隆帯区画。隆帯上円形押捺。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
11-4	51T I層	VI-1?	小波状口縁。波頂部から縦位隆帯。隆帯上円形押捺。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
11-5	52T I層	VI-1	小波状口縁。波頂部から縦位隆帯。隆帯中央沈溝。上下円形刺突。下端8字状浮文。口縁隆帯・沈線区画。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
11-6	53T I層	VI-1	小波状口縁。波頂部からノ字状隆帯。中央沈溝。口縁隆帯区画。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
11-7	66T II層	VI-1	ノ字状隆帯。口縁隆帯区画。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
11-8	53T I層	VI-1?	小波状口縁。縦位隆帯。隆帯上刻み。隆帯に沿う沈線。口縁沈線区画?。縦位波状の槽面状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
11-9	52T I層	VI-1	波状口縁。波頂部渦巻状隆線。頸部以下沈線。円形刺突。	ナデ	雲母・海綿状骨針
11-10	53T I層	VI-1	波状口縁。波頂部上端渦巻状突起。外面8字?状隆帯。	ナデ	石英・海綿状骨針
11-11	53T I層	VI-1	口縁隆帯・沈線区画。隆帯上斜位刻み。8字状浮文。胴部縦位LR 縄文⇒縦位蛇行沈線、鈎手?状沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
11-12	II区SD01	VI-1	口縁刻み付隆帯・沈線区画。	ナデ	雲母
11-13	59T I層	VI-1	口縁三角状小突起。縦位刻み付隆帯。外面斜位沈線。突起内面沈線。盲孔。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
11-14	52T I層	VI-1	口縁縦位刻み付隆帯区画。横位LR 縄文⇒隆帯に沿う2条の沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
11 - 15	59TSZ06	Ⅵ-2	口縁沈線区画。横位LR縄文⇒腕手状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母
11 - 16	59T 1層	Ⅵ-2	口縁沈線区画。横位LR縄文⇒縦位・蛇行状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
11 - 17	59T 1層	Ⅵ?	口縁沈線区画。横位・縦位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
11 - 18	52T 1層	Ⅵ-2	小波状口縁。口縁沈線区画。波頂部から縦位沈線、上端盲孔、下端円形浮文。横位LR縄文⇒鉤手状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
11 - 19	52TSD03	Ⅵ-4	小波状口縁。波頂部上端盲孔。沈線⇒沈線間半截竹管による刺突。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
11 - 20	52T 1層	Ⅵ-4	波状口縁。口縁上端沈線。縦位LR縄文⇒2条単位の沈線。沈線間円形刺突。	ナデ	海綿状骨針・金雲母
12 - 1	52T 1層	Ⅵ-1	縦位LR縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
12 - 2	53T 1層	Ⅵ-1	横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母
12 - 3	51T 1層	Ⅵ-2	横位無筋R縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
12 - 4	52TSD03	Ⅵ-2	縦位RL縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
12 - 5	53T 1層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
12 - 6	60T 1層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
12 - 7	53T 1層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒曲線状沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
12 - 8	52T 1層	Ⅵ-2	横位LR?縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
12 - 9	Ⅱ区Ⅱ層	Ⅵ-2	口縁沈線区画。横位LR縄文⇒盲孔、列点状沈線、腕手状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
12 - 10	Ⅱ区Ⅱ層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒列点状沈線、曲線状(腕手状)沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
12 - 11	53T 1層	Ⅵ-2	弧状沈線、列点状沈線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
12 - 12	51T 1層	Ⅵ	格子状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
12 - 13	53T 1層	Ⅵ	壺形土器。波状口縁。波頂部に対応して橋状把手(4単位)。頸部隆帯区画。横位LR縄文。	ミガキ、ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
12 - 14	51T 1層	Ⅵ?	外面縦位・斜位ヘラズリ。底部ナデ。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
13 - 1	51・52T 1層	Ⅵ-2	小波状口縁。波頂部縦位3条の縦位沈線、盲孔。口縁1条の沈線。波頂部から垂下する期み付隆帯。胴部RL縄文⇒上位多条沈線区画。多条沈線による重弧状文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
13 - 2	51T 1層	Ⅵ-2	口縁1条の沈線。胴部上位多条沈線区画、盲孔、多条沈線による重弧状文。	ミガキ、ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
13 - 3	59TSZ06	Ⅵ-2	小波状口縁。波頂部多条沈線による縦位弧状文、盲孔。横位LR縄文⇒斜位多条沈線。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
13 - 4	51T 1層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部多条沈線による重弧状文。口縁2条の沈線区画。縦位LR縄文。図13-5と同一。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
13 - 5	51T 1層	Ⅵ-2	図13-4と同一。	—	—
13 - 6	51T 1層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部縦位弧状沈線。頸部橋状把手。縦位弧状期み付隆帯。胴部上位多条沈線区画、多条沈線。	ミガキ、ナデ	雲母・海綿状骨針
13 - 7	52T 1層	Ⅵ-2	口縁沈線区画。横位LR縄文⇒盲孔、曲線状(円形・弧状)沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
13 - 8	52T 1層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒垂下する多条沈線による曲線状(重弧状)文。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
13 - 9	52T 1層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒垂下する多条沈線による曲線状文。	ナデ	雲母・石英・赤色粒
13 - 10	52T 1層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒垂下する多条沈線による曲線状文。胴部下端ミガキによる摩消。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針・赤色粒
13 - 11	52T 1層	Ⅵ-2	斜位LR縄文⇒垂下する多条沈線による曲線状文。	ミガキ	雲母
13 - 12	51・52T 1層	Ⅵ-2	斜位LR縄文⇒垂下する多条沈線による曲線状文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
14 - 1	59T 1層層	Ⅵ-1	口縁刻み。ミガキ。内面横位平行沈線⇒刻み。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 2	51・52T 1層	Ⅵ-1	口縁肥厚。斜位LR縄文⇒横位平行沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
14 - 3	52T 1層	Ⅵ-1	ミガキ。内面円形沈線。横位平行沈線⇒横位L字状沈線⇒刻み。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 4	52T 1層	Ⅵ-1	波状口縁。斜位LR縄文⇒横位平行沈線。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 5	51・52T 1層	Ⅵ-1	波状口縁。斜位LR縄文⇒横位平行沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
14 - 6	52TSD02	Ⅵ-1	斜位L摺糸文⇒横位平行沈線、曲線状沈線⇒磨消。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 7	51T 1層	Ⅵ-1	波状口縁。斜位LR縄文⇒横位平行沈線⇒磨消。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 8	52T 1層	Ⅵ-1	小波状口縁。斜位LR縄文⇒横位平行沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
14 - 9	51・52T 1層	Ⅵ-1	小波状口縁。斜位LR縄文⇒横位平行沈線⇒磨消。	ミガキ	石英・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
14 - 10	52T I層	Ⅶ-1	口縁肥厚。斜位LR縄文⇒横位平行沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
14 - 11	66T II層	Ⅶ-1	斜位LR縄文⇒横位平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
14 - 12	52T I層	Ⅶ-1	口縁肥厚。RL縄文⇒横位沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
14 - 13	52T I層	Ⅶ-1	口縁肥厚。斜位L捻糸文⇒横位沈線。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 14	52T I層	Ⅶ-1	斜位LR縄文⇒横位平行沈線⇒磨消。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
14 - 15	52T I層	Ⅶ-1	斜位RL縄文⇒横位平行沈線⇒磨消。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
14 - 16	52TSD03	Ⅶ-1	口縁肥厚。斜位LR縄文⇒横位平行沈線・縦位弧状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 17	Ⅱ区Ⅱ層	Ⅶ-1	口縁上端縦割山形状小突起。斜位LR縄文⇒横位平行沈線⇒縦位弧状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
14 - 18	52TSD03上	Ⅶ-1	円形突起。口縁上端縦位削み。横位平行沈線⇒縦位弧状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 19	51T I層	Ⅶ-1	小波状口縁。斜位LR縄文⇒横位平行沈線⇒横位L字状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
14 - 20	59TSD201	Ⅶ-1	斜位LR縄文⇒横位平行沈線⇒縦位弧状沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 21	52T I層	Ⅶ-1	横位平行沈線⇒縦位弧状沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 22	52T I層	Ⅶ-1	斜位LR縄文⇒横位平行沈線⇒縦位弧状沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
14 - 23	52T I層	Ⅶ-1	斜位L捻糸文⇒横位平行沈線⇒横位L字状沈線。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針・赤色粒
14 - 24	52T I層	Ⅶ-1	斜位LR縄文⇒横位平行沈線⇒縦位短沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
14 - 25	51T I層	Ⅶ-1	斜位LR縄文⇒横位平行沈線⇒縦位弧状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
15 - 1	52TSD05	Ⅶ-1	斜位LR縄文⇒ト字状沈線区画・横位区画沈線⇒磨消。底部網代肌。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
15 - 2	66T II層	Ⅶ-1	波状口縁。斜位LR縄文⇒斜位沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
15 - 3	52T I層	Ⅶ-1	横位沈線⇒弧状沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
15 - 4	66T I層	Ⅶ-1	斜位LR縄文⇒横位沈線・弧状沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
15 - 5	66T I層	Ⅶ-1	斜位LR縄文⇒横位平行沈線⇒削み・縦位短沈線?	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
15 - 6	52T II層	Ⅶ-1	斜位LR縄文⇒区画沈線⇒磨消。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
15 - 7	52T I層	Ⅶ-1	横位平行沈線・縦位平行沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
15 - 8	52T I層	Ⅶ-1	弧状沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
15 - 9	59T I層	Ⅶ-2	弧状沈線。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
15 - 10	59TSD201上層	Ⅶ-2	2個の突起⇒横位平行沈線⇒瘤貼付。	ナデ	雲母・海綿状骨針
15 - 11	52TSD03	Ⅶ-1?	注口土器。縦位沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
15 - 12	59T I層	Ⅶ-1	ミガキ。内面横位沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
15 - 13	59T I層	Ⅶ-1	ナデ。内面横位沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
15 - 14	52TSD03	Ⅶ-1?	ミガキ⇒横位沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
15 - 15	52T I層	Ⅶ-1?	ミガキ⇒横位沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
15 - 16	52T I層	Ⅶ-1?	ミガキ⇒横位沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
15 - 17	52T I層	Ⅶ-1?	ナデ⇒横位沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
15 - 18	52TSD03	Ⅶ-1	波状口縁。ナデ	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
15 - 19	52T II層	Ⅶ-1?	口縁肥厚。ミガキ。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
16 - 1	52TSD03上層	X	横位LR・RL非結束羽状縄文⇒磨消。内面横位沈線。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
16 - 2	52TSD03上層	X	斜位RL縄文⇒磨消。内面横位沈線。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
16 - 3	52T I層	X	斜位LR縄文⇒横位沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
16 - 4	51T I層	X	斜位LR縄文。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
16 - 5	52TSD02	X	斜位LR縄文。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
16 - 6	52TSD03下層	X	横位LR・RL非結束羽状縄文。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
16 - 7	52T I層	X	縦位櫛歯状条線 (5-6本単位)。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
16 - 8	52T I層	X	縦位櫛歯状条線 (6本単位)。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
16 - 9	53T I層	X	縦位櫛歯状条線 (単位不明)。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
16 - 10	59T I層	X	網目状捻糸文 (横位回転R、交互に上下しない)。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
16 - 11	51T I層	X	網目状捻糸文 (横位回転R?、交互に上下しない)。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
16 - 12	51T I層	X	図16-12と同一。	-	-
17 - 1	37 T I層	Ⅱ	口縁上端LR縄文。外面横位LR縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針・繊維
17 - 2	31 T II層	Ⅲ-1-2	附加条1種 (LR+R)⇒1条の山形沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
17 - 3	43 T II層	Ⅲ-2	口縁下多条の結節回転文、下位LR縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針・繊維 (少)
17 - 4	32 T II層	Ⅲ-3	口縁櫛歯状貼付文。横位RL?縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
17 - 5	31 T II層	Ⅲ-3	口縁櫛歯状貼付文。横位LR縄文⇒半截竹管による2条の山形沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17 - 6	31 T II層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁無文。頸部以下横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
17-7	39 T I 層	Ⅲ-4	波状口縁。口縁無文、頸部以下横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17-8	40 T I 層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁下端三角刻み。胴部横位LR縄文→横位・斜位爪形文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
17-9	39 T I 層	Ⅲ-4	口縁肥厚。口縁下端爪形文。附加条1種?⇒山形波状平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17-10	31 T I 層	Ⅲ-4	口縁肥厚。口縁縦位・斜位沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17-11	39 T II 層	Ⅲ-4	口縁上横位単沈線区画、L字状単沈線、直行する単沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17-12	39 T II 層	Ⅲ-1?	横位2条の単沈線⇒沈線間斜位半載竹管による刺突。	ミガキ	海綿状骨針・繊維(少)
17-13	39 T I 層	Ⅲ-4?	横位単沈線⇒弧状・斜位単沈線。沈線間縦位刻み。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17-14	31 T II 層	Ⅲ-4	斜位・弧状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17-15	31 T II 層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒横位単沈線⇒縦位刻み。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17-16	39 T II 層	Ⅲ-4	横位無筋L縄文⇒横位・縦位爪形文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
17-17	37 T I 層	Ⅲ-4	横位・弧状の平行沈線⇒沈線に沿う爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17-18	31 T I 層	Ⅲ-4	沈線による方形文、縦位列点状沈線⇒沈線に沿う爪形文。補修孔有。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
17-19	32 T II 層	Ⅲ-4	横位沈線⇒沈線に沿う爪形文。内面刺突。	-	雲母・海綿状骨針
17-20	39 T II 層	Ⅲ-6	多条有筋沈線。図17-21と同一。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17-21	39 T II 層	Ⅲ-6	図17-20と同一。	-	-
17-22	31 T I 層	Ⅲ-6	縦位沈線⇒斜位沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
17-23	39 T II 層	Ⅲ-6	2条の変形爪形文(幅0.9mm)。	ナデ	雲母・海綿状骨針
17-24	31 T II 層	Ⅲ-6	櫛歯状工具による横位・斜位沈線(条線文)。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
17-25	38 T I 層	Ⅲ-5	波状口縁。横位RL縄文。	ハラナデ	雲母・海綿状骨針
17-26	43 T II 層	Ⅲ-5	横位・斜位附加条1種(RL+R)。	ナデ	雲母・海綿状骨針
17-27	43 T I 層	Ⅲ-5	波状口縁。横位RL縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
17-28	39 T II 層	Ⅲ-5	口縁上端櫛状工具による刻み。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
17-29	39 T II 層	Ⅲ-5	横位・縦位RL縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
18-1	31 T II 層	Ⅳ-1	波状口縁。口縁上端隆帯貼付による突起。波頂部から垂下する弧状の刻み付隆帯⇒渦巻状沈線⇒梯子状短沈線。斜位多条沈線、口縁下端斜位刻み。	ナデ	雲母・海綿状骨針
18-2	31 T II 層	Ⅳ-1	口縁突起、縦位刻み付隆帯、隆帯上端突起、口縁下端三角刻み。突起から垂下する逆U字状刻み付隆帯。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
18-3	31 T II 層	Ⅳ-1	波状口縁。口縁縦位刻み。口縁下断面三角の隆線区画、口縁上下横位沈線⇒半載竹管によるD字形刺突列。口縁に沿う隆沈線区画、斜位多条沈線⇒区画内三角形交互刺突。胴部斜位・曲線状沈線、三角刺突、梯子状短沈線(玉付三叉文)。図18-4~6と同一。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
18-4	31 T II 層	Ⅳ-1	図18-3・5~6と同一。頸部櫛状把手。口縁内面隆帯貼付。	-	-
18-5	31 T II 層	Ⅳ-1	図18-3・4・6と同一。頸部櫛状把手。口縁隆帯。	-	-
18-6	31 T II 層	Ⅳ-1	図18-3~5と同一。	-	-
18-7	31 T II 層	Ⅳ-1	斜位・弧状の平行沈線⇒梯子状短沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
18-8	31 T II 層	Ⅳ-1	波状口縁。波頂部二又状。縦位LR縄文・結節回転文⇒口縁に沿う2条の沈線⇒梯子状短沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
18-9	31 T II 層	Ⅳ-1	口縁1条の横位沈線⇒梯子状短沈線。縦位1条の山形波状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
18-10	43 T I 層	Ⅳ-1	頸部断面三角の隆沈線区画⇒斜位・曲線状の沈線、三角刺突(玉付三叉文)。	ミガキ	金雲母・石英
18-11	38 T II 層	Ⅳ-1	単沈線による横位・斜位・弧状文⇒梯子状短沈線、三角刺突。	ミガキ	金雲母
18-12	31 T I 層	Ⅳ-1	口縁刻み付隆帯⇒口縁下端三角刻み、胴部縦位多条の浅い沈線⇒横位沈線⇒多段の山形沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
18-13	31 T I 層	Ⅳ-1	口縁縦位刻み付隆帯。多段の矢羽状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
18-14	31 T I 層	Ⅳ-1	口縁沈線区画、多段の山形沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
18-15	31 T II 層	Ⅳ-1	口縁縦位刻み。横位多条沈線⇒山形沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
18-16	31 T II 層	Ⅳ-1	口縁山形状小突起、縦位刻み付隆帯、隆帯上端貼付文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
18-17	38 T I 層	Ⅳ-1	口縁隆帯、隆帯上LR縄文。頸部下隆帯区画。胴部横位LR縄文⇒口縁・隆帯に沿う平行沈線⇒胴部斜位・弧状の平行沈線⇒沈線間半載竹管による2条の刺突列、口縁下横位櫛状貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
18-18	37 T I 層	Ⅳ-1	口縁上端刻み。横位RL縄文、結節回転文⇒横位沈線、交互刺突文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
18-19	31T II層	IV-1	波状口縁。波頂部隆帯貼付。縦位多条平行沈線文⇒口縁沈線区画、波頂部から垂下する山形状・斜位の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
18-20	37 T I層	IV-2	小波状口縁。波頂部から弧状隆帯。	ナデ	雲母・海綿状骨針
18-21	39T I層	IV-2?	横位無節 R 縄文⇒端部渦巻状の横位縄直文 (L)。	ナデ	雲母・海綿状骨針
18-22	39T I層	IV-2	口縁隆帯。頸部以下縦位 LR 縄文⇒口縁3条の横位縄直文 (LR)。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
18-23	39T I層	IV-2	縦位 LR 縄文⇒兼手状の断面三角の隆線⇒隆線に沿う有節沈線。	ミガキ	金雲母・石英
18-24	38T II層	IV-2	縦位 LR 縄文⇒縦位平行沈線、沈線に沿う爪形文。図 18-25 と同一。	ナデ	雲母・海綿状骨針
18-25	38T II層	IV-2	図 18-24 と同一。縦位 LR 縄文⇒隆線⇒縦位平行沈線、沈線に沿う爪形文。	-	-
18-26	38T II層	IV-2	縦位附加条1種 (LR+R) ⇒隆線⇒縦位平行沈線、沈線に沿う爪形文。図 18-24・25 と同一か?	ナデ	雲母・海綿状骨針
18-27	32T II層	IV-2	縦位 LR 縄文⇒断面三角の縦位隆線。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
18-28	31T II層	IV-2	縦位 LR 縄文⇒斜位・横位・曲線状の沈線 (方形・三角形区画?)。	ミガキ	雲母・金雲母
19-1	31T II層	IV-4	縦位 LR 縄文、結節回転文。図 19-8 と同一か?	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
19-2	38T I層	IV-4	口縁隆帯。頸部押捺付隆帯区画。縦位 LR 縄文、結節回転文。	ミガキ	石英・海綿状骨針
19-3	31T II層	IV-4?	口縁縦位弧状の隆線、横位押捺付隆帯。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
19-4	39T II層	IV-2	波状口縁、波頂部 U 字形、波頂部のみ上端押捺。縦位 LR 縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
19-5	31T I層	IV-4	頸部別み付隆帯区画。縦位結節回転文。	ミガキ	雲母・金雲母
19-6	37 T I層	IV-4	縦位附加条1種 (LR+R)、結節回転文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
19-7	31T II層	IV-4	縦位 LR・RL 羽状縄文、結節回転文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
19-8	31T I層	IV-4	頸部押捺付隆帯区画。縦位 LR 縄文、結節回転文。図 19-1 と同一か?	ナデ	雲母・海綿状骨針
19-9	31T I層	IV-4	縦位附加条1種 (LR+R)、結節回転文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
19-10	37T I層	IV-3	複合口縁、口縁上端、下端半軌竹管による刺突。ナデ。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
19-11	37 T I層	IV-3	口縁上下端半軌竹管に刻み、輪積み痕2段。ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
19-12	31T II層	IV-3	口縁輪積み痕2段。ナデ。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
19-13	37 T I層	IV-3	ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
19-14	31T II層	IV-3	ナデ。	ナデ	雲母・石英
19-15	37 T I層	IV-3	ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
19-16	38T II層	IV-3	ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
19-17	37 T I層	IV-3	ナデ。棒状工具による3単位の縦位刺突列。	ナデ	雲母
20-1	39T I層	V-1	口縁隆帯による楕円形区画、区画内無節沈線、横方向の突起、突起上 S 字状貼付文。頸部隆帯区画。	ナデ	雲母・海綿状骨針
20-2	31T II層	V-1	縦位 LR 縄文⇒隆線による方形区画。	ナデ	雲母・海綿状骨針
20-3	31T I層	V-1	縦位 LR 縄文⇒曲線状隆線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
20-4	43T I層	V-1	横位 LR 縄文⇒斜位・横位平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
20-5	31T II層	V-2	縦位 LR 縄文⇒横位・弧状の隆線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
20-6	38T I層	V-2	渦巻状の隆沈線。横位 RL 縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
20-7	31T II層	V-2	突起。突起上下渦巻状の隆沈線。口縁横位隆沈線。	ナデ	雲母・金雲母
20-8	38T II層	V-2	渦巻状の隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
20-9	37T I層	V-2	渦巻状の隆沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
20-10	31T II層	V-2	縦位・斜位 LR 縄文⇒弧状の隆線。	ミガキ	雲母
20-11	31T II層	V-2	縦位 LR 縄文⇒横位・弧状の平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
20-12	38T II層	V-2	横位 LR 縄文⇒横位・弧状の隆線。	ミガキ	金雲母
20-13	31T II層	VI-1	小波状口縁。縦位 LR 縄文⇒渦巻状の隆沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
20-14	32T II層	VI-1	隆沈線による渦巻文、楕円形区画⇒区画内刺突。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
20-15	31T II層	VI-1	口縁縦位 LR 縄文⇒沈線による弧状文、楕円形区画。頸部縦位 RL 縄文⇒縦位沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
20-16	39T I層	VI-1	小波状口縁。縦位 RL 縄文⇒口縁隆沈線による渦巻文・楕円形区画、縦位沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
20-17	31T IV層	VI-1	口縁横方向の突起。縦位 RL 縄文⇒縦位隆沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・石英
20-18	37T I層	VI-1	口縁横位棒状把手。縦位 RL 縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
20-19	31T II層	VI-1	縦位・斜位 RL 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
20-20	31T II層	VI-1	波状口縁。縦位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
20-21	31T I層	VI-1	縦位RL縄文⇒沈線、刺突。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
20-22	32T II層	VI-1	渦巻状の隆線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
20-23	38T I層	VI-1	縦位LR縄文⇒曲線状の隆沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
20-24	39T I層	VI-1	横位LR縄文⇒隆沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
21-1	31T II層	VI-2	縦位LR縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・金雲母
21-2	31T II層	VI-2	縦位RL縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
21-3	39T I層	VI-2	縦位LR縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・金雲母
21-4	39T I層	VI	縦位LR縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状
21-5	31T II層	VI	縦位・横位RL縄文。	ミガキ	雲母
21-6	31T II層	VI	縦位LR縄文⇒口縁円形刺突列。	ミガキ	雲母・石英
21-7	31T II層	VI-1	縦位・横位RL縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
21-8	31T II層	VI-1	縦位RL縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
21-9	31T II層	VI-1	縦位RL縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
21-10	31T IV層	VI-1	縦位RL縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
21-11	31T II層	VI-2	浅鉢。縦位RLR縄文⇒隆帯・断面三角の隆線。赤彩。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
21-12	31T II層	VI-2	縦位LR縄文⇒断面三角の隆線。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
22-1	31T II層	VI-1	小波状口縁。波頂部から垂下する縦位隆帯。口縁隆帯区画。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
22-2	32T II層	VI-1	口縁隆帯区画。縦位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
22-3	32T II層	VI-1	口縁隆帯区画。	ナデ	雲母・海綿状骨針
22-4	38T I層	VI-1	波状口縁。口縁隆帯貼付による突起、貫通孔。の字状隆帯、中央沈溝。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
22-5	31T II層	VI-1	波状口縁。波頂部縦位弧状沈線、盲孔。波頂部内面盲孔。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
22-6	38T I層	VI-1	口縁楕円形沈線区画。区画内D字状刺突列。縦位隆帯。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
22-7	31T II層	VI-2	口縁突起、環状隆帯貼付。突起内外面縦位沈線、上下盲孔。口縁縦位沈線・盲孔。頸部以下横位LR縄文⇒縦位弧状多条沈線⇒盲孔。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
22-8	39T II層	VI-2	口縁突起、貫通孔。突起外面多条沈線・盲孔。横状把手。横位沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
22-9	38T I層	VI-2	口縁突起、貫通孔、盲孔、沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
22-10	39T I層	VI-2	口縁沈線区画。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
22-11	31T II層	VI-2	口縁盲孔、ノ字状沈線。横位LR縄文⇒口縁沈線区画。弧状多条沈線⇒盲孔。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
22-12	31T II層	VI-2	縦位隆帯、頸部横位沈線区画、盲孔。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
22-13	31T I層	VI-2	口縁沈線区画。横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・石英
22-14	31T II層	VI-2	横位RL縄文⇒沈線、蛇行状沈線⇒ミガキ。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
22-15	31T II層	VI-2	横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
22-16	32T II層	VI-2	縦位RL縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
22-17	39T I層	VI-2	横位RL縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
22-18	31T II層	VI-2	口縁重弧状の多条沈線、盲孔。横位LR縄文⇒口縁沈線区画⇒多条沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
22-19	39T I層	VI-2	縄文⇒口縁沈線区画⇒多条沈線⇒盲孔。	ナデ	雲母・石英
22-20	31T II層	VI-2	横位RL縄文⇒口縁沈線区画⇒重弧状の多条沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
22-21	31T II層	VI-2	波状口縁。横位RL縄文⇒口縁沈線区画⇒重弧状の多条沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
22-22	39T I層	VI-2	横位LR縄文⇒多条沈線、縦位隆帯、円形浮文。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
22-23	31T II層	VI-2	横位LR縄文⇒多条沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
22-24	40T I層	X	縦位刺突列状赤文。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
23-1	58T II層	II	山形状小突起。多段のループ文。	ナデ	雲母・海綿状骨針・繊維
23-2	58T II層	II	口縁上端半截竹管による刻み。口縁鋸歯状の多条沈線、頸部横位刺突列。	ナデ	雲母・海綿状骨針・繊維
23-3	58T II層	II	口縁上端縄圧痕(RL)による刻み。横位LR・RL非結束羽状縄文⇒半截竹管による横位刺突列。	ナデ	雲母・石英・繊維
23-4	54T I層	II	斜位多条平行沈線。横位RL縄文。頸部屈曲部半截竹管による横位刺突列。	ナデ	雲母・海綿状骨針・繊維
23-5	58T II層	II	横位LR縄文。	ナデ	海綿状骨針・繊維

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
23-6	58T II層	II	横位LR・RL非結束羽状縄文⇒半載竹管による横位刺突列。	ナゲ	雲母・石英・繊維
23-7	54T I層	II	横位LR縄文。	ナゲ	雲母・石英・繊維
23-8	63T II層	II	横位RLR・LRL非結束羽状縄文⇒棒状工具による横位刺突列。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・繊維
23-9	54T I層	II	横位LR・RL非結束羽状縄文。	ナゲ	雲母・海綿状骨針・繊維
23-10	54T I層	II	横位LR縄文。	ナゲ	雲母・海綿状骨針・繊維
23-11	54T I層	II	横位RLR縄文。	ナゲ	雲母・繊維
23-12	58T II層	III-1	横位LR縄文⇒縦位弧状平行沈線。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
23-13	46T I層	III-1	無節L縄文⇒平行沈線による横位連結木葉文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
23-14	46T I層	III-2	口縁上端棒状工具による刻み。口縁半載竹管による2条の横位刺突列。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
23-15	63T II層	III-2	横位LR縄文⇒波状・横位貼付文。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
23-16	46T I層	III-2	口縁上端半載竹管による刺突。口縁無文。口縁下横位LR縄文⇒横位多条結節回転文。	ヘラナゲ	雲母・海綿状骨針
23-17	58T II層	III-2	口縁指頭による交互押捺。	ナゲ	海綿状骨針・赤色粒
23-18	46T I層	III-2	口縁上端上方からの押捺。横位LR縄文⇒横位多条結節回転文。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
23-19	46T I層	III-2	口縁指頭による交互押捺。横位RL縄文⇒横位結節回転文。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
23-20	58T II層	III-2	口縁山形・鋸歯状貼付文。横位LR縄文⇒横位多条結節回転文。	ナゲ	石英・海綿状骨針
23-21	46T I層	III-3?	横位LR縄文⇒半載竹管による2条の横位刺突列。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
23-22	57T I層	III-3	口縁上方への環状突起。斜位LR・縄文⇒山形貼付文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
23-23	58T II層	III-3	口縁鋸歯状貼付文。横位LR縄文⇒多山山形貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
23-24	46T I層	III-3	口縁鋸歯状貼付文。横位LR縄文⇒貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
23-25	46T I層	III-3	横位RL縄文⇒格子状貼付文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
23-26	46T I層	III-3	波状口縁。波頂部貫通孔。環状貼付文(剝離)?横位RL縄文⇒菱形・三角形貼付文。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
23-27	58T II層	III-3	口縁鋸歯状貼付文⇒RL縄文。縄文⇒半載竹管による2条の横位刺突列。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
23-28	58T II層	III-3	複合口縁。口縁上端棒状工具による刻み。下端半載竹管による刻み。横位無節L縄文⇒半載竹管による凹形刺突列。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
23-29	46T I層	III-3	口縁上端半平行載竹管による刺突。2条以上の山形平行沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
23-30	49T I層	III-3	横位RL縄文⇒3条以上の山形平行沈線。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
23-31	58T I層	III-3	横位RL縄文⇒山形沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
23-32	46T I層	III-3	横位RL縄文⇒2条以上の縦位山形平行沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
23-33	58T II層	III-3	横位LR縄文⇒2条以上の縦位菱形平行沈線。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
23-34	58T II層	III-3	波状口縁。横位RL縄文⇒口縁下2条単位の横位弧状沈線区画。横位・縦位山形・弧状・渦巻状沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
24-1	54T I層	III-3	複合口縁。口縁半円状突起。口縁上端棒状工具により刻み。突起下口縁下端ヘラ状工具による縦位刻み。横位LR縄文。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
24-2	46T I層	III-3	複合口縁。口縁上端半載竹管による刻み。横位・小波状平行沈線文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
24-3	46T I層	III-3	複合口縁。口縁上端棒状工具による刻み。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
24-4	58T II層	III-3	複合口縁。口縁上端棒状工具による刻み。下端三角形刻み。横位LR縄文。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
24-5	57T I層	III-3?	口縁下端縦位刻み。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
24-6	63T II層	III-3	波状複合口縁。口縁下端棒状工具による刻み。横位LR縄文⇒半載竹管による横位・斜位平行沈線⇒半載竹管による縦位刺突列。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
24-7	63T II層	III-3	波状複合口縁。波頂部上端棒状工具刻みによる二文状。口縁下端ヘラ状工具による縦位刻み。斜位沈線文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
24-8	58 T II層	III-3	複合口縁。口縁下端棒状工具による刻み。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-9	58 T I層	III-3	複合口縁。口縁下端棒状工具による縦位刻み。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-10	57T I層	III-3	複合口縁。口縁下端棒状工具による縦位刻み。横位沈線文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
24-11	46T I層	Ⅲ-3	複合口縁。口縁下端へう状工具による縦位刻み。横位縄文⇒横位・斜位平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-12	63T I層	Ⅲ-4	複合口縁。円形貼付文。口縁下端三角刻み。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-13	46T I層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁下端三角刻み。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-14	46T I層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁下端三角刻み。	ヘラナデ	雲母・海綿状骨針
24-15	46T I層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁下端三角刻み。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-16	63 T I層	Ⅲ-4	口縁肥厚。口縁上端刻み。横位LR縄文⇒口縁下端三角刻み。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・金雲母
24-17	58T II層	Ⅲ-4	波状口縁?波頂部二又状。口縁無文。口縁下横位LR縄文⇒半載竹管による横位多条平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-18	58T II層	Ⅲ-4	波状口縁。口縁無文。口縁下横位LR縄文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
24-19	58T II層	Ⅲ-4	波状口縁。縦位弧状凹み。頸部横位爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-20	58T II層	Ⅲ-4	口縁肥厚。横位盲孔列。胴部横位LR縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
24-21	58T II層	Ⅲ-4	波状口縁。口縁肥厚。円形貼付文上凹み。胴部横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-22	58T II層	Ⅲ-4	口縁上端縦位棒状貼付文。口縁下降帯。縦位LR縄文⇒瘤状貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-23	58T II層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁→頸部無文。胴部横位RLR縄文。図24-24・26と同一。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
24-24	58T II層	Ⅲ-4	図24-23・26と同一。	—	—
24-25	58T II層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁無文。胴部横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
24-26	58T II層	Ⅲ-4	図24-23・24と同一。	—	—
24-27	58T II層	Ⅲ-4	口縁無文。胴部横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
24-28	58T II層	Ⅲ-4	口縁指頭による交互押拵。胴部横位LR縄文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
24-29	58T II層	Ⅲ-4	口縁肥厚。無文。横位LR縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
24-30	58T II層	Ⅲ-4	口縁無文。頸部へう状工具による刻み付横位隆帯。横位附加条1種(LR+R?)。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
24-31	58T II層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁横位隆線。隆線上爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-1	58T II層	Ⅲ-4	波状口縁。口縁無文。横位LR縄文⇒頸部平行沈線による横位波状文、胴部上位1条の横位結節凹線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-2	58T II層	Ⅲ-4	波状口縁。波頂部三山状。口縁無文。横位LR縄文⇒平行沈線による2条単位の横位波状文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
25-3	58T II層	Ⅲ-4	波状口縁。口縁隆帯貼付。無文。横位LR縄文⇒2条の横位爪形刺突列。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
25-4	58T II層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁無文。無節L縄文⇒4条の横位爪形文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
25-5	58T II層	Ⅲ-4	波状口縁。口縁無文。口縁下半載竹管による横位刺突列。斜位平行沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
25-6	57T I層	Ⅲ-4	口縁肥厚。無文。縄文⇒横位・弧状・山形状の平行沈線⇒ボタン状貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-7	58T II層	Ⅲ-4	口縁無文。2条以上の横位爪形文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
25-8	46T I層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁上半載竹管による縦位短沈線。	ナデ	金雲母
25-9	58T II層	Ⅲ-4	口縁縦位棒状工具による縦位短沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
25-10	46T I層	Ⅲ-4	口縁縦位多条沈線⇒口縁下横位沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
25-11	46T I層	Ⅲ-4	波状口縁。波頂部三山状。隆帯による弧状文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-12	46T I層	Ⅲ-4	口縁2条の斜位沈線。盲孔。頸部横位沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-13	58T II層	Ⅲ-4	口縁肥厚。2条の斜位太指沈線。頸部横位沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-14	58T I層	Ⅲ-4	口縁斜位多条沈線。頸部半載竹管によるD字形刺付横位隆帯。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
25-15	58T II層	Ⅲ-4	口縁肥厚。口縁山形状突起。瘤状貼付文。2条の下向き弧状縦位爪文(LR)。頸部2条の横位爪形文。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
25-16	46T I層	Ⅲ-4	口縁山形状突起。口縁に沿う2条の縦位爪文(LR)。半載竹管による2条の横位刺突列。	ナデ	雲母・海綿状骨針
25-17	54T I層	Ⅲ-4	口縁山形状突起。口縁上端棒状工具による刻み。口縁斜位1条の縦位爪文(LR)。	ナデ	雲母・海綿状骨針
25-18	58T II層	Ⅲ-4	口縁斜位多条の有節沈線による山形文。頸部横位隆帯貼付。隆帯上位1条・下位2条以上の有節沈線文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-19	58T II層	Ⅲ-4	口縁肥厚。多条の有節沈線による弧状文。小波状沈線。横位爪形文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
25-20	46T I層	Ⅲ-4	口縁肥厚。横位LR縄文⇒口縁摩消⇒口縁上下横位爪形文、胴部2条以上の弧状?の爪形文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
25-21	46T I層	Ⅲ-4	波状口縁。波頂部環状貼付文。貼付文に沿う2条の沈線・爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-22	58T II層	Ⅲ-4	口縁先端三又状の工具による横位・弧状刺突列⇒口縁上下3条単位の横位沈線区画、ボタン状貼付文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
25-23	58T II層	Ⅲ-4	口縁肥厚、台形状突起。口縁凹形・横位・縦位の凹形竹管列文。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-24	58T II層	Ⅲ-4	口縁肥厚。口縁上位横位沈線区画、横位連弧状沈線(下方削り出し)。頸部3条の横位爪形文、1条の結節回転文?	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
25-25	62 T I層	Ⅲ-4	波状口縁。波頂部上端平坦。口縁肥厚、斜位・菱形の爪形文。口縁下端三角刻み。	ナデ	石英・海綿状骨針
25-26	58T II層	Ⅲ-4	波状複合口縁。口縁上端棒状工具による刻み。口縁1条の爪形文による方形区画、区画内2条単位の山形爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-27	56T I層	Ⅲ-4	横位RL縄文⇒上位から横位2条の爪形文、1条の横位沈線、凹形・斜位山形状・斜位の爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
25-28	58T II層	Ⅲ-4	横位RL縄文⇒横位2条以上の爪形文、1条の弧状爪形文。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
25-29	46T I層	Ⅲ-2	横位LR縄文⇒多条の横位爪形文⇒渦巻状貼付文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
26-1	46T I層	Ⅲ-4	波状口縁。波頂部二又以上、波頂部から垂下する縦位棒状・瘤状貼付文。縦位LR縄文⇒1条単位の山形状・斜位沈線、口縁棒状工具による刺突。⇒沈線の上下に沿う爪形文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
26-2	46T I層	Ⅲ-4	口縁肥厚。口縁縦位隆帯、隆帯上ボタン状貼付文。口縁弧状沈線⇒沈線に沿う爪形文。頸部横位爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-3	58T II層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒2条の沈線⇒沈線間ボタン状貼付文列⇒沈線の上下に沿う爪形文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
26-4	46T I層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒横位・山形状浮線文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
26-5	46T I層	Ⅲ-4	横位無節L縄文⇒頸部縄文摩消⇒横位・縦位結節浮線文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-6	46T I層	Ⅲ-4	口縁上端刻み。横位附加条1種(LR+R)⇒横位・縦位沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-7	46T I層	Ⅲ-4	波状口縁。波頂部三山状。横位LR縄文⇒波頂部2条単位の沈線による上向弧状文、口縁に沿う1条の沈線、頸部横位沈線区画⇒2条以上の斜位沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-8	46T I層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒2条単位の弧状・渦巻状沈線文、渦巻文の中心爪形文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
26-9	58T II層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒斜位短沈線⇒縦位沈線⇒横位沈線区画。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
26-10	46T I層	Ⅲ-4	頸部半截竹管による山形沈線。頸部下位斜位刻み付隆帯区画。横位LR縄文⇒半截竹管による斜位菱形状?・波状平行沈線⇒横位豆粒状貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-11	57T I層	Ⅲ-4	頸部多条の斜位沈線。頸部下位ヘラ状工具による横位刺突列、斜位刻み付隆帯。胴部横位LR?縄文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
26-12	58T II層	Ⅲ-4	2条の横位沈線⇒沈線に沿う1条の山形沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
26-13	58T II層	Ⅲ-4	口縁縦位隆帯貼付(突起)。口縁下2条の横位沈線⇒沈線間爪形文、縦位多条沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-14	46T I層	Ⅲ-4	口縁縦位隆帯貼付。隆帯上縦位沈線。口縁上下横位1条の沈線区画、区画内山形・横位・下向連弧状の多条沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
26-15	63T I層	Ⅲ-4	口縁上下横位1条の沈線区画⇒区画内2条単位の山形沈線、1条の下向連弧状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
26-16	58T II層	Ⅲ-4	口縁上横位3条、口縁下横位2条以上の沈線区画、区画内縦位多条沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-17	62 T I層	Ⅲ-4	口縁横位沈線⇒口縁下端刻み。横位沈線⇒縦位多条沈線。2条以上の山形沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-18	54T I層	Ⅲ-4	口縁上端棒状工具による刻み。口縁上横位2条の爪形文、多段の山形平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-19	58T II層	Ⅲ-4	口縁上縦位棒状工具による刻み付横位隆帯。山形?平行沈線。	ヘラナデ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
26-20	58T II層	Ⅲ-4	口縁内面隆帯貼付。口縁上下2条単位の横位ソーマン状貼付文区画、区画内連続菱形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-21	58T II層	Ⅲ-4	口縁横位隆帯貼付⇒縦位幅広隆帯(L字状)。ソーマン状貼付文による方形区画、区画内山形文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
26-22	58 T I層	Ⅲ-4	頸部横位・縦位の隆帯。口縁横位・山形状のソーマン状貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
26-23	63 T I層	Ⅲ-4	頸部横位隆帯区画。口縁格子状のソーマン状貼付文。	ミガキ	雲母・金雲母・石英
27-1	46T I層	Ⅲ-6	横位多条平行沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
27-2	46T I層	Ⅲ-6	横位2条以上の刺突列・横位多条平行沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
27-3	58 T II層	Ⅲ-6	横位・斜位・弧状の多条平行沈線。沈線間半載竹管による刺突。	ナデ	雲母・海綿状骨針
27-4	58 T II層	Ⅲ-6	縄文⇒半載竹管による山形平行沈線、横位隆帯区画、横位多条平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
27-5	58 T II層	Ⅲ-6	平行沈線による連結木葉文?	ナデ	雲母・海綿状骨針
27-6	46T I層	Ⅲ-6	2条の幅広爪形文(幅1.2cm)・半載竹管による1条の刺突列。半載竹管による横位条線文。	ナデ	石英・海綿状骨針
27-7	46T I層・58 T II層	Ⅲ-6	多段の横位の斜位刺突列・変形爪形文(幅1.2cm)。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
27-8	58 T II層	Ⅲ-6	横位多条有筋沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針・石英
27-9	46T I層	Ⅲ-6	半載竹管による横位多条刺突列、横位多条平行沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
27-10	46T I層	Ⅲ-6	アナダラ麻の貝殻縦線による縦位多段波状文。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
27-11	58T II層	Ⅲ-6	口縁縦位ソーマン状貼付文。口縁下横位3条の半隆起線、多条の矢羽状半隆起線。	ナデ	金雲母・雲母
27-12	46T I層	Ⅲ-5	横位附加条1種(LR+R)。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
27-13	46T I層	Ⅲ-5	口縁下輪横痕。横位LR縄文。補修孔有。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
27-14	58 T I層	Ⅲ-5	波状口縁。横位LR縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
27-15	58 T I層	Ⅲ-5	横位RL縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
27-16	46T I層	Ⅲ-5	口縁無文。横位LR縄文(端部結節)。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針・赤色粒
27-17	54T I層	Ⅲ-5	波状口縁。横位RL縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
27-18	58 T I層	Ⅲ-5	横位LR縄文・結節回転文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針・赤色粒
27-19	58 T II層	Ⅲ-5	横位LR縄文・結節回転文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針・赤色粒
27-20	46T I層	Ⅲ-5	縦位LR・RL羽状縄文・結節回転文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
27-21	58 T II層	Ⅲ-5	横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
27-22	58 T II層	Ⅲ-5	横位LR・RL縄文。底部副代痕。	ナデ	雲母・海綿状骨針
28-1	58 T II層	IV-1	口縁上端縦位刻み、内面隆帯。口縁横位2条の沈線⇒斜位・弧状2条単位の沈線⇒2条の三角形状の沈線⇒頸部隆帯貼付⇒口縁・隆帯縦位刻み、梯子状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
28-2	58T I層	IV-1	口縁横位2条の沈線⇒縦位刻み、下端三角刻み列、弧状の2条の沈線⇒梯子状短沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
28-3	58 T II層	IV-1	図28-4と同一。口縁内外面隆帯貼付。口縁横位1条の沈線区画、縦位刻み。2条単位の斜位沈線⇒梯子状短沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
28-4	58 T II層	IV-1	図28-3と同一。2条単位の斜位・渦巻状沈線⇒梯子状短沈線・渦巻中心円形刺突。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
28-5	46 T I層	IV-1	口縁横位1条の沈線⇒縦位刻み。斜位・弧状沈線⇒横位多条短沈線。頸部縦位刻み付隆帯貼付。	ナデ	石英・海綿状骨針
28-6	46 T I層	IV-1	波状口縁。斜位・弧状・三角形の多条沈線⇒頸部斜位・山形状刻み付隆帯区画⇒波頂部渦巻状・波底部縦位棒状の刻み付隆帯、余白部に刺突列充填。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
28-7	46 T I層	IV-1	縦位RL縄文・結節回転文⇒口縁1条の沈線区画、口縁下2条の沈線による三角形区画、縦位区画⇒口縁縦位刻み⇒沈線に沿う三角刻み。	ハラナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
28-8	58 T II層	IV-1	口縁下隆帯貼付。口縁下縦位刻み付隆帯⇒横位2条の沈線。胴部LR縄文・結節回転文。	ハラナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
28-9	46 T I層	IV-1	波状口縁。口縁・口縁下縦位刻み付隆帯⇒区画内棒状工具による円形刺突。胴部縦位LR縄文・結節回転文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
28-10	58 T II層	IV-1	口縁縦位刻み付隆帯⇒横位多条沈線⇒斜位2条単位の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
28-11	58 T II層	IV-1	口縁下瘤状貼付文⇒横位多条沈線⇒口縁縦位刻み⇒沈線同棒状工具による交互刺突。	ナデ	雲母・海綿状骨針
28-12	63T I層	IV-1	口縁縦位刻み、刻み付隆帯、隆帯に沿う沈線、隆帯下三角刻み。縦位結節回転文⇒口縁下横位2条の沈線⇒曲線状の2条の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
28-13	46 T I層	IV-1	口縁横位1条の沈線区画、区画内縦位刻み。ハ字状の刻み付隆帯⇒隆帯に沿う1条の単沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
28-14	58 T II層	IV-1	口縁上下横位1条の沈線区画。区画内多段の山形沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
28-15	58T I層	IV-1	口縁横位平行沈線、3段以上の波状平行沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
28-16	62 T I層	IV-1	2段以上の山形平行沈線、下端横位平行沈線文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
28-17	63T II層	IV-1	横位多条平行沈線⇒山形平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
28-18	58 T II層	IV-1	横位・斜位(菱形状?)平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
28-19	46 T I層	IV-1	口縁山形沈線、縦位LR縄文・結節回転文⇒頸部横位2条の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
28-20	54T I層	IV-1	口縁上端刻み。口縁刻み付隆帯、横位4条の沈線、頸部刻み付隆帯、横位3条の沈線文(一部交互刺突)、弧状の多条沈線(一部交互刺突)。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
28-21	58 T II層	IV-1	横位・流水状の平行沈線⇒沈線間刺突・交互刺突。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
28-22	63T I層	IV-1	横位5条の沈線⇒交互刺突。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
28-23	46 T I層	IV-1	波状口縁。波頂部突起。横位LR縄文⇒2条単位の沈線による三角形区画、区画中央三角刺突。	ナデ	雲母・石英
28-24	54T I層	IV-1	波状口縁。波頂部2条の単沈線による三角形区画⇒一部沈線間円形竹管文。頸部横位3条の沈線⇒縦位2条の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
28-25	54T I層	IV-1	波状口縁。波頂部押捺による3個の突起。口縁上端刻み。波頂部から垂下する3条の沈線。横位・弧状の2条の沈線⇒沈線間三角刺突。	ナデ	雲母・海綿状骨針
28-26	46 T I層	IV-1	縦位隆帯前離。横位・斜位2条単位の単沈線。沈線間一部円形竹管文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
28-27	46 T I層	IV-1	口縁上端半截竹管による刺突。口縁半截竹管による1条の刺突列。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
28-28	58 T II層	IV-1	口縁横位1条の沈線。半截竹管による1条の刺突列。	ナデ	金雲母
28-29	54T I層	IV-1	横位多条沈線、一部沈線間円形竹管文充填。	ナデ	石英・海綿状骨針
28-30	58 T II層	IV-1	横位多条単沈線。沈線に沿う三角刺突。	ナデ	雲母・金雲母・石英
28-31	58 T II層	IV-1	断面状の多条沈線。棒状工具による円形刺突。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
29-1	58 T II層	IV-1	口縁横位沈線区画(一部のみ)、横位・縦位円形竹管文。	ハラナデ	雲母・海綿状骨針
29-2	58 T II層	IV-2	波状口縁。口縁上端刻み。口縁に沿う2条の有節沈線、頸部横位3条の有節沈線⇒波底部交点斜位刺突。胴部横位LR縄文⇒胴部上位隆線による楕円形・弧状(三角形)区画、縦位隆線⇒隆線に沿う有節沈線。口縁内面沈線・三角印期文。	ミガキ	金雲母
29-3	63T II層	IV-2	波状口縁。口縁上端刻み。口縁内面沈線。波頂部内外面環状貼付文。口縁多条有節沈線による三角形区画、区画内三角刺突。頸部無文。胴部縦位LR縄文⇒胴部上位隆線による楕円形区画、区画内隆線に沿う1条の有節沈線、胴部中～下位隆線による方形・弧状・三角形区画、隆線に沿う有節沈線、区画内・交点に三角刺突。	ミガキ	雲母・金雲母
29-4	63 T I層	IV-2	縦位LR縄文⇒横位3条の縄任直文(LR)。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
29-5	54T II層	IV-3	浅鉢。波状口縁(4単位)。波頂部瘤状隆帯貼付による三山状の突起。外面ナデ・ミガキ。底部木炭痕ナデ消し。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
29-6	58 T II層	IV-3	外面ナデ。底部網代痕。	ナデ	雲母・海綿状骨針
29-7	54 T II層	IV-4	横位無節LR縄文。底部網代痕。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
29-8	46 T I層	IV-4	横位LR縄文、下端消。底部網代痕。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
29-9	46 T I層	IV-3	外面ナデ。底部網代痕。	ナデ	雲母・海綿状骨針
30-1	58 T II層	IV-1	口縁上下横位隆帯⇒2条の縦位刻み付隆帯。胴部縦位結節回転文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・石英
30-2	58T II層	IV-1	小波状複合口縁。口縁LR縄文。頸部LR縄文?。瘤状貼付文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
30-3	54T I層	IV-1	口縁下断面三角の横位微隆起線、横位把手、頸部断面三角の刻み付横位隆線⇒横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
30-4	63T II層	IV-4	口縁横位割み付隆線。縦位LR縄文。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
30-5	54T I層	IV-4	複合口縁。口縁山形状小突起。頸部割み付断面三角の横位隆線。横位RL縄文、結節回転文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
30-6	54T I層	IV-4	口縁横位・胴部一部縦位LR縄文。頸部断面三角の割み付横位隆線、断面三角の割み付Y字状隆線。	ミガキ	雲母・金雲母
30-7	63T II層	IV-4	横位・Y字状の断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
30-8	54T I層	IV-4	口縁縦位・頸部横位の断面三角の隆線。縦位LR縄文・口縁内面輪積痕。	ミガキ	海綿状骨針
30-9	63T I層	IV-4	縦位無節L縄文。頸部割み付横位隆線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
30-10	54T I層	IV-4	頸部無文、断面三角の横位割み付隆線⇒横位LR縄文。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
30-11	58T II層	IV-4	頸部横位隆線⇒縦位・横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
30-12	63T II層	IV-4	頸部横位隆線⇒隆線上LR縄文。縦位LR縄文。頸部内面輪積痕。	ハラナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
30-13	58T II層	IV-4	断面三角のY字状隆線。横位RL縄文。	ナデ	金雲母・石英
30-14	54T II層	IV-4	複合口縁。口縁上端割み。横位附加条1種(RL+R?)。縄文はわずかに残すのみ。	ハラナデ	雲母・海綿状骨針・石英
30-15	54T I層	IV-4	複合口縁。口縁無文。横位LR縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
30-16	58T II層	IV-4	複合口縁。口縁結節回転文。頸部横位LR縄文・結節回転文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
30-17	54T I層	IV-4	複合口縁。口縁上端二又状工具による割み。口縁横位・頸部縦位附加条1種(LR?+R)。	ナデ	雲母・海綿状骨針
30-18	58T I層	IV-4	口縁3単位以上の山形状小突起。横位LR縄文・結節回転文。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
30-19	57T I層	IV-4	口縁横位LR縄文、胴部縦位LR縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
30-20	58T I層	IV-4	縦位RL縄文・附加条1種(LR+R)。	ハラナデ	雲母・海綿状骨針
30-21	58T II層	IV-4	口縁無文。胴部横位附加条1種(RL+L)⇒頸部横位結節回転文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
31-1	54T I層	IV-2	波状口縁。波頂部U字状、上端棒状工具による割み。下向連弧状隆線、隆線に沿う沈線、縦長円形状の多条沈線、円形中央半軸竹管による縦位刺突列、交互刺突文。図31-2と同一?	ミガキ	雲母・海綿状骨針
31-2	54T I層	IV-2	波状口縁。縦位RL縄文⇒隆沈線による三角形・弧状区画、隆沈線に沿う多条沈線、沈線間交互刺突。図31-1と同一?	ミガキ	雲母・海綿状骨針
31-3	58T I層	IV-2	縦位LR縄文⇒断面三角の隆線による三角形区画、口縁・隆線に沿う2条単位の沈線。図31-4と同一。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
31-4	58T II層	IV-2	縦位LR縄文⇒断面三角の隆線による楕円形・弧状区画、隆線に沿う2条単位の沈線。図31-3と同一。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
31-5	46T I層	IV-2	口縁山形状小突起。鞭手状・斜位・弧状の2条単位有節沈線、頸部横位沈線⇒余白部に棒状工具による刺突。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
31-6	57T I層	IV-2	縦位LR縄文⇒口縁横位1条の有節沈線、口縁下位断面三角の横位隆線、隆線に沿う有節沈線。	ミガキ	雲母・石英
31-7	57T I層	IV-2	縦位LR縄文⇒曲線状(クランク状?)の2~3条単位の有節沈線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
31-8	54T I層	IV-2	口縁渦巻状隆帯による突起。突起から垂下する弧状隆帯。横位1条の沈線、上下向連弧状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
31-9	63T II層	IV-2	口縁横位・縦位爪形文。頸部横位爪形文付隆線、隆線に沿う爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
31-10	46T I層	IV-2	波状口縁。波底部棒状工具による押除。口縁1条の横位隆帯、隆帯上下1条の沈線。縦位・横位LR縄文⇒1条の沈線による下向連弧状文・縦長渦巻状文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
31-11	63T I層	IV-2	縦位LR縄文⇒縦位隆線、縦位・横位・波状・曲線状の沈線。	ハラナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
31-12	54T I層	IV-2	2条単位の曲線状沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
31-13	54T I層	IV-2	縦位LR縄文⇒2条単位の弧状沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
31-14	63T I層	IV-2	口縁割み付隆帯による楕円形区画、断面三角の縦位隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
31-15	63T I層	IV-2	口縁隆線による楕円形区画、下位のみ割み付。縦位LR縄文。頸部隆線に沿う横位3条の沈線。縦位弧状・曲線状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
31-16	63T II層	IV-2	口縁隆線による楕円形区画、下端のみ縄圧痕(LR)による刻み。頸部縄圧痕(LR?)による横位刻み列。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
31-17	58T II層	IV-2	複合口縁。口縁横位渦巻状隆帯。胴部縦位LR縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
31-18	63 T II層	IV-2	横位・縦位の爪形文・隆線・2条単位の沈線。縦位LR縄文。	ナデ	雲母・石英・金雲母
31-19	46 T I層	IV-2	縦位RL縄文⇒横位刻み付隆線⇒弧状・楕円状の隆沈線。	ミガキ	雲母・石英・金雲母
31-20	63 T I層	IV-2	浅鉢。屈曲部隆帯による楕円形区画、突出。沈線による渦巻文、方形区画⇒区画内交互刺突文。	ミガキ	金雲母
31-21	54T I層	IV-2	縦位LR縄文⇒隆線によるクラック状文⇒隆線上下に沿う1条の沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
31-22	63T II層	IV-2	縦位LR縄文⇒頸部山形波状沈線、横位2条の沈線、Y字状隆線、隆線に沿う沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
31-23	63T II層	IV-2	縦位LR縄文⇒横位・縦位隆沈線、多条の上向連弧状沈線。	ミガキ	金雲母
31-24	63T II層	IV-2	縦位LR縄文⇒縄圧痕文(LR)付縦位隆線、隆線に沿う2条単位の沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
32-1	54T I層	IV-2	波状口縁。波頂部上端棒状工具による4単位の刻み、多条の斜位・弧状縄圧痕文(LR)。	ナデ	雲母・海綿状骨針
32-2	58T II層	IV-2	波状口縁。波頂部上端縦位刻み。波頂部1条の弧状縄圧痕文(L)。口縁に沿う2条の縄圧痕文(L)。口縁内面隆帯。	ナデ	雲母・海綿状骨針
32-3	54T II層	IV-2	口縁上端縄圧痕文?による刻み。横位無節L縄文⇒頸部横位2条の縄圧痕文(L)。	ナデ	雲母・海綿状骨針
32-4	62 T I層	IV-2	口縁山形状小突起。横位LR縄文⇒頸部横位2条の縄圧痕文(LR)、瘤状貼付文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
32-5	57T I層	IV-2	口縁上端二又状の瘤状貼付、外面小Y字状?貼付文。縦位無節L?縄文⇒口縁上下横位1条の縄圧痕文(L?)。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
32-6	58T II層	IV-2	口縁横位2条の縄圧痕文(R)、横位1条の平行沈線、横位無節R縄文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
32-7	58T II層	IV-2	縦位多条縄圧痕文(LR)。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
32-8	46T I層	IV-2	口縁上端縄圧痕(L)による刻み。口縁下輪横位横位多条の縄圧痕文(L)。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
32-9	54T I層	IV-2	波状口縁。横位・斜位LR縄文⇒縄圧痕文(LR)付隆線による波頂部から垂下する渦巻文。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
32-10	57T I層	IV-2	上下2条の断面三角の刻み付横位隆線⇒断面三角の縦位弧状隆線(楕円形区画)⇒縦位RL縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
32-11	54T II層	IV-2	口縁隆帯貼付による4単位の山形状小突起。横位附加条1種(RL+R)。	ハラナデ	雲母・海綿状骨針
32-12	63T II層	IV-2	口縁下横位隆帯。縦位RL縄文⇒横位2条の沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
32-13	46T I層	IV-2?	斜位2条以上の沈線⇒刺突列充填。	ハラナデ	雲母・海綿状骨針
33-1	57T I層	IV-3	浅鉢。口縁隆帯貼付。ハラナデ。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
33-2	58T II層	IV-3	口縁上端斜位刻み。ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
33-3	54T I層	IV-3	複合口縁。口縁上端押捺による小波状。ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
33-4	63T II層	IV-3	口縁内外面隆帯貼付、外面隆帯横位押捺。ナデ・ミガキ。	ナデ・ミガキ	金雲母・海綿状骨針
33-5	58T II層	IV-3	口縁上端二又状工具による刻み。ナデ。補修工有。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
33-6	46T I層	IV-3	複合口縁。口縁上端横位押捺。ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
33-7	58T II層	IV-3	口縁三日月状突起。突起中央くぼみ。口縁内面隆帯貼付。ミガキ。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
33-8	58T II層	IV-3	口縁隆帯貼付。ナデ・ミガキ。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
33-9	63T I層	IV-3	頸部横位1条の沈線。ミガキ。内面赤彩残す。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
33-10	63T II層	IV-3	複合口縁。ナデ。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
33-11	63T I層	IV-3	ナデ。	ハラナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
33-12	58T II層	IV-3	ハラナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
33-13	63T I層	IV-3	ハラナデ。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
33-14	46T I層	IV-3	ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
33-15	58T II層	IV-3	複合口縁。ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
33-16	54T I層	IV-3	ナデ。	ハラナデ・ミガキ	雲母・海綿状骨針

図号No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
33-17	54T I層	IV-3	複合口縁。ナデ。	ナデ	雲母・金雲母
33-18	58T II層	IV-5	多段輪積痕。輪積痕上押捺。	ナデ	雲母・石英
33-19	46T I層	IV-5	多段輪積痕。輪積痕上押捺。	ナデ	雲母・海綿状骨針
33-20	46T I層	IV-5	斜位多条平行沈線。横位2条の平行沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
33-21	58T II層	IV-5	蓮華文、2条の横位半隆起線、無文帯、1条以上の横位半隆起線。	ナデ	雲母
34-1	58 T II層	V-1	口縁上端波状のソーマン状隆線。縦位LR縄文⇒横位1条の波状沈線、横位3条沈線、横位1条波状沈線。	ナデ	金雲母・石英
34-2	58 T II層	V-1	口縁上端隆帯貼付。口縁下波状・横位ソーマン状隆線文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
34-3	63 T I層	V-1	口縁隆線による上下2段の楕円形区画。上位区画内爪形文、下位隆線刻み。胴部縦位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
34-4	63 T I層	V-1	口縁隆帯貼付、横位爪形文。口縁下端下方からの押捺。縦位LR縄文。	ミガキ	雲母・石英
34-5	63 T II層	V-1	口縁有筋沈線、口縁下断面三角の隆線による楕円形区画、区画内横位有筋沈線、頸部縦位多条の有筋沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
34-6	57T I層	V-1	口縁隆線による楕円文・渦巻文、爪形文。区画内爪形文。縦位LR縄文。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
34-7	57T I層	V-1	口縁隆帯貼付⇒隆帯上2条の爪形文。縦位LR縄文。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
34-8	63 T I層	V-1	口縁下端隆帯貼付⇒爪形文⇒下端隆帯貼付⇒下方からの押捺。頸部隆線貼付⇒下方からの押捺。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
34-9	56 T I層	V-1	口縁隆帯貼付⇒隆帯上2条の有筋沈線。縦位LR縄文⇒対向する2条単位の逆弧状沈線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
34-10	63 T I層	V-1	口縁隆帯貼付による楕円形区画、区画内無筋沈線、2条単位の向上逆弧状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母
34-11	46 T I層	V-1	口縁隆帯貼付⇒横位・楕円形区画・渦巻状ソーマン状隆線⇒区画内爪形文。	ナデ	金雲母・石英・赤色粒
34-12	63T II層	V-1	口縁有筋沈線。口縁上部横位波状1条、縦位3条、口縁下部横位2条・波状1条のソーマン状隆線文。図31-13と同一。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
34-13	63T II層	V-1	図31-12と同一。	-	-
34-14	63 T II層	V-1	突起。突起上面・内面・側面にソーマン状隆線による渦巻文・S字状文。外面渦巻状隆帯。	-	雲母・金雲母・海綿状骨針
34-15	58 T II層	V-1	横位の渦巻状突起。突起上面S字状貼付文。口縁隆帯による2段の横区画、区画内無筋沈線。頸部縦位LR縄文⇒2条以上の波状沈線。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
34-16	63 T I層	V-1	横方向の渦巻状突起。突起上面S字状・渦巻状貼付文。外面横位・縦位・斜位・曲線状の単沈線。	-	海綿状骨針・赤色粒
34-17	58 T II層	V-1	縦位LR縄文⇒横位・縦位隆線⇒横位隆線に縄圧痕文(LR)、横位・縦位・弧状の2~3条単位の沈線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
34-18	63 T I層	V-1	頸部縦位LR縄文、胴部横位LR?縄文⇒横位・縦位渦巻状の隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
34-19	54 T I層	V-1	縦位LR縄文⇒横位・縦位・弧状の隆沈線、横位波状のソーマン状隆線。	ミガキ	雲母・金雲母
34-20	57T I層	V-1	縦位LR縄文⇒渦巻状の3条単位の沈線。	ナデ	雲母・石英
34-21	57T I層	V-1	縦位LR縄文⇒縦位・渦巻状多条沈線。	ナデ	雲母
34-22	57T I層	V-1	縦位R摺糸文⇒クラック状の3条単位の沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
35-1	63 T I層	V-2	縦位・横位LR縄文⇒隆線による口縁上下区画・渦巻状・刺先状文。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
35-2	54 T I層	V-2	縦位LR縄文⇒隆沈線による口縁上下区画・渦巻状文。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
35-3	63 T II層	V-2	横位LR縄文⇒隆沈線による三角形区画。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
35-4	63 T I層	V-2	横位LR縄文⇒横位・縦位隆沈線。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
35-5	63 T I層	V-2	波状口縁。縦位LR縄文⇒隆線による口縁上位区画・渦巻状文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
35-6	46 T I層	V-2	横位LR縄文⇒横位隆沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
35-7	58 T II層	V-2	横位LR縄文⇒口縁下横位沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
35-8	57T I層	V-2	隆線による渦巻状?突起。突起上下渦巻状沈線。楕円形区画縦位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
35-9	58 T II層	V-2	口縁上端1条の沈線。横方向への隆線による渦巻状突起。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
35-10	63 T I層	V-2	箱状突起。突起内外側面隆沈線による渦巻文。	-	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
35-11	63 T I 層	V-2	口縁縦位 L 燃糸文⇒隆沈線による渦巻文、口縁下横位隆帯。胴部以下縦位多条条線文⇒横位の多条沈線⇒縦位弧状の多条沈線。	ナゲ、ミガキ	雲母・海綿状骨針
35-12	63 T I 層	V-2	口縁縦位 LR 縄文⇒口縁下横位隆沈線⇒胴部縦位 LR 縄文⇒横位・縦位多条沈線。頸部無文。	ナゲ	雲母・石英・赤色粒
35-13	63 T I 層	V-2	縦位 LR 縄文⇒口縁下横位多条の隆線、胴部横位多条沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
35-14	63 T II 層	V-2	波状口縁。渦巻状隆沈線。縦位 LR 縄文⇒縦位沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
35-15	58 T II 層	V-2	波状口縁。波頂部上端渦巻状沈線。	ナゲ	雲母・石英
35-16	63 T II 層	V-2	縦位 LR 縄文⇒縦位・渦巻状の3条単位の隆沈線。	ナゲ	金雲母・石英
35-17	46 T I 層	V-2	縦位 LR 縄文⇒隆線・2条単位の沈線による連結渦巻文。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
35-18	63 T I 層	V-2	縦位 RLR 縄文⇒縦位・円形・刺先状の沈線。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
35-19	63 T I 層	V-2	頸部横位隆沈線。胴部横位・縦位多条沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英
36-1	63 T I 層	V-2	縦位 R 燃糸文⇒連結渦巻状の隆沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
36-2	63 T I 層	V-2	縦位 LR 縄文⇒渦巻状の隆沈線。	ミガキ	金雲母・石英
36-3	58 T II 層	V-2	縦位条線文⇒刺先状・連結渦巻状の隆沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
36-4	63 T II 層	V-2	縦位 LR 縄文⇒渦巻状の隆沈線。	ナゲ	金雲母
36-5	57 T I 層	V-2	横位・縦位 RL 縄文⇒渦巻状の隆沈線・沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
36-6	63 T I 層	V-2	縦位 LR 縄文⇒3条単位の縦位沈線⇒下端・底部ミガキによる摩消。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
37-1	58 T II 層	VI-1	波状口縁。縦位条線⇒渦巻状隆線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
37-2	54 T II 層	VI-1	波状口縁。縦位 LR 縄文⇒渦巻状隆線。	ナゲ	雲母・石英
37-3	54 T I 層	VI-1	波状口縁。縦位 LR 縄文⇒隆線による渦巻状文、楕円形区画。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
37-4	57 T I 層	VI-1	波状口縁。横位 RL 縄文⇒隆線による渦巻状文、楕円形区画。	ナゲ	雲母・金雲母・海綿状骨針
37-5	62 T I 層	VI-1	波状口縁。横位 LR 縄文⇒渦巻状隆線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
37-6	58 T II 層	VI-1	波状口縁⇒隆線による楕円形区画⇒区画内縦位多条沈線。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
37-7	63 T I 層	VI-1	隆沈線による弧状区画⇒区画内縦位多条沈線。頸部縦位沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英
37-8	56 T I 層	VI-1	隆沈線による渦巻文、楕円形区画⇒区画内刺突。頸部無文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
37-9	57 T I 層	VI-1	縦位 RLR 縄文⇒連結渦巻状隆沈線。	ナゲ	雲母・金雲母・石英
37-10	46 T I 層	VI-1	波状口縁。縦位 L 燃糸文⇒渦巻状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英
37-11	58 T II 層	VI-1	縦位 LR 縄文⇒隆沈線。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
37-12	54 T I 層	VI-1	縦位 RL 縄文⇒隆沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
37-13	57 T II 層	VI-1	縦位 LR 縄文⇒沈線。	ナゲ	雲母・石英
37-14	63 T I 層	VI-1	浅鉢。断面三角の隆線、つまみ状の突起。	ミガキ	金雲母
38-1	54 T I 層	VI-1	縦位 LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
38-2	54 T I 層	VI-1	縦位 LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
38-3	58 T II 層	VI	縦位 LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
38-4	47 T I 層	VI-1	縦位 LR 縄文⇒隆沈線。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
38-5	63 T I 層	VI-2	波状口縁。縦位 LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
38-6	63 T I 層	VI-1	縦位条線文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
38-7	54 T I 層	VI-1	縦位 RL 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針・赤色粒
38-8	54 T I 層	VI-1	縦位・横位 LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
38-9	63 T I 層	VI-2	縦位 LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
38-10	63 T I 層	VI-2	縦位 LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針・赤色粒
38-11	54 T I 層	VI-2	縦位 RL 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母
38-12	63 T I 層	VI-2	縦位 LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
38-13	46 T I 層	VI-2	縦位 LR 縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
38-14	56 T I 層	VI	半截竹管による縦位条線文⇒口縁摩消。	ナゲ	雲母・金雲母・石英
38-15	56 T I 層	VI	縦位 LR 縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・石英
38-16	58 T II 層	VI-3	半截竹管による縦位条線文⇒半截竹管による波状平行沈線。	ナゲ	石英・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
38-17	63 T I 層	VI	口縁横位 LR 縄文、胴部縦位 LR 縄文⇒口縁下横位沈線。	ナデ	雲母・金雲母
39-1	63 T II 層	VI-1	口縁斜め付隆帯区画。条線文による格子状文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
39-2	57 T I 層	VI-1	波状口縁。口縁隆帯区画。波頂部から縦位の斜め付ノ字状隆帯。縦位 LR 縄文。	ナデ	雲母・石英
39-3	62 T I 層	VI-1	波状口縁。口縁斜刺付隆帯区画。波頂部からノ字状隆帯、中央沈線。	ミガキ	雲母
39-4	63 T I 層	VI-1	口縁隆帯・沈線区画。横位 LR 縄文⇒弧状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
39-5	58 T II 層	VI-1	波状口縁。波頂部上端隆帯貼付。波頂部貫通孔、盲孔。波頂部から縦位 2 条の鎖状隆帯、隆帯上凹形浮文。口縁内面盲孔。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
39-6	57 T I 層	VI-1	波状口縁。縦位 LR 縄文⇒縦位多条沈線。	ミガキ	雲母・石英
39-7	58 T II 層	VI-2	口縁 1 条の沈線、盲孔。縦位弧状の隆帯。	ミガキ	金雲母
39-8	62 T I 層	VI	口縁環状突起。突起部貫通孔。突起部から橋状把手、把手上に盲孔・沈線。口縁楕円形沈線。口縁内面盲孔。	ナデ	金雲母・石英
39-9	46 T I 層	VI	橋状のひわりを持つ把手。把手上端凹形浮文。把手上沈線、盲孔。口縁 1 条の沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
39-10	62 T I 層	VI-2	波状口縁。波頂部貫通孔。波頂部上端弧状隆帯。口縁盲孔、沈線。口縁沈線区画。縄文⇒沈線⇒盲孔。口縁内面沈線、盲孔。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
39-11	56 T I 層	VI-2	波状口縁。波頂部貫通孔。波頂部上端沈線。口縁盲孔、沈線。口縁沈線区画。横位 LR 縄文⇒沈線⇒盲孔。口縁内面沈線、盲孔。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
39-12	49 T I 層	VI-1	横位 LR 縄文⇒沈線、凹形浮文。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
39-13	56 T I 層	VI-1	横位・縦位 LR 縄文⇒鎖状隆帯、縦位蛇行状沈線、斜位沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
39-14	58 T II 層	VI-1	口縁隆帯・沈線区画。縦位・斜位 RLR 縄文⇒沈線⇒凹形浮文。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
39-15	46 T I 層	VI-2?	横位 LR 縄文⇒沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
39-16	56 T I 層	VI-2	横位 LR 縄文⇒沈線、縦位列点状沈線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
39-17	46 T I 層	VI	縦位条線文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
39-18	56 T I 層	VI-1?	2 条単位の沈線による縦位菱形文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針・赤色粒
40-1	63 T I 層	VI-3	横位 LR 縄文⇒沈線、凹形刺突列。	ミガキ	雲母・石英
40-2	56 T I 層	X	縦位蛇行曲条線文(5~6 本単位)。	ナデ	石英・海綿状骨針
40-3	57 T I 層	IX	下端横位 2 条の沈線。底部ナデ。	ナデ	雲母・金雲母・石英
41-1	I 区ナストビット 層	IV-2	縦位 LR 縄文⇒断面三角の縦位隆帯。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
41-2	I 区ナストビット 層	IV-2	縦位隆沈線、横位 2 条単位の沈線⇒沈線間三角刺突・2 条単位の沈線による縦位楕円文。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
41-3	I 区ナストビット 層	IV-5	縦位蛇行状隆帯、隆帯に沿う 1 条の有節沈線、多段の幅広爪形文。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
41-4	I 区ナストビット 層	V-2	突起。渦巻状隆沈線、下端沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
41-5	I 区ナストビット 層	VI-1	縦位 RL 縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
41-6	I 区ヤブトレンチ 層上面	V・VI	縦位・斜位 RL 縄文⇒胴部下端ナデ消し。底部ナデ。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
41-7	I 区ヤブトレンチ 層上面	II	頸部横位凹形竹管文。	ナデ	雲母・海綿状骨針・繊維
41-8	I 区ヤブトレンチ 層上面	II	横位 2 条以上の結節回転文⇒横位 2 条単位の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針・繊維
41-9	I 区ヤブトレンチ 層上面	III-6	複合口縁。口縁縦位棒状工具による刻み。変形爪形文(幅 1.7 cm)、斜位刺突列、変形爪形文、横位平行沈線。補修孔有。	ナデ	金雲母・石英
41-10	I 区ヤブトレンチ 層上面	III-6	横位・縦位・鋸歯状の多条半隆起線。	ナデ	金雲母
41-11	I 区ヤブトレンチ 層上面	III-3	複合口縁。口縁下端へう状工具による刺突。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
41-12	I 区ヤブトレンチ 層上面	III-4	複合口縁。口縁下端三角刻み。横位 LR ⇒ 縄文⇒横位山形状平行沈線。	ナデ	海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
41-13	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅲ-4	口縁山形状小突起。突起部円形の爪形文、横位爪形文、横位平行沈線。	ナデ	石英・海綿状骨針
41-14	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-1	縦位菱形沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
41-15	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-2	口縁下横位隆帯、隆帯の上下に沿う有筋沈線。横位1条の波状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
41-16	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-5	口縁縦位割み付隆帯。三角形刺突付縦位隆帯⇒横位隆帯による口縁区画⇒区画内有筋沈線による多葉山形文⇒隆帯に沿う1・2条の有筋沈線(刺突)。胴部横位幅爪形文。	ナデ	金雲母・石英
41-17	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-2	波状口縁。波頂部扇形突起、上端割み。口縁に沿う断面三角の隆線、多条沈線。波頂部から垂下する縦位多条沈線。	ナデ	海綿状骨針・赤色粒
41-18	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-2	波状口縁。波頂部二又状。横位LR縄文⇒波頂部から垂下する縦位多条縄文(LR)⇒口縁に沿う2条単位の縄文(LR)。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
41-19	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-2	縦位LR?縄文⇒山形状の縄文(LR?)付隆帯。	ナデ	雲母・石英
41-20	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-2	断面三角の縦位2条の隆線、隆線に沿う沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
41-21	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-2	上下D字形爪形文付横位隆帯、隆帯による楕円形区画。区画内縦位LR縄文⇒楕円形区画に沿う1-2条の沈線。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
41-22	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅵ-2	斜位隆線⇒縦位隆線、縦位・横位多条沈線による方形区画。	ナデ	雲母・海綿状骨針
41-23	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-2	縦位LR縄文。縦位断面三角の押捺付隆線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
41-24	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-2	断面三角の縦位1条の隆線、隆線に沿う縄文(LR)。縦位LR縄文。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
41-25	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-5	断面三角の縦位・弧状の隆線。胴部多段輪積痕、輪積痕上押捺。	ナデ	雲母・石英
41-26	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅳ-5	浅鉢。流水状・渦巻状の沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
42-1	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	V-1	波状?口縁。口縁橋状突起。ナデ。	ナデ	石英・海綿状骨針
42-2	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	V-2	口縁下降帯区画(隆帯割線)。区画内横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
42-3	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	V-2	波状口縁。波頂部突起、突起上渦巻状隆線、橋状把手、把手上沈線。口縁に沿う沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
42-4	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	V-2	縦位LR縄文⇒縦位・横位・弧状の3単位の沈線、1条の曲線状沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
42-5	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	V-2	縦位LR縄文⇒曲線状の2~3単位の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
42-6	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	V-2	縦位LR縄文⇒縦位・弧状の隆帯。	ナデ	雲母・海綿状骨針
42-7	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	V-2	口縁隆沈線による弧状区画。区画内縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
42-8	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅵ-1	口縁縦位RL縄文⇒隆沈線による楕円形区画。頸部以下隆線。	ミガキ	雲母・赤色粒
42-9	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅵ-1	縦位附加条1種(RL+L)⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
42-10	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅵ-1	縦位RL縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
42-11	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅵ-2	口縁横位LR縄文、胴部縦位・斜位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
42-12	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅵ-2	縦位LR縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
42-13	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅵ-2	横位・弧状の断面三角の隆線⇒隆線間棒状工具による刺突。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
42-14	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅵ-2	縦位無筋R縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
42-15	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅵ	縦位RLR縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
42-16	1区ヤブトレンチ Ⅲ層上面	Ⅵ	縦位LR縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
42-17	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅵ	縦位無節L縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
42-18	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅵ-2	浅鉢。縦位LR縄文⇒隆帯。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針・赤色粒
42-19	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅵ	縦位附加条1種(LR+R)⇒沈線。図42-20と同一。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
42-20	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅵ	図42-19と同一。	-	-
42-21	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅵ-2	縦位LR縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
42-22	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅵ-2	縦位LR縄文⇒断面三角の隆線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
42-23	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅵ-3	縦位刻み付隆帯。縦位条縄文。	ナデ	雲母・金雲母・石英
43-1	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅶ	波状口縁。波頂部弧状隆帯、貫通孔。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
43-2	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅶ-1	橋状のひねりを持つ把手。把手上盲孔。口縁隆帯区画。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
43-3	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅶ-2	口縁沈線区画。横位LR縄文⇒沈線⇒盲孔。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
43-4	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅶ-2	口縁沈線区画。横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
43-5	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅶ-2	縦位RL縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針・赤色粒
43-6	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅶ-2	口縁沈線区画。横位LR縄文⇒沈線⇒盲孔。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
43-7	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅶ-2	口縁沈線区画。横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
43-8	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅶ-2	口縁沈線区画。横位・縦位RL縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
43-9	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	Ⅶ-2	横位・縦位LR縄文⇒多条沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
43-10	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	X	斜位網目状熱糸文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
43-11	Ⅰ区サブトレレンチ Ⅱ層上面	X	斜位網目状熱糸文。	ナデ	石英・海綿状骨針
44-1	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅱ	横位RL縄文⇒刺突列。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針・繊維
44-2	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅱ	縦位LR縄文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針・繊維
44-3	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-2	口縁上端押捺。口縁横位結節回転文⇒縦位山形貼付文。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
44-4	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-2	口縁上下からの押捺。横位LR縄文。内面調整。	-	海綿状骨針・赤色粒
44-5	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-2	口縁指頭による交互押捺。口縁無文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
44-6	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-2	口縁上端内面からの押捺。横位LR縄文⇒小波状の有節平行沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
44-7	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-2	口縁上端へう状工具による刻み。横位LR縄文⇒小波状・弧状平行沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
44-8	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-3	口縁縁歯状貼付文。横位RL縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
44-9	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-3	横位LR縄文⇒2条単位の山形・方形貼付文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
44-10	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-3	横位LR縄文⇒山形沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
44-11	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅲ-3	横位RL?縄文⇒2条単位の多段山形沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
44-12	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅲ-4	波状口縁。口縁肥厚。口縁下半截竹管によるD字形刺突。頸部以下縦位・横位LR縄文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
44-13	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-4	口縁上端縦位棒状工具による刻み。横位多条沈線⇒沈線間爪形文。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
44-14	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-4	口縁小突起。横位・斜位沈線⇒2条以上の山形波状沈線。沈線に沿う爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
44-15	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒横位多条爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
44-16	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅲ-4	横位RL縄文⇒2条単位の半截竹管による斜位刺突列。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
44-17	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-4	頸部斜位多条爪形文⇒頸部横位1条の爪形文区画⇒縦位弧状平行沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
44-18	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒横位2条の沈線⇒山形沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
44-19	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒2条の弧状沈線⇒沈線に沿う爪形文。	ナデ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
44-20	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-4	横位LR縄文⇒多条弧状沈線⇒沈線に沿う爪形文。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
44-21	41 T Ⅱ層	Ⅲ-4?	横位LR縄文・附加条2種(LR+R)⇒横位2条の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
44-22	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅲ-5	横位LR縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
44-23	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅲ-6	口縁縦位削み。横位のアナダラ風の貝殻背直文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
44-24	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅲ-6	口縁縦位削み。横位多条の半截竹管によるD字形刺突列。	ナデ	雲母・海綿状骨針
44-25	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅲ-6	口縁縦位削み。アナダラ風の貝殻背直文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
44-26	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅲ-6	横位2条の変形爪形文(幅0.9cm)。多条の矢羽状平行沈線。1条以上の変形爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
44-27	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅲ-6	横位多条の変形爪形文(幅1.2cm)。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
45-1	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-1	楕状把手。把手多段の山形沈線。把手中央焼成前の穿孔。口縁上下2条単位の横位沈線区画⇒区画に沿う上下三角刺突。区画沈線間内形竹管文。区画内多段の山形沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
45-2	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-1	口縁横位1条の沈線区画⇒斜位沈線⇒梯子状短沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
45-3	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-1	口縁縦位削み。横位2条の沈線区画。横位LR縄文⇒横位沈線に沿う三角刺突⇒三角刺突に沿う山形沈線。縦位多条沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
45-4	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-1	口縁上下横位平行沈線⇒沈線上下爪形文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
45-5	41 T Ⅱ層	Ⅳ-1	縦位多条沈線⇒口縁横位1条の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
45-6	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-1	複合口縁。口縁下三角刺突。横位多条沈線⇒山形沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
45-7	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-1	波状口縁。波頂部二又状。縦位多条沈線。横位波状沈線⇒沈線に沿う三角刺突。	ナデ	雲母・海綿状骨針
45-8	41 T Ⅰ層	Ⅳ-1	複合口縁。口縁突起。突起上端沈線状の削み。口縁上端削み。口縁下横位多条沈線(楕円区画)⇒沈線上(波頂部下)三角刺突。口縁内面横位1条の沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
45-9	Ⅰ区SX01	Ⅳ-1	口縁から垂下する八字状隆線。口縁へう状工具による横位・弧状の刺突列。図45-10と同一。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
45-10	Ⅰ区SX01	Ⅳ-1	図45-9と同一。	-	-
45-11	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-2	口縁縄直文(LR)付隆線区画。隆線に沿う2条の沈線。LR縄文⇒横位沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
45-12	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-2	波状口縁。波頂部削み付隆線。口縁隆線(割離)・沈線による楕円形区画。区画内内形竹管文。頸部横位隆線・沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
45-13	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-2	口縁下断面三角の削み付隆線による楕円形区画。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
45-14	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-2	口縁隆線・沈線による楕円形区画。区画内横位2条の縄直文?胴部縄文。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
45-15	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-2	口縁隆線による楕円形区画。縦位無節R縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
45-16	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-2	断面三角の隆線による楕円形区画。	ナデ	雲母・海綿状骨針
45-17	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-2	断面三角の横位隆線。隆線による方形区画。隆線に沿う沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
45-18	Ⅰ区SX01	Ⅳ-2	波状口縁。波頂部2個1対の山形状小突起。口縁に沿う2条単位の斜位1条単位の山形状縄直文(LR)。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
45-19	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-2	口縁上端押捺。縦位LR縄文⇒横位2条以上の縄直文(LR)。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
45-20	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-2	口縁隆線区画。横位・斜位縄直文(RL)。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
45-21	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-3	波状口縁。波頂部内凹。ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
45-22	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-1	横位多条沈線。沈線に沿う三角刺突。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
45-23	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-1	縦位LR縄文⇒縦位多条沈線⇒沈線間交互刺突。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
45-24	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-2	口縁横位削み付隆線区画⇒縦位隆線⇒平行沈線による方形区画。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
45-25	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-2	縦位LR縄文⇒横位沈線。縦位2条の弧状沈線。横位1条の波状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
45-26	Ⅰ区Ⅰ層	Ⅳ-2	縦位LR縄文⇒縦位・波状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
45-27	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-2	縦位LR縄文・結節回転文⇒縦位の縄直文(LR)付隆線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
45-28	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-5	縦位1条の有節沈線付隆線。口縁横位削み付隆線区画。隆線に沿う1条の有節沈線。区画内斜位2条の有節沈線。胴部縦位楕円爪形文。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
45-29	Ⅰ区Ⅱ層	Ⅳ-5	波状口縁。波頂部瘤状付文。波頂部から垂下する断面三角の弧状隆線。口縁内面隆線。	ナデ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
45-31	I区II層	IV-5	多段の輪積痕⇒輪積痕上押捺⇒縦文?隆線。	ナテ	雲母・海綿状骨針
46-1	I区I層	V-1	口縁隆帯区画、下端押捺。縦位LR縄文⇒横位3条の沈線、横位1条の波状沈線。	ナテ	雲母・金雲母・海綿状骨針
46-2	I区I層	V-1	口縁隆帯貼付。区内C字形彫文。頸部横位隆帯。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
46-3	I区II層	V-1	横方へへの突起、突起上弧状のソーマン状隆線。口縁隆帯区画、区内1条の有筋沈線。口縁内面横位・波状のソーマン状隆線。外面波状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・石英
46-4	I区SX01	V-1	口縁隆帯貼付による楕円形区画、区内下端隆帯上押捺。区内内爪彫文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
46-5	I区I層	V-1	口縁下端隆帯区画、2条の横位D字形刺突⇒刺突間交互刺突付横位隆線。	ナテ	雲母・海綿状骨針
46-6	I区I層	V-1	口縁2条の隆線区画⇒区内波状のソーマン状隆線。縦位断糸文?⇒横位2条の沈線。	ナテ	雲母・海綿状骨針
46-7	I区II層	V-1	2段の横位2条単位の沈線⇒沈線間波状のソーマン状隆線。	ナテ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
46-8	I区SX01	V-1	横位2条の隆線⇒隆線間縦位多条の縄直文(LR)縦位LR縄文⇒2条の沈線による方形区画。	ナテ	雲母・海綿状骨針
46-9	I区II層	V-2	口縁縦位LR縄文⇒隆沈線による楕円形区画、渦巻状隆線による突起。頸部無文。横位LR縄文⇒横位3条単位の沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
46-10	I区I層	V-2	口縁横位LR縄文⇒隆線による弧状区画、渦巻状隆線による突起。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
46-11	I区II層	V-2	口縁縦位LR縄文⇒隆沈線による区画、渦巻状文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
46-12	I区II層	V-2	波状口縁。横位LR縄文⇒横位・弧状隆線。	ナテ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
46-13	I区I層	V-2	口縁横位LR縄文⇒下端隆線区画、弧状隆線。	ナテ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
46-14	I区SX01	V-2	縦位LR縄文⇒弧状の隆沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
46-15	I区I層	V-1	縦位LR縄文⇒横位2条の隆沈線、2条単位の弧状隆線。	ナテ	雲母・金雲母・海綿状骨針
46-16	I区I層	V-2	縦位断糸文(R)⇒多条の曲線状沈線。	ナテ	雲母・海綿状骨針
46-17	I区I層	VI-2	縦位RL縄文⇒3条単位の弧状沈線。図46-18と同一。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
46-18	I区I層	VI-2	図46-17と同一。	-	-
46-19	I区SX01	V-2	縦位LR縄文⇒多条の曲線状隆沈線。	ナテ	雲母・石英・海綿状骨針・赤色粒
46-20	I区SX01	V-2	波状口縁。波頂部突起、突起上渦巻状隆沈線、横位把手。把手上沈線。口縁に沿う沈線。	ナテ	雲母・金雲母・海綿状骨針
46-21	4IT II層	V-3	口縁2条の縦位ヘラ状工具による刺突列。縦位沈線(細縦文)⇒2条単位の横位波状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
47-1	I区SX01	VI-1	隆沈線による楕円形区画、渦巻状隆線⇒区内縦位多条沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
47-2	I区I層	VI-1	隆沈線による楕円形区画、渦巻状隆線⇒区内刺突。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
47-3	I区I層	VI-1	縦位LR縄文⇒弧状の隆線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英
47-4	I区II層	VI-1	縦位LR縄文⇒曲線状・渦巻状隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
47-5	I区I層	VI-1	縦位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
47-6	I区II層	VI-1	縦位・横位RL縄文⇒沈線。	ナテ	雲母・石英・海綿状骨針
47-7	I区SX01	VI-1	縦位LR縄文⇒沈線。	ナテ	雲母・海綿状骨針
47-8	I区I層	VI-1	縦位RL縄文⇒隆沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
47-9	I区II層	VI-1	縦位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
47-10	I区SX01	VI-1?	縦位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
47-11	I区II層	VI-1	横位LR縄文⇒沈線。	ナテ	金雲母・石英・海綿状骨針
47-12	I区I層	VI-1	縦位RL縄文⇒沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
47-13	I区I層	VI-1	縦位断糸文⇒隆沈線。図47-14と同一。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
47-14	I区I層	VI-1	図47-13と同一。	-	-
47-15	I区SX01	VI-2	横位LR縄文⇒隆沈線⇒縦長刺突。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
47-16	I区II層	VI-2	断面三角の隆線⇒横位LR縄文。	ナテ	雲母・石英・海綿状骨針
47-17	I区I層	VI-2	横位LR縄文⇒断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
47-18	I区I層	VI-2	横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
47-19	I区SX01	VI-1	縦位LR縄文⇒沈線。断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
48-1	I区II層	VI-1	縦位RL縄文⇒沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
48-2	I区I層	VI-2	口縁2条の沈線区画、横位LR縄文。横位LR縄文⇒曲線状・渦巻状沈線、盲孔。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
48-3	I区I層	VI-2	口縁小突起、盲孔。頸部沈線区画。横位RL縄文⇒弧状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
49-1	I区I層	VI	縦位無節L縄文⇒隆線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
49-2	I区II層	VI-1	口縁隆帯区画。横位LRL縄文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
49-3	I区II層	VI-1	口縁ノ字状にせり上る隆帯。横位LR縄文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
49-4	I区I層	VI-1	口縁隆帯区画。格子状の櫛描沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
49-5	I区SX01	VI-1	横位LR縄文⇒沈線⇒凹形浮文。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
49-6	I区I層	VI-1	横位LR縄文⇒沈線⇒凹形浮文。	ナデ	雲母・海綿状骨針・金雲母・石英
49-7	I区I層	VI-2	口縁縦位隆帯、隆帯上下盲孔・中央沈溝、沈線による横位方形区画。横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
49-8	I区SX01	Ⅶ-2?	口縁横位2条の沈線。横位LR縄文⇒多条の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
49-9	I区II層	VI-2	波状口縁。波頂部貫通孔。頸部縦位隆帯、中央沈溝・頸部横位沈線区画。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
49-10	I区I層	VI-1	口縁盲孔列、2条の沈線。頸部縦位多条の鎖状隆帯、上下端盲孔⇒隆帯に沿う沈線⇒横位隆帯・沈線区画。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
49-11	I区SX01	VI-1	小波状口縁。波頂部弧状隆帯（弱彫）。口縁隆帯・沈線区画、交点盲孔。縦位LR縄文⇒2条単位の弧状沈線。	ナデ	雲母・石英
49-12	I区I層	VI-2	小波状口縁。波頂部貫通孔。縦位隆帯、上下端盲孔、中央沈溝。縦位無節L縄文⇒横位沈線区画、弧状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
49-13	I区II層	VI-1	波状口縁。波頂部上端枡形隆帯。口縁貫通孔。口縁1条の沈線、凹形浮文。横位LR縄文⇒縦位2条単位の沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
49-14	I区I層	VI-2	小波状口縁。波頂部ノ字状沈線、上下端盲孔。口縁沈線区画。縦位LR縄文⇒弧状沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
49-15	I区I層	VI-2	小波状口縁。波頂部縦位盲孔列。口縁沈線区画。横位RL縄文。	ナデ	雲母・金雲母
49-16	I区I層	VI-2	小波状口縁。波頂部縦位2条単位の弧状沈線、下端盲孔。口縁2条単位の沈線区画。弧状沈線。	ナデ	雲母
49-17	I区II層	VI-2	小波状口縁。波頂部縦位1条の沈線、上下端盲孔。口縁沈線区画。斜位弧状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
49-18	I区II層	VI-2	口縁沈線区画。横位無節L縄文⇒沈線による裏手状文。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
49-19	I区I層	VI-2	波状口縁。口縁沈線区画、盲孔。横位LR縄文⇒縦位弧状沈線。列点状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
49-20	I区I層	VI-2	口縁沈線区画。横位RL縄文⇒盲孔、縦位沈線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
49-21	I区I層	VI-2	口縁沈線区画、盲孔。横位附加条2種(RL+R)⇒縦位小波状沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
50-1	I区I層	VI-2	口縁沈線区画。横位LR縄文⇒弧状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
50-2	I区I層	VI-2	頸部沈線区画。横位LR縄文⇒弧状沈線、盲孔。	ミガキ	雲母・石英
50-3	I区I層	VI-2	頸部沈線区画。横位RL縄文⇒曲線状沈線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
50-4	I区I層	VI-2	頸部沈線区画。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
50-5	I区II層	VI-2	小波状口縁。波頂部上端環状隆帯。口縁貫通孔、沈線、盲孔。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
50-6	I区SX01	VI-2	小波状口縁。波頂部枡円状の沈線、盲孔。横位LR縄文⇒曲線状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
50-7	I区II層	VI-2	縦位LR縄文⇒曲線状沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
50-8	I区I層	VI-1	横位LR縄文⇒縦位蛇行状沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
50-9	I区I層	VI-2	頸部沈線区画。横位・斜位LR縄文⇒横位・弧状沈線、盲孔。	ナデ	雲母・海綿状骨針
50-10	I区I層	VI-2	頸部沈線区画。横位沈線⇒盲孔、弧状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
50-11	I区I層	VI-2	横位LR縄文⇒曲線状沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
50-12	I区I層	VI-2	横位LR縄文⇒曲線状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
50-13	I区SX01	VI-2	頸部沈線区画。横位LR縄文⇒弧状・波状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
50-14	I区I層	VI-2	頸部沈線区画。横位・斜位LR縄文⇒曲線状沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
50-15	I区I層	VI-2	横位LR縄文⇒頸部横位沈線区画⇒曲線状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
50-16	I区II層	Ⅵ-2	頸部沈線区画、首孔。横位LR縄文⇒曲線状・渦巻状の多条沈線。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
50-17	I区I層	Ⅵ-2?	横位LR縄文⇒曲線状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
51-1	I区II層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部上端環状隆帯。波頂部貫通孔、首孔。頸部橋状把手、貫通孔、頸部隆帯、沈線区画。横位・縦位LR縄文⇒弧状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
51-2	I区II層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部上端首孔、貫通孔。頸部橋状把手、把手中央沈溝、下端首孔、沈線による方形区画?波頂部口縁内面首孔、縦位弧状隆帯。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
51-3	4IT I層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部貫通孔。頸部橋状把手、首孔、沈線による楕円形区画、頸部下隆帯。	ナゲ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
51-4	I区I層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部首孔。頸部橋状把手、上下端首孔、弧状隆帯・沈線、横位沈線。波頂部内面円形刺突、首孔、刺突に沿う弧状沈線。	ミガキ	石英・海綿状骨針
51-2	I区II層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部上端首孔、貫通孔。頸部橋状把手、把手中央沈溝、下端首孔、沈線による方形区画?波頂部口縁内面首孔、縦位弧状隆帯。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
51-3	4IT I層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部貫通孔。頸部橋状把手、首孔、沈線による楕円形区画、頸部下隆帯。	ナゲ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
51-4	I区I層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部首孔。頸部橋状把手、上下端首孔、弧状隆帯・沈線、横位沈線。波頂部内面円形刺突、首孔、刺突に沿う弧状沈線。	ミガキ	石英・海綿状骨針
51-5	I区II層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部縦位環状隆帯、貫通孔。頸部橋状把手、把手下端首孔。弧状隆帯、横位・弧状多条沈線。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
51-6	I区I層	Ⅵ-2	口縁突起、突起上端環状隆帯、貫通孔、縦位弧状多条沈線、口縁1条の沈線。頸部橋状把手、下端首孔、縦位弧状隆帯、下端沈線区画。曲線状沈線。	ミガキ	石英・海綿状骨針
51-7	I区SX01	Ⅵ-2	口縁突起、突起上端円形隆帯、貫通孔、縦位弧状多条沈線、口縁隆帯、1条の沈線、首孔。横位LR縄文、突起から垂下する縦位隆帯⇒頸部下横位2条の沈線区画、縦位弧状沈線、曲線状多条沈線⇒首孔。	ミガキ	石英・海綿状骨針
51-8	I区I層	Ⅵ-2	口縁突起(前縁)。口縁1条の沈線、首孔。頸部橋状把手、把手下端首孔。縦位弧状隆帯。頸部下円形多条沈線区画。横位LR縄文⇒弧状多条沈線。突起部内面首孔。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
51-9	I区II層	Ⅵ-2	口縁弧状多条沈線。頸部橋状把手(前縁)。縦位弧状隆帯・上位首孔、重弧状の多条沈線。2条横位沈線、首孔、重弧状・渦巻状多条沈線。	ナゲ	石英・海綿状骨針
51-10	I区I層	Ⅵ-2	波状口縁。波頂部貫通孔、貫通孔に沿う曲線状多条沈線、横位・楕円状沈線。頸部橋状把手、中央沈溝、下端首孔。頸部沈線区画、縦位弧状隆帯。	ナゲ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
51-11	I区I層	Ⅵ-2	口縁首孔。頸部ひねりを持つ橋状把手、弧状隆帯、頸部下楕円形沈線、首孔。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
51-12	I区I層	Ⅵ-1・2	波状口縁。波頂部突起、対向する弧状沈線、上下端首孔、中央貫通孔。口縁首孔、2条単位の沈線。縦位・斜位沈線。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
52-1	I区I層	Ⅵ-2	口縁肥厚、弧状・渦巻状多条沈線。頸部縦位刻み付隆帯。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針・赤色粒
52-2	I区I層	Ⅵ-2	小波状口縁。波頂部貫通孔、貫通孔に沿う多条沈線、口縁2条の沈線。波頂部内面貫通孔に沿う沈線、首孔。	ミガキ	海綿状骨針
52-3	I区SX01	Ⅵ-2	波状口縁。注口土波。波頂部環状隆帯。口縁沈線区画、内面弧状隆帯、首孔。	ナゲ	金雲母・海綿状骨針
52-4	I区II層	Ⅵ-2	頸部多条沈線区画。横位LR縄文⇒弧状・縦位多条沈線、首孔。	ミガキ	金雲母
52-5	I区II層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒曲線状多条沈線。図52-6と同一。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
52-6	I区II層	Ⅵ-2	図52-5と同一。	-	-
52-7	I区I層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒曲線状多条沈線。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
52-8	I区II層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒曲線状多条沈線。	ナゲ	雲母・石英
52-9	I区I層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒曲線状多条沈線。	ナゲ	石英・海綿状骨針
52-10	I区I層	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒曲線状多条沈線。	ナゲ	雲母・金雲母・海綿状骨針
52-11	I区SX01	Ⅵ-2	横位LR縄文⇒曲線状多条沈線。	ナゲ	雲母・金雲母・海綿状骨針
52-12	I区I層	Ⅵ-2?	横位LR縄文⇒多条沈線。	ナゲ	金雲母・石英・海綿状骨針
52-13	I区I層	Ⅵ-3?	口縁山形状小突起。口縁沈線区画、横位LR?縄文口縁内面1条の沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
52-14	I区I層	Ⅵ-3	波状口縁。波頂部突起。波頂部横の口縁上端2個の隆帯(刻み)。波頂部から垂下する隆帯、隆帯上円形刺突、口縁に沿う2条単位の刻み付隆帯。口縁内面1条の横位沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
52-15	49T I層	Ⅶ-2	口縁上端縦割山形状小突起。三又状文、弧状・横位沈線⇒瘤貼付。LR?縄文、隆帯⇒横位短沈線。胴部斜位沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
52-16	49T I層	Ⅷ	注口土器。斜位L?熱糸文⇒横位沈線、円形状沈線、隆帯⇒刻目文・刺突文。	ミガキ	石英・海綿状骨針
52-17	I区II層	X	横位LR・RL、非結束羽状縄文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
52-18	I区II層	Ⅸ	浮線網状文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
52-19	I区I層	X	網目状熱糸文(横位回転R、交互に上下しない)。	ナデ	雲母
53-1	64T II層	Ⅱ	横位LR縄文⇒縦位2条の棒状工具による刺突列⇒横位多条沈線。	ナデ	石英・海綿状骨針・繊維
53-2	64T II層	Ⅲ-2	口縁上端先端二又状工具による刺突。横位LR縄文。	ヘラナデ	海綿状骨針・繊維(少)
53-3	64T I層	Ⅲ-2	口縁指頭?による交互押捺。横位LR縄文。	ナデ	石英・海綿状骨針
53-4	64T I層	Ⅲ-2	口縁無文。横位多条有節沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
53-5	64T II層	Ⅲ-3	横位LR縄文⇒多段の2条単位の山形沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-6	64T II層	Ⅲ-3	波状口縁。横位LR縄文⇒縦位・斜位・山形状の貼付文。	ミガキ	海綿状骨針・金雲母・石英・繊維
53-7	64T II層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁上端縦位刻み、下端縦位縄圧痕文(LR)。口縁無文。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
53-8	64T I層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁上下端棒状工具による刻み。縦位隆帯。縦位R熱糸文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
53-9	64T I層	Ⅲ-3	波状複合口縁。口縁下端ヘラ状工具による刻み。横位LR縄文⇒下区画連続山形状平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-10	64T I層	Ⅲ-4	複合口縁。口縁三角刻み。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-11	64T I層	Ⅲ-4	口縁肥厚、1条の山形沈線、盲孔。頸部三角刻み列ボタン状貼付文。図53-12と同一。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-12	64T II層	Ⅲ-4	図53-11と同一。	-	-
53-13	64T I層	Ⅲ-4	波状口縁。口縁二又状。頸部横位2条の爪形文付隆帯区画。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
53-14	64T II層	Ⅲ-4	波状口縁。頸部横位1条、弧状1条の爪形文付隆帯。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-15	64T II層	Ⅲ-4	波状口縁。横位LR縄文⇒上区画割格子状平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-16	64T II層	Ⅲ-4	口縁横位沈線区画、縦位多条沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
53-17	64T I層	Ⅲ-4	口縁肥厚。線1条の横位、2条単位の変形・弧状、1条の連続小山形状の縄圧痕文(L)。縦位LR縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
53-18	64T II層	Ⅲ-4	複合(肥厚)口縁。口縁多条の斜位・横位・U字状縄圧痕文(L)。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-19	64T I層	Ⅲ-4	口縁肥厚。口縁横位・縦位沈線⇒沈線に沿う爪形文。頸部横位1条の沈線区画、胴部爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-20	64T I層	Ⅲ-4	縦位RL縄文⇒弧状の多条平行沈線、2条の爪形文、1条の山形沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
53-21	64T I層	Ⅲ-4	頸部沈線区画、山形沈線、2条単位の下向き弧状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-22	64T II層	Ⅲ-5	波状複合口縁。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-23	64T II層	Ⅲ-5	縦位・横位LR縄文。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
53-24	64T II層	Ⅲ-6	横位LR縄文、結節回転文。胴部下端ミガキ。底部ナデ。	ヘラナデ	雲母・海綿状骨針
53-25	64T II層	Ⅲ-5	2条の横位変形爪形文(幅1.6cm)、多条有節沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-26	64T I層	Ⅲ-5	口縁縦位刻み。横位多条有節沈線文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
53-27	64T II層	Ⅲ-5	弧状のアナタラ属の貝殻股縁文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
54-1	64T I層	Ⅲ-4	口縁無文、肥厚。頸部横位3条の爪形文付隆帯。横位LR縄文⇒結節回転文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
54-2	64T I層	Ⅲ-4	口縁山形状小突起。頸部下輪積痕。口縁～頸部無文。横位LR縄文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
54-3	64T II層	Ⅳ-1	口縁上端刻み。頸部隆帯貼付による有段、縦位・横位沈線交点にV字状貼付文。頸部横位2条、胴部縦位3条の沈線、沈線に沿う三角刺突。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
54-4	64T I層	V-1	口縁横位S字状貼付文⇒貼付文内縄圧痕文(LR)・沈線。口縁1条の横位縄圧痕文(LR)。頸部有段、有段部半截行管によるD字形刻み。胴部縦位LR縄文。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
54-5	64T I層	Ⅳ-3	浅鉢。波状口縁(4単位)。口縁内面隆帯。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
54-6	64T II層	Ⅳ-3	口縁上端押捺。ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
54-7	64T II層	Ⅳ-4	口縁山形状小突起、突起刻みによる三又状。頸部輪積痕。横位RL縄文。	ミガキ・ヘラナデ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
54 - 8	64T Ⅰ層	Ⅳ-5	多段の輪横直。輪横直上押捺。底部側代直。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
54 - 9	64T Ⅱ層	V-1	縦位LR 縄文⇒3～4条単位のクラック状・曲線状沈線。胴部下端・底部ナデ。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
54 - 10	64T Ⅱ層	Ⅳ-3	ナデ。底部側代直。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
54 - 11	64T Ⅱ層	Ⅳ?	ミガキ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
55 - 1	64T Ⅱ層	Ⅳ-1	波状口縁。口縁縦位刻み。口縁に沿う横位弧状沈線。波頂部下弧状沈線⇒梯子状短沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
55 - 2	64T Ⅰ層	Ⅳ-1	口縁縦位刻み。多段の山形沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
55 - 3	64T Ⅱ層	Ⅳ-1	口縁下縦位刻み付隆帯区画⇒隆帯下端三角刻み。口縁上下横位沈線⇒2条単位の山形沈線⇒沈線間斜位縦長刺突。胴部横位多条沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
55 - 4	64T Ⅱ層	Ⅳ-1	波状口縁。頸部横位・波頂部から垂下する刻み付隆帯⇒隆帯下端輪状貼付文。口縁部横位⇒縦位の多条沈線による格子状文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
55 - 5	64T Ⅰ層	Ⅳ-1	口縁縦位刻み付隆帯。横位多条の沈線⇒2条単位の縦位刻み付隆帯。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
55 - 6	64T Ⅰ層	Ⅳ-1	口縁山形状小突起。口縁上下横位隆帯⇒隆帯上下棒状工具による刺突。突起から垂下する縦位刻み付隆帯。縦位LR 縄文、結節回転文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
55 - 7	64T Ⅰ層	Ⅳ-1	口縁山形状小突起。口縁横位1条の沈線⇒沈線上下縦位刻み。縦位結節回転文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
55 - 8	64T Ⅰ層	Ⅳ-1	縦位多条沈線⇒横位多条沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
55 - 9	64T Ⅰ層	Ⅳ-1	上下沈線区画、多段の山形沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
55 - 10	64T Ⅰ層	Ⅳ-1	口縁多段の弧状平行短沈線。縦位LR 縄文⇒頸部横位平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
55 - 11	64T Ⅱ層	Ⅳ-1	頸部横位刻み付隆帯。縦位LR・RL羽状縄文、結節回転文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
55 - 12	64T Ⅱ層	Ⅳ-1	横位・斜位・縦位2～3条の沈線⇒沈線に沿う刺突。	ナデ	雲母・海綿状骨針
55 - 13	64T Ⅰ層	Ⅳ-2?	口縁1条の沈線、円形刺突列。2条単位の曲線状沈線、斜位隆線、隆線に沿う沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
55 - 14	64T Ⅰ層	Ⅳ-2	口縁隆帯による楕円形区画、隆帯に沿う沈線、区画内方形状沈線。隆帯下沈線による楕円状文。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
55 - 15	64T Ⅰ層	Ⅳ-2	縦位LR 縄文⇒隆線、2条の沈線による楕円形区画、隆線による縦位楕円形区画。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
55 - 16	64T Ⅰ層	Ⅳ-2	縦位LR 縄文。縄圧痕文 (LR) 付縦位隆線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
55 - 17	64T Ⅱ層	Ⅳ-2	縦位LR 縄文⇒横位2条の沈線。縦位1条の波状沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
56 - 1	64T Ⅱ層	Ⅳ-2	口縁横位刻み付隆帯、瘤状貼付文、縦位・斜位隆帯⇒隆帯に沿う多条の縄圧痕文 (LR)。	ナデ	雲母・海綿状骨針
56 - 2	64T Ⅱ層	Ⅳ-2	口縁Y字状貼付文⇒縦位LR 縄文⇒横位縄圧痕文 (LR)。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針・赤色粒
56 - 3	64T Ⅰ層	Ⅳ-2	口縁横位縄圧痕文 (LR?)。口縁下押捺付隆帯。縦位LR・RL 縄文。	ミガキ・ナデ	金雲母・海綿状骨針
56 - 4	64T Ⅱ層	Ⅳ-2	口縁隆帯貼付、環状・縦位の貼付文による突起、下端押捺、横位縄圧痕文 (R)。縦位無節R 縄文。	ミガキ	金雲母
56 - 5	64T Ⅱ層	Ⅳ-4	口縁縦位突起状突、押捺付隆帯。縦位LR 縄文。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
56 - 6	64T Ⅱ層	Ⅳ-4	口縁押捺付隆帯。縦位LR 縄文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
56 - 7	64T Ⅰ層	Ⅳ-4	口縁・頸部押捺付き隆帯。縦位LR 縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
56 - 8	64T Ⅱ層	Ⅳ-4	口縁上端へら状工具による刻み。頸部断面三角の刻み付隆線。横位LR 縄文。	ヘラナデ	雲母・海綿状骨針
56 - 9	64T Ⅰ層	Ⅳ-4	口縁上端縄圧痕文 (L)。縦位無節L 縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
56 - 10	64T Ⅰ層	Ⅳ-4	頸部断面三角の刻み付隆線。横位LR? 縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
56 - 11	64T Ⅱ層	Ⅳ-4	頸部断面三角の押捺付隆線。横位RL 縄文。	ナデ	雲母・海綿状骨針
56 - 12	64T Ⅰ層	Ⅳ-4	頸部縄圧痕文 (LR) 付隆帯。	ナデ	雲母・海綿状骨針
56 - 13	64T Ⅱ層	Ⅳ-4	縦位LR 縄文、結節回転文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
56 - 14	64T Ⅱ層	Ⅳ-3	ナデ、ヘラナデ。	ヘラナデ	雲母・海綿状骨針
56 - 15	64T Ⅱ層	Ⅳ-3	口縁肥厚。口縁下有段。口縁上端刻み。ナデ。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
56 - 16	64T Ⅰ層	Ⅳ-3	複合口縁。多段の輪横直。ナデ。	ナデ	雲母・海綿状骨針
56 - 17	64T Ⅱ層	Ⅳ-3	複合口縁。ナデ。	ミガキ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
56-18	64T I層	IV-5	波状口縁。波頂部傾斜した突起。上端片縁のみ棒状工具による刻み。波頂部から斜位に垂下する帯手状隆帯。口縁上端・口縁に沿う有筋沈線。口縁片側周縁状隆帯(剝離)。隆帯中央貫通孔。隆帯に沿う1条の有筋沈線。口縁片側上下対向する横位帯手状の有筋沈線(一部沈線)。一部山形状。交点刺先状の刺突。胴部上位断面三角の隆帯。有筋沈線による楕円形区画。区内内輪縁状→輪縁状上押捺。胴部下位断面三角の横位隆帯。内面波頂部内形刺突・刻み文。波頂部から垂下するL字状の有筋沈線。胴部内面有段。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
56-19	64T II層	IV-3	浅鉢。口縁上端輪状貼付文。口縁内面隆帯。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
57-1	64T I層	V-1	口縁上端繩瓦痕文(L)。上から横位隆帯。半軌竹管による刺突。横位沈線。横位・渦巻状隆帯→横位隆帯・隆帯に沿う沈線。横位3条沈線。連弧状(山形)沈線。縦位LR縄文。図57-2・3と同一。	ナデ	雲母・海綿状骨針
57-2	64T I層	V-1	図57-1・3と同一。	-	-
57-3	64T I層	V-1	図57-1・2と同一。	-	-
57-4	64T I層	V-1	口縁横位隆帯。隆帯による楕円形区画(剝離)→区内内爪形文。口縁下端押捺付隆帯。縦位LR縄文。口縁内面隆帯。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
57-5	64T I層	V-1	口縁隆帯による楕円形区画→区内内棒状工具による刺突。縦位LR縄文。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
57-6	64T II層	V-1	口縁突起。突起内面にS字状貼付文。口縁上位繩瓦痕文(LR?)。口縁2条の隆帯。下端押捺。縦位LR縄文→隆帯に沿う横位2条の沈線→縦位・波状の沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
57-7	64T I層	V-1	口縁横位S字状・渦巻状突起。胴部押捺付隆帯。縦位LR縄文。突起内面渦巻状隆帯。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
57-8	64T I層	V-1	縦位R摺余文⇒2条単位の波状沈線。胴部横位多条沈線。	ナデ	金雲母
57-9	64T II層	V-1	縦位R摺余文⇒口縁上位横位2条以上の隆線。口縁横位・弧状の3条単位の沈線。胴部横位2条単位の沈線・小波状沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
57-10	64T I層	V-1	縦位LR縄文⇒縦位・弧状・渦巻状隆沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
57-11	64T II層	V-1	方形のソーマン状隆帯区画。区内に沿う隆沈線。縦位ソーマン状隆帯による曲線状文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
57-12	64T II層	V-2	口縁輪状突起⇒縦位LR縄文⇒口縁上下降沈線区画⇒弧状隆沈線。突起部渦巻状・縦位隆帯文。	ナデ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
57-13	64T I層	V-2	口縁横位LR縄文⇒横位・弧状の隆沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
57-14	64T I層	VI-1	横位・斜位LR縄文⇒断面三角の隆沈線。	ミガキ	金雲母
57-15	64T I層	VI-1	縦位RL縄文⇒隆沈線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
57-16	64T I層	VI-2・VI-1	波状口縁。波頂部山形状小突起。口縁横位1条の沈線。胴部縦位LR縄文?弧状・楕円状沈線。口縁内面突起。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
58-1	64T I層	VI-1	小波状口縁。口縁隆帯・沈線区画。横位L摺余文⇒縦位弧状隆帯・沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
58-2	64T I層	VI-1	口縁棒状工具による刻み付隆帯区画。縦位R摺余文⇒沈線。	ミガキ	金雲母・赤色粒
58-3	64T I層	VI-1	口縁隆帯区画。斜位L摺余文⇒半軌竹管による2条単位の8字状刺突。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
58-4	64T II層	VI-1	口縁上端・下端刻み付隆帯。縦位櫛歯多条短沈線。	ナデ	雲母・石英
58-5	64T II層	VI-1	小波状口縁。波頂部刻み付縦位隆帯。口縁刻み付隆帯区画。横位LR縄文。	ナデ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
58-6	64T II層	VI-1	小波状口縁。ノ字状隆帯。中央沈溝。上端首孔。口縁横位鎖状隆帯区画。横位RL縄文。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針・赤色粒
58-7	64T I層	VI-1	口縁捻りをもつ平円状突起。縦位隆帯。上下端首孔。口縁隆帯区画。縦位・斜位R摺余文。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
58-8	64T I層	VI-1	波状口縁。ノ字状隆帯。中央沈溝。上下端首孔。口縁隆帯区画。縦位・横位LR縄文。突起内面首孔。	ハラナデ	雲母・石英・赤色粒
58-9	64T I層	VI-1	波状口縁。対向する縦位弧状隆帯。中央沈溝。上下端首孔。口縁隆帯区画。横位RL縄文。	ミガキ	雲母・金雲母
58-10	64T I層	VI-1	小波状口縁。縦位隆帯。中央沈溝。上下端首孔。口縁隆帯・沈線区画。縦位LR縄文⇒弧状沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
58-11	64T I層	VI-1	波状口縁。波頂部山形状小突起。縦位隆帯。上位首孔。下端円形浮文。口縁隆帯・沈線区画。横位・縦位LR縄文⇒弧状沈線。蛇行状沈線⇒円形浮文。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
59-1	64T I層	VI-1	波状口縁、波頂部突起。突起中央貫通孔、対向する弧状沈線。上下端首孔。口縁首孔、2条の沈線。横	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
59-2	64T II層	VI-1	横位LR縄文⇒横位・縦位沈線⇒凹形浮文。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
59-3	64T I層	VI-1	縦位附加条1種(LR+R)⇒弧状・縦位沈線⇒凹形浮文。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針・赤色粒
59-4	64T I層	VI-1	横位RL縄文⇒弧状・縦手状沈線⇒凹形浮文。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針・赤色粒
59-5	64T I層	VI-1	横位・斜位RL縄文⇒縦位頸状隆帯。	ナデ	雲母・海綿状骨針
59-6	64T I層	VI-2	口縁突起。突起上端環状隆帯。頸部輪状把手、上下端首孔。横位LR縄文⇒縦位・斜位沈線。突起内面首孔。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
59-7	64T I層	VI-2	口縁突起。突起上端環状隆帯、貫通孔。側面・上面首孔。頸部輪状把手。中央沈溝、上下端首孔。縦位弧状隆帯。頸部下隆帯・沈線区画。横位LR縄文⇒横位・斜位・弧状沈線区画。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
59-8	64T I層	VI-2	口縁沈線区画⇒凹形浮文。縦位LR縄文⇒縦手状沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
59-9	64T I層	VI-2	口縁山形状小突起、首孔。口縁1条の沈線区画。横位・縦位無節L縄文。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
59-10	64T I層	VI-2	波状口縁、貫通孔。横位LR縄文⇒縦位・横位沈線。	ハラナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
59-11	64T I層	VI-2	口縁2条の沈線区画⇒8字状浮文。横位LR縄文⇒手載竹管による縦位列点状刺突。斜位沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針・赤色粒
59-12	64T I層	VI-2	小波状口縁。横位LR縄文⇒L字状・弧状沈線。縦位列点状刺突。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
59-13	64T I層	VI-2	口縁1条の沈線⇒横位LR縄文⇒横位・弧状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
59-14	64T I層	VI-2	小波状口縁。口縁下2条の横位沈線。横位LR縄文⇒3条単位のJ字状沈線。縦位蛇行状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
59-15	64T I層	VI-2	横位LR縄文⇒口縁横位沈線。弧状・曲線状沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
59-16	64T I層	VI-2	横位RL縄文⇒横位・斜位・渦巻状沈線。	ナデ	金雲母・石英・海綿状骨針
60-1	64T I層	VI-2	横位LR縄文⇒縦位・縦手状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
60-2	64T I層	VI-2	横位LR縄文⇒横位・斜位・弧状沈線⇒首孔。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
60-3	64T II層	VI-4	波状口縁。縦位・横位・斜位・弧状の沈線。沈線間手載竹管による刺突。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針・赤色粒
60-4	64T I層	VI-4	横方向の刺突全面施文。	ナデ	金雲母・石英
60-5	64T I層	VI-1	横位RL縄文⇒横位平行沈線⇒縦位弧状沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
61-1	69T I層	III-3	口縁上端縦位刻み。横位LR縄文⇒横位平行沈線⇒沈線間斜位平行沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
61-2	65T II層	III-3	波状口縁。波頂部瘤状貼付文。横位LR縄文⇒2段の横位3条単位の山形沈線⇒山形沈線間斜位2条単位の沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
61-3	70T II層	III-3	横位RL縄文⇒横位2条の山形沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
61-4	69T I層	III-2	横位多条結節回転文⇒縦位波状沈線。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
61-5	71T II層	III-4	多段の横位爪形文・三角刻み列。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
61-6	70T II層	III-4	頸部横位1条の爪形文。横位1条の平行沈線⇒縦位・小波状の多条平行沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
61-7	65T II層	III-4	口縁3条の棒状縦位隆帯。口縁横位沈線⇒渦巻状斜位沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
61-8	65T II層	III-4	口縁山形状?小突起。斜位・V字状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
61-9	65T II層	III-4	口縁肥厚。横位・斜位沈線⇒沈線に沿う爪形文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
61-10	65T II層	III-4	口縁隆帯貼付。口縁上端斜位・曲線状沈線。横位1条の沈線。多段の向下弧状短沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
61-11	70T I層	III-4	縦位棒状工具による刻み。	ナデ	雲母・金雲母・海綿状骨針
61-12	70TSD01 I層	III-4	横位LR?縄文⇒縦位・横位・斜位多条平行沈線⇒交点に弧状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
61-13	70T I層	III-5	口縁無文。横位RL縄文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
61-14	68T I層	III-4	縦位LR縄文⇒横位・弧状沈線⇒沈線に沿う爪形文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
61-15	70T II層	III-4	山形沈線。横位2条の沈線。横位1条の隆帯。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
61-16	70T II層	III-4	口縁内面隆帯貼付。縦位短沈線⇒横位1条の沈線。波状・弧状沈線。	ナデ	雲母・石英・海綿状骨針
61-17	70TSD01 I層	IV-1	口縁内面隆帯貼付。2条単位の渦巻状沈線⇒梯子状短沈線⇒斜位多条沈線。	ナデ	金雲母・海綿状骨針
61-18	70T III層	IV-1	頸部刻み付隆帯。口縁斜位平行沈線による細線文?⇒斜位平行沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針
61-19	65T II層	IV-5	波状口縁。口縁に沿う1条の有節沈線。波底部縦位2条の有節沈線。	ナデ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
61-20	65T II層	IV-5	口縁隆線による楕円形区画⇒隆線に沿う1条の有筋沈線。Y字状に垂下する有筋沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
61-21	65T II層	IV-2	隆線による楕円形区画、区画内隆線に沿う2条の有筋沈線、Y字状隆線・沈線、横位下向き弧状沈線。縦位LR?縄文。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
61-22	65T II層	IV-5	縦位隆線、隆線に沿う1条の有筋沈線。輪積痕をやや残す。	ナゲ	雲母・海綿状骨針
61-23	65T I層	IV-2	波状口縁。波頂部U字状突起、上端切み。突起部U字状隆線、縦位多条沈線。口縁に沿う3条の沈線⇒交互列突。波頂部下多条の逆U字状沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
61-24	65T II層	IV-2	口縁下横位2条の隆線区画。隆線上渦巻状隆線貼付けによる突起。口縁から突起にかけて縦位3条の隆線、口縁に沿う楕円状?隆線、隆線に沿う縄圧痕文(LR)。口縁下縦位・横位・弧状・V字状沈線。	ナゲ	金雲母・石英・海綿状骨針
61-25	65T II層	IV-2	口縁弧状貼付文。口縁横位1条の縄圧痕文(LR?)。縦位LR縄文⇒頭部縦位縄圧痕文(LR)。	ヘラナゲ	雲母・海綿状骨針
61-26	70T III層	IV-2	口縁下切み付横位隆線。L字状?の2条単位の沈線⇒縦位隆線。	ナゲ	金雲母・石英・海綿状骨針・赤色粒
61-27	65T II層	IV-2	頸部横位2条の沈線、隆線による楕円形区画、隆線に沿う1条の沈線、横位多条沈線、縦位2条の隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
62-1	65T II層	IV-3	波状口縁。輪積痕多段。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
62-2	65T II層	IV-5	輪積痕多段⇒押捺。縦位・三角状の断面三角の隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
62-3	65T II層	IV-2	波状口縁。口縁上端爪形文。縦位縄圧痕文(LR)付隆線。斜位・弧状多条沈線。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
62-4	70TSD01 I層	IV-2	環状貼付文。縦位・横位の断面三角の隆線。口縁内面沈線による楕円形文、端部切み文。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
62-5	65T II層	IV-2	口縁隆線による楕円形区画、区画内縦位短沈線。縦位LR縄文。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
62-6	71T I・II層	IV-2	口縁隆線による楕円形区画、区画内隆線に沿う2条の沈線。縦位LR縄文。	ナゲ	雲母・金雲母・海綿状骨針
62-7	70T III層	IV-2	縦位RL縄文⇒弧状・斜位楕円状沈線。	ナゲ	雲母・金雲母・海綿状骨針
62-8	65T II層	IV-2	口縁S字状(曲線状)貼付文。口縁下降帯貼付による有段。口縁半截竹管による横位1条の刺突列。縦位LR縄文。	ヘラナゲ	雲母・海綿状骨針
62-9	65T II層	V-1	口縁隆線貼付、1条の縄圧痕文(LR)。縦位LR縄文。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
62-10	65T II層	V-1	口縁隆線貼付、突起。突起上端S字状?貼付文。隆線間1条の有筋沈線。縦位LR縄文⇒3条単位の上下向き弧状沈線、横位沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
62-11	70TSD01 I層	V-1	口縁隆線貼付による橋状把手、楕円形区画。連弧状?多条沈線。口縁内面隆線貼付、隆線上ソーマン状隆線による波状文・有筋沈線。	ナゲ	金雲母・海綿状骨針
62-12	65T I層	V-1	口縁ソーマン状隆線による波状・楕円文。縦位R摺糸文⇒2条の横位沈線、1条の波状沈線、横位2条の沈線。	ナゲ	金雲母・石英・海綿状骨針
62-13	65T II層	V-1	横位2条の隆沈線、横位切み付隆線。縦位LR縄文⇒3~4条単位の渦巻状沈線。	ナゲ	雲母・金雲母・海綿状骨針
62-14	65T II層	V-1	縦位RL縄文⇒頭部横位多条沈線、1条の山形沈線、横位3条の沈線。縦位・横位・クランク状・渦巻状の3条単位の沈線。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
62-15	70T III層	V-1	縦位LR縄文⇒3条単位の渦巻状沈線。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
62-16	70T III層	V-2	縦位R摺糸文⇒口縁隆線による方形区画、渦巻文。	ナゲ	金雲母・海綿状骨針
62-17	70T II層	V-2	横位RL縄文⇒横位・弧状の隆線(端部渦巻状)。	ナゲ	金雲母・石英・海綿状骨針
62-18	65T II層	V-2	波状口縁、渦巻状?突起。口縁上端沈線。突起上円形刺突、突起に沿う弧状・渦巻状沈線。縦位R摺糸文⇒横位・弧状沈線。	ナゲ	雲母・石英・海綿状骨針
63-1	71T I・II層	V-2	波状口縁。波頂部突起、突起上渦巻状隆線。橋状把手、把手上面沈線。口縁に沿う沈線。波頂部内面貫通孔。	ナゲ	雲母・金雲母・海綿状骨針
63-2	65T II層	V-2	波状口縁。波頂部環状沈線。口縁上端沈線。波頂部から垂下する橋状把手。把手中央沈線。把手に沿う渦巻状隆沈線。口縁沈線による楕円形区画、区画内横位2条縄圧痕文(RL)・横位LR縄文。波頂部内面貫通孔。	ナゲ	雲母・海綿状骨針

図版No	出土遺構・層名	分類	器形・文様の特徴	内面調整	含有物
63-3	65T II層	V-2	頸部横位隆沈線、胴部連結渦巻状隆沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
63-4	65T II層	V-2	縦位条線文⇒3条単位の縦位渦巻状隆沈線。	ナテ	金雲母・石英・海綿状骨針
63-5	70TSD01 I層	VI-1	縦位LR縄文⇒隆沈線。	ナテ	雲母・金雲母・海綿状骨針
63-6	70T II層	VI-1	縦位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
63-7	70T II層	VI-1	波状口縁、波頂部渦巻状隆沈線、横位LR縄文⇒横位隆沈線による楕円状区画。縦位LR縄文⇒隆沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
63-8	70T II層	VI-1	渦巻状隆沈線、刺突?	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
63-9	65T II層	VI-1	横位RLR縄文⇒隆沈線による方形区画、渦巻状文。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
63-10	65T I層	VI-1	縦位LR縄文⇒多条沈線、円形刺突。	ナテ	金雲母・海綿状骨針
63-11	70T III層	VI-1	波状口縁、弧状隆線、縦長刺突。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
63-12	70T III層	VI-1	口縁横位LR縄文⇒隆沈線による楕円状区画。胴部縦位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
63-13	65T II層	VI-2	波状口縁。口縁の字状隆帯貼付による突起。条線文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針・石英
63-14	70T III層	VI	縦位LR縄文⇒沈線。胴部燒成前貫通孔。	ナテ	雲母・海綿状骨針
64-1	65T II層	VI-2	波状口縁。断面三角の波頂部から垂下するノ字状・横位隆線、L字状隆線。沈線⇒縦位条線。	ナテ	雲母・金雲母・海綿状骨針
64-2	68T I層	VI-1	口縁隆帯・沈線区画⇒盲孔。縦位蛇行状隆沈線。	ナテ	雲母・海綿状骨針
64-3	65T I層	VI-1	口縁隆帯区画。小波状口縁。弧状隆帯、中央沈溝、上下端盲孔。横位LR縄文⇒鞭手状隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
64-4	65T II層	VI-1	口縁渦巻状隆帯による突起、貫通孔。縦位弧状隆帯、下端盲孔。口縁隆帯・沈線区画。縦位弧状・蛇行状隆沈線。横位LR縄文。口縁内面盲孔。	ミガキ	金雲母・海綿状骨針
64-5	65T I層	VI-1	波状口縁。対向する弧状隆帯、中央沈溝、上下端盲孔。口縁隆帯区画。	ナテ	金雲母・石英・海綿状骨針
64-6	65T II層	VI-2	口縁山形状小突起、貫通孔、貫通孔に沿う隆線、盲孔。横位LR縄文⇒横位多条隆線。	ナテ	雲母・海綿状骨針
64-7	65T II層	VI-2	口縁弧状隆帯。縦位LR縄文⇒横位・曲線状隆沈線。	ナテ	石英・海綿状骨針
64-8	65T II層	VI-2	波状口縁。口縁沈線区画⇒盲孔。横位・斜位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英
64-9	65T II層	VI-2	口縁山形状小突起。貫通孔、貫通孔に沿う弧状隆線、盲孔。縦位隆線。頸部横位隆線。	ナテ	雲母・金雲母・海綿状骨針
64-10	65T I層	VI-2	波状口縁。口縁縦位隆線、上下端盲孔。縦位LR縄文⇒沈線。	ナテ	雲母・海綿状骨針・赤色粒
64-11	65T II層	VI-2	小波状口縁、貫通孔。口縁沈線区画⇒盲孔。口縁縦位LR縄文⇒鞭手状隆線。口縁内面盲孔。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
64-12	65T I層	VI-2	横位LR縄文⇒横位・曲線状隆沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・石英・海綿状骨針
64-13	65T II層	VI-1	口縁突起、突起上端隆線、中央貫通孔、貫通孔の周囲盲孔、下端円形浮文。口縁2条の隆線。縦位隆帯、中央沈溝。内面盲孔。沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
64-14	65T I層	VI-1	波状口縁。波頂部突起。突起縦位隆帯、中央沈溝、突起内面2枚の弧状隆線、上下端盲孔、中央貫通孔。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
65-1	65T II層	VI-1	横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
65-2	65T II層	VI-2	横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・石英・海綿状骨針
65-3	65T II層	VI-2	横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
65-4	65T II層	VI-2	横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
65-5	65T II層	VI-2	横位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
65-6	65T II層	VI-2	横位・縦位LR縄文⇒沈線。	ミガキ	雲母・金雲母・海綿状骨針
65-7	65T II層	VI-2	横位LR縄文⇒鞭手状隆線。	ミガキ	石英・赤色粒
65-8	65T II層	VI-2	横位LR縄文⇒沈線。	ナテ	雲母・海綿状骨針
65-9	65T II層	VI-2	曲線状隆線、列点状隆線⇒円形浮文。	ミガキ	雲母・石英
65-10	65T II層	VI-2	縦位LR縄文⇒多条隆線、盲孔。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
65-11	65T II層	VI-2	横位LR縄文⇒多条隆線。	ミガキ	金雲母・石英・海綿状骨針
65-12	65T II層	VI-3	横位・縦位隆線⇒横位・縦位LR縄文。	ナテ	雲母・海綿状骨針
65-13	65T II層	VI-1	波状口縁。口縁上端楕円状隆帯。横位LR縄文⇒斜位・弧状隆線⇒口縁・沈線に沿う手執竹管によるD字形刺突。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
65-14	65T II層	VI-1	横位LR縄文⇒横位平行沈線⇒縦位弧状隆線。	ミガキ	雲母・海綿状骨針
65-15	65T II層	IX	壺形土器。口縁横位3条の隆線。口縁内面横位2条の隆線。	ナテ	雲母

報告書抄録

ふりがな	うらじりかみづか3						
書名	浦尻貝塚3						
副書名	第1分冊 - 土器編-						
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第11集						
編著者名	川田強・佐川久						
編集機関	福島県南相馬市教育委員会文化財課						
所在地	〒975-0012 福島県南相馬市原町区三島町二丁目 45						
発行年月日	2008. 3. 31						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡				
浦尻貝塚	南相馬市小高区浦尻字 南台ほか	072125	52 53 54 114	37° 31' 00"	141° 01' 40"	5,140	道路・ 保存目的範囲 内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
浦尻貝塚	貝塚・集落跡・ 古墳・館	縄文～近世		貝塚・壱穴住居 柱穴・貯蔵穴等	動物遺体・人 骨・炭化種実・ 縄文土器・土製 品・石器	縄文時代前期～晩期貝塚・ 集落跡	

印刷 2008年3月28日
発行 2008年3月31日

南相馬市埋蔵文化財調査報告書第11集

浦尻貝塚3
第1分冊－土器編－

編集 南相馬市教育委員会 文化財課
発行 南相馬市教育委員会
〒975-0012 福島県南相馬市原町区
三島町二丁目45番地
印刷 有限会社 ライト印刷
〒975-0018 福島県南相馬市原町区北新田字信田 370-1
